

平成26年9月期 関西大学審査学位論文

清末中国人の日本語学習史に関する研究  
－教科書と辞書を通して－

学位申請論文

関西大学大学院外国語教育学研究科

陳娟

2014 年 4 月 10 日

©著作権 陳娟

2014 年

陳娟 による本学位論文は審査に合格した

論文審査委員

主査 教授・博士（外国語教育学）沈 国威  
\_\_\_\_\_ 印

副査 \_\_\_\_\_ 印

副査 \_\_\_\_\_ 印

学外委員 \_\_\_\_\_ 印

関西大学大学院外国語教育学研究科

日本・大阪

2014

清末中国人の日本語学習史に関する研究―教科書と辞書を通して

陳  
娟

## 要旨

1895 甲午战争失败后，使中国人的对日观产生了根本的变化。鉴于日本在地理和文化上均较西方便利，士大夫中的有识之士开始提倡向日本学习。加上以张之洞为代表的统治阶级上层人物的推动，清末掀起了留学日本以及向日本学习的热潮。然而，如果不通日语，那么所谓研究日本的经济和政治，则如同隔靴搔痒。因此，人们渐渐开始了解学习日语的重要性，朝廷也开始重视日语，于 1897 年在北京及广州同文馆开设“东文馆”，即日语课程。这标志着中国人开始将日语作为一种外语来学习。在这样的环境下，各种日语教科书也应运而生。不仅有中国人自己编纂的教科书，日本教师也开始针对中国人的日语教育进行尝试。

在外语学习中，教师和教科书是不可或缺的两部分。日语第一次作为外语成为中国人的学习对象，因此这是一个重要的时期。自从 1884 年出版了第一本有教授日语意图的日语书《东语简要》后<sup>1</sup>，日语教科书大量涌现。1912 年，清朝末代皇帝溥仪退位，中华民国政府成立，至此统治中国近 300 年的满清政权宣告结束。其后欧美留学逐渐增多，关于中文的语言学研究也逐渐增多，日语热潮渐渐平静。当然，当时殖民地的日语教育，特别是使用的日语教科书也是日语学习史重要的一部分，本文并不触及相关内容，只考察至 1912 年为止的教科书。

众所周知，关于中国人日语学习史的研究，历来都是从教授者、留学生、学习机构和语言政策及语言观等方面进行研究的。但是从日语教科书的角度对中国人的日语学习史进行考察的研究则比较少。清朝以前关于日语的记载很多，但都是作为方言收录在日本研究的相关书籍中，如《书史会要》、《日本考略》、《日本一鉴》等。而清朝关于日语的记载也可以在《吾妻镜补》和《游历日本图经》等书中见到。然而这些都不

---

<sup>1</sup> 陈娟（2012）《早期中国人编纂的日语教科书——以《东语简要》、《东语入门》、《东语正规》为例》東アジア文化交渉研究第 5 号、第 285 頁

是基于语言学的日语研究，更不能算作是日语教科书。外语教科书是集外语知识、外语分析及其方法和百科知识三个功能于一身的书籍，在外语教育方面，如词汇交流等，书面的传播比口头更有优势。但是普遍认为，教科书并不具备很高的学术价值，因此并不受重视。特别是以前的教科书，由于时间以及战争等原因，主要的图书馆都并不收藏。利用网络等便利条件，笔者共整理了 139 种日语教科书。当然，这 139 种也并不全面，但包含了绝大部分至 1912 年为止的日语教科书。

本文将搜集到的教科书资料从形式、内容、编纂目的、编著者、出版机构等五个角度进行分类，从时间上将这些教科书以 1900 年为界，划分为早期和后期两个阶段进行分析研究。早期的日语教科书主要有《东语完璧》、《东语入门》和《东语正规》三本，特别是 1900 年出版的《东与正规》，是中国人编纂的第一本科学的日语教科书，因此笔者将 1900 年作为时间分界线。将清末中国人学习日语的概况，从教科书的角度进行了系统的分析和展现。

通过本文的考察和研究，可以看到清末的日语教科书有着自己的特征。在短短的 28 年间，教科书的数量变化非常显著，尤其是在 1906 年达到了峰值，这也从一个侧面反映了中国留学日本的热潮，以及学习日本以强国的迫切性。针对后期的教材，笔者分析了会话和语法类中有代表性的教科书，通过这些资料，可以一窥清末中国人在日语学习需求上的转变。从一味追求快速翻译，到将日语作为外语循序渐进地学习，这无不体现着清末的时代特征，以及中国人学习外语的特点。同时，清末的日语教科书也有着一定的时代局限性。在“中日同文”这种不科学的日语认识下，许多知识分子并没有将日语看做外语。加上对于学习速度的追求，导致速成类教科书大批涌现。这类教科书并没有系统的语音和语法内容，甚至有的作者也没有掌握正确的日语知识。这造成了清末日语教科书的质量参差不齐，也反映了清末日语学习的情况。

不容忽视的是，清末还出版了许多日语辞典。这些辞典也有着那个时代的烙印。一种是“奇字解”。这类书籍具备了词典的功能，以词源考证为基础，在反映不科学的日语认识的同时，也对引进新词起到了一定的推动作用。另一种即我们现在所指的辞典。这一类书籍不仅具备辞典

的功能，大多还会附上语音和语法教学的内容，甚至有的质量之高内容之全面可以与其他专门的教科书相媲美。因此本文中笔者也将这些辞典作为教科书的一种加以分析。

通过对这些教科书的分析，可以看出外语教育作为一个学科是逐渐形成和发展起来的。教科书对于外语教育这一学科的建立是不可或缺的。但清末西洋语言，特别是英语的教育，严密地说并不能划进现代外语教学的范围。当然，同文馆的英语教育确实比日语时间要早，但是并没有语法相关的书籍，也没有找到正式的教科书，对学习方法、语言分析等方面的研究则相对比较困难。但由于中国人的西洋语言教育起步较早，因此中国人早期的日语教科书中，对语音或文法的教学也有借鉴西洋语言学知识的部分。通过分析日语教科书，也可以看到诸如此类日语语言学系统建立过程中所受到的西洋语言学知识影响。

另一方面，相比西洋语言的教科书，当时留下了大量的日语教科书，这对于研究中国人学习日语的情况，以及语言分析等都提供了便利的条件。通过分析这些日语教科书的内容和编纂方式，可以看到当时的中国人如何学习日语、对日语知识的掌握、对日语认识的变化等情况。不仅可以作为外国语教育学的一部分来分析，还可以考察当时中国人同时对中文及日语的语法系统建立，以及中国人的日本语观等方面的研究也有一定的参考价值同时，中国人学习日语的目的从经商贸易，到翻译日书学习日本，经历了对日冷淡和留学热潮，这些也都通过日语教科书反映出来。因此对清末日语教科书的研究，也是中日教育史上重要的一部分。

## 謝辞

本研究を進めるにあたり、始終適切な助言を賜り、また熱心なご指導を頂いた関西大学外国語教育学学部の沈国威教授に心から感謝の意を表します。また、日常の議論を通じて、多くの知識や示唆を頂いた東アジア文化研究科の皆様も、深く感謝いたします。

天津外国語大学李運博教授は大学学部学生、修士学生時代より永年にわたり多大なるご指導を頂いて参りました、ここに心からお礼申し上げます。

関西大学の阿部慎太郎君をはじめ、稲垣智恵さん、海曉芳さん、伊藤瞳さん、二宮聡君、王菲さんの各位の先輩、早稲田大学の神谷秀二君には、研究におけるご協力とご支援を頂きました、深く感謝いたします。

最後に、これまで私を暖かく応援してくれた両親、私を明るく励まし続けてくれた親友孫曉瑩さん、董瀟穎さん、劉晨君、鹿銘君、そして支えてくれた張紳君に心から感謝します。

2014 年 4 月

## 目次

緒論 .....	1
0.1 本研究の課題 .....	1
0.2 先行研究 .....	6
0.3 研究方法 .....	7
0.4 本文の構成と概要 .....	8
第一章 清末における中国人の教科書の概況と分類 .....	17
1.1 清朝以前の日本語研究 .....	17
1.2 清末における教科書の分類 .....	22
1.3 教科書の序言から見た清末における日本語学習の目的及び その変化 .....	30
1.3.1 貿易や日常生活における交流の利便性 .....	30
1.3.2 日本書の翻訳を通じた先進技術と文明の輸入 .....	33
1.3.3 日本語研究 .....	35
1.3.4 個人価値の実現 .....	37
1.4 本章のまとめ .....	40
第二章 早期中国人の日本語教科書 .....	41
2.1 東語簡要 .....	43
2.2 東語入門 .....	50

2.2.1 書誌 .....	50
2.2.2 内容 .....	54
2.3 東語正規 .....	57
2.3.1 書誌 .....	57
2.3.2 内容 .....	63
2.4 本章のまとめ .....	83
第三章 『東語完璧』を代表とする会話教科書に対する考察 .....	86
3.1 清末における会話教科書 .....	86
3.2 『東語完璧』 .....	91
3.2.1 書誌 .....	91
3.2.2 内容 .....	95
3.3 本章のまとめ .....	110
第四章 版を重ねた教科書から文法学習の変化を見る .....	112
4.1 清末における日本語の文法教育 .....	112
4.2 実用性を重視する文法教育 .....	118
4.3 『言文対照漢訳日本文典』 .....	127
4.3.1 書誌 .....	127
4.3.2 内容 .....	133
4.4 本章のまとめ .....	148
第五章 辞書と奇字解類資料に対する考察 .....	149

5.1 清末における日本語辞書 .....	149
5.2 ユニークな語彙学習 .....	184
5.2.1 コラム「新釋名」 .....	184
5.2.2 『日本語古微』 .....	190
5.3 本章のまとめ .....	199
第六章 結論 .....	202
参考文献 .....	208
附録 .....	215
附録一 『東語正規』文事類と『東語完璧』文事門の語彙 .....	215
附録二 『東中大辞典』に「中名」を提示する語彙 .....	217
附録三 新釋名凡例 .....	219
附録四 『日本語古微』表紙と収録した語彙 .....	220
附録五 1884-1912 年主要な日本語教科書一覧表 .....	222
附録六 1884-1912 年主要な日本語教科書の序言・凡例集 .....	234

## 緒論

### 0.1 本研究の課題

本研究は、清末の中国人向けの日本語教科書を考察対象とし、これらの教科書の内容と時代的特徴を分析することにより、近代の中国人による日本語学習史の諸事情を明らかにする。また教科書の一部について書誌学的に考察する。

中国と日本の交流は唐代から盛んであった。漢字をはじめ中国の文字と文化は日本に伝わり、日本に大きな影響を与えた。晋の陳寿が編纂した『三国志』の「魏志・倭人伝」の中にある日本語に関する記録が、中国最初の日本語記録だといわれている。明代以前の日本語を観察した記録は、言語学で言う意味の日本語研究にはなっていない。明代と清代に入ると、中国人の日本語研究は主として日本の仮名文字と日本語語彙（短い語句も含む）の収集・記録に集中している。主な情報源は二つあると考えている。

一つは直接日本人或いは日本に接して、収集した言葉である。初期の日本留学僧との交流により、中国人は日本語に関心を持ち始めた。今日から見ても羅大経の『鶴林玉露』（1248 年まで成立）や陶宗儀の『書史会要』（1379 年まで成立）の中に仮名文字に対する記録が正しいところが多い。そして陳倫炯の『海国聞見録』（1744）と汪鵬の『袖海編』（1765）のような、日本に滞在した経験を持つ商人たちも、直に見聞きした日本について見聞録を書いた。清代の翁広平の『吾妻鏡補』（1814 年までに成立）に採集される語彙は長崎方言の特徴を持つものもある。しかし、仮名文字と発音の記録の正確率はあまり高くない。もう一つは日本の書籍を抄録・整理したものである。例えば鄭舜功の『日本一鑑』（1565 年頃成立）がそれである。清代に入ると、徳川幕府の鎖国政策の影響により、約 2 世紀半の長い期間に渡り、中国側は日本に注意を払わなくなり、日本に対する研究はほぼ停滞していた状態である。こうした社会背景により、清代の日本に関する研究は、主に知識人や商人の記録を中心に伝えられ、学術的・言語方面からの研究は少ない。

清王朝が、初代駐日公使団を派遣した 1877 年までの日本語研究はすべて中国語から日本語への流れであった。つまり、日本語に対応させるために中国語の単語を当てはめるのではなく、中国語に対応させるために日本語の単語を取り上げたのであった。清代政府の統治者と官僚たちは日本より欧米列強の国々を更に重視した。日清戦争以後、中国と外国の交流が増えるにつれて、外国語を習得した人材が必要となるのは当然である。

外国語の視点から見ると、貿易の増加、戦争の影響、欧米諸国との交流が親密になるにつれ欧米言語は重要な問題として浮かび上がり、重視された。清代政府は 1862 年に北京で同文館を開設し、英語とフランス語の二種類の言語のみ科目として設置した。続いてロシア語とドイツ語の科目が追加された。その後、上海と広州にも外国語学校が開設された。こういう環境で、数多くの欧米言語の通訳が育てられた。一方、日本語はこれら諸言語のような対応は行われなかった。明代と清代の時代、中国人の日本語に対する認識は「中日同文」と言える。今から見ると、「中日同文」とは二つの意味を持っている。一つは日本語を外国語であると考えているが、書き方などが中国語と同じである。もう一つは日本語を中国語の一方言であると考え、このような清代の日本語研究は、中国語で日本語の発音を注釈し、仮名を振る場合もあった。当時の中国人は「天朝上国」というみだりに尊大ぶる気持ちを持ち、一衣帯水の小さな国、即ち日本を軽視する感情があった。更に日本語は中国語と同様に漢字を使うことから、中国語の一部或いは派生言語と見なし、外国語と考えていないことも当然である。漢字は表意文字であるため、日本語を中国語の漢字知識で読めるが、聞き取れないことが普通である。日本語の発音は漢字で表記でき、「寄語」や「切音」のような方法で表し、日本語の文字に対する認識は科学ではなかった。一方、漢文は学術的な存在であり、日本の官僚たち、特に外交官は漢文に精通する故に、各種の公文の文章は漢文で書かれた。更に、東アジア全体の言語環境から見ると、漢文が中心として使用されており、他国の文字に対する関心を持っていないことも意外ではない。以上が中国人の日本語に対する認識である。こういう前提で、日本語そのものを具体的、系統的な把握できず、日本語の文字、特に仮

名と漢字の関係も一知半解のままである。

1895 年、日清戦争の敗戦により、中国は新しい局面に直面せざるを得なくなる。洋務運動の「中体西用」論の限界が見え、人々は日本という国家に注目し始めた。西洋より日本が近い、そして文化と風俗も似ていることから、清代政府の統治者と官僚たち、特に洋務派は、日本に習うことを提唱する。一方、最初の中日使節団として何如璋が公使として派遣された。彼は日本現地において言葉が通じないことについて「見異邦人聚而相語、惜不通其語言（日本の人に合い、話し合うが、言葉が通じないため残念である）」<sup>1</sup>という思いを示した。日本語ができないことに対する残念な気持ちも中国国内に伝えられた。日本語に通じなければ、日本の政治と経済を習うことは机上の空論に過ぎない。こういうきっかけにより、人々は日本語の重要性を知り、更に清代政府も日本語の学習を重視し始めた。これにより、清末には日本留学ブームが起きた。1896 年日本に最初の留学生 13 名を派遣して以降<sup>2</sup>、国費でも私費でも、個人でも団体でも、男女老若を問わず、日本に留学する人は絶え間なく続いている。一方、日本では、常に通訳不足の問題に悩まされ、初代駐日公使団の人々は日本語に精通する人材を養成することが必要であると認識し、日本語学校設置を計画した。二代目の駐日公使黎庶昌は 1882 年 9 月に公使館内で「東文学堂」、つまり日本語学校を設立した。ここは日清戦争の関係で廃校となったが、それをきっかけに日本語を学習する人材が必要であることを明らかにした。こうした問題が中国国内に伝えられたが、日本語通訳を養成する計画は実現しなかった。それでもそれ以後の日本語学校設立に対する大切な基礎と言える。中国国内に通訳問題の現状を伝えることは、ある程度日本語の学習を促進し、今後の留学生の派遣にも重要な基盤として準備された。更に、1897 年 3 月、京師・広州の同文館において「東文館」すなわち日本語学科が開設された。これは中国人が、日本語を外国語として学習することを表す。そして、日本への留学生の殺到により、中国人に対する日本語教育も行なわれ始めた。もちろ

---

<sup>1</sup> 何如璋（1983）『使東述略』、鐘叔河主編『走向世界業書』、湖南人民出版社。

<sup>2</sup> 実藤惠秀（1970）『増補中国人日本留学史』くろしお出版社、第 37 頁。

ん中にはお金で卒業証明書を発行する「学店」、「学商」<sup>3</sup>のような留学生教育機関もあり、それは速成学習に応じる産物である。正式の日本語教育機関は、パイオニア的存在としての宏文学院を始め、中国人留学生専門の日本語学校も次々と開設され、数多くの清国留学生を育てた。嘉納治五郎、松本亀次郎のような日本人教師たちも教育現場での経験により、中国人に対する本格的な日本語教育を行い、科学的な日本語知識を教え、そして清国留学生向けの日本語教科書を編纂・出版した。全体から見ると、明治時代の日本の教育は、中国人に対する日本語教育を最も重要な位置に置いたと言ってもよい。中国各地にも日本語学校が次々に開設されると、こういう環境で、日本語教科書も時運に応じて現れた。

周知のように、外国語学習には、教師と教科書が不可欠である。清末は日本語が初めて外国語として中国人の学習対象になり、非常に重要な時期である。従って、日本語教師と中国人向けの日本語教科書が大量現れた。一般的には、1884年に発行された玉燕の『東語簡要』が中国最初の日本語教科書と認められているが、それは日本語を「教える意図」を持つ最初の書物と言うほうが適当である。<sup>4</sup>それ以来、日本語教科書の種類と数量も増える一方である。最初は日本人編纂者を主として、日本で出版された物が多い。初期の中国人により編纂された日本語教科書は、「方言」や「同文」の意識を持ち、科学的な教科書が少ない。その後、中国人により日本語教育や日本語教科書に対して、様々な試みを行ったが、従来の日本語意識の影響で、全体から見ると、本格的な日本語教科書とは言えないものが大部分である。これは、中国の時代の限界性も原因であり、従来の四夷館・会同館の時代から日本語学習は「翻訳」を目的とし、「同文館」が設立される以前は、清代の「会同四訳館」もそれを趣旨として踏襲した。言語学や学術研究に基づいて形成された日本語意識は一般ではない。一方、日本人が編纂した教科書は、品質が高く、何よりも正しい日本語を伝えることができ、文法も中国人の教科書より詳しい。ところで、留学生や日中共著の教科書は、日本語の教育・学習方法を受け入れ、当時の日本語を科

---

<sup>3</sup> 実藤恵秀（1970）『増補中国人日本留学史』くろしお出版社、第83頁。

<sup>4</sup> 詳しい分析は第一章に書いてある。

学的な外国語学習法へ導いた、見落としてはいけない存在である。1912年に中華民国が建国し、その後、欧米に留学する中国人が増え、中国語に関する言語研究も多くなるにつれ日本語ブームはだんだん落ち目になる。もちろん、後の植民地における日本語教育、特にその時期の日本語教科書も学習史の重要な一部であるが、筆者の研究はそこまで触れず考察したい。そして、台湾向け日本語教育も独立的な部分で、それらの教科書に対する研究も多数あるため、本論文ではそれに関する内容も検討しない。

外国語教育は、一つの学問と学科として、次第に形成し、発展したものである。教科書は、外国語教育学の成立に関して、欠くことのできない重要な存在である。しかし清末における西洋言語、特に英語の教育は厳密に言えば、現代外国語教育学の範囲に納めることができない。確かに同文館で英語教育は日本語より早く行われたが、文法に関する本がなくて、正式な教科書も見当たらず、学習方法、言語分析などを調査する事は困難である。例えば、中国語の文字は表意文字であり、外国語に対する適当な発音教育は、参考になる方法などがない。当時、異民族の言語を受け入れる経験も不十分である。しかし、中国人の西洋言語教育は日本語より早いため、初期中国人の日本語教科書から、特に文法に関する内容から西洋言語知識に関する部分をみとることができる。例えば仮名に「字母」の名を付けることから西洋言語が当時の影響力と受容する程度を垣間見ることができる。こうして、日本語教科書の分析を通して、日本語言語学が成立する過程で、西洋言語学知識からの影響に対する研究も可能になる。

一方、西洋言語と比べ、教科書が大量に残った日本語の場合は、中国人が日本語を学習する状況、そして言語分析などに便利な条件を提供した。これらの日本語教科書の内容と編纂方法に対する考察を通して、中国人はどのように日本語を勉強するのか、日本語知識をどこまで習得したのか、日本語に対する意識がどのように変化したのかなども解明できる。外国語教育学の成立はもちろん、中国語と日本語文法システムの成立と中国人の日本語意識などの研究にも参考になるだろう。ちなみに、中国人が日本語を学習する目的はビジネスや貿易から、本や文章の翻訳を通して日本に習うこと、更に日本に関心を持たない

時期と留学ブームの段差を経験すること、教科書の中にも反映されている。以上の考えに基づいて、日本語教科書に関する研究は、必ず中日教育史の重要な一部分になるのであろう。本研究では、こういう視点から、清末における中国人の日本語学習を考察したい。

## 0.2 先行研究

中国人はどうやって日本語を勉強するのか、すなわち中国人の日本語学習史に関する研究は、従来教授者、つまり留学、教師（教習）、学校と言語（政策）観の視点から考察するものが多い。留学に対する最も有名な研究は実藤恵秀の『中国人日本留学史』である。清末の留学生を各方面から分析した。教師に関する研究では汪向荣の『日本教習』があり、中国にいる日本人教師を中心に研究したものである。劉建雲の『中国人の日本語学習史——清末の東文学堂』は、東文学堂を中心に、学校の視点から清末における中国人の日本語学習の様子を分析した。同じく学校の視点から分析したものに、近年では酒井順一郎の『宏文学院』もある。その他、言語（政策）観については主に対日観から考察し、中国人が日本語を学習する動機とその変化を研究するものが多い。閻立の『清末中国の対日政策と日本語認識——朝貢と条約のはざままで』は、清末における中国人の日本語観を考察した。

しかし、日本語教科書、つまり中国人に対する日本語教科書の分野からの研究は少ない。日本語教科書に関する内容は、実藤恵秀が『中国人留学日本史』において最初に清末の日本語教科書に言及した。後の植民地における日本語教育とその時期の日本語教科書を研究するものが多く、中国の場合は、1945年以前の日本語教科書についての研究が少ない。

外国語教科書は、外国語の知識、外国語分析とその方法、百科知識の三つの機能が揃う書籍である。外国語教育の面で、例えば語彙交流などでは口頭より、書面のほうが伝えやすい。しかし、一般的に、教科書は学術的な価値がないとされているため、重視されていない。特に昔の教科書は、時間上の問題と戦争などの原因で、主な図書館が収蔵しない。

近年、清末における日本語教科書についての研究は、劉建雲『中国

人の日本語学習史——清末の東文学堂』があり、清末における日本語教科書を整理し、68種の教科書を三つの表をまとめた。<sup>5</sup>そして、李小蘭の論文「清末の日本語教科書に関する研究」がある。ここでは、中国人が編纂した日本語教科書24種について分析し、民国期の日本語教科書に対する影響と清末中国人の日本語観を考察した。そして、鮮明の著作『清末中国人が使用する日本語教科書——語言学史考察』も15冊の教科書を考察した。しかし、劉氏の著作は、学習機関に関する研究で、鮮氏は音声の角度から分析し、李氏の文章と同じ、考察する範囲が狭い状態で研究されたもので、日本語教科書研究の氷山の一角である。よって更に深めて研究する必要がある、全面的に整理する必要がある。

中国人に対する日本語教科書は、一般的に三つの場所に所蔵されると思われる。天津図書館の日本文庫、日本国会図書館と東京都立図書館の実藤文庫である。他には、上海図書館、北京大学図書館、南京図書館、重慶図書館などにも収蔵されている。

筆者は天津図書館に何度も行ったことがあり、日本国会図書館の資料はネットで調べることができる。今まで、関西大学に在学して研究を行い、東アジア文化研究室には実藤文庫の資料はほとんど揃っていた。以上の便利な条件に基づいて整理し、合計139種類の教科書をまとめていた。もちろん、この139種は不完全であるが、清末における日本語教科書はほとんど含まれている。1884-1912年主要な日本語教科書一覧表は附録六にまとめている。

1897年3月、中国人は、日本語を外国語として学習し始め、1900年前後から、日本語教科書が大量に現われ、これは清末における中国人の日本語学習の極めて重要な時期であると思われる。よって、筆者はこの時期の日本語教科書を中心として分析したい。

### 0.3 研究方法

本文は、以下の手順で研究を進めている。

---

<sup>5</sup> 劉建雲(2005)『中国人の日本語学習史——清末の東文学堂』、学術出版会、274—279頁。

- ① 資料の収集：近代における中国語と日本語の教育を中心として資料を収集し、清末における中国人向けの日本語の教科書を中心として、資料を補完する。そして、関西大学外国語学部沈国威研究室が作成した「近代日本語教科書一覧（初稿）をもとに、筆者が『第二次大戦前・戦時期の日本語教育関係文献目録』（文部省科学研究費補助金による総合研究(A)研究成果報告書）、『増補中国人日本留学史』（実藤恵秀、1970年、第62－64頁）、『実藤文庫目録』（東京都立中央図書館により作成）、「（資料）『日本語教育史』資料調査1991年・中国」（斉藤修一）、『中国人の日本語学習史——清末の東文学堂』（劉建雲、2005年、第274－279頁）、「清末日語教材之研究」（李小蘭、2002年、浙江大学修士論文）等の資料を補い、本文の附録五の一覧表をまとめた。そして、各本の序言をまとめ、時間順に並べ、調査に使いやすい資料集を完成させる。
- ② 資料分析：本研究は、資料の単純に並べるのではなく、1884から1912にかけて二段階に分け、当時の教科書出版の状況、学習の背景などを説明する。また日本語教科書のリストにより、内容、形式、影響などの要因から出発して、代表的な教科書を選び、解題を行う。教科書の序言から出版された当時の社会背景、出版目的、編纂者の生涯などの情報を考察し、教科書の種類により内容の重点を分析する。本研究では、言語学の角度から分析するだけではなく、学習者の視点から、客観的に考察を行う。比較という角度から、日本語を学習する動機、教育対象、学習方法などを考え、中国人学習者の日本語に対する意識の変化を探索する。教科書の進歩と限界を分析し、後の教科書、更に外国語教育に対する影響をまとめる。

#### 0.4 本文の構成と概要

先述したように、本研究は清末における中国人の日本語教科書に対する分析を通して、当時中国人の日本語の学習状況を考察するものである。これに従って、本論文は以下のような構成からなっている。

まず、第一章では、清代以前の日本語学習の概況を説明し、筆者が

着目する教科書に対して分類を行う。分類は五つの角度から行う。一つは形式である。速成学習と伝統学習の2種類に分類する。二番目は語彙、会話、文法、精読、辞書の5種類に分ける。その次は編成目的である。言語と別の目的の二種類に分類することが可能であると考え。そして著者編者により、中国人編纂者、日本人編纂者、中日共著の三種類に分ける。さらに出版機関から中国出版と日本出版の二つに分けることができる。1912年までの日本語教科書の種類数量変化を示す図表、更に全体的時期から中国人の日本語学習に対して時間と出版数を参考して二段階に分けた。ちなみに、中には1911年のように出版された教科書に関する資料や記録がなく、1912年には日本語教科書『国民読本参照』一冊のみ出版されなかったため、どこにも所蔵されておらず、実物が存在しないものもある。

1900年に出版した『東語正規』は中国人により編纂された最初の科学的な日本語教科書である。この年で線を引き、1884年から1900年にかけて初期とする。徳川幕府の鎖国が終わり、中国は戦争の原因で日本に注目し始め、「同文」と言う日本語認識の下で、日本語を受け入れた。日本の先進技術と政治・経済を習うことをきっかけに、日本語学習の探索を始めた。この時期出版された教科書で現存するものは三冊のみである。学習する動機や内容などの方面から見ると、中国人が日本語を外国語として学習する意識を垣間見ることができる。そして、1901年から1912年の間は、外国語として日本語を習い始め、中国人に合う教科書を編纂し、出版数も増える一方である。この時期、清代政府の統治者と官僚たち、特に洋務派の提唱により、日本留学と日本研究のブームが起こり、さらに日本語学習もブーム期を迎えた。例えば1906年の一年間で45冊の教科書が出版された。清末における出版数のピークである。教科書の種類も会話、文法、そして辞書などが揃い、速成学習がまだ主流であるが、本格的な外国語教育のための教科書も一席を占める。その後ブームの下降する傾向が見えるが、出版された教科書は質的に優れ、科学的に日本語を研究するものが多くなり、日本語教科書は各方面で成熟していく。清末の日本語教科書は、この二つの段階をたどり、後の日本語研究と教科書の基盤になった。現代日本語教科書の完成に対しても、無視できない存在である。

本章の分類や概況を通して、当時中国人の日本語教科書の全般が見られる。そして、本章では中国人が日本語を学習する動機の変化に対しても考察したい。各種の教科書の序文や緒言に、ほとんど出版当時の学習状況や出版目的などを紹介する内容がある。外国語を学習する最も大きな動機は普通「読み」と「話し」の二種類に分けることができ、中国人に対する日本語の学習も同じである。最初は貿易やビジネスを行う時、言葉が通じなく不便を感じるため、語彙や短文の学習に集中する。これは「同文」の日本語意識が一つの原因である。しかし、日本語の実用性に気づくことも進歩である。全体から見ると、貿易などに言及する教科書は多数であるが、異なる言語による不便感を強調するものは、前半の時期に集中する。そして、清末の時期は時代の特徴があり、学習する動機が変化するきっかけは甲午戦争である。日本より西洋文明を学び、当時の中国人は日本の文章や本を翻訳して、新たな知識を受け入れるための「読み」は、最も重要な動機であった。1895年に出版された『東語入門』の序言には「於国家得著富强之实效」とあり、日本語学習を強化する期待を表す最初の教科書である。ところで、科举制度を廃止した後、日本留学や日本語を学習により立身出世を目指す人も少数ではない。むしろ速成教育の主力と言ってもよい。そして『東語簡要』のように、遊興地での対話を目的とする編纂された書物などもある。これは外国語教育・学習の目的とは言えないが、ある程度は日本語の学習を促進する。上述のように、本章は当時の日本語学習は実用、翻訳、他の目的の三つに分けたい。現在入手できる教科書の序言などに目を通して、当時の中国人が日本語を学習する動機を考察する。

第二章は1884年から1900年までの教科書を分析したい。初期の教科書は、日本で出版された中日韓三か国言語を含める会話集が多い。例えば『日韓清会話』(1894)、『日清韓対話便覧』(1894)などがある。それは本研究の考察対象にならない。そして、日本人向けの中国語教科書も何冊ある。例えば『日清会話』(1894)、『日清字音鑑』(1895)などがある。時間的に見ると戦争前後のものが多く、会話を中心に編纂された。それは軍事による目的の可能性が高い。本研究ではそれらに触れず、中国人向けの教科書だけを考察したい。筆者が実際に閲覧

した中国人が編纂した教科書は四冊ある。『東語文法提綱』が現存 24 ページのみであり、中国語の説明もほとんどなく、完全な資料とは言えないため、本章は『東語簡要』、『東語入門』と『東語正規』の三冊を対象として分析したい。

表 0-1

書名	著者	出版社	出版年
東語簡要	玉燕	不明	1884
東語入門 2 卷	陳天麒編	不明	1895
東語正規 3 卷	唐宝鏐、戢翼翬 共著	作新社	1900

最初の教科書と認められる『東語簡要』は主に語彙収録という内容である。教科書の形式を取っているが、ほぼ単語帳の様子であり、「最初の日本語を教育する意図を持つ書物」と言うほうが適当であると筆者は思っている。玉燕が日本に滞在した時間は未詳であるが、日本語の基礎を持っていたことは確かである。これは以前の日本語書籍より、確実に日本語を伝えることができる。しかし、各人の日本語能力が原因で、教科書の質も異なっている。『東語簡要』の内容から見ると、玉燕は日本語文字に対する認識がなく、多分、正式な日本語教育を受けてないと推測できる。一方、陳天麒は駐日公使館で日本語の教育を受け、玉燕より正確な日本語知識を有していた。しかし、公使館は教育機関ではなく、言語教育においては限界があるので、『東語入門』は『東語簡要』と同じ旧教科書である。日本の教育機関で学習し、日本の教育を受けた唐宝鏐と戢翼翬が、確実に日本語知識を有していたため、玉燕と陳天麒より正式な日本語教科書を編纂された。

教科書の種類、内容の移り変わりにこそ、初期学習者の移り変わりが現れると考えられる。例えば、玉燕が明らかにしたように『東語簡要』を編纂する目的は、遊興地における対話である。出版地は上海であるため、当時の上海、更に南方の沿海地域における、日本語を学習する背景、学習者、環境を反映している。一方、1895 年に出版された『東語入門』の著者は、駐日公使である父親に連れられ、日本に六年

間滞在した陳天麒である。序言から判るように、学習する背景と目的は『東語簡要』の時代と異なる。当時、貿易の交流がますます盛んになり、会話力の不足が明らかになり、この状況に対処するために本書が編纂された。著者は日本語言語学の素養があり、日本語と中国語の言語学的な異同を分析した。これは以前の教科書より進歩したところである。更に 1900 年に発行された『東語正規』は、中国人が科学的に日本語学習を目指した最初の教科書と認められている。最初日本に派遣された留学生であった唐宝鐸と戢翼翬が、この教科書の著者である。著者は正規の日本語教育を受けていたため、『東語正規』は発音、文法と文章を含め、正式な外国語教科書として編纂される。戦争が原因で、日本に注目し始めた中国人は、この教科書を通して、日本語を外国語として学習し始めた。本書は現在の外国語教育の教科書の編纂方法とほぼ同じ、後の教科書も大体同じ形式を取り、日本語教育、更に外国語教育にも大きな影響を与えた。

第三章は後期の教科書を分析したい。中国人の日本語学習は、清末全体から見ると、「翻訳」を中心とする。しかし、日本に渡航する目的が多様化し、教科書に対する需要も単純ではなくなる。日本との貿易交流により、言語の差異に気づき、日本語の実用性に注意し始めたが、当時日本に留学する人数は増える一方であり、生活上の会話力も必要になる。特に、中国語は表意・象形文字であるから、発音を教える方法は中国語を参照できず、教科書の中で発音する方法に関する内容は簡略で一般的である。現地に居る留学生たちは日本語の言語環境があり、そして正式な日本語教育を受け、発音のポイントなどを習得することが可能である。一方、中国にいる学習者はそういう便利な言語環境がなく、教科書の完全な発音方法を頼らざるをえない。ところで、主流は速成学習である環境で、発音、文字、語彙、語句、文章の外国語教育手順に従う日本語教科書は当時まだ少ない。出版された教科書で、短文や語句を収録するものは少数ではないが、常用語句を並べ、或いは文法の例文などの数が少ない。最初の中国人向けの会話教科書は、『貿易叢談』（1901）である。しかし、本書は発音や文法の説明が一切無く、中国語の会話文を日本語に翻訳するだけの会話集である。本格的な会話教科書とは言えないが、文章を読むことを中心とする日

本語学習者たちを、会話に注目させる機能もある。もちろん、当時は、語彙、精読のための教科書も出版されたが、形式上初期の『東語簡要』と『東語正規』に従うものが多い。一方、内容から見ると、会話と文法に関する部分は最も大きな変化を持っている。故に、本研究では、後期の教科書に対して、会話と文法を中心として分析したい。

そして、本章では代表的な会話類教科書の『東語完璧』（1903）を考察したい。本書のように、「商務、遊学、遊歴、考察」に使われる教科書が必要である。当時、各種類の教科書が多く出版されたが、質がそれぞれ異なり、関正昭が日本語教科書を「和文漢読」、「究極の会話」と「日本事情」の三種類に分けた。本書は内容から見ると、「究極の会話」の教科書である。本書は、日本への留学生たちに生活上の役に立つ必要な会話を短時間で習得するため、日常における各シーンを分類した、実用的な教科書である。本書は会話が中心であり、発音や文法は全て会話の準備として、会話の内容に合わせて編纂された。特徴の一つは音声教育の内容である。口腔断面図に合わせて、発音する方法を詳しく説明した、当時の教科書の中で最も詳細なものである。文法は詳しい説明より、会話で常用されるものを紹介し、日常会話を身につけるための内容である。こういう形式を取る本書は、実用性を重要視して、同類の教科書より突出している。更に会話内容は地位や年齢による分類もあり、これが位相語に関する実用的な内容で、これらは本書の進歩的なところである。本書の分析を通して、当時の中国人留學生活や日本語会話の教育法を垣間見ることができる。特に本書の編纂方法は、当時速成教科書とは言えないが、現在から見ると、速成会話教科書の特徴を揃え、現代の会話教科書と非常に近い。重版された『東語完璧』は内容などに対して修正を行い、成熟した会話教科書であり、当時の会話類教科書を全体的にレベルアップさせ、後の会話教科書に対して立派な見本とも言える。

第四章では、文法教科書を分析したい。外国語の学習は、文法が外すことのできない内容である。『和文漢読法』により提唱される中国式の読み方が主流であり、一般的には日本語の文の構造や各品詞の機能、及び語尾変化などの科学的な認識を持っていない。特に留學経験がない編纂者は、『和文漢読法』に基づく読み方と翻訳方法を勧め、日本語

の速成法を中心として、文法に関する内容がほとんどなく、或いは誤りが多い。もちろんこれは個人の差があり、「同文」の日本語意識の影響もある。留学生は日本で本格的な日本語教育を受けた後、編纂する教科書は主に日本語の文法に対して、外国語の文法教育の姿勢が見える。例えば『東語正規』（1900）の文法に関する内容が、「テニヲハ」を詳しく説明することはもちろん、各品詞類の概念と使用も紹介した。しかし、当時日本語の文法はまだ確定しておらず、国語研究者たちにも様々な論議があった時代であり、中国の文法もほぼ同じ状態である。術語などがまだ完成しておらず、中国語で日本語の文法を正確に翻訳することも難しい、時代の限界も見える。こういう状況で、文法教育は日本人の文典に頼ることが多く、文法書を翻訳し、或いは中国語に通じる日本人が漢訳文典を編纂する。例えば丁福同が訳した『東文典問答』（1903）は最初の漢訳文典である。しかし、文典を翻訳することなどは中国人にふさわしい文法教育方法であろうか。中国人の角度から日本語を解釈することが、中国の学習者に対してより受け入れやすい。

教科書の重版より、文法の教育・学習、そして文法の変化が見える。本章は重版数が多い二つの教科書を分析したい。一冊目は『東語完璧』であり、中の文法に関する内容を考察し、実用性を重視する文法学習の過程を研究したい。二冊目は『言文対照漢訳日本文典』（1904）である。『言文対照漢訳日本文典』（1904）の出版前は、日本語文法教科書は日本人学習者向けのもので、中国人の需要を考えていない。本書の編纂者である松本亀次郎が現場での教育経験に基づき、中国人留学生に対する教育方法をまとめ、この中国人学習者向けの日本語文典を編纂した。文の構造の日本語言語学知識を系統的に引き入れ、これら語句の成分から分析する方法は当時未熟であったが、術語で説明することにより、日本語文法のシステムを中国人学習者の目の前に示し、中国語の文法システムにも参考的な意味を持っている。本書は中国人学習者に対して重要な文法教科書である。特に、本書は何度も重版したが、単純的な複製ではなく、当時有名な言語学者の意見を参考のうえ、教科書の内容を修正した。重版された書物の時代性を保証した上、最新の文法知識を学習者にもたらし。本章では三つの版本を比較しながら

ら序言、内容などを分析する。

第五章は、辞書に対する解題である。先行研究では、清末における教科書を対象とする考察が多く、全体的に辞書の解題についての研究はほとんどない。辞書、特に中国人向けの辞書は、文法や発音の内容を取り扱うものが多く、辞書と教科書の機能を揃えた書籍である。ゆえに本論文は辞書も考察対象として分析したい。いかなる言語の学習でも、特に自己学習に対して、辞書は欠かせない存在である。伝統的な辞書は、言語学の知識が必要である。『東中大辞典』の緒言で、辞書を二種類に分けた。一つは外国の文章を読むために、母語で外国語を訳し、もう一つは外国人が本国の文章を読めるように、外国語で母語を翻訳する辞書である。更に「辞典は知恵を啓発する有利な道具」<sup>6</sup>と評価された。当時、中国人は主に「中日同文」の日本語意識を抱いて、文章を読むことを目的として日本語を学習する。こういう環境で、西洋言語の辞書に比べると、日本語の辞書は翻訳する時に使われるもので、「訳」を中心に、語源や語意を詳しく考察しない特徴を持つものが多い。ちなみに、日本語を受け入れることも、外国語としての学習も一定の時期や過程を必要とし、辞書を出版することも教科書より時間がかかる。ところで、1904年『新民叢報』に「新釋名」というコラムが三回連載された。辞書と同じ機能を期待して、更に新名詞と知識を普及する目的もある。辞書に対して、「奇字解」類の資料は清末において何冊も出版された。本章では辞書は既に14冊出版された1910年に、辞書の機能がある「奇字解」資料『日本語古微』を一つの例として、当時の辞書と比較して考察したい。本書の内容は語彙の解釈と説明であり、辞書の効能も備える。当時の中国知識人たちは、日本語に対する抵抗、及び受け入れるための試みも垣間見ることができる。

辞書本来の形式により、当時中国知識人に正確な日本語意識と知識をもたらす。筆者が着目する清末における中日・日中辞書は合計14冊で、主に四種類の辞書がある。一つは親字が日本語或いは中国語の文字で、それに対して発音や意味説明を行う「字典」である。もう一つは、語源を考察して、語意と出典を示し、更に使用方法と連想語彙まで表す総合的な「辞典」である。三つ目は、両言語の異同を発音や

---

<sup>6</sup> 『東中大辞典』緒言、第5頁。

アクセントの視点から区別し、口語を対象として収録する「口語辞典」である。最後は、科学や新知識の術語だけを収録する「術語辞典」である。これらの辞書の書誌、特徴及び内容に対する解題を通して、『日本語古微』と比較して見ると、当時の中国人の日本語意識の変化が見え、思想史において研究することも可能である。

最後の第六章は本論文の内容のまとめ、結論である。前述した考察を通して、清末における日本語教科書を中国人の学習史の中に位置づけ、そして現代日本語教科書に対する影響などを述べる。

## 第一章 清末における中国人の教科書の概況と分類

### 1.1 清代以前の日本語研究

唐代、中国の文字と文化は日本に伝わり、大きな影響を与えた。それ以前に、中国人はすでに日本語の記録を残している。「邪馬台（ヤマタイ）」、「卑弥呼（ヒミコ）」のような日本の地名や人名を漢字で記したのは、晋の陳寿が撰する『三国志』の『魏志・倭人伝』の中に現れる。その後の『後漢書』などの中国歴代史書の日本を取り扱った部分にも似たような記述が見られる。更に、宋の羅大経撰『鶴林玉露』（1248 までに成立）は中国において最初の日本語語彙を収録・紹介したものである。その中には、日本僧安覚が伝えた「提（テ）」、「加是羅（カシラ）」、「窟底（クチ）」のような日本語の普通語彙 20 語が記されている<sup>7</sup>。同じく日本の留学僧の伝えた日本語を収録・紹介したものには元末明初の『書史会要』がある。しかし、『魏志・倭人伝』や『鶴林玉露』のなかにあるわずかな「言葉」は、質的にも量的にも日本語研究とは言いにくいだろう。

明代、「抗倭」という目的の下で、中国人は本格的に日本語に対して関心を持ち始めた。正史・官書以外に、数多くの個人の研究著書も出版されていたことから、日本研究は上から民間にまで広がっていった。

二度目の使者派遣が失敗した後、当時の留学僧椿庭海寿から日本に関する知識を得た明太祖は、三度目の使者を派遣する際、椿庭海寿たちに通訳をさせた。これは、中国人が国家間での相互的な友好往来において、対象国の言葉を知ることがいかに重要であるかを初めて認識

---

<sup>7</sup>『鶴林玉露』卷十六「日本国僧」、長澤規矩也編『和刻本漢籍随筆集』第八集に収録する。

余少年時、于鐘陸邂逅日本国一僧、名安覚、自言離其国已十年、欲尽記一部藏經乃帰。念誦甚苦、不舍晝夜、每有遺忘、則叩頭佛前、祈佛陰相、是時已記藏經一半矣。夷狄之人、異教之徒、其立志堅苦不退転至于如此。朱文公云「今世学者、読書尋行数墨、備禮応数、六経語孟不曾全記、得三五板、如此而望有成、亦已難矣。」其視此僧、殆有愧色。僧言其国称其国主曰「天人国王」、安撫曰「牧隊」、通判曰「在国司」、秀才曰「殿羅罷」、僧曰「黄榜」、硯曰「松蘇利必」、筆曰「分直」、墨曰「蘇彌」、頭曰「加是羅」、手曰「提」、眼曰「媚」、口曰「窟底」、耳曰「弭弭」、面曰「皮部」、心曰「母兒」、脚曰「又兒」、雨曰「下米」、風曰「客安之」、塩曰「洗和」、酒曰「沙嬉」。(句読点は筆者による)

したことを意味する<sup>8</sup>。『和刻本明清資料集』第6集では以下のような記録が残っている。

語言嗜好不明則無以知其情、舶船利器寇術不詳則無以制其變<sup>9</sup>

（言語、嗜好に明るくなければ其の事情を知ることとはできず、船舶、武器、敵の戦術に詳しくなければ其の変化に対応できない）

10

倭寇の対策上、日本の事情を理解するため、自覚した明代の官僚も民間も日本語研究に関心を持ち始めた。こういった社会背景の関係で、日本に対する研究も盛んとなったのである。

その時期の研究書は、主として『書史会要』、『華夷訳語』、『日本考略』、『日本一鑑』、『日本風土記』などが見られる。これらは、現在でも重要な参考文献として重視されている。日本語の発音を仮名ではなく全部漢字で表示し、単語だけでなく、日本の和歌、民謡までも編入している。このような日本語と中国語の対訳語彙は、日本研究書に設けられた「寄語欄」<sup>11</sup>に記入されていた。収録語数としては最も多いのは鄭瞬功の『日本一鑑』であり、18類に分けられ、3400余の語彙が収録されている。

その中には、仮名を意識するものもある。元末明初の陶宗儀の『書史会要』（1376）である（図1-1）。本書は書道史のようなもので、巻八には、次のように仮名で日本語彙を記録している。

---

<sup>8</sup> 王桂主編（1993）『中日教育関係史』、山東教育出版社、第232－233頁。

<sup>9</sup> 古典研究会発行（1974）『和刻本明清資料集』第6集、第25-36頁、本稿引用文の旧字体や異体字等は、現行の字体に直してから引用する、以下同様である。

<sup>10</sup> 本研究では引用される文献の訳文は、筆者訳であるが、ただし、閻立著作の中の訳文を参照することもある。参照する場合は注釈の中で提示しておく。

<sup>11</sup> 『礼記』の「玉制」に「五方之民、言語不通、嗜欲不同、達其志、通其欲、東方曰寄、南方曰象、西方曰狄鞮、北方曰訳」。寄とは古代東方の言語を通訳する官職である。

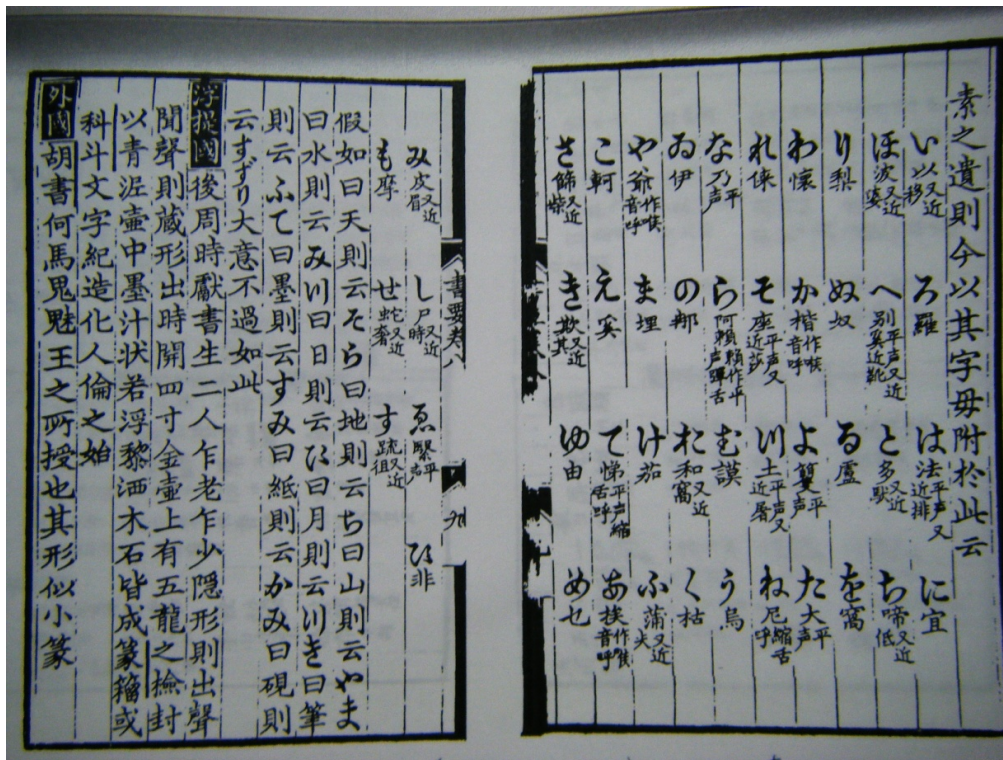


図 1 -1 『書史會要』書影<sup>12</sup>

これは、中国の文献に見える「イロハ」の四十七字母に関する最初の記録である<sup>13</sup>。これ以後、日本語研究においては、明代の繁栄期から清代の衰退期に入る。

清代は、ちょうど日本の徳川幕府が鎖国政策をとった時期で、中日両国の交流は中国側の一方的なことになってしまい、それ故、明代と比べ中国人の日本への関心はあまり高くなかった。1870年代、中国と日本が『通商条約』を締結するのをきっかけに、中国人は日本に対して再び関心を持ちだした。この時期に李鴻章を代表とする洋務派は日本に対する関心を持ち、日本との締約を主張したのである。

1641年徳川幕府が鎖国を完成させ、中国との貿易は長崎港のみを通じて行われることが許された。更に1688年には中国の船を年間70隻に限り、1689年には当時長崎の町に住んでいた清人の居住地を長崎唐

<sup>12</sup> 沖森卓也編（1991）『資料日本史』（京都大学文学部蔵）、桜楓社、第85頁。

<sup>13</sup> 劉建雲（2005）『中国人の日本語学習史——清末の東文学堂』、学術出版会、第21頁。

人屋敷に限定した。以上のような閉鎖状態のために、日本研究は明末の「氾濫の状態から火の消えたように影を潜めてしまう」<sup>14</sup>のである。

こういった社会背景でも、中国人が全く日本に対する関心を失ったわけではない。それは、以下の代表的な商人たちの長崎に赴いた見聞録と翁広平の『吾妻鏡補』を分析すると、当時の日本語認識も見えてくる。

長崎に来た中国人の日本見聞記には日本語についての記録も残っている。1710年に長崎に来た陳倫炯は『東洋記』<sup>15</sup>の中で

国習中華文字、読以倭音

(日本国は中国の文字を学び、倭の発音で読む)

というように日本と中国は「文字」が同じでも、「音」が一致していないことを指摘した。そして、「都」を「弥耶穀」(ミヤコ)、「畳」を「毯踏棉」(タタミ)というように、漢字で日本語の発音を表した。

同時代に長崎に来た商人たちの見聞録は、唐人屋敷の生活と長崎の風土を描いたものが多く、中でも典型的なのは汪鵬の『袖海編』(1764)である。その中で宴会や遊楽に関する日本語もいくつかみられる。例を挙げてみてみよう。日本語に該当する部分には、下線を付す。

客納妓名曰太由、華曰大夫也

(客が芸者を呼ぶのはタユウといい、つまり中国語では遊女の大夫という意味である)

呼煙為淡巴菇(煙草をタバコと呼ぶ)

枕名麻姑喇(枕はマクラといい)

以上のように日本語の音を漢字に当てて、簡単な説明を加えている。「太由」、「麻姑喇」のような語彙から見ると、こういう日本語は恐らく当時の唐人屋敷から出られない商人が遊女から聞いたのであろう。

中国の商人は商品だけでなく、中国の書籍を積んで長崎に行き、そ

<sup>14</sup> 濱田敦(1940)「国語を記載する明代支那文献」、『国語・国文』第10巻第7号、第9頁。

<sup>15</sup> 『東洋記』は1730年に出版され、『海国見聞録』に収録した。

の代わりに帰国する時は日本で見つけた中国の古籍と日本の漢籍などを持ち帰っていた。その中には日本史書『吾妻鏡』（52 巻）がある。それに基づいて、その時期に唯一注目された日本語研究書と言えるものは、翁広平撰『吾妻鏡補』（1814）である。

渡辺三男氏の考察によれば、現存『吾妻鏡補』は版本がなく、写本のみである。巻 28 の「国語解」は、天分辞令・地理・人事・俗語など当時通用の日本語を音訳して 14 類 1061 語からなり、収録の形式は「まず華語を揚げ、それに対応する日本語を音訳漢字に以って記す」というところから、語彙は「長崎あるいは長崎人について採集された」ものの、と渡辺氏は指摘している<sup>16</sup>。単語以外に「不要忘了」—「歪思柳意藍」（ワスルイラン）、「恭喜」—「密的多」（ミ[メ]デト）のような簡単な短文や挨拶も含まれている。

「国語解」の最後には、日本の州名島名が総計 81 個、さらに長崎町名が総計 84 個挙げられている。このように詳しく日本の地名町名を紹介することは、いままでの日本語研究書の中ではなかった。

また、貿易の専門用語も見られる。例えば、

会館一那格節几快子（ナガサキカイショ 長崎会所）

唐人会館一妥人押式吉寿前寺（トウジンヤシキジュウゼンジ  
唐人屋敷十善寺）

などである。

この時期における中国人の日本語考察は、明代より盛んではなかったが、全く進歩しなかったとはいえない。収録の形式は明代のそれと変わりはないが、取り上げた語彙から日中交渉の変化と時代感を感じさせ、その時代の日本語研究の特色がそこに見られるのである。それは近代日本語研究において重要な役割を果たすばかりではなく、当時の日清貿易関係の研究においても重要な資料になる。

中国人の日本語学習を全体から見ると、清末は最も重要な時期と言ってもよい。周知のように、中国人は昔から「中日同文」という日本

---

<sup>16</sup> 渡辺三男（1962）「吾妻鏡補所引の日本語彙一校本『海外奇談国語解』—」、『駒沢大学研究紀要』20 号、第 20—21 頁。

語意識を持って、日本語に対する記録は方言<sup>17</sup>として収録され、専門の日本語に関する本はほとんどなかった。しかし、清末の戦争や貿易の影響が一つの要因となり、日本は中国人が外部世界から新しい知識を取り入れる橋になる。日本留学、日本語学校設立など、新世界を理解する手段として、そして国の強い期待を受け、清末における日本語学習は特別な意味を持つことになる。重視された以上、日本語教科書を必要とするのも当然である。そこで、清末には大量の教科書が出版され、教科書の編纂することも日本語の教育に対する試みであり、中国人の日本語学習は外国語学習として行われた。教科書の編纂者や出版機関などに関係なく、教科書自身は日本語学習に対して歴史的な意味を持っている。更に、清末は知識人たちの日本語に対する意識が飛躍的に変化する時期である。日本語学習の進行により、日本語知識の習得も全体的に深いものとなった。日本語を外国語と見なし、真摯に研究を行う姿勢も、清末の日本語教科書からはみてとれる。

## 1.2 清末における教科書の分類

筆者が実際に閲覧した教科書を、形式、内容、編成目的、著者編者と出版機関、以上5つの角度から分けた。

### ① 形式から見ると、速成式と伝統式の二種類に分けることができる。

上述のように、清末における中国人の日本語に対する「中日同文」の意識は、歴史的に長く一般的な認識と認められた。これは中国人が正確かつ科学的に日本語を学習・研究することの障害となった。一方、西洋言語と比べ、日本語学習は中国人に向いていると考えられ、逆に日本語学習の普及に有利であろう。更に、梁啓超は『和文漢読法』を編纂し、彼のような知識人たちはそれを日本語学習の速成方法として提唱し、以後ほとんどの速成教科書はそれに基づいて書かれたのである。このような速成教育法の指

---

<sup>17</sup> 沈国威（2009a）の考察により、中国人は日本語を「方言」と考えることから、外国語として記録するまでの過程を解明した。本稿はこの研究を踏襲する。さらに、教科書の序言でも、日本語を「方言」と称すものも少数ではない。例えば、『東語正規』（1900）、『新編日本語言集全漢譯日本新辞典合璧』（1902）などがある。

導により、「中日同文」の意識は更に深まり、日本語学習は文法と文章を読めることだけを目的として、聞く・話すことを目指す実地的な会話練習などは軽視され、当時の日本語学習者や留学生に影響を与えた。故に、速成教科書は現在の同種類の教科書とは異なり、短時間で話せることを目指さず、単語と文が読め、素早く文章を翻訳することを目的としたのである。短期間で起こった留学ブームの対策として、速成教科書は盛んに作成された。ページ数が少なく、発音と文法の説明が不十分である速成教科書が多かった。例えば、『東語速成編』（1905）、『日語捷徑』（1905）などが挙げられる。

一方、伝統的な言語の習得において、音韻、単語、語句、文法、文章のように、だんだん習熟度を深めていく方法は一般的と思われる。この規則に従う教科書が伝統教科書である。例えば、『東語正規』（1900）、『（実用）東語完璧』（1903）などがある。

② 内容から見ると、更に語彙、会話、文法、精読と辞書の五つに分けられる。

まず、語彙教科書は現代の単語帳のようなもので、簡単な発音説明と漢字の仮名表記があり、収録された単語は名詞を中心として、少量の動詞を加え、たまに短句もある。例文と文法の説明がほとんどなく、中日対照の形式を取るものが多い。辞書の役割を務める教科書もある。例えば、『東語簡要』（1884）、『和文奇字解』（1902）などがある。なかでも、「奇字解」類の本は文化上の優越感と「中日同文」の意識に基づいて編纂されたものである。語源の考証を通して、新しい語彙を普及し、心理上の日本語に対する優越感も満たされる。これは、時代の変遷に伴った、中国知識人たちのやむを得ない行動でありながら、奇妙な日本語観念による産物ともいえる。なお、「奇字解」類の本と速成教育は互いに補完し合う存在と言える。

次に、会話教科書は会話を中心に編成され、ほとんど留学生や商売人を対象とする。内容は中日対照、簡単な発音説明と単語、漢字の仮名表記であり、文法の説明がない或いは非常に簡略であ

る。例えば、『漢譯学校會話篇』(1906)<sup>18</sup>、『東語會話大成』(1907)などがある。語彙、会話、文法、精読の四つの種類のなかで、語彙と会話教科書の数が一番多く、それは日本語学習の主流が、速成教育法であることに従ったためである。当時の中国人、どのように日本人と交流するかを勉強し、そして日本語を勉強する目的は何であるか、その様子が会話教科書から見てとれる。一方、語彙類の教科書からは、語彙の発展、そして術語などの変化も見える。このように、この二種類の教科書からは実用的な日本語教育の発展が読み取れる。中国人の日本語を学習する目的が、文章の読解・翻訳から、実用性へと重きを移すようになり、日本語が外国語として機能的なところを注意したことがわかる。当時の中国人、特に知識人たちの日本語知識の習得状況からもそれがわかる。また、語彙や会話文の中国語訳文は、日本語に対する翻訳の研究の参考にもなるだろう。

そして文法教科書は、中国語で日本語文法を説明するものである。初期の文法教科書は、日本人によって編纂された文典を主とした翻訳作品である。日本語での「文典」は文法書の意味で、形式的には教科書と異なる。日本人教師により編纂され、日本語文法を系統的に教えることを目指す。当時、多くの文典は中日対照の形式を取り、即ち日本語から中国語に翻訳されたものである。なかでも、丁福同が訳した『中等日本文典譯釋』は中国で出版され、中国人が訳した最初の文典である。しかし、日本語の文典を中国語へ単純に翻訳する教科書は、中国の学習者に適しない可能性がある。こうして、中国人学習者向けの文典が必要となる。日本の教育家や国語専門家などは様々な方法を試み、そのなかでも代表的なものは、松本亀次郎が編纂した『言文対照漢訳日本文典』(1904)である。他の教科書と比べると、この本は中国人が日本語を学習する時の難点に対してより詳しく説明されている。編纂方法も、以後の中国人によって編纂された文法教科書の参考となった。よって本書は何回も重版され、発行期間が長く、発行数量

---

<sup>18</sup> 本書の第二編に「語法要例」があるが、「和文漢読法」に基づいて、例文だけで説明がないため、会話の分類とする。

も大きい。本書に対する考察は第四章で詳しく説明したい。『言文対照漢訳日本文典』が出版された後、中国人も自ら日本語文法教科書を編纂し出版した。例えば、『東文典問答』(1901)、『東文法程』(1903) などである。なかでも、『東文法程』は日本の文法書に倣って、中国人が自ら編纂した最初の文法教科書と言える。文法教科書は一般的には中国語の訳文があり、例文を挙げているが、漢字の仮名表記は少ない。これら文法教科書からは、当時の中国人の言語分析に対する意識、日本に倣った品詞分類と代名詞・副詞のような名称の受容、中国語文法に対する影響が見える。

精読教科書は以上の三種類をまとめた、総合的な教科書とも言える。内容は充実しており、文法の説明はもちろん、語彙、会話、短文なども含まれている。中日対照で、漢字の仮名表記もある。著者のほとんどは一定の日本語知識を身につけ、更に日本での留学や日本語学習経験を持つ人である。これによって、この種類の教科書は日本語の正確さや編纂方法などの点でレベルが高く、正しい日本語を学習することができる。例えば、『東語正規』(1900)、『東語課程』(1905) などがある。なお、精読教科書は語彙や会話を通して百科知識を収録するもの、また伝統的な形式を取るものが多い。

最後の辞書は普通の教科書より出版時期が遅かった。これは、西洋言語の辞典は主に中国語学習のため、西洋人により編纂されたが、日本語辞典は「同文」の日本語意識で、必要としないものであったためとも言えるだろう。清末の日本語辞典に関しては、本論文の第五章で詳しく検討したい。

- ③ 編集目的から見ると、言語とそれ以外の目的の二種類に分けることができる。

言語教科書は文字通り、外国語を学習するために編集されたものである。ほとんどの教科書は留学や言語研究を目的とするが、この種類の教科書は語彙や会話の速成教科書が多く、例えば、『東語速成編』(1905)、『東語會話大成』(1907) などがある。しかし、中には水準が高い総合的な精読教科書も含まれている。例えば、

『東語正規』(1900) などがある。言語以外の目的により編纂された教科書には法律、貿易などの領域がある。およそ速成形式で、普通の言語教科書よりも該領域の用語と常用会話が主な内容であるが、一部簡単な発音や文法の説明がある。清末の時期全体から見ると、前半は貿易の目的を含んで編纂された教科書が多く、当時の日本への商売や中日貿易が増える状況に適応するためであるだろう。例えば、『貿易叢談』(1901)、『法政日語叢編, 民法』(1907) などがある。

- ④ 著者編者から見ると、中国人編纂者、日本人編纂者、中日共著の三種類に分けられる。

例えば、それぞれ『東語正規』(1900)、『法政日語叢編, 民法』(1907)、『(実用) 東語完璧』(1903) などがある。なかでも、日本人が編纂した教科書は水準が高いものが多い。特に文法類の教科書、外国語の文法教育らしく系統的に説明し、中国語対照があるものが少ない。中日共著の利点は正確さを確保しながら、中国人学習者の需要に応じることが出来る点である。しかし、これに着目し過ぎると逆に内容上レベルが高くないこともある。初期の日本語教科書は主に日本人編纂であり、水準が確保できるが、日本人は中国人の言語習慣をよく知らないため、中国人にふさわしい教育方法を探すことは難しい。そして、一つの国の外国語教育として、外国人の作る教科書だけを頼りにすることは現実的ではない。当時の教科書は主に日本での留学生を対象としているが、中国国内にいる留学準備中の人や日本語を学習・研究する学習者には専門の教科書がない。当時、中国人学習者の数が少なく、日本に対する研究も初級段階であったため、教科書を編纂する中国人著者は日本で商売を営む者か、幼い頃から日本に滞在した者、或いは留学生に限られた。このことは、教科書の水準や日本語のレベルを期待できる一方限界もある。中国人自らが高水準の日本語教科書を編纂することは、当時の知識人たちの願いであっただろう。

- ⑤ 出版機関から見ると、中国出版と日本出版の二つに分けることができる。

それぞれ『和文漢譯讀本』(1901)、『日本文典大綱』(1902) などがある。この二種類は水準から見ると大同小異であるが、日本で出版された教科書は日本人による編纂・校訂のものが多数であり、日本の外国語学校で教科書として使われる場合が多い。

そして、教科書の出版時期から見ると、筆者が着目した日本語教科書に関する資料は、1912年まで出版されたものが、合計139種類ある。<sup>19</sup>なお、台湾向けの教科書は含まない。

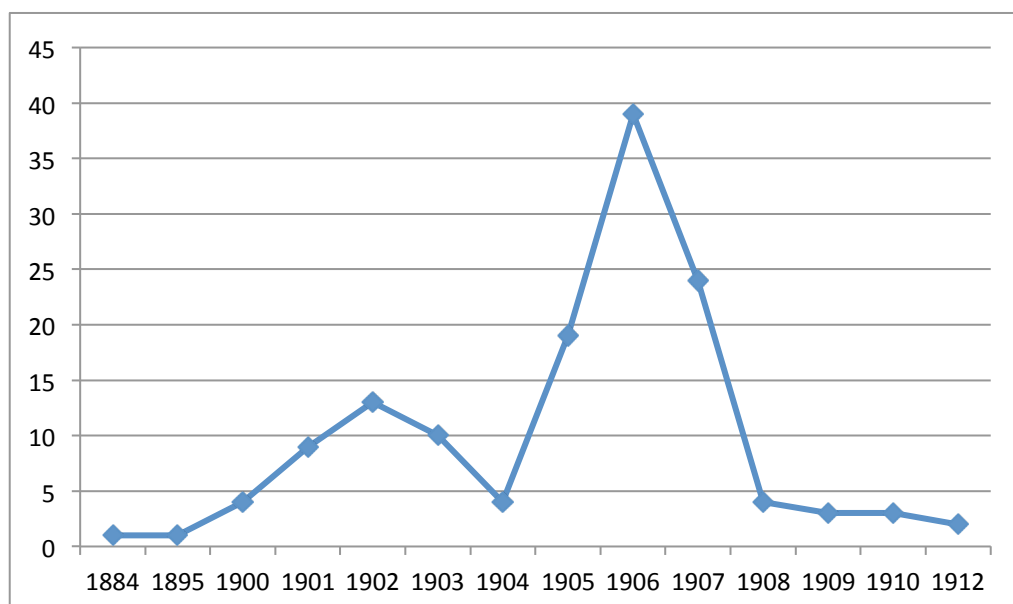


図 1-2 1912 年までの日本語学習書の数量推移図

図 1-2 は、『東語簡要』が出版された 1884 年から 1912 年までの日本

<sup>19</sup> 合計数は、関西大学外国語学部沈国威研究室が作成した「近代日本語教科書一覧（初稿）」をもとに、筆者が『第二次大戦前・戦時期の日本語教育関係文献目録』（文部省科学研究費補助金による総合研究（A）研究成果報告書）、『増補中国人日本留学史』（実藤惠秀、1970 年、第 62－64 頁）、『実藤文庫目録』（東京都立中央図書館により作成）、「（資料）『日本語教育史』資料調査 1991 年・中国」（斉藤修一）、『中国人の日本語学習史——清末の東文学堂』（劉建雲、2005 年、第 274－279 頁）、「清末日語教材之研究」（李小蘭、2002 年、浙江大学修士論文）等の資料を補い、まとめたものである。1884-1912 年主要な日本語教科書一覧表は附録五を参照してください。

語教科書の種類の数量変化を示す。1884年から1895年の間、1895年から1900年の間及び1911年に出版された日本語教科書に関する資料の実物はみつからないため、図1-2の中には表示しない。

図1-2から見ると、1912年までの中国人の日本語学習の様子がわかる。一般的には、中国人により編纂され、最初の科学的な日本語教科書は、1900年に出版された『東語正規』と認められている。該当書に対する考察は第二章で詳しく述べる。1900年で線を引き、教科書の視点からこの時期の中国人の日本語学習を二つの段階に分ける。1884年から1900年にかけて前期として、1901年から1912年にかけて後期とする。これは清末における中国人の日本語学習の全容だと言えるだろう。調査時間が短く、収集資料が不完全のため、これらの教科書は全てとは言えない、本研究は筆者が実際に閲覧する教科書だけを対象とする。

前期は徳川幕府による鎖国が終わり、日本側から中国と本格的な交流を再開する時期である。一方、戦争により中国側も日本に注目し始め、「同文」と言う日本語意識を抱いて、日本語を受け入れた。この時期に出版された教科書はシンプルなもので、語彙の収録を中心とした、『東語簡要』（1884）、『東語入門』（1895）及び『東語正規』（1900）の三冊のみである。しかし、著者は既に日本語の機能性に気づいていたと考えられる。例えば、最初の『東語簡要』で中国人が貿易や商売を行う際、日本語を身につけていなければ交流に不便であることに言及した。なお、初期の日本語教科書からは、著者たちが習得した日本語知識の異同等が明らかに見てとれる。その後、新しい言語として学習し、そしてその国の先進技術と政治・経済を習うことをきっかけに、日本語学習の模索を始めた。この時期には様々な教科書が出版され、各種の方法を試み、その中から中国人に適する形式などを探求していった。しかし、当時の中国人の日本語意識は古いままであり、日本語自身の文法がまだ。それに加え、この時期に出版された教科書は簡単な語彙と会話が依然として主流であり、日本語学習の目的は主に貿易に用いるためであった。ところで、この時期から日本に渡航する様々な目的が出始めたため、教科書の種類も多様化する傾向があることを言い添えておく。

周知のように、清末において、清代政府から提唱し、日本留学や日本及び日本語研究のブームを起こした。これにより、日本語学習のブーム期も迎えられた。日本語教科書において各種の学習方法が試みられたことは、中国人に最も合う形式を模索する情熱のなせる業であることを推測できるだろう。新しい思想を広げるためか、日本伝来の本や文章を翻訳するためか、どちらかといえば、当時の中国人はより速く日本語を習得できる方法を求めた理由である。こういった環境の影響で、速成学習法は主流になり、関連する本も大量に出版された。語彙と会話は速成学習の対象であるが、現代外国語速成教科書の編纂する方法と非常に近く質的に優れた教科書まで現れた。この時期に出版された教科書の数は最も多く、表 1-1 をみると、1906 年の一年間には 45 冊の教科書が出版され、清代全体における出版数のピークを迎えている。教科書の種類も会話、文法、及び中国人によって編纂された辞書が揃い、中に特に各種の文法教科書の取り組みは日本語学習を更に科学的な方向へと導き、中国語文法にもある程度の影響を与えた。また、「奇字解」に関する本はこの時期から現れ、1918 年まで出版されていたことから見ると、中国の知識人たちの日本語における意識の変化が、長い時間を必要としていたことがわかる。

その後、学習ブームの下がる傾向が見えるものの、出版された教科書の品質は高く、科学的に日本語を研究するものが多くなった。語彙類と会話類の教科書の水準は更に熟成し、文典が数多く出版されたのと同時に、洗練された漢訳日本語の辞書も出版された。同じ時期には、日本で出版された教科書の翻訳も多くなり、日本語の教育方法が中国に導入された。それに対し、中国人によって編纂された教科書の数は多くない。後期は前期を基礎として、日本語教科書が各方面でより成熟となり、過去に出版された高品質の教科書を修正のうえで再販することが行われた。

中国の日本語学習史において、清末は「黎明期」と言ってもよい。当時の日本語教科書は、上述した二つの段階を経て、本格的な外国語教科書の形式になり、後の日本語研究と教科書の基盤になった。現代日本語教科書の完成に対しても、取り外すことのできない存在である。そして、日中・中日辞書の出版も、日本語の教育と学習に対する影響

はもちろん、科学的な日本語認識の成立にも、重要な意味を持っている。

### 1.3 教科書の序言から見た清末における日本語学習の目的及びその変化<sup>20</sup>

言語が通じないことが、中国人の日本語学習における主な原因であった。日本留学も、当初は貿易や政治上における交流の利便性を求めるための言語習得また視野の拡大を目的としていた。留學生日記や現地の学校などの文書は当時の中国人の日本語学習状況を記録してきた。これらの日本留学に対する研究から日本語を学習する目的も垣間見ることができる。酒井順一郎の『清国人日本留學生の言語文化接触—相互誤解の日中文化教育交流』（2010）によると、清国人日本留學生のフレームワークは末期官僚志向型、国家近代化型、市民生活堪能型と民間上昇志向型<sup>21</sup>の四種類に分けられ、留学の目的が異なるという。

日本語教科書は日本語学習を目的として編纂されたもので、何を、どうやって日本語を学習するかによって教科書の内容は決定され、日本語を学習する目的が教科書の編纂理由から見られる。更に、日本語に対する認識も、学習する目的や程度によって左右される。一般的には、教科書の序言や凡例で上述の情報を記録する。本節は、筆者が実際に閲覧した教科書の序言などから、当時の中国人の日本語学習を行う目的を分析したい。

清末における中国人の日本語学習状況は、主に以下四つの目的に分けられるだろう。特に、一番と二番の目的が清末の日本語学習の主流であろう。

#### 1.3.1 貿易や日常生活における交流の利便性

清代以前、日本に関する記録は商人たちによるものが多かった。外国語を学習するためではなく、異国事情の紹介か、或いは「方言」の

---

<sup>20</sup> 筆者が実際に閲覧した教科書の序言と凡例は附録六にまとめている。

<sup>21</sup> 酒井順一郎（2010）『清国人日本留學生の言語文化接触—相互誤解の日中文化教育交流』、ひつじ書房序章、第15頁。

発音を記録するものであった。清代になると、戦争の影響や民間人レベルにおける日本人との商業接触も増え、言語による交流の不便がますます明らかになった。ほとんどの各教科書の序言にはこういう状況が言及されていたが、後期の教科書は簡単な説明に留め、該当教科書の編纂目的を鮮明にした場合が多い。或いは、言語の角度から日本語と日本語学習の情報を紹介したものもあった。逆に、日清戦争前後の時期に出版した教科書には、両国の貿易交流に関する内容が少なくなかった。これは日本語学習の利点と実用性を強調するだけではなく、当時中国人の民族感情に配慮したためであろう。例えば、

近則東瀛歩武泰西、亦於通商各埠駐設領事、而上海首屈一指  
（『東語簡要』序言）

（最近日本は西洋に習い、各開港都市に領事を設け、中には上海が第一と言える）

日東之與中華、因為唇齒輔車之國矣、觀宇內之形勢、兩國宜相親相結（『東文易解』凡例）

（日本と中国は、お互いに密接な関係がある隣国であり、両国は親しみ合うべきである）

兩國近又修睦、增開商市、東人之來我華者愈多、貿易日盛、易啓猜嫌（『東語入門』序言）

（最近両国は友好になり、商売市場が開き、中国に来る日本人が増えている。貿易は日々盛んになり、「言語がわからないと」誤解を招きやすい）

といったものが挙げられる。

一方、貿易交流において、外国人との直接的な接触を通じて、「聞く」と「話す」という問題を最初に喚起するのも当然である。当時、政府によって推進された大規模な貿易はまだ少なかったため、日本語を学習するきっかけは民間の商業活動による場合が多いと思われる。そして、上述の二つの問題において、根本的なものは「口語の交流」

である。これも、日本語に関する記録に最初は発音に係わる内容が多い原因であろう。もちろん、日本語に対する科学ではない認識により、外国語の角度から発音に関する内容を編纂する教科書は、当初「切音」などの方法に頼っている。

清末におけるほとんどの教科書は、序言で日本語学習を行う目的を貿易に便利であるためと言及し、貿易専用の教科書も出版された。例えば『貿易叢談』（1901）などである。その序言で日本語を学習することは、「便於学者益於商旅（学ぶ者には便利で、商業と旅行には有利である）」という記述があり、貿易交流における日本語学習の需要を垣間見ることができる。また、他の教科書もみてみよう。

近以日人通商蘇杭、兩郡效日東方言者頗衆、念祖乃出其所知、成東語入門一書、為問道之津梁、舌人之木鐸、俾貿易場中通問答者作先路之導焉（『東語入門』王序）

（最近日本人は蘇州と杭州に通商し、両都市で日本語を学習する人が増えている。念祖は自分の知識を活用し、『東語入門』と言う本を作成した。これは道を示す橋で、通訳の教師である。貿易をする時、通訳者を指導するものである）

讀東文者……所惜者都屬於貿易家、言本書有鑒於此故……於商賈尤宜（『東語初階』牟言）

（日本語を学習する人は……ほとんど貿易に関係する人である、本書はこの理由により、商人に特に有利である）

一方、留学のピークに伴い、日常会話の不便も現れた。同じく「聞く」と「話す」の問題であるが、貿易とは異なり、この場合は強い目的性がなく、多方面にわたって情報が関連するため、専門的な内容が少ない。全体から見ると、清末における教科書の序言に言及する「交流」は貿易の面から日常の面へと移行していく傾向があり、当時の日本語の学習者は商人に限らず、留学生も多くいたという状況を反映している。例えば、

有志者慨然於東渡之思、然既求学外洋而不通其語言文字、殊為恨事（『東語異同辨』序）

（日本に渡航する有志者たちは、海外留学をするくせに言語と文字が通じないことは、殊更残念なことである）

近者清国学生來遊我邦者、日益衆、欲研究各種学科、必先以日語為引線（『漢譯学校會話篇』自序）

（最近清国の学生が我が国へ遊学に来ることは日増しに多く、彼らが各種の学科を研究するためには、まず日本語を手がかりとしなければならない）

外国語を学習する根本的な目的は、交流に役立てることである。そのため、清末における日本語の教科書には、種類と編纂者を問わず、「交流」が基本的な需要目的であると、序言で述べている。

### 1.3.2 日本書の翻訳を通じた先進技術と文明の輸入

外国語に対する学習は、言語学習を通じて当地の文化、生活習慣、社会制度などを理解する機能がある。同時に、その国の文学、芸術また専門的な著作を読み、さらに研究することにもつながる。同文館は、西洋言語の課程を設立することに加え、外交の必要のほか、西洋の先進技術の輸入を通じて、国が進歩することを期待して設立された。洋務派の提唱により、外国語学習に課せられた役割のなかで、上記のような傾向はいつの時代よりも明らかに見られる。しかし、洋務運動の失敗をきっかけに、中国人は日本に注目し始めた。この同じく漢字を使う言語によって、日本人は訳書を通じて、ハイスピードで先進文明を輸入していった。この角度から見ると、中国知識人たちは、日本語が単純に外国語として普及され、受け入れられただけではなく、「道具」の作用を強調するからである。

翻訳する途中、先進技術だけではなく、それに関する新たな語彙も輸入された。先進技術は当初の目的として、化学、物理などの現代化学を理論と実践の両方面から中国社会に導入され、新たな語彙の輸入は中国語の言語システムに対して影響を与えた。術語の成立や翻訳さ

れた文学作品の中国文学に対する影響などが、この時期の訳書の功績である。この内容に関する研究は、沈国威の著作『近代中日詞彙交流研究—漢字新詞的創製、受容與共用』が集大成である。

教科書の序言から見ると、日本語は貿易交流の目的から、西洋文明の輸入に言及するようになるまで、長い時間がかからなかった。1895年に出版された『東語入門』では、既に「於国家得著富強之实效（これは国の富強に役に立つ事である）」<sup>22</sup>という期待を表している。当時、ちょうど清代政府が敗戦して、不平等条約を結ぶ敏感な時期であり、わずか十文字で、日本語学習に新たな意義を与えた。

しかし、先進技術と文明に対する期待の強さ、そして日本語に対する非科学的認識により、翻訳のスピードのみを求め、発音と文法の学習を簡略化にし、聞く・話す・書くことを重視しない速成学習が日本語学習の主流になった。更に「奇字解」のような中国人特有の日本語彙の学習方法が現れた。日本語学習の社会的な意義と実用性は、こういう観念により広がるのが確かであるが、「中日同文」の日本語意識に支えられた日本語学習は、ある意味で正式な外国語学習とは言えない。

こういう学習方法の影響下で、明確に序言で「翻訳」の目的を提示した教科書は約10冊がある。だが、他の教科書には「交流」という一言で簡単に紹介するものがあり、全く言及しないものもある。例えば、

说明其體繼、復説明其用、俾学著習語作文之便、而終吸文明智識於無窮也（『東語初階』序）

（その文体と作用を説明し、学習者は口語と作文に便宜をはかり、最終的に文明、知恵及び知識を吸収する）

今謀新之士輒曰、渝民智莫急於譯書、而從東文轉譯西書尤為事半而功倍（『和文釋例』自序）

（現在、新たな文明を求める知識人たちは、国民の智慧を変えるものは訳書であり、日本語の西洋訳書を翻訳することは倍の成果がある、と述べている）

---

<sup>22</sup> 陳天麒編訳（1895）『東語入門』、王序、陳氏石印版。

和文易於譯書而難於語言、何則譯書則能文之士略明文法之變化、即可操觚從事（『新編日本語言集全漢訳日本新辞典合璧』序言）

（日本書を翻訳することより、日本語を話すことが難しい。なぜなら、文法の変化を大体理解できれば翻訳できるからである）

こういう環境で、日本語は正式な外国語学習として知識人たちの視界に入ることは難しかった。数量から見ると、明らかに「翻訳」という目的を序言に書いた教科書は多くはないが、「翻訳」という手段が日本語学習の促進と新文明や中国語に対して与える影響は無視できない。

### 1.3.3 日本語研究

「中日同文」の日本語認識に基づく速成学習法は、清末における日本語学習の主流になったが、外国語として日本語を教育・研究する知識人もいた。教科書の著者から見ると、こういう日本語意識を持つ編纂者は、日本で言語教育を受けた人が多数である。内容において、速成学習法と比較して最も違いが著しいところは、語彙と文法の部分である。

上述のように、翻訳を目的とする速成日本語学習法は、日本語の漢字に依拠することである。即ち、中国人学習者に合わせた文法の学習システムがなかった。日本語語彙に対する翻訳も、原文をそのまま使う場合が多数である。新語彙が大量に現れたことと、日本語文法システムの成立に伴って、こういった学習と翻訳の欠落がますます明らかになった。清末において出版した教科書は、数量と種類が多く、内容の品質が雑然としているものの、全体から見ると、正式な日本語教科書になる傾向が見られる。

そして、日本留学のピークを迎え、外国語として日本語を学習する科学性に注意する学生が増えた。さらに、日本の学校も中日両言語が教育と研究の面で合流する場所になった。日本人教師は中国人向けの日本語教科書を何冊も編纂し、中国人学習者に対して、現場教育の経

験を合わせて、正確な日本語知識を教授した。同じ時期、中国人により編纂された日本語教科書や辞書の序言で、文法に対する認識の変化はもちろん、発音、アクセント、語彙、口語などの面でも、中国人著者の科学的な認識が見られる。例えば、

抑聞之口舌俱而不能作語者為之啞、列於廢疾之一、我国之留学日本者、數達八千人以上、其對於日本而不等於啞者幾人哉（『日本俗語文典』序）

（口と舌を作用できず話せない人は口が不自由と言い、体の障害の一つである。我が国の日本留学生は八千人以上に達して、日本人に対して口が不自由でない人が何人いるか）

日本語為漆著語、支那語為單綴語……本書説日語以對比漢語、兩國語本相異、惟有共用漢字、從此説彼、從彼説此、洵為至難（『漢譯日語文法精義』凡例）

（日本語は膠着語であり、中国語は単綴語である……両国の言語は元々相違があり、漢字だけを共用する。お互いに訳すことは最も難しい）

和文有文語體白話體之別、白話體不獨用之談話、即書報中用者亦不少、此二者中、在中国人以学文語體為易固矣（『和文読本入門』緒言）

（日本語は文語体と口語体の区別があり、口語体は会話だけではなく、書物と新聞で多く使われている。この二者において、中国人にとって文語体を学習することのほうが易しい。）

上述の序言から見ると、清末の中国人は日本語を学習することにより、内容がますます全方位的になった。さらに学習する方法と重点も変わっていった。例えば、『東語初階』の序言には、「教育之道宜乎循序漸進、自淺及深、自易及難、否則徒使学者扞格耳（教育は順を追って次第に進むことであり、浅きから深き、易しきから難しくなり、さもないと学習者に合わせられない）」と指摘した。当時の中国社会には、

やはり速成が日本語学習の主流であったが、こういう科学的な日本語認識と学習観念を持つ教科書が増えたことによって、日本語学習は「科学的な外国語学習」という方向へ進んでいった。

#### 1.3.4 個人価値の実現

1905 年に科举制度を廃止して以来、中国知識人たちは聖賢の經典を学習することによって人生の価値を実現することができなくなった。そこで、伝統的な知識人たちは努力する目標を失うこととなる。清代政府が提唱した日本留学は、帰国後に教育に関する仕事に従事することを保証する。一般的には当時の普通学校に就職できるため、「教師」身分によって中国知識人の誇りを守る政策であった。

留学を推進するため、1901 年、光緒皇帝は留学生に対して奨励の詔書を發布し、1903 年清代政府の指示で『奨励遊学畢業生章程』を制定した。これによると、帰国した優秀な留学生には、科举に及第して得ると同等の資格または官職を授与する、という。同年 10 月、張之洞は日本留学生に対して、『籌議約束鼓勵遊学生章程折』に『出洋学生約束章程』十条、『奨励章程』七条と『自行酌辦立案章程』十条を添付した。そして、外務部も章程の補充とする『咨文』を提出した。『咨文』と『約束章程』は官職を授与する資格に対して説明し、当時の留学状況を垣間見ることができる。『咨文』には「中国留学生在非在照辦約束留学章程之日本学堂畢業者（約束留学章程に規定される日本学堂から卒業した中国人留学生）、卒業後「該官私学堂自行收留者（当公・私学堂が自ら收容する人）」、と「品行不端之留学生（素行が正しくない留学生）」<sup>23</sup>という 3 点いずれかに該当する者を日本への留学生として奨励しないことを規定した。これは日本への留学の機会をねらって投機的な行為が行われることを防ぐためである。さらに、「品行不端」は品行のことだけでなく、「出洋学生流弊甚多、飭籌防范之法（留学生たちは流弊が多く、防犯の方法を考えなければならない）」<sup>24</sup>という理由から、政治活動に参加する可能性がある留学生を排除するためである。

そして、『奨励章程』には日本への留学生に対する奨励政策が規定さ

<sup>23</sup> 張之洞（1990）『張文襄公全集・奏稿』巻 37、中国書店、第 1－7 頁。

<sup>24</sup> 劉英傑（2001）『中国教育大事典：1840-1949』巻 1 浙江教育出版社 1 頁。

れている。

一、中国遊学生在日本各学堂畢業者、視所学等差、給以獎勵  
一、在普通中学堂五年畢業得有優等文憑者、給以拔貢出身  
一、高等学堂即程度相等之各項實業学堂三年畢業得有優等文憑者、給以舉人出身

一、在大学堂未学某一科或数科、畢業后得有選科及變通選科畢業文憑者、給以進士出身<sup>25</sup>

（一、中国遊学生は日本の各学校から卒業し、成績により奨励を与える

一、普通中学校から五年間卒業し、優等卒業証書を持つ人に、拔貢の称号を与える

一、高等学校及び相当の各実業学校から三年間卒業し、優等卒業証書を持つ人に、挙人の称号を与える

一、大学で一つの学科或いは多数の学科を履修しない場合、卒業する時選科及び変通選科の卒業証書を持つ人に進士の称号を与える）

1904 年 12 月、清代政府は『奏定考驗出洋畢業生章程』計八条を公布し、この制度はさらに完全となった。中国の伝統的な知識人の科举に対する感情を緩和させた。1905 年には、章程により最初の筆記試験を行われた。試験は 1911 年まで続けられたが、1905 年には科举制度は未だ廃止されていなかったため、受験者はわずか 14 名であり、全員日本からの留学生である<sup>26</sup>。

しかし、前述の三つの目的と比べ、出世という理由はより個人的で、さらに功利主義も見られる。故に、管見の限り、これに言及する教科書は『新編日本語集全漢訳日本新辞典合璧』一冊のみである。本書の序言で以下の情報が書いてある。

他日歸国后上以輔朝廷之振興庶政、中以廣益学校、樂育英才、

---

<sup>25</sup> 張之洞（1990）『張文襄公全集・奏稿』巻 37、中国書店、第 1－7 頁。

<sup>26</sup> 謝青（1995）「論清末留学畢業生考試」、『歴史档案』第二期、第 100 頁。

下焉者、所足以改良百工事業、使清国日進文明<sup>27</sup>

（帰国後、優れた者は朝廷を補佐して、政治を振興する。普通の人材は学校で人材を育て、最低でも各事業を改良し、清国の文明を促進させる）

日本で留学した後、官職と教職両方ともに従事できることが指摘された。教職に関して、日本人教師松本亀次郎により編纂された教科書で、「口ト耳ト能ク言ヒ能ク聴カズト雖、目ト手トハ能ク看能ク書カンコト欲スル者」という学習者のために設計した日本語の科目は「速成師範科」ということを指摘したい。

第一ヲ普通科ト曰ヒ、第二ヲ速成師範科ト曰ヒ、普通科ヲ習フ者ハ、我邦ニ留学スル年限、較久シクシテ、各種ノ専門学校ニ入ラント欲スル者、速成師範科ヲ学ブ者ハ、学期僅ニ八九月ニシテ、師範学科ノ大要ニ、通センコトヲ欲スルノミ<sup>28</sup>

普通科の学生は、聞く・話す・読む・書く全体から系統的に日本語を学習する。これは科学的に外国語を学習する方法である。一方、師範科の学生は文章を読むことのみ学習すれば十分である。日本語知識より、各種の専門学校に入り、「師範」のテクニックを身につけることが最終的な目的である。これも帰国後、教職に就くための準備であろう。

清代政府の政策から見ると、これは便宜上の措置とも言える。日本に留学する中国人が増え、優秀な人材を選び、そして有効的に利用することが目的である。一方、科挙による身分を重視する中国知識人たちの尊厳を守り、清代に対する忠誠心を保証する。もちろん、こういう政策も、大量の日本書に対する翻訳の需要と密接な関係にある。そして、留学のピークに伴い、日本に渡航する知識人たちは、正式な日本語教育を受けたか、真剣に学習したかを問わず、清末の日本語学習者には確かに一定の割合を占めている。帰国後の留学生たちは、日本

---

<sup>27</sup> 『新編日本語言集全漢訳日本新辞典合璧』序言、第3頁。

<sup>28</sup> 松本亀次郎（1904）『言文対照漢訳日本文典』例言、第2頁。

語研究や教科書の編纂において、優れた人もいる。第一回の試験で、進士身分を授与された人は、中国最初の科学的な日本語教科書である『東語正規』の編纂者、唐宝鐸と戢翼翬を含むのである。

#### 1.4 本章のまとめ

清末は中国人の日本語学習史のなかで最も重要な時期である。この時期の特殊性により、中国知識人たちに対して、現在の人と同じく単純に外国語学習の角度から日本語を受け入れることはできない。日本語学習は様々な意味合いが与えられた。一つの言語を学習することは、文明、個人や民族の運命を変える使命を担うと同時に、学習者自身も同じことを身に引き受ける。当時、中国社会は日本語に対する正しい認識はまだ形成していなかったため、科学的に日本語を学習することは難しかった。そのような原因もあり、日本留学のため正式な日本語教育を受けた人が増えたことにより、こういう状況を改善し始めた。

一方、当時の日本語学習は強い目的或いは功利主義を持っていたからこそ、短時間で日本語を中国社会や知識人たちに認知させることができた。そのため、清末の時期は、清代以前のどの時期よりも、日本語学習において積極的な傾向が明らかに見られる。そして、日本書を大量に翻訳することにより、新文明だけではなく、中国語に対しても大きな影響を与えた。さらに、日本語学習に対する情熱は、言語そのものに集中し初めた。教科書の編纂、種類の増加、専門性が強くなり、そして中国人により独特な試みなどから、この時期における日本語学習の発展を反映している。よって、学習する目的には清末の限界性が見られるものの、将来の教育と学習に基礎をうちたてた、日本語学習史における最も重要な時期であるといえよう。

## 第二章 初期中国人の日本語教科書

本章は前章で分けられた段階により、1900 年までの初期日本語教科書を分析したい。中国人向けのものに限らず、初期の出版状況について以下の表のようにまとめた。

表 2-1 初期日本語教科書一覧表

書名	著者	出版地	出版社	出版年
東語簡要	玉燕	上海	不明	1884
日語工夫	中野許太郎	釜山	釜山許書房	1891
日清会話自在	沼田正宣著	不明 <sup>29</sup>	法木書店	1893
独習日清対話捷徑	星邦貞（蟠彭城）編	不明	鐘鈴堂	1894
日韓清会話	吉野佐之助著	不明	明昇堂	1894
日清韓対話便覧	田口文治著	不明	田口文治	1894
日清韓三国対照会話篇	松本仁吉著	大阪	中村鍾美堂	1894
日清韓三国通語	天淵著	東京	薫志堂	1894
日清韓往復文	堀中東洲編	東京	小林仙鶴堂	1894
日清会話	参謀本部	不明	不明	1894
日清会話	木野村政徳著	不明	日清協会	1894
日清韓三国會話	坂井釵五郎著	東京	松栄堂	1894
東語入門 2 卷	陳天麒編	不明	不明	1895
軍用日清会話	鈴木道宇著、山中勘次郎（ほか）	不明	不明	1895
日清字音鑑	伊沢修二他	不明	並木善道	1895

<sup>29</sup> 実物未見のため情報が確認できない場合があり、「不明」と表示する。

東語例	物集高世著	東京	六合館	1900
東語文法提綱	薛琛	不明	東学会	1900
東語正規 3 卷	唐宝鏐、戢翼翬 共著	上海	作新社	1900

表 2-1 から初期の日本語教科書は以下の二つの特徴があるとわかる。

- ① 中国人向けの教科書が少ない。1900 年までに出版された教科書は、日本で出版され、中日韓三国言語の会話集が大きな割合を占めている。例えば『日韓清会話』（1894）、『日清韓対話便覧』（1894）などがある。そして、『日清会話』（1894）、『日清字音鑑』（1895）のような日本人向けの中国語教科書もある。このような教科書は日本人向けのもので、出版時間及び当時の日本社会環境から考えると、このように会話を中心に編纂され、中日韓三国言語を揃え、更に参謀本部により出版されたものもあり、軍事に係わる目的があると推測できる。
- ② 中国人によって編纂された教科書は『東語文法提綱』、『東語簡要』、『東語入門』と『東語正規』の四冊のみであり、全て「東語」の名を付けている。日本語を「東文」や「東語」と名を付けたのには二つの原因がある。一つは西洋言語の「西文」と対照するため、もう一つは戦争で日本に負けたことから民族感情により「中日」の併称を避けるためである<sup>30</sup>。ちなみに、『東語文法提綱』は中国人によって編纂された最初の日本語文法教科書とは言える。しかし、本書は資料が不完全のため、本章の研究対象にはならない。

中国人の日本語学習史では、教科書と言うと一般的には 1884 年に出版された『東語簡要』が中国人によって編纂された最初の日本語教科書と言われている。もちろん、『東語簡要』は本格的な外国語を学習するための教科書とは言えない。「日本語教科書」と認められるのは

<sup>30</sup> 「甲午中日之戰，日本已強，又添設了日本文，彼時名曰東文館。其所以名為東文館者，有兩種原因，說來也可笑。一因甲午之戰，官員們為堂堂中國同一小日本大戰，說起來丟人，意思是它不配與中國為敵，避免中日合稱，而云中東之戰，所以名曰東文。二因其他四國文字都是西文，所以名曰東文」、『齊如山回憶錄』（1989）、中國戲劇出版社、第 28 頁。

1895 年、陳天麒によって編纂された『東語入門』である。東文館が設立し始めてから 1900 年までの三年間、中国人によって編纂された日本語教科書はこの一冊のみである。更に、1900 年に出版された『東語正規』は、中国人によって編纂された最初の科学的な日本語教科書と評価される。この三冊は、中国人日本語学習史における代表的な教科書である。当時の中国人たちが日本語を学習する目的・形式、そして日本語に対する認識の変化、知識人たちの日本語知識を学習・受容する程度の進歩も見える。本章はこの三冊の教科書に対して考察し、『東語正規』を中心として分析したい。

## 2.1 東語簡要

本書は国立国語研究所の大田文庫に所蔵され、一般公開されているものは『纂輯日本譯語』<sup>31</sup>に収録された複写版である。『纂輯日本譯語』の解題により、本書は一冊の線装本であり、木版印刷である<sup>32</sup>。書型は 18.5×12cm、65 丁、見開き合計 130 ページである（うち第 14 ページは空白）。13 と 14 の二丁が飛ばされ、内容から見ると紛失ではなく、印刷のミスと推測できる。扉ページに「光緒甲申（1884）首夏」の文字が書いてあり、序言は「癸未（1884）仲冬月」に茂苑浣花生により書かれ、本書の出版年は 1884 年と判断できる。<sup>33</sup>

序言から本書の著者は玉燕居士であることが見られ、生平不詳であるが、曾て「久歴東瀛」の経験を持ち、一定の日本語知識を持っていたことが推測できる。序言で、「仰見我朝」のような文の区切り方が見られるため、本書は中国で出版され、或いは中国人のために編纂されたものと判断できる。

周知のように、19 世紀の中国人は一般に日本語を外国語として認識しておらず、「中日同文」の意識を持ち、日本語が中国方言の一種と認識された。1887 年初代中国駐日使団の派遣に従い、何如璋、張斯桂及び黃遵憲などは日本語に対する認識に変化が見られ、正確で、科学的な記録も増えた。しかし、中国ではまだ社会的な意識として成立し

---

<sup>31</sup> 京都大学文学部、国語文学研究室編（1968）京都大学国文学會發行。

<sup>32</sup> 字体から本書は木版印刷本と推測できる。

<sup>33</sup> 陰暦のため、1885 年の可能性もある。ただし、本文では先行研究を踏襲して 1884 年にする。

なかった。そこで、19 世紀の中国では、日本語は商業用の言語とは言えず、学術的な言語として見られない<sup>34</sup>。

『東語簡要』を編纂する間、黄遵憲の『日本国志』はまだ出版されていなかった。当時、日本との貿易がますます繁栄になっており、この状況も本書の編纂目的として序言で言及されている。想定する学習者は中国国内で日本語を使う必要がある人と設定される。しかし、本当の動機は、清末の上海とその周辺地域で、日本の茶寮が盛んになり、訪れる客が通じない言語による交流上の不便に悩んでいた。この問題を解決することが本書編纂する理由であった。

竊以中外通商、迄今已久、初時不過英、法美諸国而已、繼以泰西各国來者益眾、輯睦愈敦。仰見我 朝深仁厚澤、敷被遐荒、視中外如一體、足使海国臣民廣開見聞。近則東瀛步武泰西、亦於通商各埠駐設領事、而上海首屈一指。且日人於租界建房屋、創市肆、鱗次櫛比、即茶寮之增艷鬥麗、亦可謂酒天花国中、別樹一幟矣。惟我之人欲啜茗消愁者、苦於語言不通、徒乎負負、亦豈非一憾事乎。余友玉燕居士、久歷東瀛、於該国語言文字、靡不精通。茲因公冗來滬、感時事之日新、嗤斯人之舌歧、爰將日本要語摘錄一編、付諸梨棗、以公同好。俾使中東人民和好益敦、懋遷益盛。<sup>35</sup>

（中国と外国は長い間の通商があり、最初がイギリス、フランス諸国に過ぎない、続いて欧米各国と親しく繋がるようになった。本国は寛大であり、中外を一体に見、文明を遠いところまで伝え、各国の人民が視野を広くすることができる。最近日本は西洋に習い、各開港都市に領事を設け、中には上海が第一番と言える。日本人が租界で家をたて、市場を設け、ずらりと並んでいる。茶寮は其の中で特別な存在である。しかし、本国の人はお茶で憂さを晴らす時、言語が通じないから、無駄にな

<sup>34</sup> 沈国威（2010）「日語難嗎？——以近代初識日語的中国人為說」、関西大学東西学術研究所紀要第 43 輯、第 119 頁。

<sup>35</sup> 玉燕（1884）『東語簡要』、茂苑浣花生序 載於京都大学文学部、国語文学研究室編（1968）『纂輯日本譯語』京都大学国文学會、句読点は筆者が加える。

り、残念なことである。我が友玉燕居士は日本に長く滞在する経験があり、日本の言語と文字に精通する。公事で上海に来て、日進月歩であると感じ、言語が通じないことのために、日本の重要な語彙を収録して、本章を編纂する。共に便利のため、刊行する。更に中日人民の友好と貿易繁栄を促進する。)

本書は 1 ページ 10 語が記載されており、上は中国語、下は中国語漢字で表記された日本語読音が縦に配列されている。中国語検索、即ち中国語を日本語に訳す形式で、簡単な単語、語句を収録し、合わせて 1017 語である。事物により天文門、地理門、時令門、人倫門、帳房門、屋宇門、數目門、禽獸門、魚蝦門、顔色門、服飾門、人身門、花果門、器皿門、食物門、五金門、筵席門、船車門など 18 種類に分ける。分類できない語彙と簡単な会話を文字数により一字門、二字門、三字門と成句門の 4 種類に分けている。そして、「三字門」では短句も含み、「成句門」ではほとんど会話用の語句が収録されている。

著者は日本に滞在する経験を持つにもかかわらず、仮名で読音を表記しておらず、全て中国語の漢字が使われている。当時、ピンインはまだ現れておらず、切音の形式で表記されている。例えば、胡琴（可幾）、百（下戈）と客人（亞卻阿枯）などがある。これにより、日本に滞在する時期、著者は口語を主として、系統的・正式な日本語教育を受けていないことが推測できる。特に仮名と漢字を使う機会が多くない、或いは滞在時期が短い、日本語の文字意識がまだ不足であるといったことが考えられる。

本書の内容から見ると、翁廣平が編纂した『吾妻鏡補』と似ている。また福島邦道は本書の内容が「『吾妻鏡補』よりの剽窃部分」がある<sup>36</sup>と評価している。しかし、『吾妻鏡補』での発音表記は中国語漢字のみを使用しているが、その前に「日語夷譯語四十八字」に言及し、「伊呂波歌」も収録している。『東語簡要』の著者が本書を編纂する際には、日本語文字に関する内容を提示していない。

『吾妻鏡補』の内容と一致する部分は、発音の表記も同じである。ただ、部分的な省略があり、例えば「地」という語彙は、『吾妻鏡補』

---

<sup>36</sup> 福島邦道（1993）『日本語館訳語攷』、笠間書院、第 28 頁。

で「治」和「雪搭」と表記され、『東語簡要』では「雪搭」のみである。また、言葉遣いによる表記の相違もある。例えば、『吾妻鏡補』で「甚麼東西」の表記は「可力那宜」（これなに）<sup>37</sup>であり、『東語簡要』で「那宜木奴」（なにもの）になる。しかし、これも後者の読音は前者を参考していることも窺える。

表記された中国語文字の発音から見ると、上海地方の方言と推測できる。序言により、当時の江蘇・浙江・上海には、日本との貿易交流が多数あり、茶寮も上海地域で盛んになっていたため、学習者の範囲だけでなく、地域の制限もある。

『東語簡要』には『吾妻鏡補』で収録されていない語彙があり、そして『吾妻鏡補』にある語彙を収録しない場合もある。李小蘭は論文「清末日語教材之研究」で、『東語簡要』にある新しい語彙をまとめた。それを参考に、筆者は二冊の差異を以下の表 2-2 で表した。<sup>38</sup>

表 2-2 『東語簡要』と『吾妻鏡補』に収録された語彙比較一覧表

『吾妻鏡補』	『東語簡要』	『東語簡要』に収録されている新しい語彙	『東語簡要』に収録されていない語彙
天文時令類	天文門		甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥、前日、今日好、今日不好、昨夜、早起、朝、晝、日中、天晚、今晚
	時令門	日間、夜間、上午、下午、禮拜日、一個月、兩個月	

<sup>37</sup> 括弧は筆者が加える。

<sup>38</sup> 一部の語彙は二冊の本で分類が異なる。例えば『吾妻鏡補』で「船中器用類」の分類には容器と服飾に関する語彙が収録されている。表 1 で改めて分類しない。そして、中国語の訳語の差異があり、発音から見ると同一語彙と判断できる場合もあり、『東語簡要』の二字門、三字門及び成句門は短文が多いため、表 1-2 の中に収録しない。同じく『吾妻鏡補』の人事類、俗語類と州名島名類も含まれていない。『東語簡要』の一字門と『吾妻鏡補』の通用類は、一致するところが多いが、通用類には二文字の語彙も多数収録されているため、表 1-2 にも表示しない。

身 體 類	人 身 門	口、指、陽具、陰物	癩痢頭、麻臉、會面、身體、搓手、拍手、拓手、爪、背、擦、用心、飛信、小心、無心人、沒良心、膽大、膽小、伸腰、卵、卵袋、口、尿、小尿、大腿、膝、小腿、伸腳、氣、動氣、力大、出力、費力、淚、涕、口唾、痰、屁、汗、形、影、醜貌、標緻、清秀、齊整、風流、醜陋、老、後生、性命
人 物 類	人 倫 門	中国人、東洋人、外國人、鄉下人、老叟、老婦、東家、朋友、口店、馬夫、侍者、巡捕、童孩、麻子、相與、房東、租戶、匠人、裁縫、小工	君子、小人、善人、惡人、獸子、無情人、浮頭、伶俐、誠實、乾兒、媒人、幫閒、小廝、使女、戲小旦、皇帝、做官的、讀書人、道士、烏龜、婊子、好婊子、婊子使、刻薄、忠直、忠厚、正經、大量、家主、堂客、長輩、平輩、令尊、乾娘、夫、新郎、新娘、大頭目、小頭目、年行司、高木公、街官、街財副、通事、夫頭、守番、搜子、唐人、財副、總管、夥長、舵工、管公廝、總捕、小工廝、尊駕
禽 獸 蟲 魚 類	禽 獸 門	蝴蝶、蟬	象牙、牛角、犀角、皮
	魚 蝦 門		
花 木 類	花 果 門		蕊、心、山丹、棣棠、百合、瑞香、錦葵、六月雪、剪春羅、剪秋羅、秋海棠、竹口、
食 物 類	食 物 門	蛋餅、糖點、開水	粽子、糕、糕餅、饅頭、小菜、送菜、大茴、砂仁、藥、茯苓、

			石羔、雄黃、硃砂、味亞、澀
衣 服 類	服 飾 門	袴、拖鞋、緞、手帕、襪、眼鏡、小照、枕頭、手套、印花	包袱、素緞、大縐紗、中縐紗、小縐紗、紅縐紗、褐子
	顔 色 門	灰色、茶青	色、好花樣、大花、細花、鑲邊、□印、
房 屋 類	屋 宇 門	房子、房間、店鋪、茶館、酒店、錢莊、書坊、戲館、妓院、鞋店、雜貨店、洋貨店、綢緞店	紙窗、唐人公館、公堂上去、街官房、街官房去、轎房
船 中 器 用 類	船 車 門	火輪船、中国船、洋槍、駁、馬車、東洋車	餘利、大秤、小秤、尺長、對賬、合賬、奏本紙、做詩、煙筒袋、煙包、點火、烘火、火罩、火箸、剔牙籤、唐扇、荷包、紐扣、針、大桶、小桶、方盤、剪燭煤、燭筌、手照、燈、香、芸香、夙香、丁香、麝香、安息香、著象棋、貨、起貨、秤貨、裝貨、細貨、粗貨、包頭、裝包頭、漆、水銀、冰片、綠礬、明礬、黃蠟、磁器
數 目 類	數 目 門	十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、三十、四十、五十、六十、七十、八十、九十	一錢、一兩、十兩、千兩、萬兩
『 吾 妻 鏡 補 』 に 収 録 さ れ て	帳 房 門	算帳、收銀、利息、用錢、定銀、收條、憑據、找頭	
	器 皿 門	洋燈、屏風、面盆、剪刀、轎子、木器、竹器、古玩	

い な い 語 彙	筵 席 門	茶杯、盆子、牙籤、 豁拳、洗面、吃茶、 吃酒、吃飯、茶口、 瓷器、自來火、肥皂、 火油	
	五 金 門	洋錢、一角、二角、 一元、二元、五錢	

表 2-2 から見ると、『東語簡要』は確かに『吾妻鏡補』を大量に引用している。しかし、分類は更に細かく、常用しない語彙を外し、当時使われている新しい語彙を補充する。しかし、これら新しく収録される語彙には、貿易に関する語彙は多くない。特に成句門などの分類では、会話に使われる短文も、茶寮での交流を目的として収録されている。

本書の分類と編纂する方法は、旧式の記録方式を踏襲する。日本に滞在する経験を持ち、日本語レベルを「靡不精通」と評価される著者として、以前の日本書著者たちより相当な優勢と進歩が見られる。例えば実用的な会話短文を収録していることなどに見られる。中には「三字門」が 101 句、「成句門」49 句、合計 150 句を収録している。本書は日本語の実用性に注目し初め、日本人との交流を目的として、単純な方言記録ではなく、日本語を外国語として学習する意識を垣間見ることができる。中国人の日本語学習史において、発祥の意味を持つ書籍である。

しかし、本書の全体から見ると、一定の範囲で発行され、全ての日本語学習者に向かない「単語帳」である。また語彙と会話文の収録がかなり明確な目的を持つことから、中国人により編纂された最初の日本語教科書と評価することは適当ではないだろう。「最初の日本語を教える意図を持つ書籍」とした方が更に客観的である。

## 2.2 東語入門

### 2.2.1 書誌

本書の書型は 20×12.2cm で、石版印刷である。東京都立日比谷図書館蔵実藤文庫によれば、二巻一冊本と二巻二冊の二種類の本があり、文字の組み方や、丁数が異なるが、内容は全く同じである。二冊本の中に、誤植は二カ所がある。一つは目録で、本編内容の順番によれば、「服飾門」は「宮室門」の後ろに置くべきである。もう一つは、下巻第 33 ページの左側の内容と第 32 ページの右側とが全く同じである。一冊本にはこれらの誤植はない。

扉に「光緒乙未年（1895 年）」と書いてあり、序言は同じ年（光緒二十一年）に書かれているため、本書の印行年は 1895 年である。東文館が 1897 年に日本語学科を設立して以来、1900 年までの三年間に、中国人によって編纂された日本語教科書はこの『東語入門』のみである。

著者は陳天麒、字は念祖であり、海塩即ち浙江省錢塘道の出身である<sup>39</sup>。彼の生涯については未詳であるが、王韜が序言を担当することから、彼は知識人として名高いと推測できる。陳天麒の父は陳明遠である。『遊歴日本図経』第十八、中国使臣表によれば、陳明遠は第三代駐日公使徐承祖と第四代駐日公使黎庶昌の参贊官として来日し、公使の任期は三年で、合わせて日本に六年間滞在したことになる。

序言は王韜と著者自序の二つがある。両方とも光緒二十一年乙未閏月と書かれている。王韜は陳明遠の友人で、陳明遠が赴任した時期、陳天麒は父に連れられ、日本にいたことが分かる。陳天麒が日本語を身につけたことも明らかにされている。

念祖茂才、我友喆甫觀察長嗣也……前者觀察參贊日東、念祖航海隨任、趨庭授学之暇、兼通東西語言文字<sup>40</sup>

（念祖は秀才であり、我が友觀察使陳明遠の長男である……

---

<sup>39</sup> 陳天麒編訳（1895）『東語入門』自序「海塩陳天麒自識」より、陳氏石印版。

<sup>40</sup> 陳天麒編訳（1895）『東語入門』王序、陳氏石印版。

前者の観察使は参贊官として念祖を連れて日本に赴任した。父の指導で学習する暇に、日本語と西洋言語を身につけた)

王韜が序言で日本語に対して「方言」と「区区之東語」<sup>41</sup>の呼び方をしていることから見ると、本人は日本語を重視していなかったことが推測できる。更に当時の日本語学習状況は西洋言語に比べ、まだ距離があり、教科書の数も遥かに差がある。

效英法方言著書者獨夥、而於東語缺如、使学者无从入門、未免遺憾<sup>42</sup>

(英語・フランス語の著書を模倣する著者が多いが、日本語はまだない。学習者は入門する手がかりがなく、残念なことである)

43

当時、貿易交流がますます盛んになってきたため、言語力の不足が指摘されるようになった。しかし日本語を学習する手がかりがなかったことで、本書が編纂されたと考えられる。

近以日人通商蘇杭、兩郡效日東方言者頗衆、念祖乃出其所知、成東語入門一書、為問道之津梁、舌人之木鐸、俾貿易場中通問答者作先路之導焉<sup>44</sup>

(最近蘇州と杭州において日本人が通商しており、両都市で日本語を学習する人が増えている。念祖は自分の知識を活用し、『東語入門』と言う本を作成した。この本は学習する方法を教え、通事を指導する。貿易する際、通訳者にとって道を開くものである)

しかし、1895 年はちょうど日清戦争に中国が敗戦した年であり、当時、李鴻章が日本政府と『日清講和条約』<sup>45</sup>を締結するため来日し

---

<sup>41</sup> 同上。

<sup>42</sup> 同上。

<sup>43</sup> 筆者訳である。以下同様。

<sup>44</sup> 陳天麒編訳 (1895)『東語入門』王序、陳氏石印版。

<sup>45</sup> 一般的には「馬関条約」と呼ばれる。

た。4月17日条約は締結された。このような環境で、本書の序言の通り、同年7月<sup>46</sup>『東語入門』が出版された。社会的な影響は未詳であるが、当時唯一の日本語教科書として<sup>47</sup>、王韜は外国の事情を習い、中国が強くなることを期待したのは確かであろう。しかし、この認識は王韜自身のものか、陳天麒から教わったものかが考証できない。しかし、本書を編纂する出発点はやはり貿易であり、外国事情を習うことも商業上の配慮に基づいており、外国の体制や知識を習うことは限らなかった。

明洋務諳外情、本末兼賅、中西畢貫……於国家得著富強之实效、此其亟也<sup>48</sup>

（洋務と外国の事情を理解し、本末備え、中国と西洋のことを了解する……これは国の富強に役に立つ事であり、差し迫った必要である）

もちろん、李鴻章を代表とする洋務運動の失敗により、洋務運動の「中体西用」論の限界性が見えるようになり、人々は日本に目を向けるようになる。

陳天麒の自序で、当時の日本語学習状況にも触れ、貿易交流と言う目的で本書を編纂したことが分かる。

我華人之攻讀英法諸文者日甚一日、惟研究東学者寥寥、蓋亦苦於未得其門耳……兩國近又修睦、增開商市、東人之來我華者愈多、貿易日盛、易啓猜嫌<sup>49</sup>

（我ら中国人は英語・フランス語を学習する人は益々増加しているが、日本語を研究する者は少ない。それは方法がわからないからである……近年両国は友好状態にあり、商売市場は開かれ中

---

<sup>46</sup> 自序に「光緒二十一年歲次乙未閏五月」と記されている。西暦の7月である。

<sup>47</sup> 実藤恵秀（1942）「中国人の日本與研究」国語文化講座 6『国語進出篇』朝日新聞社、第274頁。

<sup>48</sup> 同上。

<sup>49</sup> 陳天麒編訳（1895）『東語入門』自序、陳氏石印版。

国に来る日本人の人数も増えている。貿易は日々盛んになり、{言葉が通じないと} 誤解を招きやすい)

本書は日清戦争の失敗以来、最初の中国人によって編纂された日本語教科書である。前述のような敗戦の背景で、両国の「友好」に言及していることに関しては、序言からははっきり記されてはいないが、何か言えない原因があったのではないかと、推測できる。

そして、序言で著者が日本に六年間滞在し、一定の日本語知識を持つことが分かる。

在東京六年、該国語言文字畧能會通一二<sup>50</sup>

(東京に六年間滞在し、当国の言語文字には大体通じる)

『東語簡要』が出版されてから 11 年経つにもかかわらず、当時、日本語に対する認識は「中日同文」の認識がまだ主流であった。上述の王韜の評価も偏見とは言えない<sup>51</sup>。長い時間日本語と接触したため、著者は日本語に対する自分の認識が形成し、言語学の角度から日本語と中国語の異同を分析した。これは以前の教科書より進歩したところである。

陳天麒は序言で仮名の存在を認め、四十八の字母があると表明した。更に日本語は表音文字であり、西洋言語のアルファベットと似ている。一方、中国語は表意文字であり、各文字が意味を持つ。日本語と中国語は全く違う文字であると判断した。当時の知識人は、中国語の一文字は一つの語素であることを意識していた。ところで、当時黄遵憲の『日本国志』が既に出版され、中には日本語文字に関する記録もあった。本書を編纂する際、陳天麒が『日本国志』を参考していないことが推測できる。例えば黄遵憲は日本の字母に関して「土音只有四十七音」<sup>52</sup>と指摘しており、本書の四十八字母と一致しない。

---

<sup>50</sup> 同上。

<sup>51</sup> 西洋言語に精通する王韜は序言で英語とフランス語に対しても「方言」と呼んでいる。

<sup>52</sup> 黄遵憲(1887)『日本国志』卷三十三學術志、第 1417 頁、『黄遵憲全集下』(2005)に収録され、中華書局。

日本字與語同、四十八字母、一字一音、聚音成言、就言見義、或兩三字成一言、或五六字成一義、間有七八字至十數字者、頗似西文拼字之法、以視我國之每字各具其義者、判然不同矣<sup>53</sup>

（日本語は文字と語彙が同じで、四十八字母あり、一つの字母は一つの発音を持ち、各発音を集め語彙になり、語彙から意味がわかる。二三文字で一つの語彙になり、或いは五六文字で一つの意味を持ち、稀に七八文字至る十数文字の場合もあり、西洋言語のアルファベットの組み合わせに似ている。我が国の文字は、各文字が意味を持ち、全く違うものである）

### 2.2.2 内容

清末における日本語の教科書で、『東語入門』は日本語文字、即ち仮名に関する教育内容がある最初の教科書である。「いろは歌」以外、五十音図も記載されており、日本語文字は平仮名と片仮名に分けている。しかし、平仮名を「大寫（大文字）」、片仮名を「小寫（小文字）」と称する。著者が西洋言語をマスターしているという前提から見ると<sup>54</sup>、こうした名付け方法は英語の影響を受けていると考えられる。更に凡例にも「東字拼法頗與西文相同」と記してあり、中国語の表意文字と違い、仮名は表音文字であることに気づいていたことから本書の進歩したところである。一方、西洋文字と同じという認識には、著者の限界性も現れている。それは著者が日本に滞在した期間中、受けることができた日本語教育は日本の正式な学校で行う発音などの教育ではなく、またローマ字で発音を表示していないことから、当時中国国内でローマ字に関する知識はまだ普及していなかった。

本書には清音だけでなく、濁音、半濁音、長音及び拗音まで収録されている。しかし、著者は明確に分類しておらず、日本語のめまぐるしい変化は「不外此四十八字（この四十八字に過ぎない）」と指摘している。仮名は全て漢字で切音の形式を取り、江蘇省と浙江省周辺の方

<sup>53</sup> 陳天麒編訳（1895）『東語入門』自序、陳氏石印版。

<sup>54</sup> 王韜は序言で陳天麒が「兼通東西語言文字（東西の言語を通じる）」に言及したため、陳氏は一定の西洋言語基礎を持っていたことが推測できる。

言で発音を表示する。本書の表記に関して、著者は「凡例」で以下の通り説明している、

書中所載拼法傍注華音

(本書の綴り方は横に中国語で表示することである)

所注字音係就江浙口音、易於通用、而東国之音、中国無字相肖者甚多、書中俱以反切取音、凡旁加一柱者均須反一音而讀之<sup>55</sup>

(注釈する字音は浙江地方の発音で、通用しやすい。日本の発音は中国で当てはまる字音がないものが多いため、全て反切で表す。隣に線を引くものは一つの音節を反して読むことである)

ところで、「不以土語夾雜其中」という説明から、当時南方の官話を標準として表記していたことが推測できる。発音の表記から見ると、『東語簡要』と比べ、本書は更に現代日本語の標準語に似ており、切音にもアンダーラインを付け、学習者が理解しやすい便利な表記方法を用いている。

そして、陳天麒は日本語の漢字に言及していない。つまり日本語の文字は仮名であることと認め、日本語の漢字が文章語で使われるという意識を持っていない。黄遵憲の『日本国志』では日本語が「用假名不得不雜漢文」、漢文は読書に用い、仮名からなるものは「今市井細民、閭巷婦女通用之文」<sup>56</sup>であるとしている。陳天麒は黄遵憲の日本語意識を持たず、個人的な素養のほかに、受けられた教育の影響もあるわけである。1882年、第二代駐日公使黎庶昌は、通訳を養成するために、公使館内東文学堂を開設した。陳氏は清代から派遣された留学生ではなく、随行する家族として来日したため、東文学堂で学習する資格はなく、塾のようなところで日本語を学んだと考えられる。できるだけ早く日本現地の生活に適応するために、口語の教育から学習した可能性が高い。そこで漢字を使う必要がある場合は多くないと推測できる。こうした環境では、正式な日本語教科書より、初心者向けの

<sup>55</sup> 陳天麒編訳(1895)『東語入門』、凡例。

<sup>56</sup> 黄遵憲(1887)『日本国志』卷三十三 學術志二、第1418頁。

もの、或いは児童用の小学教科書、例えば『童蒙教草』のような漢字が少ない読本などを使用したのであろう。これによって、日本滞在六年間の陳天麒は日本語の文字に対して正確な意識を形成しなかった可能性も高い。

全書は上下二巻からなり、中国の類書を参照して、合計 35 部門に分けられている。上巻には天文門、時令門、地理門、郡国門、君臣門、刑法門、人倫門、人物門、形体門、文事門、武備門、珍宝門、服飾門、宮室門和飲食門の 15 類があり、下巻には舟車門、器用門、医道門、采色門、数目門、秤尺門、果蔬門、草木門、花卉門、飛禽門、走獸門、鱗介門、昆虫門、進口貨門、出口貨門、一字語門、二字語門、三字語門、四字語門と談論門の 20 種類に分けられている。総語数は 1921 語あり、二冊本の誤植により、うち 20 語が重複したものである。全書は主に語彙であるが、三字語門、四字語門と談論門は短文と簡単な会話用語である。談論門には 69 句の会話を収録する。こうした編纂方法は、『華英通語』（1855）と『新增華英通語』（1893）にも見られる<sup>57</sup>。

本書は上に中国語の語彙を置き、下に日本語片仮名を配列し、右側は中国語漢字であり、アンダーライン付きの反切音で読み方を表示する。例えば、「雨天（ウテン 烏聽）」、「龍眼（リュウガン 利烏 額痕）」と「多謝（アリガトウ 阿利額託）」などがある。『東語簡要』と異なり、凡例の「所譯華文」という説明により、本書は日本語で検索するものであり、即ち中国語で日本語を翻訳している<sup>58</sup>。中国語訳語を上置き、元となる日本語語彙を下に配列している。これは著者が一定の日本語知識を身につけていることが証明できるが、一方、日本語の影響を受けている場合がある。本書の中には、当時中国語で使われていない語彙も現れた。例えば、当時中国語では既に「銀河」という語彙が一般に使われていたが、日本語の先入観の影響を受け、本書の天文門では「天河」のまま記載されている。

<sup>57</sup> 内田慶市（2009）「ピジン——異言語文化接触における一つの現象」『言語接触とピジン』、白帝社、第 1-13 頁。

<sup>58</sup> 劉建雲『中国人の日本語学習史——清末の東文学堂』（2005）第 224 頁に、本書と中明代の『日本館譯語』が似ていることを指摘している。「日常に使う中国語を想定して対応する日本語を当てるという体裁をとっている」と言う説は正確ではないと、筆者は考えている。

収録された短文と会話文には、簡単な問答文がある。特にその正確性と完全性は以前の教科書に勝るものとなっている。会話文には「テニヲハ」が使われていないが、口語表現では特に問題はない日本語となっている。例えば、

你能操華語否（アナタシナノコトバハナシマスカ）

我畧能幾句（ワタシスコシハナシマス）

上述のように、本書の内容は実用性を重視し、細かく分類し、広い範囲に触れ、日常用の語彙と短文を多数収録している。また新しい事物も見られる。例えば「牙粉」、「楊梅素」などがある。『東語簡要』と同じ、本書も国内の学習者を対象とし、中国における日本人との交流を目標としている。しかし、文法に関する内容は収録されておらず、日本語に対する分析も文の構造から行われていない。更に、日本語はどんな言語かを明らかにしておらず、語彙と語句も区別していない。これらの原因により、『東語入門』は単語と簡単な会話文を丸暗記したらたちどころに効果が出る語彙・会話集のレベルに限定された。そのため、本書も当時の中国人の理想的な日本語教科書とは言えない<sup>59</sup>。ところで、著者自身は意識していないかも知れないが、語彙の注釈や短文で、「テニヲハ」が現れる場合も見られる。例えば、「天象（テンニアラハレルモノ<sup>60</sup>）」などがある。虚字に関する内容は黄遵憲が既に『日本国志』で説明したが、清末における日本語教科書では、『東語入門』が最初のものである。

## 2.3 東語正規

### 2.3.1 書誌

1882年、第二代の駐日公使である黎庶昌は公使館に東文学堂を設立した。しかし、1895年、東文学堂は日清戦争が原因で閉じられた。本来、東文学堂は日本と貿易する際の日本語の通訳者を養成するために

---

<sup>59</sup> 劉建雲（2005）『中国人の日本語学習史——清末の東文学堂』、学術出版会、第32頁。

<sup>60</sup> アンダーラインは筆者が加えたものである。

開設された。東文学堂が閉じられた後、清代政府によって留学生を選び、日本に派遣するようになった。その留学生たちは日本人の教師から教えられ、日本語を学んでいた。修了後は公使館で日本語の翻訳に従事する予定であった。当時、康有為は初めて日本の書籍を翻訳して日本を学ぶという主張<sup>61</sup>を提出したが、日本へ留学生を派遣し、日本の書籍を翻訳するブームを引き起こしたのは、1898年の張之洞による『勸学篇』が原因であった。

東文学堂は13年間に12名の日本語専門の学生を養成した。1896年から、公使館は既に日本語の教育を行うことができなくなった。そのため、1896年に清代政府は13名の若者を選び、日本に派遣した。もちろん公使館の翻訳者を養成することが目的である。当時、第七代駐日公使である裕庚は、日本政府の外務大臣の西園寺公望を通して、13名の中国留学生を東京高等師範学校の学長、嘉納治五郎に頼んだ。これにより留学生たちは日本の教育システムに入った。そのうち7名の学生は卒業することができた。本書の著者、唐宝鏐と戢翼翬はその中の二人である。そのため、著者たちが日本の学校で学習した日本語に関する知識も本書に反映されている。

『中国人日本留学史』により、唐宝鏐（1878－1953）は上海で生まれ、字は秀峰である。1896年に日本に行った留学生の中で最年少であった。亦楽書院に入り、嘉納治五郎に従い日本語を学習する。1899年に亦楽書院を卒業して、清代政府により駐日本長崎領事館の副領事代理に任命された。また、1901年に駐東京公使館の館員を担当した。彼は公使館で翻訳者として働く際、宏文書院（元亦楽書院）で日本語の講師も担当した。1903年、彼は東京専門学校に入り、その後、東京専門学校から昇格した早稲田大学の政治経済学部に進学し、1905年に卒業した。彼は初めて日本で学士の学位を取得した中国人である。1906年から1911年までの間に（清光緒32年－宣統3年）、彼は北洋司法官養成学校監督・洋務局会辦・陸軍部一等首席参事官・川粵鐵路督辦などの職務を担当した。また、1911年（清宣統3年）に辛亥革命の南北平和交渉が行われた際、北方の代表である唐紹儀のもと

---

<sup>61</sup> 沈国威（2010）『近代中日詞彙交流研究——漢字新詞的創製、容受與共享』、中華書局、第248頁。

で参事官を務めた。民国が成立した後、北方政府国会衆議員・大統領顧問・直隶都督府顧問・外交科長・綏遠將軍署高等顧問・榮旗墾務督辦署秘書長・帰綏警務處處長などの職務を歴任した。1924年11月、彼は政治界から引退した。その後、北京と天津で法律事務所を創立し、天津に定住して弁護士としての生活を送った。1953年75歳で病没した。『東語正規』や『日本明治維新概要』などの著作が世に残されている。

もう一人の著者の戢翼翬(1878-1908)は湖北房県の出身であり、字は元丞である。1896年に公費で日本へ留学した。同じく嘉納治五郎のもとで3年間日本語を勉強した。後に東京専門学校へ転校し、同時に亦楽書院に入学した。日本にいる間に、彼は日本の書籍を翻訳して出版するため、東京で訳書彙編社、上海で出洋学生編輯所を創立した。また、実践女子学校の学長、下田歌子とともに作新社を創立して、日本の書籍を翻訳、大量に出版した。また、彼は図書局と印刷局も設立した。後に興中会に入り、腐っていた清代政府に支配された社会を批判し、民衆と共和などを唱えるため、『訳書彙編』や『国民報』、『大陸』などの月刊雑誌を作った。1905年に外務部の主事を担当して興中会の仲間を推薦し、法律の改革も行った。後に袁世凱により「交通革命黨、危害朝廷(革命党と結託し、朝廷に危害を加えた)」という罪で職を解かれて本籍に送還され、1908年に武昌で亡くなった。

本書はまさにその作新社により出版された教科書である。奥付では「明治三十三年七月廿三日印刷、明治三十三年八月五日發行」(明治33年7月23日印刷、明治33年8月5日發行)に書かれ、故に本書は1900年に出版されたものであることが確認できる。しかし、本書の序言に「又將次告罄」とあることから見ると、既に出版されたことがあり、1900年の版本は初版ではないことが分かる。他の出版時間に関する情報は見られず、本書の初版時間も判断できない。筆者が参考にするのは1906年に出版された第10版の実藤文庫版<sup>62</sup>である。全書は11.5×17.6cmで、三巻を含む一冊で250ページであり、レタープレスで印刷されたものである。

---

<sup>62</sup> 奥付には「光緒三十二年一月廿五日十版發行」のように印刷している。

実藤恵秀は本書に高い評価を下している。彼は、本書の内容は「日本語学習書として画期的なもの」<sup>63</sup>、「従来の日本語学習書よりはるかに充実したものであり、中国人としては初めて日本語を科学的に研究したもの」<sup>64</sup>などと評価している。また、本書は西洋の用紙で両面印刷され、西洋式で装丁されたものであるため、実藤は本書の印刷や装丁も「空前のこと」<sup>65</sup>であるという評価もしている。

本書の序言は著者によるもので、冒頭では「歳辛醜之冬、期満將歸」（今は 1901 年の冬であり、間もなく帰国する）が書いてある。当時、唐宝鏐は当时に東京公使館に務めていたため、本書の序言は戢翼翬によるものであろう。本書の序言では以下の事実が述べられている。

在中国發印、殊未便、故不能不在東付印

（本書の初版を中国で印刷・発行するのは、非常に不便なのだ。  
そのため、日本で印刷しなければならなかった。）

譯述之書、多至十餘種、已成筴矣

（後に中国で翻訳書は 10 何種類増え、より良い出版の環境になったため、中国でも印刷することができた。）

本書は『東語入門』と同様に日本語の初心者のために作られたものである。したがって、本書の説明の用語について、著者は「措詞祇取簡潔」<sup>66</sup>と述べている。すなわち、著者は簡単な言葉だけで日本語を説明することにしていると分かる。

中国は日清戦争で敗戦した後、洋務派による「西学東漸」という主張にすでに欠点が現れた。そのため、1897 年に、梁啓超は日本の書籍を翻訳し、翻訳書を通して西洋の新しい知識を学ぶという観点を初めて公にした<sup>67</sup>。変法を主張する人たち、特に日本で留学している中国の留学生たちはすでに日本を学ぶ重要性を十分に理解していた。その

---

<sup>63</sup> 実藤恵秀（1970）『増補中国人日本留学史』、くろしお出版社、第 39 頁。

<sup>64</sup> 同上、第 298 頁。

<sup>65</sup> 同上、第 298 頁。

<sup>66</sup> 唐宝鏐、戢翼翬（1895）『東語正規』、凡例。

<sup>67</sup> 沈国威（2010）「日語難嗎？——以近代初識日語的中国人為說」、関西大学東西学術研究所紀要第 43 輯。

ため、日本語は中国人が西洋の知識を学ぶために身につけなければならない重要な外国語になった。それは中国人が努力して日本語を勉強する新たな機会であった。戢翼翬は序言で以下のように述べている。

思謀輸入東邦文明、以享吾同胞之有志新学者

（新学を学びたい中国人のために、日本の文明を中国に導入することを考える）

竊思我国當茲創鉅痛深之後、有志之士旋思磨蕩腦力、以為變法用

（国の創立の深い痛みを思っ、大志を抱いている人たちは変法のために知恵を絞り尽くす）

こうした観点は重版された『東語正規』で更に顕著である。たとえば、重版の凡例は、初版と異なるところについて説明している。

將原刻古文及聊齋誌異刪去、增補散語甚多

（元の古文と聊齋志異に関する内容を削除し、単語や語句を増やすことになる）

すなわち、初版は、「古文聊齋數則」を含み、中国の古典の『聊齋誌異』に関する内容を日本語に訳している。和文漢読法の学習の一環として扱う内容である。しかし、重版は『聊齋誌異』に関する内容を削除して新たな単語やフレーズを加えた。その内容の変化により、著者は既に実用語の重要性を認識したことが分かる。著者は本書を日本語の教科書にして、日本に留学する人たちが確実的に日本語を習得し、日本を通じて西洋の新知識を中国に導入できるように十分に工夫した。それについて、著者は以下のように述べた。

言語為人類交通一大關鍵<sup>68</sup>

（言語は人類の交流にとって最も肝心なことである。）

---

<sup>68</sup> 唐宝鏐、戢翼翬（1895）『東語正規』、凡例。

將來東渡留學者、更當不絕於道、則輸入文明之先導、不得不求之於語學也

（将来日本に留学する人が絶えず、文明を輸入する先導として、語学を利用しなければならない）

研究此書即可從事一切普通專門學問<sup>69</sup>

（本書を研究すれば、すべての一般的、及び専門の学問を研究することができる。）

『東語正規』は清末において初めて中国人により編纂され、系統的に日本語文法を紹介した教科書である。多数の概念に関しては、本書はまだ明らかにしていないが、玉燕や陳天麒が編纂された教科書に比べて、日本語に対して更に全面的で科学的な分析を行った。例えば、著者は既に日本語の口語と文語の区別を認識していた。また、日本の文字について「漢字」と「字母」（仮名）の違いも説明している。

日本只有文法、決鮮語法等書、初學者苦無考證、茲特刻意搜求編成語法一篇、旁及文法

（日本には文章作法の本があるが、文法書が非常に少なく、初心者には参考するものがない。そのため、さまざまな資料を収集して文語法を一編に編纂した。また、本書では文章の作法にも言及している。）

中東文法各殊

（中国語と日本語の文法は異なる）

是書所有應用漢字處則用漢字、應寫字母處則仍寫字母<sup>70</sup>

（本書は漢字を使うべきところは漢字にし、字母を使うべきところは字母にする）

---

<sup>69</sup> 同上。

<sup>70</sup> 同上。

### 2.3.2 内容

#### ① 文字

本書は三巻に分けられており、巻一は「語法」である。その内容は14の部分で構成されている。各部分のタイトルは以下の通りである。

「文字溯源」、「文字區別」、「字母原委」、「字母音図」、「字母解  
釈」、「声調」、「拼音法」、「変音」、「文法摘要」、「虚字」、「言彙」、  
「学期」、「学訣」

つまり、本書は主に文字、発音、単語と文法の四つの言語学的な角度から日本語を説明している。

著者は日本語の文字の歴史を概略的に紹介している。日本語の音声は「訓」と「音」に分けられ、「音」は「呉音」と「漢音」の二種類があることを明らかにしている。そして、本書には「漢音唐代之音也、呉音呉越之音也（漢音は唐代の中国語の発音であり、呉音は呉国と越国の中国語の発音である）」という説があり、時代と場所の二つの角度から日本語発音の元を説明する。

本書では日本語の文字を、訓、字音、和字、国訓と新字の五つに分けている。訓は仮名であり、字音は漢字である。和字は日本人が作った文字であり、国訓は日本語の読み方で表す漢字である。新字は外来語のために使われる漢字で、これは明治時代における日本語の文字の特徴である。

著者は、明確に漢字は文章で使われる文字であると指摘している。漢字に関しては、このように述べる。

閭照之民、視為畏途、習之者寡

（庶民にとって非常に難しいため、漢字を学ぶ人は少ない）

また、仮名は漢字の読み方を表すために作られたことも指摘した。仮名に関しては二つの場合がある。一つは、「訓與字音編文、曰假名混文」（訓と字音を混じえて文章を作るのは「和漢混淆文」と呼ばれる）であり、すなわち「漢字仮名交じり文」である。もう一つは、「意義深

奥者曰和文」(意味が深い文章は「和文」と言い)であり、すなわち当時祭る時使われている文章である。

本書が出版される前に、黄遵憲は既に日本語の文章語と口語の区別に着目していた。彼は、「漢字雜假名以成文者、有專用假名以成文者(日本語では漢字と仮名を混じえて文章が作られる場合があり、仮名だけで文章が作られる場合もある)」と指摘した。しかし、清末に初めて「混文」と「和文」を区別した教科書は本書である。

著者は平仮名と片仮名の由来についても紹介した。中国語の漢字は仮名の根源として、本書では「真体」と呼ばれている。また、著者は仮名が語義を持たないこと指摘し、仮名が表音文字という認識を持っている。仮名の部分では、「五十音図」・「濁音」・「半濁音」・「撥音」・「促音」・「合字」・「変音要字表」・「平仮名変体字母表」及び「漢字平仮名草体」と「伊呂波歌」が付いている。

本書は、平仮名の変体や漢字の草書を初めて日本語の教科書に入れたが、それらは同じ文字の書き方の違いではなく、異なる文字の表記法である。著者がこれらを中国人向けの日本語教科書に編入した目的は、中国人が日本語の知識を詳しく把握できるようである。また、その内容は明治時代における重要な日本語の知識であるということも示されている。

仮名表の中では、仮名の後ろに「真体」、漢字の読み方とローマ字の読み方が付いている。漢字の読み方は「切音」で表され、官音、呉音と粵音の三つに分ける。また、本書は初めてローマ字で字音を表した。著者も初めて科学的な音声知識を日本語の教科書に入れた。一方、当時の中国では、英語の知識は日本語より広く知られていたため、中国人にとって、ローマ字は分かりやすいものであった。また、本書は文字を非常に詳しく紹介している。例えば、撥音は漢音を表す時に使われるものであると説明し、促音の読み方についても簡単に紹介した。

## ② 語音

著者は、日本語の音声は中国語とは大体同じであると指摘し、「韻為母音、音為子音」(「韻」は母音であり、「音」は子音である)と説明している。また、著者の説明によって、母音は「アイウエオ」の五音で

あり、母音と組み合わせて音節になるものは父音<sup>71</sup>と呼ばれる。「父音」という概念は、1893 年に出版された落合直文と小中村義象の『中等教育日本文典』においても使われている。落合と小中村の「父音」の本質は本書とほぼ同じであり、「父音」に関してこのように述べている。

母音を配合して、子音が生し、九個の聲音あり、これを父音といふ。(中略) 片仮名をもて、これを書きあらはす時は、クスツヌフムユルウ九個の音の幽微なるものなり。この音、母音に配合して、子音を生ずるものなれば、一にこれを原音ともいふ。<sup>72</sup>

一方、大槻文彦によって 1891 年に出版された『語法指南』には「半母音」という概念しかなく、「父音」に関する内容はない。そのため、本書に反映された日本語の音声知識は、著者が「父音」の概念を含む文典から学んだものであろう。

日本語の発音は、濁音、半濁音や撥音、促音などを含むが、著者はより詳しく分類している。著者の分類は以下のとおりである。

「喉音」、「齒音」、「舌音」、「唇音」、「撥音」(鼻音)、「促音」、「鼻音」

音声分類に関しては総合 82 字であると紹介している。著者はその分類に関して「此日本從來之本音也 (それらもともとは日本語の発音である)」のように説明している。

音声の部分には、「拗音表」、「長音表」と「拗長音表」がある。「拗音」という概念も中国人によって編纂された日本語教科書では初めて採用された。また、著者は半母音も紹介している。しかし、著者は日本語の音声に対する研究はまだ深く進めていないようである。例えば、鼻濁音の「ガ」行の仮名は、実は日本語本来の音声ではない。

また、本書は清末の中国人によって編纂された日本語の教科書として、初めて日本語のアクセントを紹介した。トーン以外に、著者は日

<sup>71</sup> 原文は「其與母音，並而成子音之音者，謂之父音」である。父音、実はウ段の仮名を指摘している。すなわち、半母音になるウ段の仮名である。

<sup>72</sup> 落合直文、小中村義象 (1893) 『中等教育日本文典』、第 4 東京博文館。

本語が「平上去入」という四声に分けられると指摘している。もちろん、現代言語学によれば、日本語のアクセントは音の高さだけを表すことが分かっている。しかし、当時の日本語のアクセントに関しては、日本人自身もあまり明らかではなかったため、著者が中国語の「四声」という概念で日本語のアクセントを説明したこともおかしくないのだろう。

なお、著者は「変音」という概念を提示し、「長変音」・「短変音」・「跳変音」・「雑変音」・「省変音」の五つに分ける。「変音」は音声だけではなく語法の内容も含む。著者はこの部分では、いくつかの変音の事項を挙げている。

中国語の鼻音からの「ン」は日本語の「イ」や「ウ」になる  
形容詞終止語「キシ」は「イ」になる  
形容詞連用の「ク」は「ウ」になる  
形容詞の後ろに「カ」、「ツ」、「タ」に付く  
動詞の発音は「イ」音や、促音、撥音になる  
強調やリズムのため、元の発音に「イ」、「ウ」や「撥音」、「促音」が付いて撥音は長くなる  
「ハ」行は「ワ」行の5音で読める  
複合名詞の音素を組み合わせる読み方  
連濁や母音脱落

以上の変音に関する内容は、音声変化の説明とすれば、音声に対して専門的な分析を行っていない。もし文法の内容だとしたら、後の文法部分のように、文法らしく紹介されていない。また、変音部分の多くの概念に対する説明は曖昧である。このため、著者は変音の内容を本書に入れた意図が推測できない。

本書は文法に関して詳しく紹介しているが、著者は多くの文法現象を仮名や音声の変化の範囲に収めている。それは恐らく著者の誤解や本書の配列などの問題であろう。例えば、撥音や促音に関する内容について、著者は動詞に「テ」が付く連体形、即ち語尾の撥音や促音の変化を音声の範囲に入れたが、それらに対する分析は文法的な方法で

行っている。これは本書の配列の問題である。一方、著者が多数の文法事項を変音として説明していることは、明らかに日本語言語知識の不足である。

### ③ 文法

本書が出版された時代は、中国では中国語文法がまだ体系になっておらず、日本では日本語の文法に関する研究はまだ深くない状態であった。したがって、当時の日本語の文法に関する資料は少ない。また、最初の漢訳文典は、1903年に出版されたため、本書が出版された当時は外国人向けの日本語文法教科書はなかった。こういう状況で、中国人に日本語の文法を紹介することは非常に難しい。例えば、中国語では多くの文法術語がまだ存在していなかったため、それを解釈することは難しい。また、著者の言語学知識が足りないということもあり、品詞に対して詳しく紹介してはいるが、文の構成法については一切言及していない。故に、本書の日本語文法に関する説明には限界がある。文法に関して、著者はこのように述べている。

言語之中、有卻別、然後有名稱、然後又文法、名稱者文法之始也、環珠有文字之邦、皆有文法、雖各国互異、至於言語之稱謂則  
—<sup>73</sup>

（言語の中には、区別があり、そして名称、また文法もある。名称は文法の始まりである。地球上文字を持つ国には、皆文法がある。国により異なるが、言語における呼び方は同じである。）

すなわち、言語の統語成分にはそれぞれ術語があり、それらの統語成分が文法を構成する。また、すべての言語には文法があるが、各言語の文法によって異なるところもある。しかし、文法事項を説明する術語は一致している。そのため、著者は日本語品詞の術語に対して抵抗感を持たず、本書でそのまま導入した。これは中国語文法に対して積極的な選択であろう。

本書では、文法に関する内容は品詞分類から始められている。日本

---

<sup>73</sup> 唐宝鏐、戢翼翬（1895）『東語正規』、第24頁。

語の品詞を名詞、代名詞、動詞（助動詞も含む）、形容詞、副詞、後詞、接続詞、感嘆詞の八種類に分けている。

名詞は普通名詞と特別名詞の二種類がある。普通名詞は有形名詞と無形名詞に分けられている。これは即ち具体名詞と抽象名詞のことである。特別名詞は人名、地名や国名を含む。本書の名詞分類は西洋文法の影響を受けていることが推測できる。中国語や日本語は西洋言語と異なり、語尾の屈折など、特別な形態を用いて意味を区別しないため、こうしたような名詞を分類する必要はない。そのため、中国語や日本語についてそのように名詞を分類するのは意味がない。例えば、1898年に中国で出版された馬建忠の『馬氏文通』ではこのように名詞を分類していない。しかし、当時の日本語文法研究は西洋の影響を受けていたため、落合直文と小中村義象が1893年に出版した『中等教育日本文典』では、本書と同じく名詞を分類している。

本書の普通名詞には「抜粋名詞」という分類があり、その中には動詞抜粋名詞と形容詞抜粋名詞が含まれる。抜粋名詞とは、動詞と形容詞の語形変化や動詞に形式体言「こと」を付けたもののことである。上述の『中等教育日本文典』にも語尾を省略する動詞は体言になることが説明されている<sup>74</sup>。また、『馬氏文通』の名詞に関する内容には、「静字」（形容詞）や「動字」（動詞）、「状字」（副詞）などの「通名假借」<sup>75</sup>という事項が指摘されている。しかし、本書は名詞と統語成分をはっきりさせていない。即ち、本書の内容から見ると、著者は名詞の概念と文法における役割をはっきり区別する意識を持っていない。

代名詞は普通代名詞、人代名詞、問代名詞と指示代名詞の4つに分けられ、具体的には以下のとおりである。

物事、地方、方位を含む「こそあ」系列

第一人称代名詞、第二人称代名詞、第三人称代名詞

疑問代名詞

連体詞の「この」、「その」、「あの」、「どの」。

---

<sup>74</sup> 落合直文、小中村義象（1893）『中等教育日本文典』、東京博文館、第44頁。

<sup>75</sup> 馬建忠（1893）『漢語語法叢書--馬氏文通』、商務印書館、第34頁。

そして、現代の分類方法と異なり、本書では「どれ」、「どこ」と「どちら」は問代名詞の範囲に収められている。著者は「近称」、「中称」、「遠称」でこれを説明するが、「不定称」には言及していない。一方、『中等教育日本文典』では本書のように代名詞を分類しない。しかも第一人称や第二人称などの概念もない。ちなみに、『語法指南』では代名詞に関する分類は現在とほぼ同じである。

動詞に関しては、本書は自動詞と他動詞の二種類に分け、動詞の語尾変化により正体動詞と変体動詞に分けた。正体動詞は四段活用、上二段活用、下二段活用と下一段活用を含み、変体動詞はカ行の変格「来る」、サ行の変格「する」、ナ行の変格「死ぬ」とラ行の変格「ある」を含む。

他動詞について著者はこのように述べている。

動作及他物之詞、如白虹貫日、貫者、非日自貫、白虹貫之也、大雨漲河、漲者、大雨漲之也之類<sup>76</sup>

(他動詞はアクションが他のものに及ぶ動詞である。たとえば、「白虹貫日」の「貫」は、日が自ら貫くことではなく、虹により貫かれることである。「大雨漲河」の「漲」も、大雨により漲られることである。)

動作は自発ではなく他のものに関連し、支配するもの即ち目的語が必要である。これは他動詞の要素である。著者は他のものに関連することを意識したが、肝心な目的語に関しては一切言及していない。『馬氏文通』は目的語という概念を提出しなかったが、目的語の役割に関する内容が書いてある。また、著者が挙げた「白虹貫日」と「大雨漲河」は他動詞の例文としては正しくない。実は「貫」の目的語は「日」ではなく、「漲」の目的語も「河」ではない。ところで、動詞について『語法指南』ではすでに以下のように述べられている。

動作ノ、他ノ事物ヲ処分スル意味アルモノヲ、他動詞トス<sup>77</sup>

<sup>76</sup> 唐宝鏐、戢翼翬（1895）『東語正規』、第28頁。

<sup>77</sup> 大槻文彦（1891）『語法指南』、北原保雄、古田東朔編『日本文法研究書大成』、勉誠社、第17頁。

また、『語法指南』には「蜂ハ蜜ヲ釀ス」のような正しい例文も挙げている。そのため、本書において他動詞に関する理解が正確ではない原因は、もちろん著者が『語法指南』以外の日本語文典を参考した可能性もあるが、当時の中国語と日本語の言語学に対する研究が未成熟であるため、著者は正確な関連知識を得るルートがなかったことが考えられる。例えば、『中等教育日本文典』では自動詞と他動詞に関する分類も精確ではない。『中等教育日本文典』では動詞について「自他格」という概念で分類し、動詞の可能態も「自他格」に入れている。また、「他動詞」という目的語も提示していないが、「他に然せさする詞」<sup>78</sup>のような説明がある。

また、動詞の語尾変化に対して、本書は「動詞因其事物動作之時、而變動其語尾（動詞は物事の動作する時により語尾が変わる）」のように説明したが、語尾変化の原因ははっきりしない。『語法指南』を例として、動詞に対して以下の説明がある。

動詞ハ、其動作ノ意ヲ、数様ニ現ハサムトシ、又ハ、他ノ語ニ連続セムトスルが為ニ、其語ノ末ヲ変フ<sup>79</sup>

なお、動詞の形態について、本書は「一語分將然、連用、忠直、續體、已然、命令等六種詞（一つの動詞は將然、連用、忠直、續體、已然、命令の六種の形態に分ける）」<sup>80</sup>という説明がある。1900年前後当時、動詞の終止形や連体形については、現在の認識と異なり、動詞の二つの変体として説明されている。また、『語法指南』では動詞に関する直説法や接続法などの説明により、当時の日本語の動詞形態に関する分類もまだ統一していないことが分かる。

また、動詞の語尾の変化について本書は「文有八種、話有五種（文は八類があり、話は五種類がある）」<sup>81</sup>と指摘する。そこで、著者はす

---

<sup>78</sup> 落合直文、小中村義象（1893）『中等教育日本文典』、東京博文館、第 82 頁。

<sup>79</sup> 大槻文彦（1891）『語法指南』、第 18 頁。

<sup>80</sup> 唐宝鏐、戢翼翬（1895）『東語正規』。

<sup>81</sup> 同上。

でに日本語の口語と文章語における文法の異なりを意識している。即ち、当時すでに日本語の口語文法に関する教育が行われ、著者は日本でそうした教育を受けられたのである。上述の『語法指南』も書面語と口語を区別している。そして、本書は動詞の各形態を説明するために「文」と「話」の例文をそれぞれ挙げているが、「恨（ウラム）」は上二段活用の範囲に入れるという間違いもある。

補助動詞（助動詞）の部分は、動詞の能動態、被動（受動）態と使役態を紹介している。その例文も「文」と「話」に分けている。著者の補助動詞に関する定義は正しい。また、補助動詞に関わる敬語も詳しく紹介している。その内容は以下の通りである。

- 被性之助動詞：動詞被動態（ル、ラル）
- 能性之助動詞：動詞可能態（ル、ラル）
- 使性之助動詞：動詞使役態（ス、サス、シム）
- 敬性之助動詞：敬語 オ＋動詞連用形＋ナサル―（用於話）、被性（用之者甚鮮）、使性（文話适用）、マス（自卑或尊人、用於話）
- 決定之助動詞：ナリ（用於文）、デアル、ダ、デス、デゴザイマス、マス（用於話）
- 否定（不決）之助動詞：ズ、ヌ（音便ン）、ネ、ナク、ナイ、ナケレ
- 否定決定之助動詞：ナラズ、デナイ、デアリマセン、デゴザイマセン
- 未来之助動詞：後の「想像」を参照する

また、本書は初めて日本語の時態を紹介した。著者は日本語の時態を現在、過去と未来の三つに分けた。「想像」も時態の範囲に入れたが、それは動詞の推量未然形である。具体的には以下の通りである。

- 現在（動詞未經變化）
- 過去：タ、ツ、ヌ、キ、ケリ
- 未来：ム（音便ン、用於文）、ウ（用於話）、ヨウ

- 想像：未来之助動詞（動詞推量）ウ、ヨウ、決定之助動詞ダラウ、デセウ、デゴザリマセウ、否定之助動詞マイ、マシ（用於文）、上下一段活用、サ行變格（属方言）<sup>82</sup>

著者の日本語の動詞に関する知識は当時の日本語文典から学んだはずである。例えば、大槻文彦の『語法指南』には助動詞に対して「使役ノ助動詞」、「受身ノ助動詞」、「敬語」と「推量ノ助動詞」などの分類を行い、動詞の時態について「現在」や、「第一過去」、「第二過去」などの分類をしている。しかし、本書から、当時の日本語文典は動詞の分類や分析の方がより現代的であったことがわかる。

本書の形容詞に関する分析は 100 文字程度で少ない。著者は「用於名詞之前後（形容詞は名詞の前や後ろに使用される）」ことや、形容詞が語尾の変化により「ク、シ、キ」の活用と「シク、シキ」の活用の二つに分けられると指摘している。また、各形容詞の語尾の変化やその常用語彙も並べている。例えば、「深」、「長」、「短」、「善」、「悪」、「高」、「低」、「厚」、「薄」などは「ク、シ、キ」の活用に属し、「悲」、「宜」、「久」、「喜」、「喧」などは「シク、シキ」の活用に属している。しかし、本書の形容詞の内容を見ると、著者は形容詞に関して詳しく説明していないことが分かる。本書の後ろに付く単語表に収録される形容詞からは、著者は形容詞の分類について明確に認識していないことも分かる。

そして、「副詞」に関しては、当時中国語文法の中には「副詞」という名称が無かった。『馬氏文通』には副詞関連の内容が書かれてあり、修飾性の機能があることも指摘されているが、この専門用語で名づけられていない。前述の『中等教育日本文典』と『語法指南』には「副詞」という術語を使い、関連内容も書かれてある。副詞の意義と使い方について両方とも説明しているが、前者が意義上の解説（副詞が形状、願望、推量、疑問、応答、反復、集合、強調と転換などを表現すること）を強調し、使い方に関して、副詞は形容詞、副詞、名詞と代名詞の前に置き、又は助詞が付いた上、その後ろに名詞につけ

<sup>82</sup> 著者は明確に「方言に属する」と指摘したが、実は「サ」行の変格に「マイ」が付く表現である。方言の例文は「朝寝ヲセマイト思フ」しかない。

る使い方を説明する。後者は更に詳しく説明し、名詞、形容詞と動詞は副詞との連用の角度から副詞の使い方を解説している。これらのことから本書の中に使われている術語は日本語から直接に取られたはずだと推測できる。本書の副詞内容は全面的ではないが、副詞は動詞、形容詞の前に置かれ、その意味を制限するものであることを著者が紹介し、副詞の統語機能のみ説明してあるが、副詞の使い方と意義に関する考察はなく、例文も少ない。著者は副詞を3種類に分け、一つは「語尾不定之副詞」があり、例えば「必ズ」などがある。もう一つは「帶虚字ニテ等字之副詞」もあり、語尾が変わらない。これには、例えば「既ニ」などがある。この分類する方法は正確とは言えないが、「ニテ」が語彙の一部となり、虚字ではない場合がある。例えば、挙げられた例の「決シテ」である。最後は「重疊名動詞之副詞」があり、例えば「年々」、「見ル見ル」などがある。ただし、動詞重疊の場合は全て副詞に属するわけではない。この点について著者自身は恐らく明らかに理解していなかったであろうと考えられる。しかし、中国語文法界では1907年に章士釗によって正式に「副詞」という名称が導入された。1900年梁啓超によって編纂された『和文漢讀法』にも「副詞」が使われており、『東語正規』が初期に「副詞」という術語を使った書物の一つとも言える。

接続詞は「接續詞句、或文章之詞……與漢文相同、亦帶虚字（語句或いは文章を接続する語彙である……中国語と同じ、虚字も付く）」という機能を果たす。著者が21例の語彙を挙げ、それぞれ後ろに中文訳を付け、例文は無い。接続詞の意義と使い方を説明し、中国語の意味と対照し、文化の差が見られる接続詞もある。解説からは、日本語漢字語彙と中国語との異同を著者がすでに意識し、場合により意味上の差が出ることが分かる。これは昔の「同文觀」と異なる、一種の科学的な日本語認識である。例えば「抑モ」の解釈はこのようである、

此字與漢字之意大同小異、用於文字之間、作或解者、則與漢字同、用於文字之首、作語中一體（イッタイ）解者則與漢字異

（この語は中国語の意味と大同小異であり、文中に使い、「或」を表す時は中国語と同じであり、冒頭に使われ、「一体」の意を

表す時は中国語と異なる)」<sup>83</sup>

しかし、接続詞の分類と使い方に対して著者は詳しく説明しておらず、ほとんどが簡単な中国語訳である。上述二冊の日本文典にも接続詞関連の紹介が多くないため、著者自身は詳しい接続詞の教育を受けてはいないことが推測できるだろう。

その後著者は感歎詞 14 個を挙げている。釈義は日本語の位相に繋がり、男性用また女性用及び尊敬意味が含まれるかどうかについて標記がある。例文も下記の通り付いている。

表 2-3 『東語正規』における感嘆詞一覧表

例詞	意義	備註
エ	惊讶	応答尊上
ヤ	語末命令詞、語首感歎聲	
ヨ	呼人、軟語	軟語文中不用
ナ	追思、有恍惚之意、親密	表親密時比カ字稍有崇敬意
ナア	ナ引長	
カナ	嘆息聲	
ガナ	懸想	古文及詩詞用
ネ	親愛之詞	文中不用。女子多用、用於語中間或尾處
サ	邀人、將做事、與起之音	文中不用
サア	サ引長	
イザ	同サ	文話通用
マア	暫擱前事、惊讶	文中不用
ハイ	応答	文中不用
ハア	笑聲、驚悟聲、男子應呼聲	文中不用

中国人に対する難点であるが、日本語の「接続詞」は、本書では「後詞」という呼び方もしている。下に「即天爾遠波虛字也（即ち天爾遠

<sup>83</sup> 唐宝鏐、戢翼翬（1895）『東語正規』、第 45 頁。

波<sup>84</sup>の虚字である)」の注がある。著者が虚字は「如漢文之焉哉乎也（中国語の焉哉乎也の如く）」文章のキーポイントであることを指摘した。虚字を把握できないと日本語を正確に使えない。黄遵憲が1887年に日本語は「語長而助詞多（文が長くて助詞が多い）」、「実字在前虚字在後（実字は前に虚字は後ろに置く）」<sup>85</sup>言語であることを指摘し、虚字がある場合の読む方法についても説明した。清人が編纂した日本語教科書において、本書は最初に虚字の日本語における機能を認め、正式な教授内容として系統的に紹介した教科書でもある。虚字の種類が多いことを著者が述べ、そのうちテニヲハが「虚字主脳」であり、虚字それぞれの使い方と意味に対して説明をし、例文も挙げている。

- テ

使い方は二種類ある。一つは接続であり、中国語の「而」とみなされ、助動詞として動詞形容詞など用言の後につく。もう一つは断語として使われ、例えば「テハイケマセン」などのように、動作の前後順序を表し、「ハ字以壯口氣（ハは語調を強調する）」の役目を果たす。両者は意味上の区別は大きくないが、文法上の区別が主要な原因である。

- ニ

ニの使い方は11種類あり、下記表の通りとなる。

表 2-4 『東語正規』における「に」の使い方

解説	用法	現代日本語における意義
於	名詞下動詞上	対象
在、於	用法如前	地点
向、到	動詞、代名詞下、動詞上	目的地
當並	用法如前、他動	様ニ
变化	前自動、同ト	变化、ニナル
因	名、代名形容詞、動詞連用言	目的

<sup>84</sup> 「テニヲハ」のことを指す。

<sup>85</sup> 黄遵憲（1887）『日本国志』卷三十三學術志二、第1417頁。

當其時	同漢文「時」、動詞終止言下	目的
比較	名動詞之間	比較的物件
已過追言	名詞下	具體時間
未來預言	用法如前	具體時間（未來）
緣此	ヲ之变用、動詞下	表示原因

• ヲ

三つの意味がある。一つは事物を処置することであり、後ろに他動詞がつき、一般的な使い方である。次が自字从字意、「カラ」に相当し、後ろに自動詞がつく。例えば「国ヲ離レテ」である。しかし、この解説は正確だとは言えない。「カラ」は始発点のみを表し、それに対してヲは始発点以外に「通過」の意味も含まれる。最後は一つ目と同じく動作を表し、後ろに自動詞がつく。ただし著者は「路ヲ歩キマス」という例を挙げている。この「ヲ」は通過の場所、移動の意を表す。

ヲの自動詞接続について、上述『語法指南』の説明がより正確である。「自動詞ニ係ルモノハ、其意義異ナリ」、「国を去ル」「人を別ル」ノ如キハ、よりノ意ヲナシ、「路を行ク」「門を過グ」ノ如キハ、其動作ノ行ハルル地位ヲ示スマデナリ」<sup>86</sup>。本書の著者が日本語学習した教科書の中には、ヲの使い方に関して、詳しい、或いは正確な説明がなかった可能性もある。

• ハ

二つの意義がある。一つは物事を区別する機能であり、名詞の後ろに付き、転換また強調の意を表す。もう一つは中国語の「者」と同じ、無意義である。即ち現代文法において主語を提示する機能である。上述『語法指南』ではハの定義が「事物ヲ各自ニ差別スル意ノモノナリ」<sup>87</sup>となっており、本書の定義は日本の類似の文典を参考したものであり、中国人が学習するためにその内容を補充したのであらうと考えられる

<sup>86</sup> 大槻文彦（1891）『語法指南』、第 93 頁。

<sup>87</sup> 同上、第 99 頁。

著者はテニヲハ以外の虚字についても説明を行ない、へ、ト、ド、デ、ゾ、モ、ノ、カ、ガ、ヤ、バ、ノミ、バカリ、ダニ、マデ、サへ、カラ、ヨリ、トモ、コソ、ナガラ、トテなど合計 22 個、それぞれの意義を説明し例を挙げている。

虚字の部分において著者は虚字が中国語の「之乎者也」に相当すると指摘したが、この対照は正確だとは言えない。中文において「之」は構造助詞であり、「乎者也」の三つは終助詞であり、構成に関わるため、イコール日本語の「テニヲハ」とは言えない。しかし、著者は形式だけを強調し、分類してはいない。例えば「ニ」と「ガ」などの接続詞は格助詞としても使え、機能と意義上の区別があると言うが、具体的な分析は行っていない。原因は二つがあると考えられる。一つは著者自身の限界で、その区別を意識していないからであろう。もう一つは時代の限界であり、当時の日本は現代の格助詞の分類がまだ成立しなかったからであろう。内容は不足があるが、定義を下してから例を挙げるという書き方は現代の日本語教科書と同じであり、これこそが本書の進歩的なところである。

本書は語彙学の角度から日本語の語種を紹介した初めての教科書である。そして、当時の中国人は日本語言語学という意識を持っていなかったため、この教科書は言語学知識の導入について、先進性を持つ教科書である。日本の上述文典二部の中に語彙学関連の内容は書かれていない。著者は「日本文字既有區別、言語亦不無分析（日本語文字は区別があり、言語にも分別がある）」、「分日本言語為四種、曰訓語、漢語、音語、新語（日本語は四種に分けられる。それぞれ訓語、漢語、音語、新語である）」<sup>88</sup>と述べている。著者は分類それぞれに例を挙げ、片仮名で読み方と中国語の意味を表記する。そのうち「訓語」は名詞、動詞、形容詞の分類により例を挙げる。「訓語」は「日本本土語、雖個用漢字、而音與意亦有不同處（日本語の俗語であり、漢字を使うが発音と意味は差がある）」、例えば、「入齒」、「押入」、「五月蠅」などがあり、現代日本語語彙学中の和語に該当する。漢語の例は主にサ変動詞であり、「以下各語、加セシ、ス、スリ、スレ等字、但成動詞用之（以

---

<sup>88</sup> 唐宝鏐、戢翼翬（1895）『東語正規』、第 63 頁。

下の各語彙にセシ、ス、スリ、スレに加え、動詞となる)」と説明し、例えば「壓制」、「生活」などがある。基本的には現代日本語語彙学中の漢語であり、和製漢語も含まれる。「音語」は全部音読みになっている語彙であるが、現代日本語語彙学中の分類には入っていない。例は全部サ変動詞の語幹であり、和製漢語がメインとなっている。例えば「安産」、「用心」などがある。その中に当時中国社会で違和感を持たれた「改良」のような語彙もある。この種類の語彙は「假漢字音、而牽強其意以用之語也（漢字の発音を借り、その意味を無理に使った語彙である）」と述べた。これも、日中語彙の形は同じであるが意味が異なることを中国人が初めて教科書に書き入れた。新語は「近世西学盛行、所譯西書有不能以漢文譯者、乃用漢字、自造多語、其意與本字之意大相徑庭（最近西洋学問が盛んになり、訳された西洋書籍には漢文で訳せないものがあるため、漢字で多くの語彙を作り、その語彙は文字本来の意味と相当な差異を持つ）」であり、明治後期に現れた新概念と新語彙が多数であり、例えば「肋膜炎」、「物質文明」などがある。

外国語の学習といえれば必ず話し言葉と書き言葉に分けられる。本書では著者も言及しており、このような分け方が学習上の難点であることが明らかになっている。

若專恃日用會話之語與彼都之有学者酬答、不但己不能瞭解人之言、且見輕於人、言語之難、有是如哉<sup>89</sup>

（日常会話に使われる言葉で向こうの学者たちと話し合うと、相手の話が理解できないだけでなく、軽視される可能性もある。言語の難しさとはこのようなところにある。）

これに対して著者は最後の部分で日本語を学習・把握するために、必要な時間と学習方法を紹介した。「学期」部分は必要時間と程度により3種類に分けている。一つは日本で日本語を学習する場合であり、話し言葉とヒアリングをメインとするが、「三四月習日常用語、半載後多記名動等詞、習文法、学作文及書割等類、期年可聽東師講義（三、四ヶ月をかけて日常用語を習い、半年後名詞と動詞を中心に暗記し、

---

<sup>89</sup> 同上、第66頁。

文法、作文と手紙などを習い、一年間で日本人教師の講義が聞き取れる)」ことが必要となる。もう一つは、「漢文深通或已通普通学者（漢文或いは普通学の基礎を持つ人）」であり、このような基礎を持っている人に対して、「二三月学会話及虚字、半載後学文法、且廣搜名動等詞、期年小成、二年大成（二三ヶ月で会話と虚字を習い、半年後文法を学習し始め、同時に名詞と動詞を大量に記憶し、一年間で成果が見られ、二年間で大成できる）」。最後に「究其国語、真正倭文（日本語を研究し、本格的な日本を習う人）」になりたい人に対して、「非專学四五載、莫能貫徹（四五年間習わないと身につけない）」としている。

著者は日本語の話し言葉、書き言葉と国語学の異同を意識して、日本語学習認識、時間の角度から見ると、梁啓超が『論学日本文之易』で述べた「數日而小成、數月而大成（数日で成果が見られ、数ヶ月で大成できる）」という説より更に科学的である。しかし、梁啓超は日本語について「漢字十之八九（日本語で十中八九は漢字である）」ことから、「若未通漢文而学和文、其勢必顛倒錯雜、贅亂而兩無所成（漢文に通じずに日本語を学ぶと、逆さまや複雑で、混乱し、両方とも成し遂げられない）」と指摘した。本書の著者も「用漢字十之五六、故学東文、必以通漢文為嚆矢（日本語は五六割り漢字を使うから、東文を習うことは漢文に通じることが嚆矢である）」<sup>90</sup>ということを強調する。この点について本書は梁の観点に鑑みていると考えられる。梁啓超自身は文体の意識を持っていないが、本書は「日本文體、別為數種（日本の文体は数種類に区別される）」と述べており、漢字の割合についての説明も比較的正確である。「学訣」が学習方法即ち「読記聴」であり、更に中国古典物語を例として、言語環境と練習の重要性を説明している。著者の説明は簡単ではあるが、現代外国語学習に必要な幾つかの要素が揃っている。日本語教育システムの元で、本書の著者が日本語を完全に外国語として習い、科学的な判断を下したことをこの部分の内容をもって説明している。

#### ④ 語彙

---

<sup>90</sup> 同上。

卷二は語彙と会話である。語彙（散語）は意義によって天文類、時令類、數目類、顔色類、地類、宮室類、国名類、各国都城商埠類、方向類、人倫類、稱呼類、官爵類、人民類、身體類、形容動類、身動類、動作類、動作副類、動作成語類、言語類、性情類、品行類、人事類、應酬類、政事文牘類、文事類、武備類、商賣類、行店類、疾病類、喪葬類、外教（宗教）類、金宝類、衣服類、布帛類、飲食類、日用火類、日用水類、飲食炊口器用類、舟類、車類、居家器用類、雜器類、樹木類、物形容類と事理形容類の 46 種類に分けられ、合計単語 2124 個となっている。本書に収録された語彙は日常生活での口語の語彙が多く、外国語教育において、限界がある。

漢字は片仮名で表記し、反切音は無いが、中国語訳語が付いている。訳語が無い語彙は、同形詞が多数であるが、適当な中国語語彙が見つからない場合もある、例えば「進歩黨」、「風邪」などがある。

「是書以華語譯東語（本書は中国語で日本語を訳す）」と書かれているように、『東語正規』も日本語検索の形で著されている。日本語語彙がさきにくるが、あとに中文訳がつく。翻訳は前の二冊本より更に正確である。例えば「坐（スワル）」は「跪坐」に訳されている。

意義による分類であるが、動詞と形容詞の項目がある。動詞の場合は形容動類、身動類、動作類、動作副類と動作成語類に分けられる。よく使う動詞を主として、本書全ての動詞がこの分類に含まれるわけではない。例えば「賛成」のような語彙は言語類に入れられている。形容詞は物形形容類と事理形容類に分けられ、よく使われる形容詞が収録されているが、この分類は明確ではないため、「是非」、「成程」、「有れば有るほど」のような副詞と短句も入れられている。これにより、著者自身の形容詞の品詞性に対する見解は明確ではないことが見てとれる。

本書は『東語簡要』、『東語入門』の出版時期よりそれぞれ 16 年、5 年ずつ遅れており、収録された語彙からは時代性が見られる。『東語入門』中の国家名は少ないが、本書には主要な国家の首都及び中国の主都市が挙げられている。しかし「市加哦（シカゴ）」、「紐育（ニューヨーク）」のような単純な音訳語彙も収録され、中国語訳語が付いていない。『東語入門』の中の「義大利（イタリア）」が本書では「伊

太利」という日本語語彙に変わっている。著者が日本語学校で習ったものか、著者自身の記憶間違いかは判断できない。

そして、『東語入門』の宮室類、官爵類語彙は清代の機関名と官名である。例えば「軍機處」、「内務衙門」などがある。本書にはより多くの日本機関名が収録されている。例えば「内閣」、「外務省」などがある。この点から二人の著者が受けた教育の異同が分かる。陳天麒は日本に6年間滞在していたが、日本の学校教育を受けなかった。父親に連れられて日本に行き、公使館内の私塾で日本語を習ったはずであり、学習した語彙は公使館内常用のものが多数であろう。一方、唐宝鏐と戢翼翬は日本の系統的な教育を受け、『東語正規』に収録されている語彙は陳氏より新しく、更に正確である。陳氏は中国において日本人との交流をより重視し、中国語の角度から語彙を収録したが、唐氏は日本生活における用語、つまり日本生活での交流をもとにした語彙を収録している。『東語簡要』と『東語入門』は国内の日本語学習者を対象にしているが、『東語正規』は日本に行く中国人、または在日中国人を対象にしている。この区別に関しては会話の部分でより目立っている。

『東語入門』における武備類語彙の数は文事類語彙より少ないが、『東語正規』は逆である。本書には「水雷艇」、「葡萄彈」のような新式武器名称も現れ、更に兵種関連の内容も収録された。これも当時の社会環境を反映していると考えられる。前2部の教科書には外来語がないが、本書には片仮名で書かれる外来語語彙が収録されている。例えば「ランプ」、「コップ」などがある。また医療類には「黒死病」のような新語彙も収録されており、宗教類も「回回教」、「耶穌教」と「羅馬教」のような語彙も収録されている。

『東語簡要』と『東語入門』の中に収録された語彙と短文は娯楽常用の語彙が多数である。例えば花草、珍宝などの語彙数は貿易交流関連の語彙数に比べると遙かに多いが、本書のように「商賣類」、「行店類」を分類していない。

## ⑤ 会話と文章

会話が用途により日用語、燕居語、訪友語、遊歴語、慶賀語、弔唁語、賣買語、商業語、学校語、天時語、消遣語と辭別語 18 種類に分けられ、合計 693 条ある。

本書の会話内容は充実しており、実用性を強調している。分類も細かく、及ぶ範囲が更に広い。会話と文章は漢語の読み方を表記せず、片仮名のみが使われている。この編纂方法は旧式の記録方式より先進している。また本書の日本語は以前の教科書より正確である。

本書が出版される前に中国では日本語学習用教科書が何冊も刊行された。一般の書類は日本語を中国語として扱うため、文字と文法に対する科学的、正確な説明がなく、会話中日本語助詞テニヲハの使い方も厳しくない。例えば「你上哪兒去」は「アナタ何處行ク」のような訳文がある<sup>91</sup>。一方、本書の中では助詞などの使い方が正確であるというだけでなく、時態、敬語、命令など形態の日本語も含まれている。また、「燕尾服（セビロフク）」、「ホテル」のような新語彙、外来語も収録されている。前の 2 部と比べ、本書の会話は場面ごとに分類され、短文も長編会話もある。例えば「燕居語」には、完全な日常生活会話が収録され、洗面、召使に言いつけるなどの内容も入っている。

上述のように、本書は在日の中国人を対象とするため、多くの会話内容は日本の生活を背景にしている。例えば、

アナタハ何ナ船ニオ乗りナサイマス（你坐甚么船）  
西京丸ニ乗ります（坐西京丸）

人足ヲ二人呼ンデ下サイ（给我叫两个挑夫来）  
此レ等ノ荷物ヲ横濱ホテル迄持ッテイッテ下サイ（把这些东西给我送到横滨西洋客栈里去）

卷三は短文と文章である。文章語訣、人事六則（潔身、起居、擇友、節用、修身、前車可鑒）、史事三則（郭巨、陸績、司馬溫公）、雜談四則（兵商並重、野蠻略述、德使遇盜、英国工人會規）及び附錄泰西哲十三則（立志宜堅、勿過疑慮、勿畏謗言、勿望報施、不知不慍、勿盜

---

<sup>91</sup> 実藤恵秀（1970）『増補中国人日本留学史』、くろしお出版社、第 40 頁。

虚聲、勿多疑心、勿驚虚憊、勿耽間居、愛眾親仁、深謀遠慮、悲宜中節、性理宜講）などがある。

本書は清代人が編纂した短文と文章の内容を収録した初めての日本語教科書である。その中には、例えば史事三則などのように人の修養を培い忠誠孝行を唱道する文章がある。しかし、この三つの文章は普通に知られる經典ではなく、日本の教科書にはこのような物語が収録されていた可能性は高くないが、著者が訳した作品だとは断定できないだろう。そして、国家の政治と経済に対する見解も見られる。例えば「兵商並重」、「英国工人會規」のような時代性が目立つ内容もある。これは序言の「思謀輸入東邦文明」に対して考えた内容であろう。また例えば「徳使遇盜」などのような他国の時事もある。文章の最後に一言の評語がついているが、著者自身の感想か、原文から取ったものか確定できない。

付録は『泰西哲十三則』となっており、著者は「英国若莫斯登先生」である。本書の出版時期と出版地から見れば、この部分は英語から日本語に訳されたものであるはずであり、日本語から更に著者によって中文に訳され本書に入れられたことが分かる。

本書は新しい形式へ移り変わるものである。例えば細々した語句の分類方法は、古い形式のもとに新たな類別を付け加えている。このため、この本は確実に日本語知識を持つ中国人により完成された過渡的な日本語教科書である。この本はその後の留学ブームを推進していた。日本に行く意志があり、或いは日本語を学習したい中国人が、正確な方法で日本語を学習できる本となっている。

## 2.4 本章のまとめ

上述 3 部日本語教科書の編集者は一つの共通点を持っていた。それは日本に滞在した経験があることである。日本語の基礎を把握していることは、本の中に記載されている日本語の正確さを保証できる。この 3 部の教科書は当時の中国人の日本語学習目的の変化、学者の日本語認識の変化も反映している。玉燕が編集した『東語簡要』は『吾妻鏡補』を参考した内容が多い。当時の新語彙を収録したといっても、玉燕が正式な日本語教育を受けたことはないはずであり、日本語の文

字意識を持っていない。旧式の編集方法に従ったが、著者は、貿易上日本語が分からなければ日本人との交流に不便が生じること、つまり日本語の機能を認識していた。以前の日本語を方言として収録していた日本関連書籍と比べると、『東語簡要』はこの点において先進性を持っている。陳天麒は幼い頃父に連れられ日本に六年間滞在しており、日本で日本語を習っていたが、正式な日本語教育を受けていなかったはずである。このため、『東語入門』はより正確な日本語を使っていたが、外国語教育における正式な教科書とは言えない。実用的な会話内容が収録され、日本語を通じ日本文明を味わうことに言及し、日本語の役割を広げた。一方、『東語正規』は清代の人が日本で正式な日本語教育を受けた後に編纂した教科書であるため、日本教育システムの産物とは言える。これは中国人の日本語学習史においても初めてであり、日本語教科書としての要素が備わっているため、清代人の日本語学習の正式な教科書として使われていた。

特に当時日本行きのブームが起こっており、著者が学習対象にした人は日本に留学に行く中国人であった。本場の日本語学習、日本での生活交流に役立つことを期待していた。また、正確な日本語を把握することにより、日本の新知識を取り入れることも期待していた。最も重要なことは、この本が新しい外国語教育方法をもたらすことである。著者が就学した日本の学校の教師達は外国人にどのように日本語を教えるかについても考えており、教授方法と教科書の編纂に対する試みを行ったことも推測できる。著者が教わった内容は『東語正規』の中に反映されている。

この3部の本から中国人の日本語知識把握の状況変化もうかがえる。『東語簡要』と『東語入門』は、語彙の収録方法が似通っており、前者には中国語訳語がついておらず、後者は語彙の意味上の微かな区別にも気付いていない。また、著者は漢字への認識が不足していたため、訳文は正確ではない。『東語正規』は日本語言語学知識に対してより完全に把握するだけでなく、「座ル」のような語彙を正確に「跪坐」に訳していることから、著者には相当の日本語知識が備わっていることがうかがえる。この三冊の教科書は清代末中国人が日本語学習において単純な語彙収録から正式な外国語教科書に移行した16年間の重要な

部分だとは言えるだろう。

とはいえ、清末当時において日本語を学習する中国人はまだ少なく、また日本語研究も深くなかったため、日本語教科書は主に日本人によって編集された。当時影響力を持っていたのは、坪内雄藏（1901）の『和文漢譯讀本』、松下大三郎（1901）の『日本俗語文典』などがある。これらの教科書は日本人が中国人日本語学習者に対して編集したものであり、質は保証されていたが、日本人が中国人の言語習慣を完全に理解できなかったため、中国人の日本語学習に適用する方法はなかなか見つからなかった。一国の外国語教育として、外国人に頼り教科書を編集したり、学習方法を策定したりするのは不可能である。そこで、中国人自身が日本語教科書を作ることが必然の潮流となった。

この時期の日本語学習は、中国人の日本語学習史において、まだ模索時期にあった。日本語を外国語として受け入れ、日本語の教科書を編纂することも、「試作」段階であったと言っても過言ではない。日本に滞在した経験を持つ著者に頼ったことから、当時中国国内には本格的な日本語研究がなかったことがうかがえる。こうした背景で、『東語正規』のように質が高い教科書が出版され、日本語学習の目的、方法を明らかにするように試みられたのである。この三冊の教科書は清末中国人の日本語学習における価値ある嚆矢濫觴である。

### 第三章 『東語完璧』を代表とする会話教科書に対する考察

#### 3.1 清末における会話教科書

清代は中国最後の王朝であり、漢民族以外の民族により統治された政権である。皇帝たちは政権を確保するために、中国語と漢民族の文化の受容を提唱した。そこで、公文や政府用の文献などは、満族の文字と言語、即ち満州語と漢文を併用して記録されるものが多かった。清代の統治者は満州語を全国に普及する意思も持っていた。しかし、文化の問題に対しては強制的に受容させることができるが、言語による不都合は学習を通じる方法でのみ解決できる。異民族の言語を学習することは、清代では珍しいことではなく、それは漢民族と満族が共存したことにある。さらに、1779年の乾隆帝の時代、満族の官僚たちの間では漢文化の影響によって「満洲語亦日漸遺忘（満州語が日々忘れられていく）」<sup>92</sup>という状況が現れた。こういう背景で、満州語の会話教科書も大量に編纂・出版された。例えば、『清文指要』<sup>93</sup>、『清話問答四十条』<sup>94</sup>、『清語易言』<sup>95</sup>などがある。他には、モンゴル語、朝鮮語さらにロシア語などと対照させた会話教科書も出版された<sup>96</sup>。

---

<sup>92</sup> 『清高宗純皇帝実録』卷十四（1986）、中華書局、第1080頁。

<sup>93</sup> 富俊、嘉慶十四年重刻、三槐堂藏版。

<sup>94</sup> 乾隆二十三年、刻本。

<sup>95</sup> 乾隆三十九年改訂、刻本。

<sup>96</sup> 王敵非（2010）「清代満文讀本會話類文獻研究」『満語研究』2010年第1期、第56－57頁。



図 3-1 『清文指要』書影

こういう満州語の会話教科書は、ほとんど短文と会話文の内容であり、語彙などは少量、或いは収録しない。『清文指要』は語音と文法の内容について言及しているが、四冊で見開きの 16 頁のみであり、他は会話文の羅列である。何の説明もなく、直接会話の短文を載せている形式をとり、満州語と中国語を配列する教科書が多数である。清末まで続けられた満州語の学習は、清代の時代において中国人が異民族の言語を学習することの始まりと言えるだろう。この形式も、後の西洋言語と日本語の会話教育に影響を与えた。

一方、同文館の開設以前は、中国の沿岸都市で英語における教育は既に行われていたが、交流の不便を解決するために教科書も出版された。代表的なものは 1860 年<sup>97</sup>に出版した『英話注解』である。それは当時上海などの都市で、言語が通じないことによる貿易上の不都合のため出版した教科書である。

<sup>97</sup> 奥付の「咸豐十年歲次庚申仲冬上澣」の文字により、本書は 1860 年に出版されたことが推測できる。

諭旨准予各口通商、中外交貿易必更加蕃盛、但言語不通、雖善於經營者、未免齟齬<sup>98</sup>

（各港の通商を許可する聖旨があり、中国と外国の交流は必ず盛んになるだろう。しかし、言語が通じないと、例え経営が得意であっても、調和できないことは避けられない）

『英話注解』は語彙と会話を収録し、「Yang King Pang English」の代表と言われている。寧波の方言を注釈し、語彙を天文門、地理門、時令門など 30 種類に分けた。ちなみに、1884 年に出版された『東語簡要』の編纂方式と分類方法は、『英話注解』に類似する。

しかし、西洋文明を輸入するための英語を中心とした西洋言語教育は、洋務運動が失敗する以前は、清代の外国語教育の重点であった。しかし、英語教育は西洋書籍を翻訳するための教育であり、即ち、「読む」と「書く」ことを重視した、翻訳する方法を中心とした内容であった。一方、当時中国人が編纂した英語と日本語会話教科書には、発音と文法の内容がなく語句と訳文だけを羅列する形式を取ったものが多く、前述の満州語会話教科書と類似している。これは長い間で清代の満州語学習を推奨することにより、外国語の会話学習に影響を与えたことであろう。しかし、日本語学習は満州語と異なり、統治者による圧力がなく、清代の政治と統治に対する不都合もなかったため、日本語の会話教科書は、急速に発展できたのであろう。

前述のように、中国人の科学ではない日本語意識と翻訳能力を求める速成学習により、会話は最初から重視されなかった。しかし、交流上の不便を無視できず、「話す」ことの重要さはますます顕著となった。例えば、1907 年に出版された『日語用法自習書』の序言には、会話の重要性を詳しく説明している、

余謂日本語法難於文法、於是畏難者遂專學文法、置語法於度外、以為即不能操日語、能看日文足矣……不研究語法、而專用力於強記、勢必至口言之而弗能達其意、耳聽之而誤會其意、抄寫講義時、

---

<sup>98</sup> 馮澤夫（1860）『英話注解』、馮祖憲序。

稍有遺漏、即不能補足其意、是皆不通語法之咎也<sup>99</sup>

（余は日本語の口語が文法より難しいと思っている。困難を避けようとする人は口語を無視してわざと文法を習う。日本語を話せなくても、読めることだけで十分だと思われるのである。……話す方法を研究しない暗記だけでは、会話する時に必ず表せない意味があり、聞き取りでも意味の誤解が起こる。講義のノートを書く時、遺漏があればその意味を補足できない、これはすべて口語が通じないためである）

このように、口語の重要性を理解していれば、会話教科書を編纂することも当然である。全体から見ると、清末における日本語の会話教科書は二種類に分けることができる。一つは日本人向けの、軍事目的を持つ速成会話書である。この種類は本格的な教科書とは言えない。形式はほとんど文法や発音の内容を載せず、大量の会話文を並べたもので、短期間で暗記することを目的とする。例えば、『独習日清対話捷徑』（1894）、『速成日清会話独修』（1902）のような書名からも、速成の主旨が明らかであろう。また、この種類の本は数が多く、1912年までに28冊が出版された。特に1894年から1905年にかけて、集中的に出版され、22冊にのぼる。この頃はちょうど、日清戦争と日露戦争の時期である。『軍用日清会話』（1895）のように書名に明示するものは少ないが、「参謀本部」により出版された本も何冊かある。1895年前後は日清会話を中心とし、『日清露会話』（1904）のような本が出版されたことから、軍事目的がその出発点と判断できる。更に、中国語だけでなく、韓国語、ロシア語を合わせた「三ヵ国語」、英語を加えた「四ヵ国語」に対照する会話教科書がこの種類の特徴である。例えば、『日清韓三国対照会話篇』（1894）、『日清英語学独習』（1905）、『日清英露四語合璧』（1910）などがそれである。

もう一つの種類は、中国人向けの日本語会話教科書である。中国人や日本人の編纂者がおり、共著のものも出版されたが、数は前述の会話教科書より少ない。前者と同じように大量の会話文を羅列する教科書もあるが、ほとんどは簡単な発音或いは文法の内容を加え、会話部

---

<sup>99</sup> 著者不明（1907）『日語用法自習書』、序言。

分を補助する形式である。なかには、現代の編纂方法と極めて近く、日本語教育の進歩が見えるものもある。筆者が実際に閲覧したこの種類の会話教科書を、以下の表にまとめ、情報がない場合は「不明」と書いてある。

表 3-1 清末における中国人向けの会話教科書一覧表

書名	著者	出版年	出版者
貿易叢談	徐東泰	1901	文尚堂
東語初階	泰東同文局	1903	泰東同文局
東語完璧	新智社編輯局	1903	新智社
日語独習書	郭祖培、熊金寿著・村上恵 遵閲	1903	東文学堂
東語士商叢談便覧	金国璞	1905	田中慶太郎
東語速成篇	宮沢文次郎、張毓靈訳	1905	東亜堂
日華会話筌要	平岩道知	1905	岡崎屋
中華人適用日華会話 入門	本間良平	1905	大阪屋号
新式東語課本（巻1）	中堂謙吉著、伊澤修二閲	1906	泰東同文局
中日對照実用會話篇	唐木歌吉著、王盛春訳	1906	中東書局
東語會話大成	井上翠	1907	国文堂書局
東語自得指掌	文求堂編輯局	1907	文求堂
日清対話編	松平康国	1907	東亜公司
孝雀(日文独修第1編)	雀巢真人編、古洞逸人訳	1907	竜文館
新式東語課本（巻2）	中堂謙吉著、伊澤修二閲	1907	泰東同文局
日語会話	島井浩	1908	不明

上に挙げた 16 冊の教科書のなかで、『貿易叢談』が中国人により編纂された最初の会話教科書である。本書は国会国立図書館に所蔵され、既にデジタル化された書物である。奥付によると、著者は徐東泰であり、明治三十四年五月二十日に発行された。内容は、貿易における会話文のみで、発音・語彙・文法の内容は一切なく、正式な会話教科書とは言えない。僅か二年後、同じく中国人により編纂された『東語完璧』は、既に現在の日本語会話教科書の素質を備え、会話学習における重要な存在である。後の教科書にも大きな影響を与えた。本章は、『東語完璧』を対象として、分析したい。

### 3.2 『東語完璧』<sup>100</sup>

#### 3.2.1 書誌

1903 年に、泰東同文書局は既に『東文易解』と『東語初階』という二冊の日本語教科書を出版した<sup>101</sup>。当時、中国人が執筆した教科書は、呉啓孫の『和文釈例』（1902）、王鴻年の『日本語言文字指南』（1902）及び郭祖培と熊金寿共著の『日語独習書』が挙げられる。また、1903 年に丁福同が翻訳した初めての漢訳日本語文典『中等文典訳釈』、及び最初の辞書の性質を持つ『新編日本語言集全 漢訳日本新辞典 合璧』も出版された。この点から見ると、1903 年は中国人による日本語教科書の分野において、重要な節目の年だと言える。この年には、発音、文法、単語、会話などの内容が完備された、水準の高く、応用・実践を重視する分厚い教科書も刊行された。現代日本語教科書の作成方法と近い、『東語完璧』である。

実藤恵秀氏がリストアップした清末の日本語教科書目録<sup>102</sup>には、『東語完璧』が収録され。また、本書の巻末には『日本東京遊学指南』という付録が付けられている。この『指南』は当時在日留学生の学習や生活などの面に触れ、広範囲にわたっている。よって、この本が当

<sup>100</sup> 本書の文法内容に関しては、第四章に書いてある。

<sup>101</sup> 『支那交際往来公牘』（1902）も泰東同文書局により出版されたが、両国の往来公文のみ収録したから、日本語教科書とは言えない。

<sup>102</sup> 実藤恵秀（1970）『増補中国人日本留学史』、くろしお出版社、第 62-64 頁、編纂者と出版元は全て「上海作新社」と書いてある。『東語完璧』の奥付には「新智社」の名を載せているが、これは実藤恵秀氏のミスであろう。

時留学生の中で広く流布したことを垣間見ることができる。福井久蔵氏は『増訂日本文法史』で本書について言及し、その内容の簡単な紹介及び評価を行っている<sup>103</sup>。同じ時期における多くの日本語教科書の中で、この本の重要性も垣間見ることができよう。

『東語完璧』は新智社編集局が編集し、上海新智社によって出版された。凡例の、編集者による「大清光緒二十九年四月」の署名時間によれば、この本の初版は1903年（清光緒29年、明治36年）に版行されたことが推測できる。その後、1905年（明治38年）及び1906年（明治39年）に重版された。重版時の名は『實用東語完璧：一名日語自得』となっている。筆者はこの三つ目の版本のみ所有している。関西大学図書館には初版及び明治38年版が所蔵されており、一方明治39年版は国会図書館のデジタル版にて閲覧できる。

この三つの版本はともに清国全権公使矢野文雄による「登高自昇」という題言及び「龍溪」という署名が付されており、また印が三つ捺されている。初版の題言は新智社の双竜マークの後に印刷され、2種の重版はいずれもその前に置かれる。また、初版では序言の前にカラーの「日本富士山之図」が付されており、重版では絵は取り消された。初版及び重版の序言と凡例の内容はまったく同じである。

矢野文雄による題言と、日本台湾協会学校の中国語教授である馬紹蘭によって1902年に（光緒28年）執筆された序言、凡例及び巻末の東京留学指南を含めて、初版は618頁、2つの重版は616頁となっている。本のサイズはともに縦23cm、横15cmである。

本書は著者に関する情報について言及していないが、馬紹蘭の序言には「悉出自華日諸名手編訂（全て日中の名人により編集された）」と書かれ、そこで本書は日中共同で作成したものと推測できる。更に、内容及び付録の遊学指南をみると、主な執筆者はおそらく在日留学生であろうと考えられる。序言の文脈から、馬紹蘭は日本語を勉強するためこの本を手に入れたという経緯が分かる。そのため、馬氏は賛辞を惜しまず、この本は知識人達が貿易などに使用するのに適し、また一般民衆もこの本を通じて日本語を学習することもできると賞賛している。

---

<sup>103</sup> 福井久蔵（1934）『増訂日本文法史』、成美堂書店、第349頁。

（前略）得暇時欲習東語、坊本雖多而盡善盡美者鮮現。茲于友人得獲此集、悉出自華日諸名手編訂、由一貫以及千仞進退周旋、無美不備、洵可謂便於士大夫以逮商旅、且于古人善於辭令之旨、庶幾近焉、吾人能奉之圭臬乎。

（暇なとき日本語を学習するつもりがあり、世間には多数の教科書があるが、名実を尽くすものがめったに現れない。友人を通して本書を手に入れたが、全て日中の名人により編集され、内容は完備である。士大夫には商業及び旅行において有用であり、また古人の言葉遣いを重視するという主旨に従っており、庶民も習得できよう、我々はこの本を模範として奉ずることができるのである。）

于江戸四一閣

光緒二十八年癸卯清和月 燕京 馬紹蘭 序<sup>104</sup>

凡例の第一段落の内容によると、本書を編纂する時期は、ちょうど「日清比隣、漸形親密、往来甚多、貿易繁昌（日清は近隣で親しくなり、交流が増え貿易も繁栄になる）」ため、「華人東渡遊学及營商者接踵而至（日本に渡って遊学したり商売を営んだりする中国人は次から次へとやってくる）」、「以通曉日語為急務（日本語に通ずることは急務である）」という時期に当たる。馬紹蘭も序言において特に「便于士大夫以逮商旅（士大夫には商業と旅行において有用である）」と言及し、当時の日本語学習は依然として主に貿易のためのものであることがわかる。しかし、日本への渡航目的の多様化に伴い、教科書の種類の多様化も求められるようになった。しかし、そのなかで、中国の国情を知らない日本人による教科書もあれば、習得のスピードに重点を置き、質を軽んずる中国人による速成教科書もあり、その質にばらつきがあった。また、「坊本雖多而尽善尽美者鮮顯（世間には多数の教科書があり、名実を尽くすものがめったに現れない）」、「均屬杜撰謬誤不堪枚舉（ほとんどが杜撰なもので、誤りは枚挙にいとまがない）」といった事情もあったので、「于商務、遊学、遊歷、考察（商売、遊学、旅行、

---

<sup>104</sup> 新智社編（1903）『東語完璧』、新智社、序言。

視察において)」<sup>105</sup>様々な目的で使われる日本語教科書が必要であり、本書は当時の日本語教科書の需要に応えている。

初期の日本語教科書『東語正規』(1900)等の内容から、当時の編纂者たちは、中国人に教科書を通して系統的に日本語の知識を学習してほしい、という願いをこめていたことが伺える。しかしながら、中国国内の知識人は依然として日本語に対して「中日同文」という日本語認識を捨てられず、それに加え、日本の書物を翻訳する需要の増加により、人々は急いで日本語を習得しようとし、リーディングのテクニックを把握するために、やむを得ず手取り早い方法を探って日本語を学ばなければならなかった。それ故、速成教科書は最初からずっと一席を占めていた。当時多くの種類の日本語教科書が出版されたことにもかわらず、本書の凡例のみ「教育之道貴乎循序有条不紊、由浅及深、由易及難(教育の方法は順を追って一步一步進めることが大切であり、浅い内容から深い内容へ、易しいものから難しいものへ)」ということに言及しており、内容からも、科学的且つ系統的な外国語教授法を通して、学習者に日本語会話を速く身につけさせようと努めていたことがわかる。

凡例では篇ごとの内容及び著者の学習方法に対するアドバイスが紹介されている。また、本書は「華語譯日語(中国語から日本語に訳す)」という本であることを指摘している。しかし、著者は凡例及び本文の中で、日本語の文字を仮名と呼ばず、「字母」と表現したことから、日本語認識に限界があったと考えられる。しかし、「日本語言其音同一而其字母異者甚多、亦極繁雜(日本語は発音が同じでも字母の違うものが多く、大変繁雑である)」という説明から見ると、著者は日本語文字の音読みと訓読みの相違に気付いたことが分かり、また「前年日本政府諭令小学堂嗣後一定應用字母概从簡便(一昨年日本政府は小学校に必ず字母を使用して一律に簡便に教えることを命令した)」<sup>106</sup>という内容があり、著者は日本の言語教育に相当詳しいことも分かる<sup>107</sup>。こ

---

<sup>105</sup> 上掲、凡例。

<sup>106</sup> 本書の内容から見ると、ここで言及した「諭令」は明治33(1900)年に日本政府が公布した「小学校令施行規則」であることを推測できる。

<sup>107</sup> 同期の他の教科書で、仮名に関する内容は変わるところがあるが、政府の法令に言及するものはない。

の矛盾した点から、本書は日中合作の教科書であろうということが証明できる。

### 3.2.2 内容

『東語完璧』全書は五つの篇から成る。凡例からは、第一篇から第三篇までは「初歩者可用（初級者向け）」、「上者則適用於其他諸篇（他の篇は上級者向け）」ということが分かる。重版された2つの版本は内容が同じであり<sup>108</sup>、初版に基づいて一定の調整と増補が行われ、特に第二篇及び第三編に集中している。初版に比べ、重版は更に洗練された日本語教科書の形に近付いている。三つの版本の巻末には完全な『日本東京遊学指南』が付されており、内容は同じである。本書は実用性を重点に置き、量と質において同じような教科書より型破りな存在だといえる。

#### 3.2.2.1 下級編

①、第一篇は予習で、九章に分かれ、音声教学に当てられている。五十音図、転音、促音、濁音、半濁音<sup>109</sup>、長音及び拗音などの内容が含まれている。第八章までは音声で、第九章は数字となっている。五十音図の前に、読者にそれらの基礎内容を熟知させるために、片仮名の中国語の読み方（半切音の表記を含む）、日本語の漢字（片仮名が振られている）及びローマ字を別々に明記し、また記憶させるため名詞の例も挙げている。平仮名及びアクセントの内容には触れていない。

はじめに著者は「日本之字母、固有之音、其為數四十有八、而或加之符号、或数字母結合、則所有之声音、无不尽具（日本語の字母は固有の音として、48個があるが、符号を付けたり幾つかの字母を結び付

---

<sup>108</sup> 本文での引用は初版を参考し、重版の部分は説明がなければ明治38年の版本を使う。

<sup>109</sup> 『東語完璧』の第68頁にある図表は「濁半音圖」である。ただし、本書の別のところで「半濁音」と称するから、ここはミスと推測できる。

けたりすると、全ての音を表記できる)」<sup>110</sup>と言及している。当時の中国の社会では、英語知識は日本語と比べかなり積み重ねがあり、また普及しているため、日本語の仮名を「字母」と呼ぶことが、より中国人に受け入れやすいことを考えたのであろう。日本人が作成した日本語教科書、例えば『東文易解』（1903）でも同じ呼び方が見られる。一方、中国人による教科書にもかかわらず、初期の『東語正規』（1900）や本書の出版時期に近い『日本語言文字指南』（1902）では、「仮名」という言葉を使用している。これも著者及び社会環境の日本語に対する認識には限りがあったためと見られる。続いて、著者はこれまでの日本語教学の「入門即教以複雑之語言（入門の段階で複雑な言葉を教える）」を批判し、「学外国語言、与童子之学話相等（外国語を学ぶことは、子供が言葉を覚えることと同様である）」という順を追って一步一步進める教授法を提唱している。

五十音図の図表は『東文易解』の構図を模倣し、初版の簡易発音口腔図及び発音の説明は、いずれも『東文易解』と同じである。但し、図表に日本語の発音により近い中国語の漢字で表記する以外、ローマ字の読み方も明記されている<sup>111</sup>。『東語完璧』は伊呂波の図表を取り入れておらず、五十音図の形式を音声表としている。音声教学において、初版と重版の内容は大体同じであるが、明治38年の重版は日本語教科書として初めて口腔縦断面図を付けており、現代の外国語教科書の図とほぼ同じである。また、重版では日本語の読み方を表す中国語の漢字に対して微調整が施され、例えば、「ソ」の中国語漢字の読み方を初版の「索」から「素、鎖」に変更している。更に、母音と子音の説明が加えられ、「犹漢字之有反韵切韵（漢字の半切に如く）」、「母韵」を母音、「父韵」を子音としている。それに伴い、初版図表の左側各行の注釈は、例えば、「ア韵長呼則各音皆為ア（アの長音は各音が皆アである）」<sup>112</sup>の説明は、重版には「各音長呼皆為母韵（各音の長音は皆

<sup>110</sup> この文は『東文易解』とほぼ同じであるが、仮名の歴史というは歌に言及しない。『東文易解』での文は「日東之字母、其數四十有八、而或加之符號、或數母結合、則天下之聲音、無不畢具」である。

<sup>111</sup> 本書で表記したローマ字は、a、i の上に u の下に各二つの点があり、e の上に「v」マークがある。重版では、a の上と u の下に一つの点となり、i、e、o の上に「v」マークがある。

<sup>112</sup> 新智社編（1905）『（実用）東語完璧』、新智社、第41頁。

母音である)」<sup>113</sup>に変わっている。これは、重版するまでに、著者が日本語の発音に対して、母音の概念を明確にしたことを垣間見ることができる。発音口腔図がより厳密になり、発音方法に対する説明もより詳しくなり、現代日本語教科書の発音解と殆ど変わりが無い。例えば、ナ行に対する説明は次のとおりである。

初版 先如上圖挺舌頭密接上齦、開鼻孔、次与如側圖變口形共發音<sup>114</sup>

重版 如上圖挺舌頭密接上齦、開通鼻孔而可如各同列母韻圖變其口形而發音、就中發二音時、密接前部舌面于中部硬口蓋、開通鼻孔可如イ圖變其口形而急發音<sup>115</sup>

転音とは日本語の「ハ行転呼」を意味し、即ち「ハヒフヘホ之五音転化于ワイウエオ（ハヒフヘホからワイウエオへの音変化）」を指す。各図表の下に、発音練習用の単語が挙げられ、いずれも名詞であり、片仮名と中国語漢字の音で表記し、一部の例には中国語の意味も書かれている。最終章は数字となり、一から十まで、百、千、万及び億はどの数字にも常用数量詞の例が添えられ、一部の例には中国語の意味も付けられている。また、約2ページ分の日本語と中国語の相互翻訳練習も設けられている。

日本で日本語を学習すると、その言語環境の中に身を置き、模倣や練習を通して容易に正確な発音を把握できるため、音声教学には細部に気を配ることは無いであろう。一方、中国で学習すると、学習者の発音方法を規範とするため、完全且つ詳細な音声教育内容が必要となってくる。この点において、『東語完璧』は共著の利点を発揮し、学習者に迅速かつ正確に日本語の発音を習得させることができる。

②、第二編は主に文法の内容である。初版では「説話法標準」と名付けられ、「授受、命令、請求要望、有無、我想、言語異時法」の六章から構成され、全部で二十一課となっている。一方、重版では、「言語組

---

<sup>113</sup> 上掲、第41頁。

<sup>114</sup> 上掲、第38頁。

<sup>115</sup> 上掲、第40頁。

織法標準」という名前に変わり、「授受、請求要望、命令、定辞、有無、想、要、愛、言語異時法」の九章から構成され、計二十課となっている。「日用倫常及進退周旋擬、可為話法之標準者而掲出之（日常の徳目から立ち居振る舞い、交際までの内容が織り込まれ、標準的な話し言葉を使用している）」<sup>116</sup>の内容である。重版では、初版の単語の例、例文及びその後の練習内容を大幅に変更し、内容の順番も有る程度変更はあるが、解説は大体同じである<sup>117</sup>。第二編に関して、初版及び重版の各章のタイトルをまとめたところ、次のようになった。

表 3-2 『東語完璧』各章題名の変更

章のタイトル			課目タイトル		
	初版	重版		初版	重版
第一章	受授	受授	第一課	給爾、請給我	給我、給你
			第二課	給爾、請給我、給他	前課應用
			第三課	給爾這個、給爾那個、請給我這個、請給我那個	這個、那個
			第四課	借給我、借給爾、還給我、還給爾	交給、借給、還給
第二章	命令	請求、願望	第一課	看、聽、拿、擺	買給、賣給、送給、教給、換給、遞給、看看
			第二課	出、收、坐、站	借、換、拿、折、我
			第三課	攔、寫、念	
			第四課	找、借、來、去	

<sup>116</sup> 新智社編（1903）『東語完璧』、新智社、凡例。

<sup>117</sup> 例文及び例語の変化は一々挙げなく、解説順が変わるところも省略させる。

			課		
第 三 章	請 求、 要 願	命 令	第 一 課	教、買、賣、得、換	聽、念、開、看、 洗、試、問、想
			第 二 課	前課變用	走、來、坐、去、 等
			第 三 課	前課變用	
			第 四 課	前課變用	
			第 五 課	前課變用	
			第 六 課	前課變用	
			第 七 課	知道了、不願意	
			第 八 課	要、願意	
第 四 章	有 無	定 辭	第 一 課	有、沒有	是不是
			第 二 課	前	前課應用
第 五 章	我 想	有 無	第 一 課		有、沒有
			第 二 課		前課應用
			第 三 課		前課應用
			第 四 課		前課應用
			第 五 課		前課應用
第 六	言 語	想	第 一	一定	我想

章	異 時 法		課		
			第 二 課	不定	前課應用
第 七 章		要			
第 八 章		愛			
第 九 章		言 語 異 時 法			

本書の会話に関する内容は、一問一答の形で作成されている。初版は五章に分かれ、全部で十一課となっている。それに対して、重版では九章となり、課を設けていない。

初版の内容は誰、場所、時令「多嗜、什麼時候、年、月、日、時」、数量「個、錢、年、歳等、套、人、管、枝、張、本等」、何「什麼、怎麼樣、什麼様子、什麼東西、什麼、做什麼、做什麼了、要做什麼、為什麼」からなっている。それに対して、重版の内容は誰、場所、何、時令、前章の応用、数量、雜辭三章から構成されている。本篇では、人物、場所、時間などの日常的な問答について系統的に紹介している。日本語と中国語を照らし合わせ、課の最後には簡単な中国語から日本語へ或いは日本語から中国語への翻訳練習が設けられ、初版と重版の練習問題は若干異なっている。初版では、会話の前に新出単語をリストアップし、簡単な文法に触れたのは第一章の一箇所だけで、「カ是虚字。疑問之辞也。与漢文乎哉耶之字同（カは虚字で、疑問詞である。中国語の乎、哉及び耶と同じである）」という説明である。しかし、重版では会話内容のみとなっている。

初版における多くの方言の使い方は重版では削除され、例えば「多嗜」、「嘎嘎儿」<sup>118</sup>などである。また、「ワ」が全て「ハ」に直され、

<sup>118</sup> 新智社編（1903）『東語完璧』、新智社、第 140 頁、「コマ」の釈義の一つである。

著者が時代と共に進歩していった表れであろう。その上、日本語も初版より更に口語的になり、語彙も口語体の単語や読み方を選出し、多くの例文は以下のように、「デ御座イマス」或いは「デアリマス」を使うのではなく、「デス形」を使用している。

初版 今天是几儿了 今<sup>シ</sup>日<sup>ニ</sup>ワ、何日<sup>ニ</sup>デ、アリマスカ  
今日は初五 今<sup>キ</sup>日<sup>ヨ</sup>ワ、五日<sup>ニ</sup>デアリマス<sup>119</sup>  
重版 今儿是几時了 今<sup>キ</sup>日<sup>ヨ</sup>ハ何日<sup>ニ</sup>デスカ  
今日は初二 今<sup>キ</sup>日<sup>ヨ</sup>ハ二日<sup>ニ</sup>デス<sup>120</sup>

重版では、本篇の引用した会話内容は第四篇と重複した所があったが、初版に比べ、かなり時代性のあることを取り扱われた。例えば、第一章では、「来的是女学生、来タノハ女学生デス」<sup>121</sup>という内容が加えられ、当時の社会における女性教育の普及を表している。初版ではよく中国の人名と地名が使われていたが、重版ではほとんど日本の人名と地名に変わっている。著者は、日本に渡る中国人のために一定の調整を行ったと考えられる。例えば、同じく第二章場所についての内容だが、初版と重版の人名及び地名は次のように変更されている。

初版 我的家在南京 私ノ家ワ、南京ニ在リマス  
我在北京城里住 私ワ、北京城内ニ住居マス  
光景是汪兄家的儿子罷 汪サンノ、家ノ児デ、アリマス  
上海是近的 上海ガ、近クアリマス<sup>122</sup>  
重版 我打算上横濱逛一趟去 横浜へ遊ニ行クツモリデ御座  
イマス  
拉到新橋去 新橋へ（迄）引イテ行キナサイ  
我要上小石川去往哪条道 小石川へ行キタイデスガド  
チラへ行ッタラ宜ウ御座イマスカ  
内山兄上那儿去了呢 内山サンハ何処へ行キマシタカ

<sup>119</sup> 上掲、第 154 頁。

<sup>120</sup> 新智社編（1905）『（実用）東語完璧』、新智社、第 163-164 頁。

<sup>121</sup> 上掲、第 153 頁。

<sup>122</sup> 新智社編（1903）『東語完璧』、新智社、第 146 頁。

我要上神田去那条道頂近呢　神田ニ行キタイデスガド  
ノ道ガ一番近イデスカ  
這是上新橋去的道么　之レハ新橋へ行ク道デ御座イマ  
スカ<sup>123</sup>

重版では、各課の練習に対しても上記のような調整が施されている。また、初版の単語の部分が削除され、アウトラインがよりすっきりしている。初版に比べ、重版の『東語完璧』はより現代の会話教科書に近い。

本篇は基本的に日常会話の短文から構築され、前の二篇の内容を強化、そして拡大したものと言える。外国語学習において、きまった言い方の導入は往々にして学習者に暗記させる意図が隠されており、よって数はそれほど多くなく、意味についても多くの解説はせず、ただ学習者に迅速に日常会話を習得させるためである。多くの会話を納める日本語教科書も短文から始まり、次第に長文へとシフトしていく。本書第三篇及び第四篇の内容は、会話能力養成の段階に沿って作られたものである。第三篇は初級会話の内容で、よく用いられる短文が収録されているのに対して、第四篇は上級会話で、更に詳しい会話内容が納められている。本書の会話教学は、言語学習において順を追って一步一步進めていくルールに従っている。明確に「初級」と「上級」、或いは「簡単」と「複雑」のように区分していないが、篇分けの形で初級と上級の境界線を描いている。一方、当時の多くの教科書は本書のような区別をしていない。

### 3.2.2.2 上級篇

①、第四篇は会話教学で、十三章に分かれ、全部で九十一課となっている。初版と重版の内容は全く同じである。

その内容は「訪問、消遣、学業、天時、飲食、送信、鋪店、商家用語、遊歴、辭別、慶賀、人物、雜類」となっている。本篇は場面に従って体系的に日常会話を取りまとめ、日中で対照し、各課の後に簡単

---

<sup>123</sup> 新智社編（1905）『（実用）東語完璧』、新智社、第 155 頁。

な日中対訳の練習が設けられている。初版と重版の出版時間は二年の差があり、時間的に余裕があったにもかかわらず、本篇の内容に対して、著者は一つも手を加えなかった。第三篇の添削と比べ、著しい対照となっている。

以前の日本語教科書にも日常会話や慣用句に関わった内容があったが、本書はまず数量において、以前及び同時期の教科書を超え、更に生活場面に沿って体系的に会話を教授し、場面は理髪店、税関のような生活の各方面に係わる。その範囲の大きさや内容の豊富さは、以前の教科書にはなかったものである。また、多くの例文や語彙が当時の時代的特徴を表している。例えば、第九章第七課では、「賽珍会」<sup>124</sup>という分類項目があり、内容は 1903 年大阪万国博覧会をテーマにして作られた会話であり、勉強すると同時に読者に時事ニュースも知らせることにもなる。また、「新聞報」<sup>125</sup>という項目は、以前の教科書の会話例のなかでは、一つの独立した分類項目として分けられたことがなかった。本書では、その例文は各国に関連一主に軍事関係の内容となっており、当時の社会環境を反映している。下記の例を参照されたい。

法国為陸軍的經費提出來一案已經知会了下議院了

佛国陸軍費用ノ為ニ、提出致タル、増税案ヲ下院ヲ、通過致タル云云<sup>126</sup>

語彙の翻訳も「ホテル」を「喝鉄路」<sup>127</sup>に音訳したように時代の特徴を表している。著者は新しい単語の後に小さな活字の注釈を付け、例えば「喝鉄路」に「西洋旅店也」という注釈が添えられている。第七章第五課「飯館子」<sup>128</sup>では、多くの注釈が付けられ、中国人にとって知らない外国の料理について下記のように説明している。

---

<sup>124</sup> 新智社編（1903）『東語完璧』、新智社、第 339 頁。

<sup>125</sup> 上掲、第 386 頁。

<sup>126</sup> 上掲、第 388 頁。

<sup>127</sup> 上掲、第 321 頁。

<sup>128</sup> 上掲、第 281 頁。

来“鰻魚的蒲焼”做好了串中等的焼三盤子拿来

オイオイ、鰻ノ蒲焼ガ、出来ルナラ、中串ヲ、三皿計リ、焼イ  
テ来テ下ダサイ

“鰻ノ蒲焼”貫串鰻魚。沾醬油、而焼之其味鮮美東人嗜甚<sup>129</sup>

また、本篇の会話は年齢や社会地位による分類も行い、例えば、子供、役人、学生、農民、和尚などである。これは一種の大まかな位相語分類と言える。『東語正規』は既に日本語の敬語に対して解説と分析を行っていたが、現代位相語の分類による会話教学を進めていたのは『東語完璧』が最初の教科書であった。例えば、以下は農民と役人という2つの分類での、似た内容の会話である。

府上是什么地方ル　オ屋敷ヲ、何地デ、ゴザイマスカ  
敝舎在東四牌楼　屋敷ヲ、東四牌楼デ、ゴザイマス<sup>130</sup>

你老好啊　且那樣、ゴ機嫌宜敷ウ  
你打那儿来的　汝ヲ、何処カラ来タカ<sup>131</sup>

このような具体的かつ詳細的な分類方法は、場面によって会話教学を進め、その後の教科書に手本を打ち立てた。現代の多くの日本語会話速成教科書は、同じ編纂方法を受け継いでいる。

本篇は主に東京に渡る留学生向けの内容で、学校選びから各種の手続きまで、留学にかかわる情報を全てカバーしている。内容はかなりの的を射て、且つ詳しい。この指南を通じて、当時の留学状況は以下の様子を示した。

今年中華人士、入帝国大学或入高等学校其他之各种学校者、源源不勢如潮涌。然東京之学校、種類多而性質亦雜、遠来学士、时有不能判其良否之憾<sup>132</sup>

---

<sup>129</sup> 上掲、第 383 頁。

<sup>130</sup> 上掲、第 375 頁。

<sup>131</sup> 上掲、第 379 頁。

<sup>132</sup> 上掲、第 601 頁。

（今年帝国大学や他の大学に入学した中国人は、潮のように絶え間なく押し寄せてきた。しかし、東京の学校は種類が多く、性質も様々なので、遠くからやってきた読書人は其の良し悪しを判断できないことを残念に思う）

よって、本書のような指南に対する需要も必然といえる。指南からは、当時日本へ留学に行くことは、かなり簡単になっていたことが分かる。「数日可达（数日で到着できる）」だけでなく、船も「約間日有之（一日おきに出航）」、両替するのも日本以外の「上海天津香港均可兌換（上海、天津及び香港で両替できる）」<sup>133</sup>ことが分かる。また、当時の中国人留学生は日本での様子も垣間見ることができる。著者は留学生の「轉学之一悪習（転学という悪習）」を批判し、学業では「不能貫其宗旨（初志を貫くことができない）」<sup>134</sup>、また金銭の浪費にもつながる、とした。多くの中国人は日本語を身につける前に、日本に渡って遊学し、「多入同文書院、及弘文学院等、普通学与日語併進（多くの方は同文書院や弘文学院に入学し、一般学科と日本語を同時に勉強する）」<sup>135</sup>。著者が述べたように、当時の留学生は中国国内の「政治、法律、経済、兵学（から）以至于医学、文学、宗教、理科、美術、工芸（に至るまで）」などの分野に影響を及ぼしていた。

著者はあらゆる面から、日本の生活で注意すべき必要な事項を周到に紹介している。学校の状況、交通及び費用などのことが詳細に述べられ、「暈船者开船後需用之物、宜置枕边（船酔いする者は船が出た後の必需品を枕の横に置くべきだ）」<sup>136</sup>のような細かい点まで書かれている。一方、執筆者のなかで、自らこれらの経験をした者が居たということが分かり、他方で、この指南を通して当時日本へ留学に渡る様子も紙上に躍如としている。

清代の末期、中国人は日本語に対して常に「中日同文」という観念を抱いてきた。その考え方の歴史は長く、また長期に渡り主導的な存在であった。中国人が日本語を意識し、そして勉強するようになった

---

<sup>133</sup> 上掲、第 608-609 頁。

<sup>134</sup> 上掲、第 602 頁。

<sup>135</sup> 上掲、第 604 頁。

<sup>136</sup> 上掲、第 608 頁。

という過程において、その考え方は一方、科学的且つ正確に日本語を認識、研究できなかった原因となり、他方、中国人には英語に比べて日本語のほうが学びやすく、また向いているということを理解させることとなり、日本語の普及には有利であった。梁啓超は日本語学習を提唱していたばかりでなく、『和文漢読法』という本も執筆し、日本語の速成方法を教授していた。そのような速成指導法のもとで、「中日同文」との観念が更に深まり、その影響で当時の留学生及び日本語学習者は文法とリーディングを重視し、実際のヒアリングと会話練習を粗末にしていた。一般的な言語学習の流れ、即ち、発音から単語、センテンス、そして文章への流れは明らかに迅速に日本語を身につけたい中国人には向かなかった。しかしながら、日本語学習に関して、当時梁啓超も「学日本語者一年可成、作日本文者半年可成、学日本文者数日小成、数月大成（日本語の口語を一年勉強すれば、できるようになる。日本語作文の半年コースで、日本語文法を数日勉強すれば、ある程度身につけられるようになり、数ヶ月すると、かなりできるようになる）」と述べていた。梁啓超からしてみれば、日本語のなかで、口語が最も難しく、作文がその次、リーディングが一番簡単であった。

③、第三篇と第四篇は会話教学の内容であり、第三章で詳しく説明したのでここでは贅言しない。

④、第五篇は練習問題の解説で、前の四編における翻訳練習の回答となっている。初版から重版では、一歩進んだ解説や説明が行われていない。第二篇と第三篇は重版の変更点に合わせて修正が加えられ、例えば「ワ」から「ハ」への変更、「デス」の使用などである。他の篇の内容はまったく同じである。本篇の内容について、これ以上贅言しない。

⑤、第六篇単語篇は三十章に分かれ、天象門、地理門、時令門、人倫門、人物門（役職も含まれる）、工商門、役所門（学校も含まれる）、文事門、武備門、刑法門、医事門、宗教門、国都門（要港も含まれる）、身体門、人事門、言語門、服飾門、飲食門、宮室門、器具門、金石門、

舟車門、彩色門、草木門、花卉門、果菜門、鳥獸門、虫魚門（貝も含まれる）、数門及び日本度量衡貨幣考の内容から構成されている。その内、第三十章は貨幣考、丈尺考、権衡考、容量考の四種類に分けられている。本篇収録した語彙は日常用語であり、言語門では一部は常用形容詞、形容動詞及び動詞があり、また少数ながらも他の項目に納められた語彙もあったが、ほかは全て名詞となり、篇合計 3807 個の語彙が収録されている。初版と重版の内容が同じである。日本語の漢字は片仮名が振られ、漢字から意味を推測できる場合には訳がなく、中国語の意味と異なるならば、中国語の訳がつけられる。例えば、田舎（イナカ）に「郷下」という中国語の訳が付いている。

本書の出版以前、分類が細かく語彙が多い日本語教科書は唐宝鏐、戢翼翬共著の『東語正規』で、天文類や時令類などの 46 項目に分かれ、2124 語<sup>137</sup>が収録されている。本書の語彙部分は、分類からその本を参照したことが分かり、例えば、『東語正規』の舟類と車類を合わせて舟車門と名付け、一部の分類の名前は「文事」、「武備」のようにそのまま受け継いでいる。また一部の語彙も、『東語正規』のもとで整理補充したもので、例えば、人物門の役人類に関して、ほぼそのまま『東語正規』の語彙を収録して調整を行った。

この二冊の文事類を例にとれば、『東語正規』は 43 語を収録したことに対して、『東語完璧』は 150 語を収めている。43 語のうち、33 語が引用され、引用されていないのは「書籍、目録、職員録、箋紙、封袋、表書、繪、油畫」の 8 語<sup>138</sup>であった。そのなかでも、同じ語彙で解釈が異なったものもある。33 語のうち、『東語正規』では 12 語は訳付きで、本書では 17 語となり、解釈が一致したのは「字引、和文、横文字、手紙、返事、書置、印」の 7 語で、新しい解釈が加えられたのは「（ ）のなかは解釈である」「平假名（亦日本字母）、書物（書籍）、稽古（学問）、新聞（新報）、印肉（印色）」の 5 語である。2 冊の間で解釈が異なった 5 語をまとめると、次の表のとおりである。

---

<sup>137</sup> 陳娟（2012）「初期中国人編纂的日語教材——以『東語簡要』、『東語入門』、『東語正規』為例」、東アジア文化交渉研究第 5 号、第 299 頁。

<sup>138</sup> 本文の附録一を参照されたい。参考のため、『東語正規』に収録した「政事文牘類」の語彙も並べた。

表 3-3 『東語正規』と『東語完璧』における文書類の語彙の異同

語彙	『東語正規』の説明	『東語完璧』の説明
片假名	日文正字	日本字母
横文字	西文	西文通稱
寫	抄謄	謄寫
白墨	粉錠	白土筆
罫紙	格紙	空行紙

上記の比較から、著者は先人の書物を参考すると同時に、自分自身も整理するのに多くの精力を費やし、解釈が重複したり、よく使われていなかったりする語彙を排除したことが伺える。例えば、著者は「字」を「文字」に変えたり、意味が同じである「書物」と「書籍」、「稽古」と「学問」から一つを選んで収録したりしている。一方、「封袋」と「表書」は新しく収録された「状袋」、「上書」と同じく、それぞれ「封套」、「封外字」の解釈となっている。また、それ以外「願書、條約、国書、敕令、省令、認可状、免状、委任状、届、上申、鑑札、指令、公告、新任披露、出勤、敘任」のような語彙は『東語正規』の政治文牘類<sup>139</sup>に納められ、同様に残りの一部語彙も『東語正規』の他の分類に収録されている。これも本篇は著者が『東語正規』のもとで、新たに整理分類を行い、新しい語彙を付け足したものであることを意味している。

同時に、本書は他の項目で多くの時代的特徴に富んだ語彙も収録されている。例えば、役所門の後ろに付された学校名称のなかで、「東京女子大学校」、「華族女学校」などの新しいスタイルの学校名が見られ、また当時の中国で日本語を学ぶ知識人の間で知られていた「成城学校」も入っている。更に、著者は日本の風習をより多く紹介することに努めていた。宗教門では、以前の教科書より神道教にかかわる単語が多く導入され、飲食門でも和食の名前がたくさん紹介されている。医事門では、「解剖」、「墮胎薬」、「眼医者」のような語彙が収録され、当時の時代的変遷を物語っている。また、刑法門でも多くの法律専門用語が導入され、例えば、「有期徒刑」、「無期徒刑」など、法律関係の語彙が初めて教科書のなかで独立項目として分類された。同様に、初めて

<sup>139</sup> 唐宝鏐、戢翼翬（1900）『東語正規』、第 93 頁。

独立項目として分類され、且つ詳細に紹介されたのは日本度量衡貨幣考で、日本の貨幣の額面金額とその種類、及び長さ、重さ、容積などの度量衡の情報が含まれている。

当時、辞典の性質をもった『新編日本語言集全 漢訳日本新辞典 完璧』が出版されたにもかかわらず、上記のような形式で語彙を取りまとめ、分類することが必要であった。本書の語彙篇は分類が細かく、収録語が多いため、他の日本語語彙教科書と比べ、いささかも遜色がない。

⑥、本書には付録として完全な『日本東京遊学指南』が付されており、初版と重版の内容はまったく同じである。1899年に既に姚錫光による『東営学校挙概』が出版され、そして1901年留学生リーダーに務めた章宗祥<sup>140</sup>が執筆した『日本遊学指南』も一定の知名度があった。だが、当時日本語教科書の中に留学指南を付録したのは、『東語完璧』のみであった。その指南は渡日準備、学費概算、必須国語と上京注意点の四章から構成され、章毎に幾つかの節が設けられ、合計20節となっている。ところで、本節で興味深いところが一カ所ある。それは、第一章第一節「游学宗旨」の注釈で、明確に「科学」という単語が用いられ、中国での伝播状況が下記のように紹介されている。

学科與科学、中国多有混同。日本則判為兩門、科学者、一切理学之總稱、如英語所謂 science 是也。学科者即科学中之一学科目、又曰課程或科目、如英語 lesson 是也。<sup>141</sup>

(学科と科学は中国で混同している場合が多い。日本では二つの分類となる。科学とは、一切の理学の総称であり、英語の science である。学科とは、科学における一つの分類であり、別称「課目」或いは「科目」のことで、英語の lesson である。)

---

<sup>140</sup> 実藤恵秀 (1970)『増補中国人日本留学史』くろしお出版社 第173頁。

<sup>141</sup> 新智社編 (1903)『東語完璧』、新智社、第603頁。

### 3.3 本章のまとめ

清末における外国語の会話学習は、ほとんど暗記を通じて、「話す」能力を育てることであった。これは満州語の学習には既に構築した基礎である。日本語教科書に対して、参考にできる価値を持つ英会話教科書は少数である。最初の会話教科書の出版から、『東語完璧』のような自己のシステムを持っている教科書が出版されるに至るまで、僅か二年間しか経過していないのである。これは日本語の学習に対して、語彙・文法などより、最も注目すべきことである。

当時、内容量が最も大きかった日本語会話教科書は『東語完璧』であった。一番の特色は会話教学方法で、そしてその方法を中心として音声教学及び文法教学をあわせるところにあった。また日中共著という点は、発音と会話の質を保証できたことにつながり、高く評価すべきであろう。更に、会話の例文はよく用いられる標準日本語を使用している。「来的是誰呀」の日本語訳が、「来タノワドナタデスカ」となっているのがそれである。そして、これまでの日本語教科書に比べ、『東語完璧』の音声教学は非常に詳細かつ完全で、初めて補助として完全な発音口腔図を導入し、またローマ字で読み方を振り、音声表に関しては、五十音図のみを取り入れた。その分類及び解説の方法は、現代音声教学体系の雛形だと言える。重ねて言えば、現代の一部の速成日本語書籍の編集方法と一致するところもあるのである。文法教学の角度からみれば、本書は完全な文法体系を構築しなかったものの、以前の日本語教科書の編集方法を打ち破り、会話の内容をめぐり、文法の実用性を後世の同類の日本語教科書と比較して、完全なる見本を作り上げた、と言えるのではないだろうか。

重版の『東語完璧』は洗練された外国語会話教科書に近付き、当時の中国における日本語、ひいては外国語教学の水準を高めた。本書は、現代実践会話の教学方法と同じ効果が得られ、またその内容は民国の日本語教科書に大きな影響を及ぼし、絶えず引用されていた。飯河道雄が執筆した『実用日語完璧』は、第三篇の「平仮名」が足された以外、その他は序言、凡例、目次、表紙と題詞を含めてそのまま引用したものである。且つ、幾度も重版し、1937年には第10版まで出版され、却って原作の素晴らしさを証明したことにならないだろうか。

速成学習法が主流であった背景のもとで、『東語完璧』は発音、文字、語彙そして会話の手順に従い、言語習得の流れに基づいて作成されたのである。助詞を「虚字」と名付け、その助詞に対する分析にも「和文漢読法」と当時日本語に対する主導的な考え方のなごりが残っているにもかかわらず、本書は現代の言語速成習得法とほぼ同じで、実用性と会話を重要視し、後世の日本語教科書の手本となっている。他の言語、さらに同じ種類の日本語教科書のなかでも参考できるものではなく、会話学習の新たな域に達した。その先進的かつ科学的な内容によって、『東語完璧』は日本語教科書の歴史の重要な地位を占めているのである。

## 第四章 版を重ねた教科書から文法学習の変化を見る

### 4.1 清末における日本語の文法教育

外国語を習うと、文法の学習は最も重要な部分と言える。中国人は最初日本語に対して方言と認識したため、両言語の文法における差異は無視された。1897年に北京及び広州同文館に「東文館」、即ち日本語学科が設立されたが、「中日同文」意識の影響で、文法の学習は発音や文字など偏っていた。科学的な文法教育に関する内容を収録する教科書は1900年出版された『東語正規』に至り、既に東文館の設立から三年間である。日本書を翻訳することは当時における最も重要な目的である。これに関する内容は第一章で紹介したので、ここでは繰り返さない。

そして、翻訳の主流に従い、1900年にもう一冊の本が出版され、文法教科書とは言えないが、中国人の日本語学習に対して大きな影響を与えた。それは梁啓超が編纂した『和文漢読法』である。もちろん梁の説は翻訳するための方法であるが、「中日同文」の概念を広げた。特に、日本へ逃亡した後、日本語学習の易しさを宣伝し、中国式の倒置の方法を推奨した。

日本文漢字居十之七八、其専用假名不用漢字者、惟脈絡詞助詞等耳。其文法常以実字在句首、虚字在句末、通其例而顛倒讀之、將其脈絡詞語助詞之通行者、標而出之、習視之而熟記之。則可讀書而無窒閼矣。<sup>142</sup>

（日本語には漢字が七・八割を占め、漢字を使わないものは、脈絡語と助詞だけである。文法は実字が文の最初、虚字が最後に置き、ルールが通じたら逆さまになると読める。脈絡語と助詞を表示して、暗記するなら、日本書を読むことことに障害はない。）

確かにこの方法は日本書の翻訳に対して素早く役に立つことができる。これに従う教科書も少数ではない。例えば『和文釈例』（1901）、

---

<sup>142</sup> 梁啓超『論学日本文之益』、中華書局（1988）、『飲冰室合集卷一』、第81頁。

『東文典問答』(1901)、更に 1933 年に出版した『日本文法輯要』も推奨していた。もちろん、日本語学習の進み或いは日本で教育を受ける中国人の増加に従い、知識人たちの日本語意識が科学的になり、『和文漢読法』の主旨に反対する意見も現れた。『日本語言文字指南』(1902)、『日語教程』(1906) などである。ちなみに、倒置の方法は漢文を通じる人に向き、更に日本語を読む・翻訳することのみ効果があると、梁啓超も指摘した。

若未通漢文而學和文、其勢必顛倒錯雜、贅亂而兩無所成<sup>143</sup>

(漢文が通じなく日本語を学習すると、倒置しても錯雑になり、両方とも成功できない)

清末における中国人の日本語教科書には、文法書以外に、ほとんど文法に関する内容が収録された。数量から見ると、倒置法を提唱する教科書は多くない。しかし、専門的な文法書以外に、他の教科書に収録された文法に関する内容も、清末における日本語文法教育の重要な部分である。

第一章の分類により、文法書以外、語彙・会話・精読と辞書がある。語彙類教科書の数が少なく、一般的には文法に関する内容を収録しない。『東語簡要』(1884)を初め、辞書の役割を期待する形式で編纂した。中には『東語入門』(1895)のような日本語の文字を紹介する内容を加えるものもある。初期の三冊の教科書には語彙教科書が二冊含まれているが、それは日本語の学習は始まったばかりで、中日両国でも中国人に対する日本語文法の教育はまだ模索していたからである。語彙教科書は後期で主に「奇字解」の形式が取られ、「中日同文」の日本語意識の影響で、新語彙の普及或いは翻訳の補助とする存在と言ってもよい。そこで、清末における語彙類教科書は、日本語文字に関する内容を中心として、文法の内容が少ない。

一方、語彙類教科書に対して、当時の日本語の辞書には文法に関する内容が収録している。辞書の編纂と日本語の教育及び学習は、清末において、未熟であり、こうした形式が取られたことも探索の証拠で

---

<sup>143</sup> 同上。

あろう。ほとんどの辞書には文字や音声教育の内容及び、品詞類、そして動詞の語尾変化なども収めた辞書は4冊がある<sup>144</sup>。最も詳細なものは『日華新辞典』（1907）であり、86ページの日本文典を収録した。少なくとも『漢訳日本辞典』（1905）の14ページがあり、これは清末における日本語辞書の特徴である。更に、系統的な文法に対する説明があり、専門的な文法書に負けない水準を持っているものもある。辞書に関する内容は、本文の第五章に書いてある。

なお、辞書における文法教育とは、語彙の使用を中心として行うことである。同じく、会話教科書も、会話をめぐって文法に関する内容を組み立てられた。もちろん、会話文を並べ、発音や文字の内容も収録しない教科書もあるが、それは文章を並べているものと同じく、旧式の中国教育の方式、即ち暗記を通じて理解するようになるものである。こうした教科書の形式は精読教科書に近い、実は文法や語彙の収録は全て会話の内容を中心とする。これは現在の会話教科書の編纂する方法とほぼ同じである。ところで、著者の日本語意識と能力、更に時代の限界性もあるが、こうした教科書は文法学習の目的を明確にしておき、逆に要点を押さえやすく、文法の実用性を生かしている。

もちろん、精読教科書は要を得ていないというわけではない。現在の総合的な外国語教科書と同じく、学習者に全面的に外国語を教授し、水準が高いものも少数ではない。『東語正規』（1900）を初め、精読教科書における文法教育は、科学的な内容が多く、系統的に編纂された。しかし、文法に関する内容は、会話教科書や辞書と異なり、強い目的性を持たない。そして、文法書より簡単である。これもこうした編纂する方式の限界性である。ところで、当時は外国語教育も成立していなかった状況であり、即ち日本語教育自身はまだ「聞く・話す・読む・書く」に細かく分けられなかった。そのため、教科書が全ての内容を揃い編纂することは、安全な形式であろう。

日本人が編纂した教科書の中に、日本の小学校において使われた教科書を参考にするものがあり、単語、文法や会話を中心とする専門教科書もある。「文典」ということは日本語で文法書の意味であり、形式

---

<sup>144</sup> 『新編日本語言集全漢訳日本新辞典合璧』（1902）を除く。本書は辞書とは言えず、具体的には第五章に書いてある。

は教科書と違い、日本の教師により編纂され、主な目的は日本語文法を系統的に教授することである。中国日本語学習者の増加や、日本語知識の把握が深刻になり、文典類教科書に対する需要も次第に明らかになる。しかし、中国人学習者向けの文典の形式はそれに限らない。語彙、会話などの内容を総合し、一冊にまとめて出版発行する文典もある。そのため多くの文典は中日対訳の形式が取られ、これは日本の文典を中国語に訳すものである。翻訳者は中国人と日本人両方があり、例えば丁福同が訳した『中等日本文典訳釈』（1903）は中国で出版された、最初の中国人が翻訳した日本文典である。

しかし、単純に文典を日本語から中国語に翻訳することは、必ずしも中国人学習者に適しない。明治時代、日本国内における日本語教育の中心は清国留学生の日本語教育とも言え、多くの日本語教師が漢訳文典を編纂し、内容と説明に対して中国人学習者向きに調整を行った。三矢重松、松本亀次郎、松下大三郎などを代表とする国語学者は清国留学生の日本語教育に熱心である。これらの教師たちは高い国語教養を持つことに加え、現場で清国留学生に対する日本語教育を行う仕事を通じて、中国人学習者に適応する教授方法を探索した。これに基づいて編纂された文典はほかの日本語教科書より、更に科学的、系統的に日本語の文法知識を導入した。

そして、1912年において、筆者が実際に閲覧した中国人向けの日本語文法教科書は22冊が出版されており、以下の表にまとめた、

表 4-1 1912 年まで中国人向けの日本語文法教科書

書名	著者	出版年	出版者
東語文法提綱	薛琛	1900	東学会
和文漢読法 <sup>145</sup>	梁啓超、羅孝高合著	1900	勵志会
日本俗語文典	金井保三	1901	宝永館
中等日本文典 譯釋	三土忠造著・丁福同 訳	1903	教育改良会
言文対照漢訳	松本亀次郎	1904	中外図書局

<sup>145</sup> 文法書とは言えないが、中国人の日本語学習には文法に対する影響が最も大きな本であるから、ここに収める。

日本文典			
東文法程	商務印書館編譯所編	1905	商務印書館
清人適用日本語典	井上友吉	1905	青山堂
日本俗語文典	吳初、孟先	1905	吳初、孟先
日本文典課本	大矢透著、鐘賡言校	1905	泰東同文局
文法應用東文漢訳軌範	門馬常次	1906	東亜公司
東語集成	金太仁	1906	東亜公司崇文書局
漢和對照日語文法述要	難波常雄	1906	觀瀾社
漢訳東文法彙編	独一訳社	1906	清国留学生会館
漢訳日本語典	佐村八郎	1906	六盟館
漢訳日語階梯	松下大三郎	1906	誠之堂
漢譯日語文法精義	高橋龍雄	1906	東亜公司
校訂日本俗語文典	竜文館編輯局編	1906	竜文館
日本文典講堂問答	菊池勉	1906	中和堂
実用日本語法	岸田蒔夫	1906	明文堂
高等日本文典課本	児崎為槌	1907	東亜公司
日本俗語文典	竹内善朔	1907	新智社
日本文典	芳賀矢一	1907	商務印書館

当時中国人の日本語文法教科書の内、中国人により編纂されたものは、筆者は二種類があると考えている。一つは短時間で日本書を翻訳するための教科書である。もちろん、これは「中日同文」の日本語意識からの影響であり、上述のように、この目的を抱えている知識人た

ちはスピードを望み、『和文漢読法』の倒置法或いは「奇字解」などを頼っていた。即ち、正式な文法学習が必要ではない。もう一つは、日本語を本格的に学習・研究するものである。この種類は、日本の文法書を翻訳し、或いは模倣して編纂されるものがある。一方、日本人により編纂される教科書は、水準と正確さが高く、更に、単純な文法内容より、文章を加え文法説明を行うものもある。例えば、『文法應用東文漢訳軌範』（1906）、『東語集成』（1906）などがある。

ところで、清末における日本語文法教育を考えると、時代性を無視できない。即ち日本と中国の文法システムは、当時両方とも成立していなかったことである。中国人が日本語を学習する過程で、日本語の文法も発展と変化を経験する。例えば、「形容動詞」の品詞類の成立などがある。そして、文語と口語の区別なども、文章の中に反映する。この状況に対して、1907年に出版された『日語用法自習書』には、詳しく分析した。当時の科学的な文法観を代表することとも言える。

（前略）以為即不能操日語、能看日文足矣、竊謂爲是也者、是專指明治初年之日文言之耳、彼明治初年之文章、大半由漢文一轉而成者、故精漢文者之於日文、有數日小成數月大成之效、至若今日之文章、若新聞雜誌、若大学專門發行之講義錄、悉文與語參半、如不同語法而看此等文章、終不免於杆格不通、譌者其大意、自以為通、而問心實不了然（後略）<sup>146</sup>

（日本語を話せず、読めるだけで十分と思うことは、明治初期の日本語文言を指す。明治初期の文章は、半分以上が漢文から転成したものである。漢文に精通する人は日本語を学習するなら数日で効果が出て、数ヶ月で大成できる。現在の文章に対して、新聞や雑誌、大学が発行する専門的な講義など、文語と口語が混じり、口語の法を通じないと、このような文章を読むなら、意味が間違い、或いは通じない場合もある。自分は通じると考えても、実は通じていない。）

特に、重版する教科書からこの時代性が明らかに見える。筆者が所

---

<sup>146</sup> 著者不明（1907）『日語用法自習書』、序言。

有する資料の中に数回重版する教科書が何冊あり、時間が一番長いものは松本亀次郎の『言文対照漢訳日本文典』である。1904年から1938年にかけて34年間にわたっている。ちなみに中国人により編纂され、重版時間が一番長い教科書は『東文法程』であり、1905年から1935年までである<sup>147</sup>。しかし、重版する『東文法程』の内容は30年間変わらず、翻刻だけである。一部のみ残された『東語文法提綱』以外に、『東文法程』は中国人により編纂した最初の文法書とも言える。1905年以前、中国人は日本語文法を学習するため、日本人により編纂する専門文法書以外、他の種類の教科書に収録された文法内容も、重要な手段である。こうした教科書の中には、文法の実用性を重視し、科学的な文法内容が収録され、更に重版する教科書は『東語完璧』(1903)一冊のみである。本章ではこの二冊の教科書の重版版本により、文法内容を中心として、内容の変化を分析したい。

#### 4.2 実用性を重視する文法教育<sup>148</sup>

『東語完璧』は清末における代表的な会話教科書である。本章では、文法に関する内容のみ考察したい。

助詞は中国人にとって日本語文法の中で一つの難関と言われている。本書の著者は日本語の助詞を中国語の虚字と類比し、その重要性を述べている。なお本書の第一章で、既にそれは説明を施している。

日本関係詞甚多、而取要者為テニヲハ四字。為虚字主腦。故総稱為テニヲハ。用法變化無窮、虚实相需。關係甚重。若不識虚实貫串之法、則詞不达意。東語之有虚字、其犹車之有軸乎。<sup>149</sup>

(日本語には助詞が大変多く、その中でもテニヲハが要となり、虚字の中心である。それ故、助詞は総じてテニヲハと呼ばれてい

---

<sup>147</sup> 筆者の手元には実藤文庫版と民国重版がある。実藤文庫版の奥付に「光緒三十一年三月一日発行」と書いてあり、民国版には「乙巳年三月初版」の文字もあるため、本書の初版は1905年に発行されたことを推測できる。更に、民国版には「中華民國二十四年六月国難後第二版」も書いてあるため、本書は1935年までまだ重版していることが分かる。

<sup>148</sup> 本書の解題は第三章に書いてあり、本章では文法だけに言及したい。

<sup>149</sup> 新智社編(1903)『東語完璧』、第93頁。

る。用法は変化に富み、虚字と実字はお互いに必要とする。係わり合いが非常に密接である。もし、虚字と実字の接続法が分からなければ、意味が通じない。日本語の虚字は車軸のようなものである。)

初版では、以上の説明が第一章第一課の始めに書かれている。これに対して、重版では、第二章序言の部分となり、しかも幾つかの言葉遣いも変わり、例えば、「日語」から「東語」になったなどである<sup>150</sup>。

当時、中国言語学の文法学がまだ正式に歴史の舞台に登場しておらず、決まった文法体系も形成されず、中国語における虚字の研究に対しても完全なものではなかった。中国言語学の研究は、「字」の研究に基づいて発展してきたものであるため、文法分析に比較的弱かった。日本語の重要な文法機能を担う助詞は中国語の中でそれと対応する品詞が見当たらず、そのため「虚字」と類比することにした。これは中国人が日本語の助詞を理解する・受け入れることに有利である。これもこれまで中国人が作成した日本語教科書の形式を受け継いだものである。

一方、当時の日本語も完全な文法体系が形成されていなかった。多くの文典が出版され、例えば、大槻文彦『語法指南』(1891)、落合直文と小中村義象が共著した『中等教育日本文典』(1893)、三土忠造『中等国文典』(1898)等、いずれも日本語言語学に対して一定の基礎を築き上げたにもかかわらず、格助詞のよう用法における分類はまだ現れていなかった。1903年4月に丁福同が翻訳した『中等日語文典』が出版され、『東語完璧』は同年5月に出版された。出版した当時、『東語完璧』の著者は参照できる中国人向けの日本文典がなかったため、中国語で適切に文法機能を説明することもかなり困難であろう。それ故、完全な文法体系を以て、品詞分類や動詞活用などの内容を教授するのではなく、実用性を重視する形式を取った。例えば、課ごとに短い文を例として挙げ、日本語中国語を対照し、一部例文の前に簡単な文法

---

<sup>150</sup> 新智社編(1905)『(実用) 東語完璧』、第95頁、「凡初学東語者、首當注意虚字及關係詞、然東語之关系詞甚多、而其最要者為テニヲハ為虚字之主腦、故総称曰テニヲハ、其用法變化无窮、虚実相需、關係甚重、若不識虚実貫注之法、則不能得其趣旨、東語之有虚字、其由車之有軸乎」。

説明が加えられ、その後に簡単な中国語と日本語の相互翻訳練習が設けられている。

現代における日本語品詞の分類により、初版及び重版の中で言及した助詞、助動詞、代名詞、接頭辞、接尾辞、副詞及び主要動詞の活用を以下のようにまとめた。

表 4-2 版本により『東語完璧』の品詞類に関する内容の異同

		初版		重版	
		章節	説明	章節	説明
助 詞	ヲ	第一章 第一課	有處置事物之意、置兩語之間、示以關係、稱曰關係詞、即虛字也	第一章 第一課	略有將字把字意、用以連接名詞與動詞之間以示關係、即所謂虛字也
	ニ	第一章 第二課	承上啓下語、似漢文於字之意	第一章 第二課	是虛字、承上啓下語、似漢文於字之意
	テ	第一章 第四課	是虛字、承上接下、與漢文而字同	第一章 第四課	承上接下詞、與漢文而字同
	ノ	第一章 第四課	是虛字、示所有之意、與漢文之字同	第四章 第二課	作之字解、凡兩名詞相連、中必用ノ字、如(私ノ家) (花ノ香) 是
	ナサイ	第二章 第一課	指使之意、請求之意	第三章 第一課	命令辭、宜也、當也、清 <sup>151</sup> 也、即請求之意
	ト	第二章 第二課	是虛字、用於兩名詞並列之處、接續辭也、與漢文與字及字同	第一章 第三課	用於兩名詞並列之處、與漢文與字及字同
				第六章 第	接續辭也

<sup>151</sup> 「請」と同じである。

助 詞				一課	
	モ	第二章 第二課	是虛字、為指定辭、與漢文亦字同	第五章 第二課	與漢文亦字同
		第五章	亦也、都也、皆也		
	ニ      ヘ (エ)	第二章 第四課	是虛字、示方向也、向之意也	第三章 第二課	承上接下詞、此ニ、ヘ字即有于字在字向字之意
	カラ	第二章 第四課	是虛字、自從也。又故也、因也	第二章 第二課	自從也、打也、用於名詞代名詞下
	デ	第三章 第五課	是虛字也。在之意也。		
	ハ	第三章 第六課	(ワ) 是虛字。區別事物也。有發起意	第四章 第一課	區別主辭之為何時用
	ガ	第三章 第七課	是虛字、有指定之意、与ハ字相似	第五章 第一課	於実字下用、以表示行動狀態、屬自動意
	バ	第四章 第一課	是虛字。若之意也		
	ナラバ	第四章 第一課	則之意、倘若之意也		
	ケ   レ   ド モ	第四章 第一課	雖然之意也		
	ニ      ハ (ワ)	第四章 第一課	於之意也		
	カ	第五章	疑問之辭也、與漢文乎哉耶之字同	第六章 第一課	疑問之辭也

	エ			第二章 第二課	示方向也。向之意也
	マス			第五章 第一課	表示性質狀態、用於動詞下
	デアリマス			第四章 第一課	或（デス）（デ御座イマス）説明其事物也。有為字是字意。其變化為（デス）現在（デシタ）過去（デセウ）將然
代名詞	コレ、ソレ、アレ及コノ、ソノ、アノ	第一章 第三課	稱曰代名詞、代事物之名之詞也。コレ、ソレ、アレ三者單代用於事物之詞也。而コノ、ソノ、アノ之三者、乃指主事物之時所用之詞也、有近稱、中稱、遠稱之三者如左	第一章 第三課	コレ、ソレ、アレ三者單代用於事物之詞也。而コノ、ソノ、アノ之三者、乃指主事物之時所用之詞也、有近稱、中稱、遠稱之三者如左
	ココ、ソコ、アソコ	第二章 第二課	皆是代名詞、指示方位之時、所用之詞也。有近稱、中稱、遠稱之三者如左	第三章 第二課	皆之代名詞、示方位、而有近稱、中稱、遠稱之三者如左
	コチラ、ソチラ、アチラ	第三章 第五課	皆是代名詞、指示方位之時所用之詞也。分近稱、中稱、遠稱之三種如左		
	ワタクシ、アナタ	第一章 第二課	我、爾	第一章 第二課	我、爾

	ア ノ ヒ ト	第 一 章 第 二 課	他		
	僕、君			第 一 章 第 二 課	朋友間之用語也
接 頭 詞	オ、ゴ	第 二 章 第一課	御 也、上 用 御 字、尊 敬 之 意、 即 接 頭 語 也	第 三 章 第 一 課	御 訓 読(オ)音 読(ゴ) 表 尊 敬 之 意、用 于 語 前、(オ)字 用 于 訓 読 字 前、(ゴ)字 用 于 音 読 字 前
接 尾 詞	タチ	第 二 章 第三課	皆 等 之 意		
	サン	第 五 章	同 輩 之 称、姓 又 名 之 下 附 サン、 以 称 人 泛 用	第 四 章 第 二 課	同 輩 之 称、姓 又 名 之 下 附 サン、以 称 人 泛 用
副 詞	ナ	第 三 章 第四課	不 也、勿 之 意 也		
	ヨリ・ヨ リモ	第 三 章 第八課	皆 較 之 意、比 之 意 也	第 六 章 第 二 課	比 也、用 於 名 詞、代 名 詞、動 詞 下
助 動 詞	セテ	第 三 章 第三課	使 為 之 意		
	タイ	第 三 章 第八課	望 也、要 也	第 七 章	要
	ダ	第 五 章	斷 定 之 辭 也、與 漢 文 也 字 同	第 六 章 第 一 課	斷 定 之 辭 也
	マス			第 五 章 第 一 課	表 示 性 質 狀 態、用 於 動 詞 下
	デ ア リ			第 四	或 (デス) (デ御座イ

	マス			章 第一課	マス) 説明其事物也。有為字是字意。其變化為(デス) 現在(デシタ) 過去(デセウ) 将然
主要動詞活用	ク ダ サ イ	第 三 章 第一課	請求之意。即俗語給我之意也		
	アル・アリ マ ス・ゴザイマス	第 四 章 第一課	有之意也(初版无アル)	第 五 章 第一課	有
	ナイ・アリ マ セ ン・ゴザイ マ セ ン	第 四 章 第一課	没有之意也(初版无ナイ)	第 五 章 第一課	没有
	イ マ ス・オリマス	第 四 章 第二課	在也	第 五 章 第五課	有、在也
	イ マ セ ン・オリマセン	第 四 章 第二課	皆不在也	第 五 章 第五課	沒有、不在也

『東語完璧』の出版時期において、それ以前と比べて各教科書はそれぞれ異なる重点を置き始めた。既に触れたように同時期に出版された教科書の中で、『東文易解』(1902)と『東語初階』(1093)は発音と簡単な文法から取り掛かり、少しばかりの会話や文が補助的なものであったのに対して、『和文釈例』(1902)はリーディング能力を重視していた。丁福同が翻訳した『中等文典訳釈』(1903)は文法書であり、『新編日本語言集全漢訳日本新辞典合璧』(1903)は辞書機能を備え、『日本語言文字指南』(1902)と『日語独習書』(1903)のような教科

書は相変わらず単語を主とし、ただ幾らか簡単な言語学及び文法知識を付け加えたものであった。一方、全体から見ると、本書の編纂方法は『東語初階』に似ている。同じく会話教科書として、文法の内容も同じ形式を取っている。即ち、本書は実用会話の習得を出発点とする教科書であり、上記の表から次のようなことを指摘できる。日常会話によく用いられる文法に対しても深く触れず、重版では文法に関する内容を一層減らした。本書は当時の多くの教科書のように品詞分類という角度から解説せず、品詞分類に関わった内容が幾つかの名前に過ぎなかった。その中で、動詞活用語尾の変化について簡単に説明し、例えば、連体形、命令形、否定形および動詞の使役態などである。また、中国語での解釈から見ても、著者はその用法と意味を厳格に区分せず、これも著者の中国語と日本語における言語学知識が不足していたことを反映している。ところで、初版の例文の「ハ」は全て「ワ」と書かれ、これは発音の部分にある「ハ行転呼」の原因かも知れない。実際、当時の助詞の場合はやはり「ハ」が使われていた。この点から著者の謹厳でない一面も見られる<sup>152</sup>。

本書は助詞のことを「虚字」を呼び、そして中国語の「之乎者也」と類比していることは、中国人により編纂された日本語教科書を参照している可能性がある。語彙部分は『東語正規』を参照することから、文法の部分も恐らく同じである。本書の出版する時期、品詞分類の名称はほとんど決められ、著者がそれを選ばないことより、『東語正規』の影響力が見え、一方、大部分の中国人学習者の意識も反映する。

本書の文法に関する内容は、以上のこと以外に、正確性も科学性も高い。ここから、編纂者には日本で日本語教育を受けた人がいることを確認できる。本書の文法は会話を中心とする内容であり、詳しい説明を行わなかった。逆に、例文の数は当時の一般的な教科書より多く、更にほとんど日常で使われる文である。そして、簡明な紹介と重版における調整から、会話に対する工夫も見える。

初版では文法における意味の解説に対して、重版では実用性の角度から修正された。例えば、仮設を表す「バ、ナラバ、ケレドモ」を削除された。当時、これに関する内容は中国人編纂された教科書に収録

---

<sup>152</sup> 重版で「ハ」を使用する。

するものが少なく、『言文対照漢訳日本文典』（1904）のような専門文法書には説明があるが、そこまで詳しくなかった。これも翻訳や口語には常用文法ではないことが推測でき、重版では省略される。一方、「エ、マス、デアリマス」に関する内容を増え、特に「デアリマス（或デス、デ御座イマス）」に対して現在、過去、将来の形態を説明しており、これは翻訳する場合より会話に常用される内容である。

ところで、文法を会話に活用すると、動詞が最も重要な内容である。初版と重版には語尾変化による接続の内容はほとんどなく、これも暗記を通じて会話力を育つ意図が見られる。一方、重版には編纂者の日本語能力の向上も見られた。例えば、「オ・ゴ」に対しては、重版にそれぞれ「訓読」と「音読」の前に使用説明を加え、そして、「ダ」の説明には「與漢文也字同（中国語の「也」と同じである）」の文が削除候された。初版と同じく、重版には専門に品詞分類を説明する内容がなかったが、助詞の接続に言及する時品詞名称を使っていた。例えば、「ヲ」の場合、「用以連接名詞與動詞之間以示關係（名詞と動詞の間に連続し関係を表す）」の説明文を加え、「ノ、カラ、マス、ヨリ、ヨリモ」なども名詞や動詞との接続を明示している。一般教科書のように語尾変化の内容に力を入れることより、助詞の位置を説明すると、会話の記憶と理解に効果がある。ちなみに、「ハ」の説明に「主辭」のような文構造に関する内容を加えたことから、当時日本語の文法教育が、シンタックスの角度から取り扱われ始めたことも窺える。特に 1904 年に出版された『言文対照漢訳日本文典』では既に文構造の視点から分析を行われ、日本での教育現場の特徴を反映した。本書の編纂者は日本にいたため、こうした教育の影響を受けたのであろう。

更に、文法教学の疎かさと打って変わって、著者は会話の面に関して、次のような様々なテクニックと組み合わせに言及している。例えば、主語の省略、「坐于床上謂スワル、坐于椅子上謂カケル（ベッドに座るのはスワルと言ひ、いすに座るのはカケルと言う）」、重版の第一課第二課では人称代名詞我（ワタクシ）、アナタ、僕、君を取り上げ、その上「僕」と「君」は「朋友間之用語也（友達の間で使う言葉）」と指摘しており、位相語に対する簡単な選別を行ったと言えるであろう。こうした細かい点はより一層機能上重きを置く所を明示している。

一方、前述のように、当時中国人向けの日本語教科書は既に一定程度の規模・発行量・水準に到達しており、文法に関する内容も科学的に発展している傾向が見える。簡単な説明から着手し、大量の例文を付け加え、そして簡単な練習問題を設けることによって、速く習得させるような会話教科書の編集形式はその後及び現代の速成会話教科書作成の手法である。この角度から、本書は比較的洗練された実用会話教科書であり、ひいては一つの言語速成教程の新しいモデルを構築したと言えるであろう。

### 4.3 『言文対照漢訳日本文典』

#### 4.3.1 書誌

著者の松本亀次郎（1866-1945）は、漢文に精通し、「一生を留学生の準備教育＝日本語教育にささげた<sup>153</sup>」。松本亀次郎は 1903 年から宏文学院に就任して以来、明治、大正及び昭和の時代を経て、在日中国人の日本語教育に身を投じていた。「教育視為無上之至樂、終身之天職、功名富貴、淡若浮曇、矻矻年窮、以迄于今、而不知老之将至焉」<sup>154</sup>。1908 年松本は北京の京師法政学堂で教習を担任し、1912 年 3 月日本に戻り、中華キリスト教青年会戸塚支部などの場所に教師として勤める。1914 年松本は自分で資金調達し、留学生教育に熱心する同士と共に、長期的に中国人留学生の日本語教育を行う予備学校――東亜高等予備校を創立した。松本に師事した中国人は数え切れなく、中には魯迅兄弟、秋瑾、週恩来などの有名人も含まれる。

1904 年に松本亀次郎は留学生の要求に応じて、宏文学院の授業講義をもとに、『言文対照漢訳日本文典』を編纂した。更に編纂する途中、中国人留学生と漢訳部分を検討する。中国人の学習状況と中国留学生に対する教育の経験に基づいて、学界で広く好評され何回か重版した。関正昭はこの文典に対して「日本語教育文法の源流<sup>155</sup>」と評価した。

本書は長期間にわたり宏文学院叢書の一部として発行され、筆者は 1904 年に発行された第 3 版、1908 年増補訂正第 23 版及び 1935 年増補

---

<sup>153</sup> 実藤恵秀（1970）『増補中国人日本留学史』、くろしお出版社、第 68 頁。

<sup>154</sup> 『日語肯綮大全』（1935）、有隣書屋、序言。

<sup>155</sup> 関正昭、平高史也（1997）『日本語教育史』、アルク 第 94 頁。

訂正第 38 版三つの版本を手元に所有している。第 3 版の版奥付に書かれている「明治三十七年七月二十日印刷、廿十三日発行、十月六日重版印刷、十月九日重版発行、十二月十四日三版印刷、十二月十七日三版発行」の内容から、本書は明治 37 年 7 月（1904）に初版発行されたことが推測できる。同じく、上述の情報から本書初版を発行一年間以内、すでに三版を印刷出版したことが分かり、本書を需要する程度も窺われる。そして、本文典は昭和 13 年 12 月 10 日増補訂正第 39 版も発行された。これは昭和 13 年まだ広く使われていることが分かる。第 23 版と第 38 版は実藤文庫に所蔵され、第 3 版のデジタル版は国家国会図書館に収録されている。

第 3 版の書名は『言文対照漢訳日本文典』であり、中外図書局により出版された。第 23 版の書名は『訂正増補第二十三版言文対照漢訳日本文典』に変わり、第 38 版は『言文対照漢訳日本文典訂正第三十八版』になった。両者ともに国文堂書局から発行された。三つの版本には内容における異同が多く、本文で言及する場合は版本により区別する

本書の序言は嘉納治五郎により書かれ、第 23 版には新刊緒言を添付された。更に、序言の前に告示もある。第 38 版は新刊緒言、例言及び告示を取り消し、他には序言や例言の内容は同じであり、ただし第 23 版例言の文字サイズが小さくなる。

第 23 版の序言前にある告示は上海公共租界会審分府黄為から公示されるものである。発表時間は「光緒三十年拾月十三日」であり、内容は版權を明示し、利益のために本文典の不当翻刻を厳禁する。また、関正昭も本文典は中国で海賊版がある状況に言及した<sup>156</sup>。初版出版の同じ年でこうした翻刻の状況が発生することは、本書の影響力も窺われる。

外国語を学習するには最も重要なことは文法であるため、文法書を必要することと、嘉納治五郎は序言で指摘した。当時中国での日本語教育は一定程度の規模があり、出版された文法書も少数ではない。しかし、中国人学習者に対して、これらの文法書を通じて習得する日本語文法は不完全である。それは二つの原因があり、一つは質的に優れていないことであり、もう一つは文章語と口語両方を配慮する教科書

---

<sup>156</sup> 同上。

がないということである。故に、日本語の文法を全面的に把握することは難しい。まだ様々な論議がある日本語文法システムに対して、本文典は学界における文法研究も役に立つ参考となるものであった。

凡学他邦言語之必待于文法書、比学自国言語、更加甚焉。是通彼我皆然、清国人之修我日本語者、欲得良好文法書、固其所也、顧現今文法書之行於世者、不乏其類、然其主文語者、則密于古、而疏於今、主口語者、則或流理論、或誤標準、粗漏杜撰、未足以中選、是教育者之所深以為憾也。松本龜次郎氏在我弘文学院、教日本語于清国学生、有慨於此、頃編一書、題曰言文對照漢譯日本文典。請序於予、予受而讀之、文語口語、對比説明、舉例示證、附以漢譯、丁寧親切、曲得其要、其益于中国学生、決非淺鮮也。蓋我口語文法、諸説未定、人迷去就、本書之出、別具一成案、可以供世人之研究討議而有所進盡於学界矣。何翅益于中国学生雲而哉。是為序。

（外国語を学習するには必ず文法書が必要であり、母語の学習より更に重要である。清国人で日本語を学習する人が、良い文法書を探すのはこのためである。現在世にある文法書は、種類が多いが、文語がメインであるものは、目下的内容より古典を重視する。口語を中心とするものは、理論や標準など間違いが多く、選ばれるものではない。これも教育者たちの残念と思われることである。松本龜次郎は我が弘文学院で清国学生に日本語を教えている。上述の理由で、教科書一冊を編纂し、書名は言文対照漢訳日本文典である。序言を頼まれ、読むと、文語と口語を比較的に説明し、例を挙げて、漢訳を付いている。丁寧に親切に重点を解説する。本書は清国学生にとって重要なものである。日本語にも口語文法の諸説はまだ成立していない。本書が出版されることより、成案になり、学界の研究や検討を役に立ち、特に清国学生に有利である。）

明治三十七年七月 嘉納治五郎<sup>157</sup>

---

<sup>157</sup> 第3版、序。

序言により、当時宏文学院に勤務する松本亀次郎は本文典を編纂した。いわゆる言文対照とは、文語（明治時期）と口語対照的に配列されることである。これも当時は言文一致の時代であることを反映した。「漢訳」については、本文典は来日の清国留学生を対象として、文章用語と日常会話を身につけさせるために、一石二鳥の効果がある。これまでも日本語の文典が何冊か出版されており、例えば丁福同訳の『中等日本文典訳釈』などがある。しかし、丁氏の本は日本人学生向けの文典を中国語に翻訳するだけである。本文典のような対照方式を取り、中国人向けの文典は当時における新しい試みと言える。更に、本文典は最初の公式的な漢訳対照文典であり、これも本文典が広く採用され、影響が大きい原因であろう。

第 23 版の新刊緒言で、新版の内容は三矢重松、松下大三郎及び臼田寿恵吉三人の意見を参考にした上に改正されるものであり、三矢重松が校閲した後発刊することと、著者が指摘した。これらの学者たちの協力が得られ、本文典の影響力も見られる。

本書ハ獨リ漢譯日本文典ノ嚆矢タルノミナラズ、文典ノ全部ニ通ジテ口語ト文語トヲ對照シ、且一一漢文ト比較シテ、其ノ譯字ノ適當ヲ求メタル者ナレバ、事多クハ草創ニ屬シ、先哲典型ノ參考ニ資ス可キ者甚少<sup>158</sup>

清国駐東留学界並ニ其ノ本国各省諸学校ノ教科書若クハ參考書ニ採用セラルルノ榮ヲ得ルニ至リタル<sup>159</sup>

当時の日本語は、江戸時代の言文一致運動を経験して、現代日本語への変化する途中である。そのため「口語文法諸説未定（口語文法に関する諸説はまだ定めない）」<sup>160</sup>、「専門学者間未見十分之定案（専門学者の間でも確実な提案もない）」<sup>161</sup>の状況に直面しながら、重版する過

---

<sup>158</sup> 第 3 版、序。

<sup>159</sup> 第 23 版、新刊緒言。

<sup>160</sup> 同上。

<sup>161</sup> 第 3 版、例言、第 4 頁。

程でも絶えず調整改正し、中国人留学生の需要に適応したのである。古い版の強い文語傾向に対して、新版には東京の共通語を使って、教學経験を活用して文法の解説順位に対する調整を行い、文法説明の類推及び新たな例文などの内容を追加した。版本別の内容における異同については後述することとし、ここでは新刊緒論の説明のみ引用する。

新版ハ舊版ノ順序ヲ改メタル者尠カラズ、例ヘバ動詞七法中ニ於テ中止法ヲ最後ニ廻シタルガ如キ、助動詞ノ推量否定ヲ推量ノ後ニ廻シタルガ如キ、時ノ助動詞ヲ助動詞ノ最後ニ廻シタルガ如キ、教授ノ便宜上、自ラ此ノ順序ニ従フルナル可ヲ認メタレバナリ。

新版ハ舊版ノ足タザル所ヲ増補セル者尠カラズ、例ヘバ舊版中解説ノミヲ舉ゲテ実例ヲ省略シタル者ノ如キ、新版ニテハ一例ヲ舉ゲテ之ヲ示セリ。例ヘバ名詞數詞ノ用例ノ如キ、動詞語尾変化ノ必要ナル理由ノ如キ、サ行変格ニ關スル諸種ノ用例ノ如キ、動詞音便ノ例ノ如キ、或ハ動詞形容詞等ノ第五変化ニバ、ド、ドモノ助詞ヲ添フル者ノ中ニ、確說的假定前提法ノ例ヲ附加スルガ如キ、助動詞ノ時ノ部ニ不定時ヲ加ヘ、或ハ未来ニ確定ノ未来ト不確定ノ未来トノ區別アルコトヲ詳説セルガ如キ類、即是レナリ。

新版ハ世間ノ普通ニ從ヒテ、品詞ノ所屬及名稱等ヲ換ヘタルモノアリ。例ヘバ語句ノ中尾ニ添フ感歎詞ヲ、助詞ノ部ニ移シタルガ如キ、或ハ使性、被性、能性、敬性等ノ名目ヲ、使役、被役、可能、崇敬ト換ヘタルガ如キ、或ハ以シク活用ノ語尾ヲシク、シ、シキ、シケレト為シタルガ如キ、即是レナリ。<sup>162</sup>

本文典の最後には高步瀛、崔謹と王振珪、三名の中国学生のあとがきがあり、各人の留學生活と學習感想を述べ、本文典に対して高く評価する<sup>163</sup>。第3版の後に校勘表が付いて、他の二版本はこの表を取り

<sup>162</sup> 第23版、新刊緒言、第5-7頁。

<sup>163</sup> 三つの版本で後書きの順序が異なる。第3版と第38版は高-崔-王の順であり、第23版は崔-高-王になる。

外し、同じく第 23 版に載せる書籍広告も、他の二版本も収録されない。

著者は自分の教学経験を通じ、中国人留学生の日本語学習に対する要求を二種類に分けた。その一つは「口能ク之ヲ談ジ、耳能ク之ヲ聴キ、目能ク之ヲ看、手能ク之ヲ書カシ」<sup>164</sup>四つの能力を身につけてほしいというものであり、もう一つは「目ト手トハ能ク看能ク書カンコト」<sup>165</sup>のみ習得したいというものである。いずれにせよ、日本語の文法を習う重要性を指摘している点は同じである。そこで、松本は普通科と速成師範科二種類の課程を設計した。後者は中国国内の新式学校教員不足の問題を解決するためであり、帰国後素早く教師に就任できる速成教授であった。

清国留学生ノ日語日文ヲ学ブ者、二種ノ區別アリ、第一口能ク之ヲ談ジ、耳能ク之ヲ聴キ、目能ク之ヲ看、手能ク之ヲ書カシ欲スル者、第二ハ口ト耳ト能ク言ヒ能ク聴カズト雖、目ト手トハ能ク看能ク書カンコト欲スル者、是ナリ、余昨年五月ヨリ、初メテ東京弘文学院ニ在リ、此ノ二種ノ希望、相異ナル所ノ学生ノ為ニ、日語日文ヲ教授ス。第一ヲ普通科ト曰ヒ、第二ヲ速成師範科ト曰ヒ……此二種ノ学生ノ日語日文ヲ学ビヤ、時期ニ長短アリ、程度ニ深淺ノ別有リト雖然モ其ノ文法ヲ学ビニ急ニシテ、重要視スルコト相同ジ。<sup>166</sup>

松本は文法学習のことを「日文ヲ會得スルコト、猶管鍵ヲ持シテ寶庫ノ啓クガゴドクナラン」<sup>167</sup>と考えており、文典の役割を軽視できない。故に、著者は本文典を編纂する理由を以下の四つを提出しており、それを以下にまとめた、

1. 留学生の日本語教育は、日本人向けの方法を模倣せず、中国人に適應する方法で行うべきである。
2. 古文が多く、普通文が少ない、更に漢訳された文法は要点が

---

<sup>164</sup> 第 3 版、例言第 1-2 頁。

<sup>165</sup> 同上。

<sup>166</sup> 同上。

<sup>167</sup> 第 3 版、例言、第 3-4 頁。

わからないものが多数である。

3. 漢文対照するものがない。大矢透の『東文易解』は完全ではない。
4. 各文法現象と中国語の口語を対照するものが少ない。

これに基づいて編纂された文典は、中国人の日本語学習史において、中国人向けの最初の専門的な文法書と言える。日本人により編纂されたが、教育と学習の両方から見ると、日本語文法書の嚆矢であり、当時右に出るものがない。筆者は本文典の特徴を以下の五つにまとめた。

1. 清国留学生向きに編纂され、不適用な部分を調整する
2. 文法理論の説明ではなく、実用性を中心とする
3. 三矢重松、清水平一郎の「前提法」（動詞変化—仮定前提法・連用法・中止法・終止法・連体法・確定前提法・命令法）を踏襲する
4. 文語と口語を並行する
5. 解説は主に日本語で行う

#### 4.3.2 内容

本文典の内容は書名通りで、「言文対照」即ち文言と口語両者を同様に重んずる上に、中国語の翻訳も加える。例えば、

文語体：馬走ル 【馬走】

口語体：馬ガ走ル 馬ガ走りマス

本文典は三編に分けられ、品詞概説・文章概説と品詞詳説から成る。一編ごとに練習問題を添付している。三編の内容、編纂する方法などに関しては、例言に次のような紹介文がある、

文法ヲ学ブ者ハ、第一品詞ノ區別ト其ノ用法ノ大體トヲ、識ルヲ要ス。故ニ第一編ニ於テ、品詞ノ名目ト效用トノ大要ヲ説キ、且最主要ノ助動詞ト動詞トヲ撰ビテ、一覽表ト為シ、之ニ附説セ

リ。第二編ニ於テ、文章ノ佈置結構ト修飾法トノ大體ヲ説キ、以テ彼我文章法ノ異同ヲ比較セリ。第三編ニ於テハ、各品詞ノ性質、效用、變化、用例等ヲ説クコト、頗ル詳密ニシテ、凡現今世ニ行ル所ノ文法書中、説ク所ノ要項ハ、略網羅シ盡セリ<sup>168</sup>

これ以前に中国人によって編纂された教科書には、速成の主流に影響を受け、簡略に品詞を紹介することが一般的である。更にそれに言及しない教科書もある。松本は品詞の知識が第一の要務と考え、「概説」と「詳説」の二部分に分けられ、正確で系統的に日本語文法の基礎を導入しており、現代日本語教育する方法とすこぶる似ている。品詞概説の部分は、日本語の九品詞に対して簡単な説明を行う。説明には例語と中国語訳文を合わせる方法を取っている。第3版を例として、筆者は本文典に品詞及びその意味に対する説明を以下にまとめる、中には接頭語と接尾語は九品詞の範囲に収まらない。

名詞--有形ト無形トヲ論セズ、事物ノ名詞ヲ表ス詞ナリ  
代名詞--人及ビ事物ノ名稱ニ換ヘテ、用フル詞ナリ  
動詞--事物ノ動作及ビ有様ヲ表ス詞ナリ  
形容詞--事物ノ形状、性質、美丑等ヲ表ス詞ナリ  
助動詞--動詞及ビ他ノ助動詞等ノシタニ添ヒテ、其ノ完カラザル所ヲ補ヒ助クル詞ナリ  
助詞--此ノ詞ト他ノ詞トノ關係ヲ表ス詞ナリ  
副詞--動詞、形容詞及ビ他ノ副詞ノ上ニ添ヒテ、其ノ意義ヲ限定スル詞ナリ  
接續詞--甲乙ノ語句及ビ文章ヲ接續スル詞ナリ  
感歎詞--喜怒哀樂等ノ感情ノ為ニ發出スル聲音ナリ  
接頭詞、接尾詞--熟語ヲ合成スルノミ

上述のように、各版本の内容は異なる部分がある。例えば、第23版で「七品詞二助辞」の内容を添加したが、第38版ではこの部分を取り外した。助詞に関する内容は第23版で例文が増え、文末のヤ、カ、

---

<sup>168</sup> 上掲、第8頁。

ナ三者は感嘆を表すことを指摘した。しかし、第 38 版には口語部分の説明を簡略化にして、転換を表す部分の文字が削除された。そして、第 3 版には接頭語と接尾語に対して説明がなく例語のみであるが、第 23 版には係る定義を追加し<sup>169</sup>、第 38 版には例語を調整する。更に、第 23 版と第 38 版は固有の日本語形容詞と中国語形容詞に関する部分を省略する。

本文典は品詞概説章節の後、一覧表を添付された。各品詞の用法などの内容を一目瞭然にまとめられた。版本により表の内容も変わっており、それは以下のようにまとめられる。

表 4-3 版本により品詞一覧表における変化

内容	第 3 版	第 23 版	第 38 版
表一	ザリ、ケラ、ラ、リ、 レ框無し	有り	有り
	主要之助動詞一覧表	主要之文語助動詞一覧表	同第 23 版
	使性、被性、能性「因用法為敬性」	使役、被役、可能	同第 23 版
	否定は「直説否定」と「推量否定(恐不、欲不)」二種類に分けられた	「否定」と「推量否定(恐不)」二種類に分けられた	同第 23 版
	「未来」の分類がある	無し	無し
表二	ノ、ガ：持格、連結名詞代名詞之辭	領格、連結兩個以上之名詞或代名詞而表領有意之辭	定限格、連結名詞或代名詞而表定限意之辭
	ヲ：示目的之辭	示他動詞目的之辭	同第 23 版
	接續之助詞“ニ、ガ”	變為ニ、モ、ガ	同第 23 版
	テ：表一事終于他事之辭	表一事終而移於他事又接續	同第 23 版

<sup>169</sup> 第 23 版、第 9-10 頁。

	無ヤヨ	含感歎情而懸乎之辭	同第 23 版
	無カナ	添于諸種感情之辭	同第 23 版

表 4-3 から見ると、本文典の重版はただの翻刻ではなく、日本語文法の発展と変化に従い、内容とその説明を調整して編纂する。例えば「ノ、ガ」に関する紹介については明らかな変化が見える。そして、著者は「備考」を追加して、文法の変化を説明する<sup>170</sup>。

七品詞二助辭備考 以上ノ九品詞中、助詞及ビ助動詞ハ、他ノ品詞ニ隸屬シテ、其ノ意義ヲ補助スルノモノニテ。獨立ノ效用ヲ有セズ。故ニ又單語ヲ分ツテ、七品詞二助辭ト為ス者アリ<sup>171</sup>。

代名詞 備考一 等達共方ハ、複數ヲ表ス接尾語ナリ

備考二 他稱ハ其ノ人ノ距離ノ遠近ニ因ツテ、是其ノ彼ヲ用フルコト、與次ノ指示代名詞ト相同シ。此ノ場合ニハ、人ヲ以テ事物ノ如ク見做セルナリ。

備考三 対称ト他稱ハ、尊卑ノ區別ニ因リ、対称ニハ尊稱（アナタ、アナタ様）ヲ用フルドモ、他稱ニハ卑稱（誰）ヲ用フルコトアリ。或ハ有對稱ニハ卑稱（御前、貴様）ヲ用フルドモ、他稱ニハ卑稱（ドナタ、ドナタ様）ヲ用フルコトアリ。最留意ヲ要ス。<sup>172</sup>

サ変備考 漢字音ノ動詞、文語ニテハ悉皆サ行変格ニ活用スレドモ、口語ニテハサ行上一段ニモ活用スル者アリ。例ヘバ煎ジル、案ジル、封ジル、判ジルノゴドキ者、是レナリ<sup>173</sup>。

<sup>170</sup> 第 38 版には備考の内容は修正するところがないため、ここで第 23 版を基準として、読みに便利するために、品詞詳説の備考共に並べる。

<sup>171</sup> 第 23 版、第 8 頁。

<sup>172</sup> 上掲、第 56-57 頁。

<sup>173</sup> 上掲、第 102 頁。

形容詞 備考一 漢字ニナリ或ハタリヲ添フル者、必ズシモ形容詞ニ非ズ。

備考二 ナリ活用及ビタリ活用ハ、其ノ活用ノ状、動詞ノ类ラ変ニ似タル者ナレバ、其ノ接続法モ、略ラ変ニ同ジ<sup>174</sup>。

助動詞 助動詞ノ法、及ビ他語ニ接続スル方法ハ、其ノ活用ノ動詞ニ類スル者ハ、略動詞ト相同ジク、又其ノ活用ノ形容詞ニ類スル者ハ、略形容詞ト相同ジキ者ナリ。<sup>175</sup>

サ行変格第一変化ヨリ、使役ノサスニ連続スル時ハ、動詞ノ語尾ト使役ノ頭部ト、縮約スルコト常ナリ。例ヘバ注意セサス、研究セサスノ縮約シテ注意サス、研究サスト為ルガ如シ<sup>176</sup>。

近文及ビ口語ニテハ、サ変ノ第一変化ヨリラルニ接続スル時、動詞ノ語尾トラルノ頭部ト、縮約スルヲ常トス。例ヘバ注意セラル、訓誨セラルノ、縮約シテ注意サル、訓誨サルト為ルガゴトシ。<sup>177</sup>

以上の備考からは、内容の増減が見える。最新の日本語文法知識を中国人学習者に教授するようになるために調整し、著者が中国人留学生の日本語教育に対する真剣な態度が見られ、一方、当時日本語と中国語の文法システムの変化も見て取ることができる。以前の教科書に比べると、本文典最も重要な特徴は、文構造の視点から詳しく分析・説明することである。文章概説の部分には、日本語の術語を使い、シンタックスの角度から説明し、文語体と口語体の例文をそれぞれ並べ、中国語と日本語の区別も行う。品詞詳説には構文から各品詞の使い方

---

<sup>174</sup> 上掲、第 188 頁。

<sup>175</sup> 上掲、第 192 頁。

<sup>176</sup> 上掲、第 195 頁。

<sup>177</sup> 上掲、第 208 頁。

を分析して、構文から着手することは本文典の文法教育の突発点とも言える。これは文法の教育方法における進歩しているところである。

文の構造を主語、客語<sup>178</sup>、補足語、説明語<sup>179</sup>と修飾語を五つの部分に分けられ、当時「述語」の名称がまだ成立していないため、この術語が本文典には現れない。そして、主語と説明語は文の最も基本的な部分である。主語は文章の主題であり、文の最初に置かれ、主に名詞と代名詞からなっている。代名詞が主語とする場合、名詞の使い方と同じである。例えば、

名詞者、帶助詞ガ、ノ、ハ、モ等于其下、則為主語（但ハ、モ者、亦有添于他語）

説明語は文の最後に置かれ、主に動詞と形容詞から構成された。名詞も説明語になることができる。動詞の性質の違いにより、文章の構造も変化があることを、著者は指摘した。自動詞は説明語とする場合、補足語は「名詞、代名詞系助詞ニヘトヨリカラマデ」を下に綴り、説明語を接続して、常に主語と説明語の間に置くことが規則である。これらの助詞は文と文章の二次格を提示し、一つの動作はどこで発生することと、発生する範囲などの内容と関連する。例えば、

文章体：友人上海へ行ク  
（補足語）

口語体：友人ガ上海ニ行ク

他動詞は説明語とする場合、客語が「名詞、代名詞系助詞ヲ」をその下に綴り、説明語と接続し、常に説明語の前に置かれ、中国語の客語の位置と逆さまになる。これは主格（一次格ガ）と目的格（二次格ヲ）に対する区別であり、日本語において両者の位置を逆さまにすることができる。例えば、

文章体：太郎書ヲ次郎ニ寄ス

太郎次郎ニ書ヲ寄ス

---

<sup>178</sup> 即ち目的語である。

<sup>179</sup> 即ち述語である。

(客語) (補足語)                      (補足語) (客語)

口語体：太郎ガ手紙ヲ次郎ニ寄セル                      …………… 寄セマス

文の構成部分が多ければ多いほど文が複雑になる。更に、中国語と日本語の比較に関しては、位置と順序の差別が出る。松本は本文典でそれに対して説明しており、それを以下の表にまとめた、

表 4-4 中国語と日本語の位置と順序の差異

	日本語	中国語
形容詞は説明語とする	主語+説明語	主語+説明語
名詞は説明語とする	主語+説明語	主語+説明語
自動詞	主語+説明語	主語+説明語
	主語+補足語+説明語	主語+説明語+ 補足語
他動詞	主語+客語+説明語	主語+説明語+客語
	主語+客語+補足語+説明語	主語+説明語+客語+補足語
	主語+補足語+客語+説明語	

修飾語は必ず修飾される語彙の前に置かなければならない。即ち、文で「修飾語+主語」は主部となり、「修飾語+客語」は客部となり、「修飾語+補足語」は補足部となる。この三者の組み合わせは複雑な文の構成となる。位置により、以下の二つの種類に分けた、

1. 主語、客語及び補足語に添付される修飾語
  - a) 形容詞は修飾語とする（修飾主語、補足語、客語）
  - b) 名詞及代名詞は修飾語とする（修飾主語、客語及補助語）
  - c) 動詞は修飾語とする（修飾主語、客語及補助語）
2. 説明語に添付される修飾語：
  - a) 説明語は動詞や形容詞からなるものは、副詞で修飾する

b) 名詞は説明語とする場合、その修飾語は主語及び客語の修飾語と同じである

c) 修飾語帯に修飾語を綴る

著者は中日両言語の差異を比較して文の構造を分析し、両者の異なりは日本語で文の構成の位置が逆さまにすることが可能であるとした。当時、日本語の語順は自由である説が一般的に広がっていたが、その原因は日本語に対する優位感である。しかし、日本語で助詞により文の構成が判断できることを、松本は本文典で指摘した。そして、逆さまにすることも語勢或いは雅馴語調を強調するためであることも指摘した。

第三編の品詞詳説は第一編品詞概説に基づき、日本語における九つの品詞及接頭語と接尾語に対して説明を行う。概念・使い方と簡単な文法現象まで詳しく解説し、更に、多数の例文も合わせる。第3版と比べると、第23版と第38版には動詞部分の内容に対して、二つの変更がある。一つは「名詞法」に関する内容を追加して、例文を通じて動詞の名詞化を説明する。しかし、定義は簡単であり、用法による分類もしない。例えば「夜明ケ、シワザ、(牡丹ノ)開キ」などを動詞の変化として収録される。もう一つは「中止法」に対して詳しく説明することである。用言中止形の使い方を紹介する。

名詞法ハ、動詞ノ轉ジテ、名詞ト成ルモノニテ、第二變化ヲ用フ。而シテ其ノ中ニ單獨ニテ名詞ニ為ル者アリ、又他語ト結合シテ熟語名詞ヲ作ル者アリ。<sup>180</sup>

中止法ハ文章ノ中間ニ在リテ、暫ク其ノ言ハント欲スル所ヲ中止シテ、下文ニ移リ、下文ノ動詞形容詞及ビ助動詞ノ法ニ應ズル者ナリ。故ニ下文ノ動詞形容詞等ノ法、若シ終止法ナル時ハ、上文ノ中止法モ之ニ照應シテ終止法ノ意義ヲ為シ、下文ノ法若シ連體法命令法等ノ場合ニハ、上文ノ法モ、亦為連體法命令法等ノ意

---

<sup>180</sup> 第23版、第122頁。

義ヲ為ル者アリ。<sup>181</sup>

第 23 版と 38 版では「轉成感歎詞」の項目が増え、副詞や代名詞が呼格とする場合を紹介する。例えば、「コレ、ソレ、アレ、ドレ、サテ、若シ」などがある。

轉成感歎詞：感歎詞ニモ他語ヨリ轉成スル者有リ。口語ニ於テハ、代名詞、副詞、接續詞等ヨリ轉スル者、殊ニ多シ……但此等ノ感歎詞皆漢文譯シ難シ。<sup>182</sup>

全ての品詞の中でも、中国人留学生に対する難点は副詞である。松本は教授する過程で、副詞の問題を直面する可能性があるとし、本文典を編纂する際、わざと副詞に対して、実用的な注意点を提出した。これも当時の教科書において初めてのことである。

1. 副詞ハ限定セラル、語ノ直上ニ置クヲ、本則トス。然レドモ、習慣ニ因リ他語ヲ隔ツル者アリ
2. 副詞ノ位置ニ因ツテ、意義ニ異同ヲ生ジ若クハ、被限定語ノ不明ニ屬スル者アリ
3. 全句全文ニ繋ル者アリ
4. 漢文ヲ和譯スル時副詞ノ位置ニ因リテ、助詞ヲ添フルヲ要ス
5. 同一ノ語モ、用法ニ因ツテ、副詞トモ、名詞或ハ代名詞トモ為ル、例えば、昔男アリケリ（副詞ノ例）、昔ヲ偲ブ（名詞或ハ代名詞ノ例）
6. 呼應ニ一定ノ規則アリ<sup>183</sup>

前述のように、1907 年章士釗により「副詞」を術語として中国の文法に導入するため、本文典が出版される 1904 年には、中国語でこの術語がまだ固定されていなかった。初期日本の文法書、例えば大槻文彦（1891）の『語法指南』、落合直文と小中村義象共著（1893）の『中等

---

<sup>181</sup> 上掲、第 144 頁。

<sup>182</sup> 上掲、第 429 頁。

<sup>183</sup> 第 3 版、第 364－369 頁。

教育日本文典』では、すでに副詞の意義と使い方に対する説明を収録している。上述通り、1900年出版された『東語正規』の著者唐寶鏐と戢翼翬は、二人とも日本で日本語教育を受けたため、「副詞」の概念をそのまま自分の教科書に引用した。しかし、副詞に関する内容も不完全であり、「用於動詞形容詞之上、以限制其語意之詞」という副詞の機能のみ紹介したが、副詞の使い方と意義に対する考察がなく、例文も多くない。

そのため、本文典の初版が出版された時期、中国人に対して、「副詞」はまだ明らかにならない外来概念である。本文典の重版する途中は、中国語の文法も模索の段階である。本文典がこの術語の導入に対して、どのような影響を及ぼしたか分からないが、推測できることは、本文典を通じて日本語文法を学習する中国留学生たちは、『東語正規』の著者と同じ、書を著し説を立てる時「副詞」という術語と概念の導入に抵抗がない。

著者の副詞に対する定義は「副詞ハ、動詞形容詞及ビ他ノ副詞ノ上ニ添ヒテ、其ノ意義ヲ限定スル詞」<sup>184</sup>である。本然副詞、轉成副詞と疊語三種類に分けた。副詞を分類する文法書は本文典以前もあるが、定義や説明などは著者の日本語知識により、品質がまちまちである。松本は両言語の集大成的な学者であるため、本文典の分類と説明は当時、他の教科書より詳しくて正確性も高い。

本来、副詞とは「造語ノ初ヨリ、副詞タルモノ」であり、例えば「必、最、皆」などがある。そして轉成副詞は「諸種ノ語ヨリ、ル者、頗ル多シ」であり、形容詞「ク、シク、ナリ、タリ活用ノ第二変化、名詞、代名詞、自動詞が「ニテハ」が付く場合などである。例えば、「悪シク、遙カニ、如トシテ、若シ、案ズルニ」などがある。疊語は本然或いは轉成を問わず、意義を強調するための存在であり、数が多い。例えば「泣ク泣ク、ピカピカ、ドンドン」などがある。副詞の使い方に対して、本文典は例文を通じて、特に中国語に翻訳する時の位置問題を説明した。前述のように、当時中国人の日本語学習は翻訳が主な目的であるから、副詞が難点のため翻訳にも問題が出やすい部分と推測でき、本文典もそれを配慮したのであろう。

---

<sup>184</sup> 第3版、品詞概説、第5頁。

……然レドモ漢文ニ譯スルトキハ、往往原文ノ位置ヲ、変ズルガ故ニ、形容詞ト區別スルコト、能ハザル者アリ。他無シ彼此ノ文章ノ構成法ヲ異ニスルヲ、以テナリ。故ニ因ツテ、日文ノ品詞ヲ、區別ス可カラズ。学者、宜シク注意ス可キナリ<sup>185</sup>

そして、本文典の内容調整は全般的にあるが、主に品詞詳説に集中する。まず、筆者が実際に閲覧した三版本の差別を以下の表にまとめる。

表 4-5 三版本の内容差異一覧表

内容	第 3 版	第 23 版	第 38 版
動詞	語根と語尾に言及する	1. 「人死」の例を「花开」に変わり、それを通じて「咲く」の語尾変化と接続を説明する 2. 動詞語形ヲは変化を表し、スルは理由を表すことを指摘した 3. 上二段動詞命名に対する説明	同第 23 版
	文章概説で自他動詞を説明する	動詞分類で自他動詞を説明する	同第 23 版
サ行變格	1. 動詞と結び熟語動詞になる 2. 漢語と結び熟語動詞になる	1. 名詞と結び熟語動詞になる 2. 自動詞、形容詞から転成する名詞とサ変の結び 3. 漢字音の語と結ぶ	同第 23 版
	音便に言及す	音便を詳細に述べる上、練	同第 23 版

<sup>185</sup> 上掲、品詞詳説、第 359 頁。

	る	習問題も増加する	
表三		文語のサ行変格には口語のサ行上一段になるものがあり、 上一段＋サ行（口語）	内容は第23版と同じ、新たな組版をする。読みに便利のため表を最後に移動する。
表五	第三変化 逆態 假定前提法（トモ）	1. 第二変化に順態假定前提法（タラ、ト）を増やす 2. 第四変化に順態假定前提法（ナラ）及び順態確定前提法（カラ）を増やす	同第23版
	連用法と命令法の間には中止法を置く	1. 第六変化は命令法であり、「東京語命令法」項目を増やす 2. 中止法を最後に移動する 3. 順態確定前提法及び中止法に対する説明は更に詳しくなる	同第23版
形容詞	表がない	將第3版内容整理為文語和口語二表放置於最前	同第23版
	1. 形容動詞の分類はない、形容詞に属する 2. カリ活用に関する定義	同第3版	1. 「形容動詞」の分類がある 2. カリ活用に対

	がない		する定義がある
助動詞 ズノ法 前提法	戦争に関する 例文が三つあ る	戦争に関する例文を入れ替 わり、日常生活の内容にな る。例えば野球などがある。	同第 23 版
ザリ		説明を簡化する	同第 23 版
否定助 動詞	マジ、ジ	順序を調整し、「マジ、ジ」 がない	同第 23 版
推量否 定	この分類無し	マジ、ジ	同第 23 版
推量	「ム」がない	「ム」があり	同第 23 版
未来助 動詞	ム	ム、ベシ	同第 23 版
時態	過去、現在、未 来三つの時態	過去、現在、未来、不定時 四つの時態	同第 23 版
未来之 時		例文を増やす	同第 23 版
歴史的 現在	この分類無し	ある	同第 23 版
助詞	四種類に分け る	1. 五種類に分けた 2. 第二種類の順序を調整 する 3. 第三種類で「モ、テハ、 テモ」を増やす	同第 23 版
未来助 動詞表		カ、クベク	同第 23 版
欧文翻 譯	戦争に関する 例文がある	戦争に関する例文を入れ替 わる	同第 23 版
助詞ノ ガ	1. 持格 2. 例文に現れ た「ド、サテ」	1. 領格 2. 関連の例文とその説明 を取り消した	同第 23 版

	に対する説明がある		
助詞ニ		「累疊同一動詞」を増やす用法を強調する	同第 23 版
助詞		内容は目次と異なり、更に以下の内容を増やした： 「12.ナモヤヨ 13.カ、カナ、カモ 14.ガ、ガモ、ガナ 15.ナム、バヤ 16.カシ」	同第 23 版
感歎詞		「ナ、モ、ヤヨ、ハ、カ、カナ、カモ、ガ、ガモ、ガナ、ナム、カシ」などがない	同第 23 版

表 4-5 から見ると、重版する途中で、著者が日本語文法の変化に応じて、中国人学習者の特徴に対して、最新の文法知識を導入していることがわかる。そして著者も中国人学生の民族感情を配慮し、戦争に関する例文を取り消し、日常生活の内容に変更した。

以前の教科書と比べると、本文典の重版時間が最も長く、日本語文法の変化とシステムの成立過程が見られる。著者は重版の内容を、日本語文法の変化に従い修正を行った。当時、他の教科書ではこうした特徴が見られない。最も典型的な例は、本文典の第 38 版で「形容動詞」の分類を増やすことである。周知のように、現代日本語における「形容動詞」の概念は、1904 年に芳賀矢一の『中等教科明治文典』で初めて提出された。故に、本文典の第 3 版と第 23 版にはこの分類が分けられなかった。1935 年にはすでに「形容動詞」を品詞分類に収まる橋本文法は大体成立し、その後の第 38 版にこの分類を増やすことも道理である。しかし、本文典では形容動詞の定義に関する内容がなく、活用のみが説明された。活用に関する内容には、カリ活用（カリ活用ト推量助動詞トノ接続、カリ活用ト過去助動詞トノ接続、カリ活用ト否定助動詞トノ接続などを含める）、ナリ活用（ナリ活用ノ終止法、ナリ活用ノ連体法、ナリ活用ノ命令法、ナリ活用ノ副詞法、ナリ活用ノ中

止法、ナリ活用ノ前提法などを含める)、及びタリ活用(タリ活用ノ語尾変化ト其ノ法、タリ活用ハ皆漢語ヨリ転成スル形容動詞ナリなどを含まれている。更に、「ナリ活用ノ前提法」は順態仮定前提法、逆態仮定前提法、順態確定前提法、逆態確定前提法四種類に分けられる。そして、最後に二つの備考がある。

備考一 漢字ニナリ或ハタリヲ添フル者、必ズシモ形容動詞ニ非ズ

備考二 ナリ活用及ビタリ活用ハ、其ノ活用ノ状、動詞ノラ変ニ似タル者ナレバ、故其ノ接続法モ略ラ変ニ同ジ<sup>186</sup>

本文典が出版される前に、中国人によって編纂され中国で出版された日本語文法教科書もあったが、内容と教育方法から見ると、すべて日本人学生向けのものである。中国人のために編纂した本文典は、当時の中国人留学生に対する重要な文法教科書である。著者は現場での教授する経験に基づいて、清国学生に適応する教育方法をまとめていた。文の構成法を含む日本言語学の知識を系統的に導入した。出版した初期、日中両言語の文法はまだ様々な議論がある時代であるが、文の成分から分析し、述語を使って説明する日本語文法の教育方法が清国留学生の目の前に現れた。これは中国語文法に対しても、非常に参考になる。

本書の重版は単純に翻刻ではないことは、清末の時期全体においてもめったに見られないことである。当時有名な言語学学者の意見を参考にして、教科書の内容に対して調整と修正を行い、文法専門家に校訂され、重版の水準と進歩性を保証する。ここには最新の日本語文法知識を清国学生に伝えるだけでなく、中国語と日本語の文法システムの変化も見えて取ることができる。他の教科書と比べると、本文典は清国留学生の学習する難点に対して、重点的に説明し、教育方法も後の中国人による編纂される教科書に影響を与えた。

---

<sup>186</sup> 第 23 版、第 187-188 頁。

#### 4.4 本章のまとめ

上述のように、日本語文法学習は、清末の時代に発展する過程が見られる。当時の中日両言語の文法システムはまだ完成しなかった。さらに中国人が完全に日本語を外国語として受け入れていなかった。この二冊の教科書の重版における変化から見ると、中国人が日本語文法に対する学習は二つの種類に分けることができる。

一つは、実用性に基づく文法学習である。当時、日本書籍を翻訳するための日本語学習は、文法より語彙の把握が重視され、日本語の漢字を通じて翻訳の目的が達成できると思われていた。しかし、『東語完璧』のような会話教科書においては、文法の問題に直面しなければならない。こうした明確な目的を持つ文法学習は、複雑な説明が必要ではなく、短時間で学習者が確実に基本的な会話能力を把握するために、中国人学習者の習慣にあわせて、文法概念を簡明に或いは曖昧に解説するようになった。

もう一つは、系統的で科学的に日本語の文法を学習するものである。松本亀次郎の教科書は、こうした目的で編纂されたものである。重版における内容の変化から、日本語の文法システムがしだいに成立する過程が明らかに見える。そして、清代留学生専門の日本語教師により編纂されたことは教科書の正確さと権威が保証できる。そこで、中国人が日本語文法の学習において、現れた問題を見られるだけでなく、中国人が日本語に対する観念と受容する程度を反映している。

清末における日本語学習する過程で、日本語を「方言」と見た段階から、「欲学他邦之語、口能語之、耳能聽之者、須先知道其国語之構造（他国の言語を習い、話す・聞くことができるようにしたら、その国語の構造を先に理解しなければならない）」<sup>187</sup>の認識を形成した。この過程は、日本語文法が中国語文法に対する影響の基礎を定めた。

---

<sup>187</sup> 松下第三郎（1906）『漢訳日語階梯』、誠之堂書房、序言。

## 第五章 辞書と奇字解類資料に対する考察

### 5.1 清末における日本語辞書

外国語を学習するにあたり、特に自己学習において、辞書はいつの時代でも欠かせない存在である。中国では昔から「字書」が一般的であり、「辞書」がなかった。清末の宣教師たちは中国語を習うために、英漢辞典を編纂した。伝統的な「字典」や「韻府」の名を付けたが<sup>188</sup>、辞典の形式が採用され、中国人の外国語学習にとっても効果的な工具書である。さらに日本留学と日本語学習のブームが起きて以降、教科書だけでなく、日本語辞書に対する需要も無視できなくなった。しかし、日本語の受け入れや、外国語としての学習には一定程度の時間や過程を必要とし、辞書を出版するにしても、教科書より多くの時間が必要となる。

清末の中国人向け日本語教科書には、豊富な語彙集が付けられ、単語帳の形式を取ることから、辞書機能も期待される。一方、日本語の正式な辞書は、清末全体から見ると、数も水準も西洋語辞典に比べるべくもない。教科書が 100 冊以上出版されたのに対し、1912 年<sup>189</sup>までに出版された日本語辞書は以下の 14 冊のみである<sup>190</sup>。

表 5-1 1912 年まで出版された日本語辞書一覧表

書名	出版年	編纂者	出版社
『新編日本語言集全漢訳日本新辞典合璧』	1902	王	不明
『漢訳日本辞典』	1905	東亜語学研究会	吉川弘文館
『日華字典』	1905	善隣書店	文求堂
『日漢辞彙』	1905	石山福治	南江堂

<sup>188</sup> 沈国威（2008）「日漢辞典的黎明期」、『或問』15号、第84頁。

<sup>189</sup> 本文は1912年（中華民国建国）までに出版された辞書を対象として考察したい。

<sup>190</sup> 沈国威の「關於和文奇字解類資料」を参考、台湾で出版された辞書を除く。

『標品字典』	1906	黄廣	清国留学生会館
『東語異同辨』	1906	張毓靈	春清堂書店
『日語新辞林』	1906	日清語学会	富山房・文会堂
『漢訳日語大辞典』	1907	新智社	上海新智社東京分局
『日華新辞典』	1907	松平康国、牧野謙次郎	三省堂
『新輯中東字典』	1907	東文学社	不明
『普通・専門科学日語辞典』	1908	司克熙、歐陽啓勳	不明
『東中大辞典』	1908	不明	作新社
『日本読書作文辞典』	1909	難波常雄	東方社
『同文新字典』	1909	漢字統一會	泰東同文局

ところで、当時「同文」の日本語に対する認識により、漢字を見れば語彙の意味が推測でき、助詞による中国式の読み方に従えば、日本語の文章が読めるということは一般常識であった。速成教授が主流である日本語教育では、辞書も短時間で翻訳するためのものになった。伝統的な辞書の編纂は、両国言語に関する言語学の知識が必要である。『東中大辞典』の「緒言」では、辞書を二種類に分け、辞書の基本形式と作用を指摘している。

凡外国語字典（或辞典）可分為二種。一則以本国語注外国語者。此種字典、其目的在使讀外国書者、檢出不解之語、而查其適合本国何語、故必列外国語於前、而置本国語於後。一則以外国語解本国語者。此種字典、其目的在使学者知本国某語當外国何語、故必列本国語于前、而置外国語于後。<sup>191</sup>

（外国語字典或いは辞典は二種類に分けることができる。一つは、母国語で外国語を注釈するものである。この種の字典は、外国の書籍を読む人に、分からない単語が母国語ではどの単語に相当するかを調べさせることが検出する目的である。そのた

<sup>191</sup> 『東中大辞典』（1908）作新社、緒言、第4頁。

め、外国語を前に配列し、母国語を後に置く。一つは、外国語で母本国語を解説するものである。この種の字典は、学習者に母国語のある単語が外国語のどの単語に相当するかを分らせることが目的である。そのため、必ず母国語を前に配列し置き、外国語を後ろに置く。)

同じく『東中大辞典』の「緒言」には、「辞典為啓迪智識之利器（辞典は知識を啓発する利器である）」<sup>192</sup>とも書いてある。言語を学習する道具になぜ知識を啓発する作用があるかと言えば、当時の中国人にとって、外国語の書籍を通じて新たな知識を導入する視点からこのように述べたのだろう。

本節では、表 5-1 の辞書に対して解題を行った上で、中国語を学習する日本人向けの辞書である『日華字典』と『日漢辞彙』について簡単に説明する。

#### ① 『新編日本語言集全漢訳日本新辞典合璧』

本書は管見の限り最初の漢訳日本辞典である。東京都立中央図書館実藤文庫所蔵。石版印刷で、縦 22cm、横 15cm、出版社不明、合計 320 頁。序言に「明治三十五年」とあることから 1902 年に出版されたものと推測される。日清戦争が終わってから七年間で日本語の教科書は 20 冊以上が出版され、本書は最初の中国人学習者向けの「辞典」の名を冠する本である。

しかし、「辞典」の名称が付されているが、辞典の内容は 80 頁のみである。他は、「日本字母」7 頁、「単語部」二篇合わせて 72 頁、「会話部」80 頁、「新體漢訳和文」33 頁、「日本文法舉隅」10 頁から構成されている。末尾に「日本新書紹介目録」20 頁が附録として付されている。この割合から見ると、本書は正式な辞典とは言えず、「辞典を含める教科書」と言ってよい。本稿では辞典以外の内容に概説を加えた上で、辞典の内容に関して考察する。

---

<sup>192</sup> 上掲、第 5 頁。

序言は「日本高等学校教員和田正太郎」により書かれた。序言の内容により、本書の著者は浙水の「王」という中国人であり、既に日本に何年間遊学した人物であった。冒頭の「同文」、「方言」、「和文奇字」等の表現から見れば、著者は日本語に対して正確な認識を持っていたとは言えない。中国人がこのような認識を持つことは不自然ではないが、序文を書かれるのは日本人であるため、中国人の戦敗後の感情に配慮してのことであろう。ちなみに、本書にある「奇字」という呼び方は、清末における教科書でより早く現れたものである。

そして、戦敗によって、清代政府は日本語学習を提唱し、日本語学校を設立し、訳本などを大量に必要とした状況も、序言で「蓋欲求進歩之速、不得不以我国文字為先導也（速く進歩しようとしたら、我が国の文字を先導としなければならない）」の文から確認できる。日本語は翻訳することだけを考えれば簡単であり、語彙の位置の変化くらい把握するとできる。文法説明は「日本文法舉隅」にまとめ、和文の訳例は「新體漢訳和文」に収録された。このような意識も速成教育を主流とする時代の産物であり、本書もその趣旨に従い編纂されたものである。しかし、話すことは翻訳と異なり、一定の規則を持っている。本書を用いれば、三ヶ月で日本人と会話することができ、日本語の書籍を読むにも差し支えない程度にまで学習内容が到達できるという説明から、『和文漢読法』の影響が見える。

本書の語彙収録部分は「単語編」と「辞書」の二部からなり、前者はさらに二編に分けられた。第一編は天文、地理、時令、人倫、身体、宮室、人物、職業、家具、化粧道具、食事道具、文具、農工商具、服飾、食事、果物、野菜、草木、飛禽、走獣、魚貝、昆虫、金石類、舟車、彩色、薬材、貿易品、軍語の28類に分けられている。第二編は五つの節に分けられ、合計2117語が収録されている。中には「コップ」、「シャツ」のような外来語も収録され、「カヒー入（イン）」のような混種語もあり、「人ニ催促スル」のような短文も含まれている。この部分は漢字と

片仮名で表記され、一部の語彙には中国語訳を下に記し、一般的な語彙の教科書と同じ形式であり、辞書の役割も期待できた。

日本語学習者には不可欠な工具書である『帝国大辞典』と『言海』の両辞典を参照して、「和文奇字」を翻訳し、注釈も付し、辞書の機能を加えた。漢訳日本新辞典に収録した語彙は五十音順で並べられ、約 3600 語が収録された。平仮名で表記され、語彙の下に括弧の中に漢字を表し、そして品詞分類を示し、大部分は中国語訳文がない。品詞分類は後の「日本文法舉隅」と同じで、名詞、代名詞、数詞、動詞、形容詞、副詞、接続詞、感歎詞、助詞である。例を以下に挙げる。

いや（否） 感歎詞  
あがりたるよ（上世） 文句  
あまり（餘） 名詞 接詞 副詞同

中国語の解釈を付すものは 446 語あり、動詞・名詞の数が多い。動詞は複合動詞が多数であり、名詞は外国事情、例えば地名や食品名が多い。例、

いりこむ（入込） 入也又作混和解 動詞ま行四段  
さが（嵯峨）日本之地名 名詞  
さくらがり（桜狩）観櫻花者 名詞  
ひきかふ（引替） 交換也 動詞は行下二段

しかし、「漢訳辞典」の名を冠しているにもかかわらず、中国語の訳語は一割に過ぎない。全体的に、同形語或いは漢字から意味を推測できる語彙には訳語を付けないことは何ら不思議ではない。例えば「蚊」、「河」、「浩然」、「驚」などである。しかし、「面白」、「空手」などのように、意味上の誤解を生じやすい語彙には訳語が付けられていない。他には、「化学」、「気象学」、「霍亂」のような語彙にも訳語がない。これは著者の錯誤である可能性があるが、知識不足も原因の一つであると考えられる。

中国人が編纂した最初の辞典として、80 頁にまとめられた内容から中国人知識人の日本語に対する認識を垣間見ることができる。序言を書いた日本人教員は、恐らく中国人の日本語知識の不足を考え、「方言」のような文字を書いたのであろう。漢字を使って日本語を学習する上で都合がよいこともある。しかし、ある意味では漢字への頼りは障害にもなる。『和文漢読法』が提唱された速成法以外に、日本語語彙の「奇字」という概念も中国に広がった。こんな環境で、漢訳が少ない「漢訳辞典」も意外ではない。さらに、短時間で翻訳することが最重要とされたため、翻訳例文の内容はもちろんのこと、附録の新書紹介も辞書の長さの四分の一を占める 20 頁がある。当然、清代政府は日本書籍の翻訳を提唱することにより、新しい知識を日本から導入することは知識人に使命感を与えとも言えるが、そして、中国人が短期間で日本語を習得して、日本に留学することは、政府機関、学校などのポストに就くための手段でもある。これに関しては、本書の序言にも以下のように言及した。

他日帰国後、上以輔朝廷振興庶政、中以廣益学校樂育英才、下焉者所足以改良百工事業、使清国日進文明<sup>193</sup>

（後日帰国してからは、優秀な者は朝廷を補佐して民政を盛んにする。中くらいの者は広く学校の益となり、優秀な人材を育てる。下の者は各種の事業を改良し、清国の文明を促進できる）

## ② 『漢訳日本辞典』

国立国会図書館所蔵。東亜語学研究会編纂。明治三十八年（1905）に吉川弘文館から出版。編纂者代表は既に中国語を習得した難波常雄である。序言はなく、凡例のみである。凡例 6 頁、「語法撮要」14 頁、本文 610 頁で、合計 630 頁の辞典である。凡例一によると、本辞典は清国の日本語学習者のために編纂され、古語、粗野な語彙、重要でない語などを除き、合計 23150

<sup>193</sup> 『新編日本語言集全漢訳日本新辞典合璧』序言第 3 頁。

語が収録された。黄彬の考察<sup>194</sup>によれば、本書の文法も『言海』を参考にし、中国人の日本語学習状況に鑑みて編纂されたものである。

此書、為清国学生学日語日文者蒐輯普通所用語言貳萬三千一百五十而一、夕漢譯之、古語鄙語不要緊者則缺如<sup>195</sup>

（この本は清国の日本語を学習する学生のために編纂されたものである。普通に使われた語、合計二万三千百五十語を収録、一々漢訳し、古語・粗語・重要でない語を収録しない。）

本辞典は五十音順に並べられ、単語は片仮名で表記され、単語の下に品詞分類、漢字、漢訳が書かれた。動詞と形容詞は口語と文語を区別して、口語は文語の下に置き、○で示す。◎は異音同義の語を示す。動詞や形容詞は全て「第三変化即終止法」で示す。外来語には「英語」の説明もある。以下に例を示す。

サブシ 形 ○□サブシイ〔淋シ〕寂寥也◎淋（サビ）シ  
サン 名〔産〕一（黒い点）婦生子也 二物生也 三其所生長也 四 生業也

○ース 物生也。生物也

ガラス 名 〔硝子〕玻璃也。（英語）◎ハリ。ピートロ

その他、本辞典の凡例では日本語の中に中国では一般的に使われない漢字と語彙があることも指摘している。

〔 〕内之字、普通所用之漢字也、其中、日本獨用之清国不用之、例如「相圖」「勘辨」「差支」「田植」「榊」「付込ム」等者

<sup>194</sup> 黄彬（2008）『關於漢譯日本詞典及其詞彙』中日研究生国際論壇 2008 漢語漢文化論叢第 232 頁、白帝社。

<sup>195</sup> 凡例、第 1 頁。

(〔 〕内の文字は、普通に使われる漢字であり、中には日本で特有するものであり、清国には使わない。例えば、「相圖」「勘辨」「差支」「田植」「櫛」「付込ム」などがある)

196

このような日本特有の語彙は 7422 語である<sup>197</sup>。管見の限り以下の 6 種類に分けられる。

1. 日本独自の漢字で表すもの。例えば、「袴」、「峠」など。
2. 同形異義語、二種類に分けられる。一つは、日本の文化、生活、風俗を表し、中国語では意味の通じない語彙である。中国人にとって、文字は障害にならないが、語義理解に困難があると推測できる。例えば「有平糖」、「十六夜」、「生人形」などである。もう一つは日中間で意味が異なる語彙。例えば、「生肝」、「生霊」、「意趣」などがある。
3. 漢字と仮名が混じる語。二種類に分けられる。一つは送り仮名が付された動詞、複合動詞である。例えば「生出ル」、「有付ク」、「祝フ」などである。もう一つは漢字と仮名の混ざった語である。例えば、「息ノ根」、「ウ冠」など、さらに「言フ甲斐無シ」のような短文もある。
4. 術語や新しい事物の名称。中国でまだ普及していない新しい知識、すなわち、法律、医学、植物学などの専門用語である。例えば「石綿」、「白粉花」、「起訴」、「結核」などである。特に「石綿」は「石絨也」、「起訴」は「起訟也。告状也」の中国語説明があるが、「白粉花」は「植物名」とだけ書かれた。恐らく、当時中国語で「紫茉莉」<sup>198</sup>の専用名称はまだ決められていなかった。そして、新名詞も含まれている。例えば、「有機物」、「改良」、「瓦斯」、「倶楽部」などである。

<sup>196</sup> 難波常雄 (1905)、『漢訳日本辞典』、第 4 頁。

<sup>197</sup> 二種類の表記を持つ語彙と読み方が異なる語彙は全て一回のみカウントした。

<sup>198</sup> 「白粉花」の学名。

5. 日本語文法用語。本辞典の「語法撮要」で使われた日本語の文法に関する語彙である。例えば、「名詞」、「自動詞」、「後詞」、「天爾乎波」などがある。
6. 編纂者が中国語に訳せない語彙。例えば、「砂蟲」の訳は「蟲名」とだけ書かれている。しかし中国語では「石蚕」という。日本と同じく釣り餌として使われる虫の名前であり、既に漢代の医書『名医別録』に収録されていた語彙である。同様に虫の名前「轡虫」は、中国語で「蟲名。聒々兒也」という説明があるが、これは明らかに編纂者のこれに関する知識が不足していたことを示している。

上述のように、編纂者が中国語を習得済みの日本人であって初めて、このように言語学的に区別ができる。「祝フ」、「幾ラ」のような、語尾で日本語と中国語の異同を示す。もちろん「怪我」のように中国人にとっての「奇字」という語彙にも注意させ、中国語で正確に「過失也」、「偶然受傷也」と翻訳された。当時、日本語を学習する中国人知識人は両言語の区別や日本語の語尾などに注目していたが、教科書を編纂する時に、これらの区別を明確にしたものは少ない。この点も、本辞典の特徴である。ところで、このように区別することは一体どんな基準を従うことも判断できない。「況ムヤ」、「憤ル」のような書き方や意味上に異同がある語彙を見逃して、「石垣」、「石崖」など中国語と同形同義の語彙も、同じく右に線を付けた。これは編纂者の過失か、中国語に関する知識不足によるものか判断し難いが、正確に両言語の語彙の異同を伝えようと試みたことだけは読み取れる。そして、術語に関する内容から、編纂者は中国の社会に詳しい人物であったと推測できる。

本辞典は伝統的な知識人が日本語に対する主観的な感情に囚われず、「同文」や「奇字」などの意識も一切無い、言語学の視点から日本語と中国語を捉え、日本語の習得に役に立つ辞典である。中国語を学習する日本人にはもちろん、当時の留学生たちに対しても、正確に日本語を認識できる工具書であった。

### ③ 『日華字典』

本辞典は慶応義塾大学図書館に所蔵され、既にデジタル公開されている。表紙裏に書かれた「大日本明治三十八年春刊行于東京」と、奥付に書いてある「明治三十八年三月十五日発行」の文字により、本書は 1905 年に出版されたことが分かる。そして、1910 年に重版された。序言、凡例などはない、辞書部分 320 頁と索引 54 頁、合計 374 頁である。善隣書院の編纂により、文求堂書店が発行した中日辞書で、本辞典はウェード式により配列されていることが特徴である。

周知のように、ウェード式は 19 世紀後半、イギリスのトーマス・ウェードの『語言自邇集』に記載されるローマ字表記法で、北京官話を表記対象として、その後ハーバード・ジャイルズにより修正し、1892 年に上海初版の『華英字典』で用いられ、1912 年民国が成立した後さらに広く普及された。本書が出版された 1906 年はちょうど、上海で開かれた「帝国郵電聯席会」において、中国地名のローマ字表記に対する基準は全てウェード式に統一した。ウェード式により「字典」を編纂するのは、恐らく著者が西洋言語の中国語教科書から中国語知識を習得した、或いは学習する時そういう書籍を参考したのであろう。これも筆者が着目する中日辞書で、最初にピンインが導入され、並べられたものである。ちなみに本書の索引部分は部首順である。

本字典は、合計 9246 文字が収録され、一頁が左右両列に分け、親字を左側に置き、右側で小さな 1・2・3・4 の数字で親字の音調を表し、多音の場合は音調の数字を並べる。右側は日本語で意味を説明し、漢字と片仮名で書かれた。その後ろ、他の読音を挙げられ、例語を加える場合もあり、「|」で親字に換わる。例えば、

側<sup>1</sup> 榜 (tse 聲調 4)<sup>4</sup>  
齊<sup>1・2</sup> | 心 協心ナリ (chi)  
察<sup>2</sup> 吟味スル、批評スル

管見の限り、本字典は最初の中日字典である。文字の語源を考証せず、意味の解説を中心とするものであり、さらに声調とウェード式で引くことから、本書が日本人の中国語学習者向けの実用的な字典と判断できる。ところで、当時アルファベットの表記方式は新しい事物であり、中国人が編纂した日本語教科書にローマ字表記を使用しないものはまだ少数である。そこで、ウェード式は恐らく伝統的な中国の知識人たちに対する挑戦であろう。一方、日本維新後に西洋知識を大量に受け入れ、このような形式で外国語を学習し、字典を編纂することは普遍的になりつつあった。そこで本字典は中国人学習者に対しどれほどの影響があったか推測できないが、重版されたことから一定の読者があったことがわかる。

#### ④ 『日漢辞彙』

本書は国立国会図書館に所蔵され、近代デジタルライブラリーから検索できる。15cmの一冊本である。表紙裏に「大日本明治三十八年夏刊行于東京」、奥付にも「明治三十八年六月八日発行」と書いてあることから、本書は1905年に出版され、序言はない。例言2頁、索引5頁、辞書部分と度量衡比較表334頁、英字（ウェード式）と片仮名対照表5頁、合計346頁である。編纂者は石山福治であり、南江堂と文求堂より共同刊行された。

日本語の語彙は平仮名で書かれ、下に漢字、品詞類と中国語訳文が配列される。中国語訳文の右側片仮名で発音を表記し、さらに凡例で本辞典の収録された綴りの「兒」と「子」及び過去を表す「了」を記号で区別する説明から見ると、本辞典は日本人の中国語学習者のために編纂されたものと判断できる。本辞典の品詞分類には、「活名」と「形動」がある。前者は動詞語尾変化による名詞化するものであり、後者はほとんど形容詞のことを指す<sup>199</sup>。例えば、

あまごひ〔雨乞〕（名）・求。<sup>チモウ</sup>雨・祈。<sup>ニイ</sup>雨

<sup>199</sup> 本辞典では「形容詞」の分類がない。

あやかり〔肖〕（活名）<sup>シイキヌ</sup>像。あやかりもの〔者〕（名）<sup>シイキヌ</sup>像。  
<sup>テイ</sup>的

あやしい〔怪〕（形動）・<sup>ミョクモライ</sup>可怪。

凡例では品詞類に関する説明がなく、「活名」の分類基準も明らかでない。これらの特徴から見ると、中国人学習者に対して使いにくい辞典と言ってもよい。

## ⑤ 『標品字典』

本字典は実藤文庫に所蔵され、清国留学生会館から発行され、編纂者は黄廣である。縦 15cm、横 19cm、石印本であり、「陰曆丙午五月十九日發行」とあることから、本字典は 1906 年（明治 39 年）に初版出版されたと考えられる。序文 3 頁、例言 5 頁、総目 11 頁、検字 11 頁と字典 374 頁、合計 405 頁である。後ろに仮名図、代名詞表、動詞表、形容詞表、助動詞表の附録がある。序文は日本樋口龍緑がある。

編纂者の黄廣は、江蘇省餘姚縣の出身である。字は越川、号は小梅苑主人、別署名は餘姚布衣などがある。徐錫麟の学生であり、日本東京岩倉鉄道学校から卒業して 1905 年に帰国後、事業を興して浙江鐵路会社が設立した後の資金集めと株を募集することを発起する<sup>200</sup>。後、大連で植物油の製造販売事業に従事するとともに、革命活動にも参加する。さらに、1912 年に大連で開設された詩社「嚶鳴社」の事務役を担当した。詩人として同社の黄棣華とともに「嚶鳴社二黄」と呼ばれている<sup>201</sup>。序文により、黄廣は日本語を習得し、訳書が多く、明治三十七年（1904）日本へ観光に行く傍ら、体育に関する内容を学び、明治三十八年また日本に遊学に戻ってきた。日本に滞在約三年間、帰国する直前に本字典を出版した。

<sup>200</sup> 王孫榮（2008）『「餘姚六倉志」編纂始末』浙江省中日關係史學會中日地方志比較研究課題組 [szbftp.cixi.gov.cn/szbftp/html/difangzhi/-id=253.htm](http://szbftp.cixi.gov.cn/szbftp/html/difangzhi/-id=253.htm)。

<sup>201</sup> 孫海鵬（2007）「遼東詩壇」研究」、中国歴史文献研究會大連図書館編『典籍文化研究』、第 25 頁。

1906 年はちょうど清国の訪日留学生の数がピークを迎え、宏文学院一カ所の学生数は 1173 人がある<sup>202</sup>。序文にも留学生の人数は萬で数えることも反映した。留学する目的はそれぞれ異なるが、当時の留学生たちは政法、教育、実業などの科目に熱心を持ち、普通教育の基礎を建てる目的もある。そして、中国人だけではなく、中国語を学習する日本人にも役に立つ期待も持っている。そして本字典は実用に応じて編纂されると指摘したことより、やはり短時間で翻訳できるようになるために参考するものである。

固有ノ字典ト其体裁ヲ一洗シ専ラ実用ニ応セントス、  
簡求正確區別詳明ニシテ啻ニ支那学者ノミナラズ、我国  
人ノ漢文ヲ学ブニ於テ、其裨益スル所亦淺鮮ニ非ルベシ

203

著者が例言で「日本字典坊間所鬻汗牛充棟（日本語字典は世間に多数出版された）」と書いているが、前述のように、日中辞典はただ 2 冊が出版されただけで、「於性質變化不啻有分別者（性質と変化を区別しないものがある）」の文から見ると、恐らく当時の語彙教科書のことを指すものと思われる。文字通り、本書は『康熙字典』の形式を取り画数順で並べられ、部首により分類する辞書で、中国語字典の形式を取るものであるが、収録されたのは中国の文字ではなく、日本語の漢字で、即ち、本字典は「漢和字典」の特徴を持つものである。例言により、唐から当時において、中国から日本に伝わった漢字は約三、四千文字で、本字典出版時近年の 2000 語前後が収録されている。日本では 1903 年に既に三省堂より最初の『漢和大字典』が出版され、収録字数は字典により異なるが、現在 2000 字程度は基本的には小学校対象のものである。当時には「作文には足りない恐れが

<sup>202</sup> 酒井順一郎（2010）『清国人日本留学生の言語文化接触——相互誤解の日中教育文化交流』、ひつじ書房、第 14 頁表 1 より。

<sup>203</sup> 黄廣（1906）『標品字典』、序文、第 1-3 頁。

ない」<sup>204</sup>ことである。

発音の表示は例言から見ると、字音は漢音と呉音を問わず、常用される発音は親字の右側に書き、常用でない発音は左側に示す。下に羅列された語彙は日本語漢字の意読である。その語彙らは全て終止形であり、品詞分類は名詞（数詞を含む）、代名詞、動詞、形容詞、助動詞、助詞、副詞、接続詞と感嘆詞の九品詞に分けられ、動詞は自動詞と他動詞も区別されている。本字典は前の辞典と比べると、文法内容をほとんど取り消され、附録の語尾変化表以外、例言で言及した部分のみである。親字の下に中国語訳語や出典を付けているのは約 526 語があり、中には動詞や名詞が多く、他の語彙は品詞類まで表示されている。著者は日本語漢字の「同訓異品」の語彙の品詞類を左右に並べ区別して、「同形異音」の語彙には線を引くと注意された。例えば、

換（クワン）	カヘル	動	四自
	カフ	動	下二他
模（モ　ボ）	ノットル	動四他	摹也
	カタ	名	形也
榊　サカキ	名	木名専用於神事者	
犀（スイ）	カクシ	形一	堅也（漢書）器不犀利

「漢和字典」で親字に対する解説は総画数、部首内画数、音読と訓読、字義などを含んでいるが、本字典は全て備えている。著者は日本で日本語の教育を受けたことや日本語知識も一定のレベルがあると判断できるが、本書の上述のような編纂する仕方から見ると、やはり日本の漢和字典を参考したのであろう。そして、編纂者は「句」、「榊」のような和製漢字に「日本俗字」と称するが、一般的な「奇字」を使わない上に、「方言」や「同文」の意味も一切表さない。ちなみに、「弗（ドル）」、「磅（ポンド）」などを「西洋訳字」と称する。これより編纂が日本語を

<sup>204</sup> 黄廣（1906）『標品字典』、例言、第 1 頁。

外国語として学習して、一定の日本語の言語知識を把握したことが推測できる。中国人が編纂された中国人向けの最初の漢和字典としては、質が高く、日本語教育や日本語学習に大きな意味を持っている。当時の中国語にはまだ「文字」の概念だけがあり、一般辞典より、漢和字典は速成を求める清国留学生たちに受け入れやすく、翻訳に役立つ実用性も当時大切な性質である。

#### ⑥ 『東語異同辨』

本書は国立国会図書館に所蔵され、既にデジタル化資料である。奥付に「明治三十九年三月二十日発行」と書いてあることから、本書は 1906 年初版を出版されたことが分かる。春清堂書店から発行され、16cm の石印である。著者は張毓靈で、校訂は張廷彦である。序言は三篇からなり、著者自序、原峯賓淺と蓮心道人それぞれの序文がある。三人の情報が不詳であるが、校訂者の張廷彦は淑範女学校の創立者であり、『支那音速知』（1899）、『官話急就篇』（1911）などの中国語教科書を出版した著名な中国語教師である。蓮心道人の序言から、当時の有志知識人たちが中国の局勢に関心を持ち、日本を通じて西洋のことを習い、言語の重要さも分かるようになることから、日本語を習う動機も垣間見ることができる。

著者は自序で自分が 1900 年から日本に滞在してから、日本語を四五年間学習したことを書いてある。一定の日本語知識を持つ学習者として、日本語のテニヲハ文法、音訓の読み方、発音など、中国人留学生にたいして難しいところを指摘した。最も難しいことは、仮名表記も発音も同じ、意味が異なることである。例えば「カキ有牡蠣柿子之分、カミ有上頭神紙之異」<sup>205</sup>、原峯賓淺の序言でこれについてさらに詳しく説明し、「鞆鞆格磔（アクセントのことを指す）」は難しいところを指摘した。日本語の仮名の数が少ないから、同じ組み合わせが避けられない、その高さや長さにより区別する。つまり、中国人学習者に対して、一つの難点は

---

<sup>205</sup> 張毓靈(1906) 『東語異同辨』、蓮心道人序、第 1 頁。

日本語のアクセントである。これが本書の編纂理由であろう。

（前略）テニヲハ文法之難也、吳訓並用讀法之難也、半濁音不易發、暗ツ字不可顯、此又口音之難也、不知此種難法皆在初学、一經指陳即可領會、而余謂尤有一至難者係字同音同意異者、其国人發於天然辨之甚易、而在学者間之不惟初学者苦之、即久於学話者亦時有誤會之虞。<sup>206</sup>

（テニヲハは文法の難点であり、吳訓共に使われることは読み方の難点である。半濁音は発音しにくく、「ッ」は発音しない、これは発音の難しいことである。これは初心者に対しての難点であり、指導に従えば理解できる。最も難しいことは、文字或いは発音が同じく、意味が異なることである。母語であるため日本人はアクセントが区別でき、学習者に対して初心者はもちろん、長く学ぶ人も間違いところがある。）

與同人談日語一科、無不以輟輟格磔為難。（中略）每見同此字母、而口吻畧異義能遂殊、殆悟日本字母有限、此界言詞無窮、無論如何分配、萬難免其雷同。<sup>207</sup>

（同僚と日本語科のことを話すと、アクセントの難しさを共感する。（中略）同じ文字で、アクセントにより意味が異なる。これは日本語の文字が有数であり、言語は限界なし、どのように配っても雷同を避けられない。）

本書は 263 組の語彙を収録し、五十音図順に配列され、ほとんど動詞と名詞である。分別する語彙は二つから五つまで、上には片仮名で日本語語彙を表し、下に漢字と中国語を並び、左側にそれぞれ例文とその訳文を挙げる形式を取る。日本語の語彙にアクセントの変化があるところを太字にして、両言語で対応する語彙は三角形のマークを右側に付けられている。例えば、

---

<sup>206</sup> 張毓靈(1906) 『東語異同辨』、自序、第 1 頁。

<sup>207</sup> 張毓靈(1906) 『東語異同辨』、原峰宝淺序、第 1 頁。

(一) アシ 足 脚

(二) アシ 蘆 蘆葦

(一) 彼ハ電車デアシヲ軋カレマシタ  
他叫電氣車軋了腳了

(二) アシノ中ニ一羽ノ鷺ガ居マス  
蘆葦塘裏頭有一隻鷺鷥

本書は日本語漢字の読み方を出発点として編纂され、日本語における同訓の語彙に対する弁別も目的の一つである。さらに、語彙と短文や否定形式などの語彙変化による「同音」現象も含まれている。例えば、

(一) アキナイ 不厭 不膩

(二) アキナイ 商 買賣

(一) 私ハドレダケ本ヲ讀ンデモアキナイ  
我念多少書都不膩

(二) オ前ハ何ノアキナイヲシテ居ルカ  
爾做甚麼買賣那

日本語の品詞類が同じであり、或いは語彙と語彙の場合、区別することが一般的であるが、このような語尾変化や接続などの文法に係わることも挙げ、著者の日本語知識と関係がありながら、当時の留学生たちは文法を重視しなかったことも原因であろう。ちなみに、アクセントは会話する時に問題となるから、ある程度文章を読む留学生たちの日本語の会話に役立ったであろう。

ところで、清末の日本語教科書の中には、1900 年に出版された『東語正規』で既に日本語のアクセントを音韻教育の内容を収め、中国の四声から説明した。それは正確ではないが、初めて日本語のアクセントに言及した教科書である。ちなみに、言語のアクセントは高低、長短、強勢と声調の四つに分け、本書が序言で「輕重長短之別」と書いてあるが、それも恐らく言語学における

意識ではなく、普段の日常会話において困難な箇所であろう。方言によるアクセントの差もあり、これも「軽重長短之別」の原因の一つであろう。また、当時、現在言語学上の日本語のアクセントはまだ成立しておらず、当時日本人により編纂された教科書には、アクセントに言及するものは少数であり、前述の辞書にも表示されていない。本書は科学的にアクセントを教育する教科書とは言えないが、当時の日本語学習者に音声教育の注意点を提示した。さらに、例文をつけて語彙を区別することは、辞書としても便利である。

ちなみに、仮名を「字母」と呼ぶのは欧米言語の影響であり、『東語正規』を初め、日本人編纂される教科書にもこの呼び方を使う、例えば『東語易解』（1902）などがある。これは確かに中国人の民族文化の感情を考える可能性があるが、上述アクセントに関することを加え、日本人教師は清国留学生に対して覚えやすい名称を使い、求める速成に応じて日本語教育を行う恐れもある。

#### ⑦ 『日語新辞林』

本書は国立国会図書館に所蔵され、近代デジタルライブラリーから検索できる。16cmの一冊本であり、序言3頁、凡例9頁、索引27頁及び辞書部分316頁、合計355頁である。奥付に「明治三十九年六月廿五日発行」と書いてあり、本書は1906年に初版出版し、富山房と文會堂より共同刊行されたことが分かる。日清語学会が編纂し、監修者は宏文学院の教授佐村八郎であり、1900年に出版された約二万五千部の国書の解題書--『国書解題』の編纂者である。

序言を書いたのは宏文学院長である嘉納治五郎で、当時出版された日本語辞書は普通五十音図により配列、漢訳され或いは文語と口語を並べる形式にまとめた。本書は『康熙字典』に倣って、部首と字画数により配列されたものである。さらに、本辞典は、当時多数の「日中辞典」と異なり、「中日辞典」である。管見の限り最初の中日辞典である。序言と著者の「凡例」により、本書は中国語学習者向けに編纂されたため、清国普通語「北京官話」

を日本普通語「東京語」と訳し、両言語とも方言の表現を避け、標準語を用いた「中日口語辞典」である。これも本書が他の辞典と特別視されるところである。

倣康熙字典、而每語皆本北京官話、以索東京語、可得直施之口語、比之舊來辭書（中略）實為便利<sup>208</sup>

（康熙字典を倣い、語彙は全て北京官話に基づき、東京語を検索できる。直接に口語として使え、旧来の辞書より実に便利である。）

此書、專為清国学生之始学日本語者作。故基於清国普通語（北京官話）以檢出日本普通語（東京語）。與他種列舉日語附會漢文者迥別<sup>209</sup>

（本書は日本語を学習し始める清国学生のために編纂された。故に清国標準語（北京官話）に基づき日本語標準語（東京語）を検索する。他の羅列される日本語に中国語をこじつけるものと異なる）

本辞典は文法説明など一切無い。ただし、「凡例」では仮名に関する説明は、以前の辞書より詳しい。五十音図は片仮名で表し、その漢字音にはもちろん、ローマ字も加え、さらに濁音、半濁音と拗音まで漢字音及びローマ字を綴り、長音を一々列挙するのは、同時代の辞典の嚆矢でありながら、「便於獨修（自己学習に便利する）」の辞典を編纂するために著者の工夫も垣間見ることができる。

本辞典は約 24000 語が収録され、辞書部分は中国語、日本語漢字、品詞類と片仮名で表示された読み方の形式を取り、本辞典の品詞類は九品詞以外、「句」（語句）も含まれている。語句には「テニオハ」を使う短文も含む。語尾変化による動詞や形容詞の分類をせず、自他動詞も分けられなく、全て終止形である。例えば、

---

<sup>208</sup> 日清語学会（1906）『日語新辞林』、序、第 1 頁。

<sup>209</sup> 上掲、凡例、第 1 頁。

廚子＝料理人（名）リョーニン  
廢＝廢ル（動）スタル  
廢人＝無用ナ人（句）ムヨーナヒト  
張傘＝傘ヲ開ケル（句）カサヲアケル

また、本辞典から当時の北京での中国語語彙の使用状況も分かる。例えば、「風雨表」（晴雨表）、「郵信票」（郵便切手）、「馬錢」（診察料）などの語彙はまだ使われており、「理学」、「物理」、「煤氣」<sup>210</sup>（ガス）のような語彙は普通語になっている。中日両言語を対比すると、「電気燈」のような日本語から伝来した同形同義語があり、「西紅柿子」は「赤茄子」と訳し、まだ「トマト」の外来語が普及していないことなど、当時中国及び日本での語彙交流状況も多少反映されている。

清国留学生向けの辞典であるため、康熙字典の配列する仕方をとるのは最も便利であるが、前述のように、中国学習者にとって、辞書や奇字類などの資料は文章の翻訳の参考にするものである。即ち「中日辞典」より「日中辞典」の方が使いやすく、必要とされた。このような原因で、「中日辞典」の数が少ない。日本人の中国語学習者に対するものが何冊か出版されたが、それ以外に筆者が実際に閲覧した辞書で中国人により編纂された「中日辞典」は一冊もない。前述『日華字典』は中日字典であるが、語彙ではなく、文字を対象とするものである。

さらに、本辞典は口語を標準として語彙と語句を収録する。「過河拆橋」、「遊手好閒」など、よく使われた成語はもちろん、「賣得着賣」（賣レバ賣レル）、「矮慙々兒」（卑怯）のような明らかな日常口語も含まれている。前述の『東語異同弁』と同じく、翻訳ではなく会話に関心があった。ただし、前者はアクセントに注目して、語彙の解釈など非常に簡単であり、辞書とする機能が不足している。本辞典はアクセントに関する内容はないが、語彙量と説明から見ると、口語辞典として充実している。そして、本稿の

---

<sup>210</sup> 前述の『日語新辞林』で「瓦斯」が使われた。

考察により、1906 年は日本語教科書出版数のピークを迎える時期であるが、会話類教科書は五冊しかない。しかし、速成はまだ主流であるが、文法や語彙など、各種類の教科書が出版され、日本語を本当の意味の外国語学習へ導き、中国の知識人も日本人教師も色々試した。会話力に注目する辞典を編纂することも、その一つであろう。

#### ⑧ 『漢訳日語大辞典』

本書は国立国会図書館に所蔵され、既にデジタル化されている。本書は上下二冊からなり、序言、凡例及び目次各 4 頁、日本文典 78 頁、辞書部分は 1604 頁、合計 1694 頁である。奥付に「明治四拾年二月二十日発行」と書かれ、本書は 1907 年に上海新智社東京分局から出版され、本文最後の頁に校訂者竹園苞、竹園行潜、竹内善朔、宓秉鈞、林亦盧、郭德裕の六人の名前が記されている。

本辞典はもちろん日本に渡航し、日本語が通じない中国人たち向けに編纂されたが、熟語などは最も難しいと感じ、その内容を収録する辞書がなく、本書のようなことわざと童謡も収録される辞典を出版する必要があった。凡例に見られるように当時出版された辞書には語彙数が少なく、漢訳も誤りだらけの質と批判した。

「随一」を「第一」、「一所懸命」を「一生懸命」になることが多く、それは仏教経典を知らず、日本語を誤解する原因である。日本語の語源の一つは仏教経典であるという説があり、1907 年の時点で、出典を考証するものどころか、言及する教科書はほとんどない。さらに中国出典の異義語も含まれ、そこで本辞典は文字、語彙及び俗語の語源考証に基づく日中辞典である。

熟語故事、往往難之<sup>211</sup>

(熟語と諺などは難しいことである)

配列方法は五十音図順で、仮名の文字数により並び、片仮名で日本語の語彙を上置き、「。」で各漢字の表記を分かれ、下に品

---

<sup>211</sup> 新智社 (1907) 『漢訳日語大辞典』、序言、第 3 頁。

詞類、漢字と解説の順を羅列する。そして収録された古語、俗語を提示して「雅俗」の区別があり、古今意味の差も説明があり、外来語の元言語とその単語も書いてある。例えば、

カミ。ノ。ミムロ（名）「<sup>ミムロ</sup>神御室」古言 謂神祠也  
カン。キン（名）唐音 謂繡竺典。而看之也。今世人謂諷  
誦佛經。雲爾。誤也  
カナ。キン（名）「<sup>キン</sup>金巾」葡萄牙語曰 Canequin 謂西洋布  
也  
カン。ヅク（自動四）「<sup>カン</sup>勘付く」俗語 謂推知人之隱事也

「古言」、「俗語」、「佛教之語」のような出典を示し、当時の意味との異同を区別するほか、例文を挙げるところもある。語彙に対する説明は簡明であり、編纂者の日本語と中国語の能力と工夫も見える。語源や出典考証に関する最初の漢訳辞典として、当時の中国人学習者に対して、科学的に日本語を学習する参考書を提供した。これは本辞典の時代性と進歩性である。

ところで、本辞典の品詞分類には「冠詞」と「序詞」が含まれている。この辞典より前の「日本文典」では、冠詞は「則方發一語而冠於其語頭之詞也（冠詞又稱枕詞）」、序詞は「則稱多音數者也」と定義された。序言や凡例から、本辞典の編纂者は日本語の古典や文字の考証にこだわり、伝統的、冠詞は「則方發一語而冠於其語頭之詞也（冠詞又稱枕詞）」、序詞は「則稱多音數者也」と定義された。冠詞は名詞句に使われ、普通一番外側に置かれる限定詞であり、中国語でも日本語でもない品詞類である。一方、枕詞は和歌修飾法であり、特定の語彙の前に置く言葉で、両者が共通点を持っている。しかし、冠詞は後ろの語彙の数や性、格などに従って変化することが多い、枕詞は規定される語彙であり、「あまざかる」、「しらまゆみ」のような「五音者最多」である。そして、枕詞は語調を整えたり、ある種の情緒を添えたり、冠詞のように名詞の定と不定、加算と不可算を規定する機能がない。序言や凡例から見ると、本辞典の編纂者は日本語の古典や文字の考証

にこだわり、伝統的な枕詞に注意するなど現代の西洋言語の冠詞とつながるであろう。しかし、中国人向けの辞典として、文法説明に品詞類に「冠詞」を収めたものは、教科書や辞典の中で本書のみである。

ちなみに、本書の日本文典は音韻論、単語篇と文章論の三つに分けられ、中の文章論は文の構造と文章の種類を説明した。中国人向けの日本語教科書は、正式に文構造から分析するのは松本亀次郎の『言文対照漢訳日本文典』である。本辞典は主語や補語及び主部や説明部などを挙げたほか、文節の概念と説明もある。辞書の内容を問わず、本辞典の日本文典は、当時の専門の文法教科書に負けない質をとっている。

#### ⑨ 『日華新辞典』

本書は国立国会図書館に所蔵され、近代デジタルライブラリーから検索できる。13cmの一冊本である。奥付に「明治四十年三月卅一日光緒三十三年二月十八日発行」に書いてあるから、本辞典は1906年発行された。本書は序言、凡例や例言無し、日本彩色略図と日本屋内面略図及びその説明6頁、辞書部分1969頁、日本語法要略86頁、合計2061頁である。編纂者は松平康国と牧野謙次郎であり、東亜公司与三省堂書店より共同刊行された。

一般辞書と異なり、本辞典は最初の頁に日本彩色略図を載せ、赤、紅、紫、茶、鼠、樺、柿と紺の八種類の色の名称と色見本を掲載された。後には各色の読み方を示し、「其字用漢字而其実有異同」（同じく漢字で表記するが意味が異なる）、これは少数ではない、という説明がある。続き日本屋内面略図一枚があり、和風部屋内の様子を示し、「座敷」、「障子」、「引出」などの部屋構造や置物の名称を書いてあり、後ろも同じくそれらの読み方を表し、「文字用漢字而聲訓有異同」（文字は漢字を使い音訓が異なる）のことを説明した。

辞書部分は五十音図順で並び、平仮名で日本語語彙や外来語を示し、下に品詞類、漢字と中国語訳で配列された。後ろに語

彙の接続や常用する組み合わせとその品詞類も示す。本辞典は歴史的仮名遣いを使い、長音など下に平仮名で現代仮名遣いを書き、語彙の上に「ㄥ」、「ゝ」と「ゝ」を置き、それぞれ古語、俚語方言と字音を表す。そして、出典を示し、或いは図画を添える場合もある。例えば、

ああめん〔感〕英語 Amen 也。耶穌之徒。禱神畢。必唱此語。心願如是之意。

あか〔名〕（閼伽）梵語。水之義。○謂池水井水等。○謂所供佛之水。○盤盂壺瓶。盛香水供佛者。總稱為あか。

ゝがう-ぎ<sup>ゴウ</sup>〔名〕東京俚語。勢焰之著也。得意之容。  
一に〔副〕一おる〔形〕

ㄥかうがへ<sup>コウ</sup>〔活名〕（考）かんがへ之音便。

そして、辞典最後の「日本語法要略」の品詞を九種類に分け、「形容動詞」の分類ではなく、「形動」は恐らく形容詞のことを指す、例えば「おもてはづかし（面羞）」、「あらし（粗）」、「いとほし<sup>イト</sup>（愛）」などがある。全書には「活名」、「形名」と「形動」に関する説明もない。収録された語彙から見ると、「活名」と「形名」は動詞や形容動詞の語尾活用による名詞化のものと推測できる。例えば「祈り」、「いとまき（糸巻）」などは活名であり、「おもらか（重らか）」、「おもりか（重りか）」などは形名である。先述した『日漢辞彙』も語彙に「活名」と「形動」の分類があるが、当時「形容動詞」の品詞類はまだ定められておらず、中国人向けの文法教科書にも形容詞も動詞も「形動」の分類がなく、恐らく辞書のみで用いられる名称であろう。しかし、これに対する説明もなく、中国人学習者には不便であり、これも本辞典の欠点と言える。

ちなみに、「日本語法要略」の最初に「文字」と「語彙」に関して述べ、つまり中国語は「字」と「詞」を区別せず、欧米言語と日本語は全て異同がある。日本語の場合は、仮名は「字」であり、仮名の組み合わせは「詞」になり、漢字で書かれた。

これも本辞典最初に掲載された二枚の図画に関する説明の根拠である。清末における出版された文法教科書には、こういう言語学の角度から文字と語彙を説明することがめったにない。

同年出版された辞書と比べると、本辞典は前述の『漢訳日本辞典』と編纂する方法が近く、解説も同じ形式を取っている。この二冊は当時において、詳細を尽くす辞書である。古語と俗語はもちろん、さらに本辞典が方言も分けられた。当時の文法教科書においてもほぼ言文対照の内容があり、文法上で口語と文語を区別しているが、方言の内容にはあまり言及していない。一方、語彙類の教科書は俗語を提示するものが少ない、言語学知識の不足や「同文」意識の影響で、語彙上の文言区別が多くない。中国人編纂する辞書は1908年の『東中大辞典』が最初こういう形式を取る。

一方、中国人向けの辞書で語彙の出典を表すのはこの二冊から始め、「同文」という日本語意識を抱く中国知識人たちに、科学的な認識を示した。語彙の理解と利用、さらに翻訳により確実な参考書を提供し、中国学習者に対して、これは辞書の最も重要な役割である。ちなみに、度量衡対照表を添付される辞典は本書が最初であり、教科書においても多く見られない。そして、現在の日中辞典とほぼ同じ編纂方法は、本辞典の進歩性を表し、辞典による日本語学習は、規範的な形式に向かい進み、後の辞書にも参考になっている。

#### ⑩ 『普通・専門科学日語辞典 附奇字解』

本書は司克熙、歐陽啓勳による共著であり、1908年に出版され、関西大学図書館に所蔵されている。

本書は序言が無く、凡例のみがある。凡例により、本書に収録された語彙は全て科学研究に関する名詞であり、各学科における重要な用語をまとめる。内容は博物・理化・数学・歴史地理・法制経済・銀行鉄道と奇字解の六部分に分かれ、各部分の下にまた二種類から四種類までの小項目に分けられた。六部分

と奇字解はそれぞれ 88、46、48、54、65、30 と 59 頁があり、そして凡例 2 頁と目次 72 頁を合わせ、合計 464 頁である。

本書は各語彙の最初の文字の画数により並び、日本語を上置き、片仮名で読み方を右に表記され、中国語解釈は下に配列された。携帯に便利のため、解釈は「務從簡易（必ず簡易にする）」、出典などを示さないが、化学の名詞には化学式を表示する。例えば、

無意犯 無意思之犯罪也

亞硝酸 其符號為  $\text{NHO}_2$

九州 日本極西之一大島也

ところで、清末の日本語学習は日本書を翻訳して西洋文明を習うことが主な動機であり、専門書の翻訳も一般的な知識人が普通文明に対する期待を反映する。語彙の角度から見ると、当時中国人の日本書翻訳に二つの障害がある。一つは「術語」である。即ち、借用語であっても、日本で新知識のために作られた漢字語彙であっても、専門知識がなければ、中国語の漢字や語彙が本来の意味からこれら西洋文明の専門用語を表す語彙を理解することが難しい。もう一つは「奇字」、即ち日本語特有な文字或いは語彙である。『和文漢読法』が提唱する中国式の読み方は、ある程度で文法を習わなくても快速翻訳できる方法とも言える。故に、語彙上の二つの障害を排除することが大切である。もちろん清末において、中国人は様々な試みを行った。例えば、語彙収録を主とする教科書、或いは辞書などを編纂した。しかし、「術語」と「奇字」両方の内容を収録する専門的な辞書は、本辞典が最初であり、清末における中国人により編纂されたものとしてはこの一冊のみである。

さらに本書は清末における術語辞書として、収録された語彙数が多く、科目も細かく分けられ、専門性が高い。特に、清末における辞書は日本語の言語と文法の知識を含んだ出版物が一般的な特徴であり、本書は文法や日本語言語学の説明はもちろ

ん、アクセントなどの発音教育に関する内容も一切無く、実用的な専門術語辞書とも言える。例えば、本書が収録した化学に関する語彙の訳語は、「有機物」、「電解」のような現代使われる術語と同じか或いはそれに近い。ちなみに、1907年嚴復が編纂した『化学詞彙』<sup>212</sup>、そして、1908年の術語辞書『東中大辞典』も化学術語を日本語訳語から採用している。この点から見ると、本辞典は術語辞典として、質的に優れている。

一方、「奇字解」部分は、以前の教科書や辞書より、収録される語彙数も増え、合わせて1500語がある。「成果」のような今でも使われる語彙もあり、「元素」のような術語も含まれる。実用性を重視するため、簡単な訳語を付けただけであり、本来の奇字解の形式と同じである。しかし、本辞書に収録された奇字解は、全て正確な訳語が付き、以前の教科書や奇字解類資料に比べ、この点が著者の日本語水準を垣間見ることができる。ところで、当時、「奇字」に対して、本辞典のように翻訳する実用性を目指すものもあり、知識人に受け入れられようとする語源考証を行う方法もある。具体的な内容は、本章の第2節で説明したい。

#### ⑪ 『新輯中東字典』

沈国威が論文で言及したが、「新輯中東字典、東文学社編、印、1907（M40）、線装87葉」<sup>213</sup>の情報のみである。筆者も実物が閲覧できていないため、沈氏の文章を参照されたい。

#### ⑫ 『東中大辞典』

本書は実藤文庫に所蔵され、一冊本であり、奥付に「戊申五月初五發行」と書いてあるから、1908年発行されることと分か

---

<sup>212</sup> 江家發、紹甜甜（2011）「晚清化学図書翻譯出版的特点与走向」、『大学化学』第26卷第6期中国化学会、第81-86頁。

<sup>213</sup> 沈国威（2008）「關於「和文奇字解」類資料」、『或問』第14号、第117-128頁

る。緒言 5 頁、文法大綱 34 頁、凡例 4 頁、索引指南と索引 34 頁、辞書部分 1479 頁、合計 1556 頁である。本辞典は作新社により編纂、出版された。

第二章で日本語を「東文」と「東語」の名を付く二つの原因に対して説明したから、ここで贅言しない。しかし、清末において、両者の意味は若干差別が生じ、「東語」は日本語の口語や俗語を指し、敬語を使い、それに対して「東文」は文章用語である。本辞典の緒言で「東学」を学ぶために、「東文」と「東語」を習得しなければならない。文法、会話或いは日本の古式辞書の限り十分ではない、普通学科や専門書の訳本が少数ではないが、中国語で多数の術語はまだ成立せず、元語彙をそのまま使うと通じない場合が多い。辞書も読書用のもののみ出版され、そこで、「東学」を研究するには学術を紹介する本が必要である。つまり、本辞典は法政・経済・理化などの術語収録を目的として、編纂された「術語辞典」である。

自普通教科書。以至法政經濟理化博物等一切専門書記、莫不逐譯之、而其専門術語則因中国尚無成語之故、往往襲用原語而不改、学者苟欲藉譯本以求新智識、勢非先盡通此等術語、有所不能、而彙輯術語之書<sup>214</sup>

（普通教科書、或いは法政・経済・理化・博物などの専門書は多数訳されたが、中国語で専門術語が成立しないものが多く、原語をそのまま使う場合が多い。学習者たちは新知識を求め、書籍を翻訳する場合、術語が通じなければならない。故にこの術語書を編纂する。）

緒言で辞書の命名方法に関する説明があり、辞書の役割から「読書用」と「作文用」に分けられ、命名上は前者が「対象言語＋母語」で、後者が「母語＋対象言語」の形式を取ることは国際的な基準であるが、当時出版された命名標準に合わない中国の辞書が多数であることを指摘した。前述のように、辞書は

---

<sup>214</sup> 作新社（1908）『東中大辞典』、緒言、第 2 頁。

二つの種類に分けられ、本辞典は中国語を使って日本語を注釈しており、「東中」の書名を付けた。全体から見ると、命名に言及し、そしてそこまでこだわる辞典は本書のみである。外国語と一々対応することができ、それは「近代化言語」と言え、さらに知識とそのシステムが確立できる。本辞典は命名から国際基準に従い、「近代化」を求めたものであったと言える

辞書の内容は漢字類 1～1403 頁の 34000 語あまり、和字類 1405～1411 頁 160 語余りと仮名類 1413～1478 頁 1680 語、三つの部分に分けられている。日本語は雅語、俗語、新語と古語とに区別し、術語は法律、物理学、経済、化学、軍事、動物学、哲学、植物学、心理学、鉱物学、倫理学、数学、天文学、教育学、地文学、歴史、生理、文法の 19 類、合計 5398 語、その他仏教、諺なども収録した<sup>215</sup>。『康熙字典』の形式を取り、部首順で配列された。『』で日本語漢字を提示し、( ) 内は片仮名で読み方を示し、品詞類の下に【】で学科を表し、最後は簡明な中国語訳文である。ただし、日本語の発音を踏襲する学術語彙は、北京官話に基づき、漢字で発音を表記する。「中名」を提示する語彙もあり、それは既に中国語で使われた術語であり、合計 114 語<sup>216</sup>があり、例えば、

『中央火山』(チュウワウクワザン)(名)【地】英 Cetralcone.  
謂生於舊火口中央之新火山是也

『丸子』(マルキ)(名)【動】(中名) 金鼈。金魚之一種  
『丸丸』(マルマル)(副) 豐肥貌。

『主我』(シュガ)(名) ⊖【哲】自己。⊖【倫】利己。

前述の辞書は術語の収録するものもあるが、学科を区別するのは本辞典が最も詳細である。特に、本辞典では「和字類」を 7 頁収録されたが、「哩呖吋等字康熙字典中固有之、然其意義懸絶……大雅君子、幸勿以謏陋譏之（哩呖吋などの文字は康熙字

<sup>215</sup> 術語としてカウントしない。

<sup>216</sup> 附録二に収録する。

典には既にあり、意味がだいぶ違う……君子は浅いと皮肉らないように)」と書いてある。中国本来の文字であるから、「譎陋（浅い）」ではないという日本語観念がまだ一般的である。そして、仮名類の副詞や感嘆詞に対して「日常極俗極鄙之語（に地表における極粗野な語）」と評価され、上述の日本語観念も反映した。しかし、本辞典では、副詞と感嘆詞に対して全て「～貌」と「～声」を統一に訳すことは、当時の辞書で初めてである。これも編纂者が規範的な辞書を編纂することを求める意識であろう。

本辞典は当時中国人によって編纂された内容量が最も大きな辞書と言える。しかし、日本書を翻訳するには術語の収録が大きな役割を果たすはずであるが、本辞典を収蔵する図書館が少ないことから発行量が多くなかったと推測される。術語を中心とする最初の辞典として、解説や形式などのみならず術語の普及にも影響を与えたと考えられる。

### ⑬ 『日本読書作文辞典』

本辞典は一冊本であり、奥付に「明治四十二年五月廿五日発行」と書いてあるから、本辞典は 1909 年に発行されたことと分かる。編纂者は難波常雄であり、東方社から出版された。叙例 9 頁、目次と新編検字 8 頁、辞典部分 450 頁、合計 467 頁である。

これまで出版された辞書は、ほとんど翻訳や口語を目的として編纂され、「術語」を収録する『中東大辞典』も翻訳の目的を持っている。つまり「読む」と「話す」に重点がおかれている。本辞典は、読むこと以外に日本語で文章を書けることを目指し、中国学習者に対する難点、即ち語尾変化を示し、日本語の「書く」ことを目的とする辞典である

漢土人之欲作日文者、最苦於難知表動作形容之漢字讀法  
及其語尾變化……故本書雖欲以資讀書之用為主、而於此點

亦特致意焉、凡学作文者、據此書以用漢字、當不至復有晦澀僭謬之弊<sup>217</sup>

（日本語で文章を書く中国人に対して、最も難しいことは動作や形容を表す漢字の読み方と語尾変化のことである……故に本書は読書に使えるが、作文を学習する人も、この本によって漢字を使え、晦渋や理屈に合わないことにならないことである。）

本辞典は「漢字四千有余、與二字以上組成之熟語二萬有餘、及重要之地名姓氏數百（漢字が四千字余り、二つの漢字で組み合わせた熟語は二万あまり、重要な地名や名字が数百）」に基づいて、「按畫排列、所有讀法意義標註其下（字画数により配列し、全ての読み方と意味を下で表示する）」の形式が取られている。全体的には『漢訳日本辞典』と大体同じ形式と解説方法が取られている。しかし、中訳の説明がある語彙は、日本文化に関する語彙が中心である。術語なども収録されたが、学科の区別や提示なども無く、読み方と品詞類のみ表す語彙が多数である。三、四文字の熟語も多数収録され、読み方は現代仮名遣いを使っていない。当時、日本語の仮名遣いは新旧交代の時期で、本辞典の編纂者は旧日本語仮名遣いを推奨するからである。一つの語彙が多数の品詞類を持つ場合には常用された種類を選び、文語と口語のも提示する。当時、同一語彙の異なる品詞類に言及するのは、本辞典が最初である。例えば、

十二支腸<sup>218</sup> ジフニシチャウ（名）

十二単衣 ジフニひとへ（名。古代衣服一種）

半信半疑 ハンシンハンギ（形）

1897年に東文館が開設されて以来、本辞典が出版された1909年において、中国人の日本語学習、及び中国人向けの教科書が

---

<sup>217</sup> 難波常雄（1909）『日本読書作文辞典』、第1頁。

<sup>218</sup> 十二指腸を指す。

らも本格的な外国語学習に向かう傾向が見える。翻訳することから「話す」ことの実用性、さらに「書く」ことの重要性が注目された。本辞典は日本人により編纂されたが、中国人が日本語学習する需要も反映していた。前述の『東中大辞典』の辞書に対する分類により、本辞書は「作文用」を目指して編纂されたが、内容から見ると、作文に向く語彙の意味を詳しく説明がなく、口語と文語の区別より、語尾変化を重点として説明し、どう見ても作文辞典の素質が十分ではない。しかし、著者の前作の辞典『漢訳日本辞典』は口語を収録する特徴に比べると、本辞典は文語語彙の数が増える点から「作文辞典」の意図も見られる。ところで、著者は日本語の言語学者で有名であるが、中国語を系統的に学習する経験がなく、二冊の辞典共に中国語の訳語の正確さは論議の余地がある。

語尾変化は上述の『標品字典』と『漢訳日語大辞典』も提示する。前者は字典であり、後者と本辞典は同じく語彙を出発点とするが、しかし、本辞典は携帯用の小型辞典として出版されたから、簡単な説明などで十分であろう。著者が数年前に編纂した『漢訳日本辞典』の「凡留学日本者、其初未有不購一冊者也（日本にいる留学生は、最初一冊この辞書買わない人がいない）」<sup>219</sup>の影響より、本辞典の重版などは見られない。

#### ⑭ 『同文新字典』

本字典は国立国会図書館に所蔵され、近代デジタルライブラリーから検索できる。22cmの一冊本である。奥付に「明治四十二年一月十五日発行」と書いてあるから、本辞典は1909年に発行され、また1915年に本辞典は再版された。漢字統一會より編纂され、代表者・校閲者は伊沢修二であり、泰東同文局から出版された。序言12頁、凡例は日本語と中国語訳文合わせて10頁、字典部分302頁、索引106頁、合計430頁である。

---

<sup>219</sup> 彭文祖（1915）『盲人瞎馬之新名詞』、第45頁。

序言は伊沢修二と漢字統一会会長である金子堅太郎が書いている。本辞典の出版目的は以前の辞書と若干差異があり、漢字統一会の趣旨を反映した。西洋文明を輸入することに熱心な日本では、漢学が冷遇された。欧米の先進技術を学習することは重要であるが、文字まで同化されたら、逆に強くなることができず、三国が欧米と比べ物にならない恐れがあるとされた。

日清韓均屬同種同文、如三国同心協力進行亞東經營、則歐美国人恐他日被逐於東亞大陸、亦未可知也、如欲廢漢文、而專用羅馬字……以之與歐美国人所專長之嶄新科学精巧機械相抗衡、斷非得策也。<sup>220</sup>

（日清韓三国の言語は同種同文であり、三国協力して東アジアを運営して、欧米国も東アジアの大陸から追い出すことができる。漢文を廃しローマ字のみ使い……欧米人が得意な斬新的で精巧な科学機械に比べ、絶対にいい方策ではない。）

もちろん当時、中国は日本を通じて新しい知識を習得し、さらに日本の政治や社会に習うが、「同文」という日本語意識を持っているから、文化上で日本を上位に置かない。一方、本辞典が主張する三国同じく漢字を使うことによる「同文」は、実に中国人の観念と異なる。さらに日本は欧米文明を輸入してから、清国と韓国に輸出する責任を持ち、東アジアの文明普及を担う民族主義もある。そのため日本、中国と韓国三国の文字を漢字に統一することを目指し、漢字統一会を設立する。

據我邦之地位而論、今後我邦之應靠羅馬字益輸入歐美文化、固不待論、但能咀嚼消化之、再恃漢字以輸出諸亞東大陸、以補清韓兩國之文化之不足、舍我邦其誰哉、雖世界各国之多、且歐美文化之為最先進之國、此後將東西兩球之文

---

<sup>220</sup> 漢字統一會（1909）『同文新字典』、序言、第10頁。

化、薈萃一處、陶冶一爐、別造出東洋一新文化之要素者、恐除我邦之外、不知復有何国在焉<sup>221</sup>

（日本の地位から見ると、ローマ字によって欧米文化を輸入して、まだ学問にならないが、受け入れることができる。そして漢字により東アジアの大陸に輸出する。清韓両国の文化不足を補充できることは、日本以外ない。世界には様々な国があり、欧米が最先進国であり、今後東西文化を一カ所にまとめ、東洋新文化の要素を創立できるのは、日本以外の国はない。）

三国人間唯一筆可以通意而止、一言口音有未能達其意者、即是無劃一漢字字彙之故也、是以我諸同志相謀、思彌此缺陷、設立漢字統一會<sup>222</sup>

（三国の人は筆談や発音で意志を伝えないことは、統一的な漢字語彙がない原因である。故に、我ら同士が相談の上、この不足を補うために、漢字統一会を創立するになる。）

伊沢は序言で漢字を「於交通東亞五萬萬生民之思想、不可缺之利器也（東アジア五億の人の思想をつながり、欠けない利器である）」という重要さを高く評価して、六千字を選び、三国の常用漢字を統一に規範されることを求めた。中には、中国の『康熙字典』から三国通用の 5000 字、清国俗字 700 字前後、そして日本和字と韓国新字百字余りが含められた。

字數姑限以六千、擇其最通俗慣用之漢字、傍以我假字及羅馬字、施以三国字音、其意在不惟日清韓三国人、及歐美人苟一繙閱之、使其易會漢字之音也。<sup>223</sup>

（字数は六千に限り、最も通俗的な常用漢字を選び、仮名とローマ字を横付け、三国の発音を表す。日清韓三国の

---

<sup>221</sup> 上掲、第 13 頁。

<sup>222</sup> 上掲、第 15 頁。

<sup>223</sup> 上掲、第 16 頁。

人だけでなく、欧米人が読んでも、分かりやすい漢字音と  
思わせるためである。)

本辞書の内容は日本語漢字とその発音を上に置き、下に漢字の意味に対して説明する。そして、韓国語と中国語、伊沢が作った新字音とヴィート式を並べた。日本語漢字の発音と平仮名で表記され、韓国語は平仮名で発音を表す。

本辞典は「不僅日本人、有志於清韓語学及其文学者、或清韓人、有志於日本語学及其文学者、可以為精確不移之指南針（日本人だけでなく、中国や韓国の言語学と文学を学ぶ人、或いは日本の言語と文学に興味を持つ中国人にも、精確な指針である）」を目指す、実は三国の音韻に対する「東亞比較音韻学之良資料（東アジア比較音韻学の良い資料）」とするに足るものである。内容は文字と文字の意味の説明であるから、語彙、術語さらに新知識の引き受けることなどには、本辞典が役に立たないと言っても過言ではない。そこで内容から見ると、本辞典は日清韓三国の漢字字典を寄せ集め、漢字音を比較的に記録された字典である。伊沢は独創する清韓両国の発音表記も導入し、「辞典」より音韻学に関する研究の試みと言うほうが適当だと思われる。しかし、本辞典は三国の発音を統一することではなく、音韻における差異のルールを探し出し、それに基づいて三国通用の漢字を作ることが最終目的である。実用性から見ると、中国人学習者にとって使いにくい辞典であることが判断できる。

一方、東アジア三国に使われる文字を統一することは、戦争の影響も連想される。当時、中国と韓国で戦争などから利益が得られ、文化上の優位感も現れる。植民の便利さなどは憶測できないが、序言で東アジアの文明は日本のみ頼れる説から、尊大ぶったことも垣間見ることができる。

ところで、編纂者の伊沢も本辞典が出版された後、中国語の語音研究と教育に重心を移した。ですから、漢字の「統一」と

「同文」などの趣旨は、本辞典で深く見られず、「学術でも商業でも失敗作」<sup>224</sup>であったと言える。

## 5.2 ユニークな語彙学習

### 5.2.1 コラム「新釋名」

上述した辞書は、科学的に日本語語彙を学習するための試みである。しかし、中国人に対して、新語彙を受容することは簡単ではない。日本語特有の漢字或いは語彙に「奇字」の名を付け、この分類を収める辞書も何冊かある。中には語源考証の角度から新語彙を普及することも珍しくない。本来、『釋名』は東漢の劉熙が編纂された訓詁学の著作である。「新釋名」の題から、新語彙の普及、及びそのための辞書を編纂する意図が見える。ここまで語源考証の考察に『日本語古微』を例としてきたが、他にも当時の新聞紙の「新釋名」と言うコラムからも、語源考証を需要する背景が伺える。

梁啓超は、1898年に日本へ亡命し、そこで『清議報』を創刊した。これにより、日本語の新漢語と訳語が中国の伝統的な言語生活に浸透してきた。新しい語彙を受容することは、当時の中国の知識人たちにとって想像もできないことであった。梁啓超は、日本の政治や経済を学び、改革の新しい思想を伝えるため、『清議報』をはじめ、『湘報』、『湘學報』などの新聞紙で日本語の新漢語と訳語を使用している。しかし、これらは国内の知識人や官僚たちから次のような非難を受けた。

自時務館開、遂至文不成體、如腦筋、起點、壓、愛、熱、漲、抵、阻諸力、及支那、黃種、四萬萬人等字、紛紛滿紙、塵起汚人。我公夙精古文之學、當不謂然。今奉旨改試策論、適當厘正文體、講求義法之時。若報館刊載之文、仍復泥沙迷目、人將以為我公好尚在茲、觀聽混淆亂、于立教學之道、未免相妨。(中略)官評輿誦、莫不以停止為宜。<sup>225</sup>

(時務が開館して以来、文は文にならない。例えば、腦筋、

<sup>224</sup> 沈国威(2008)「日漢辞典の黎明期」、『或問』15号、第84頁。

<sup>225</sup> 湯志鈞(1982)『戊戌變法人物傳稿增訂本』下編卷八、中華書局、第579-602頁。

起點、壓、愛、熱、漲、抵、阻諸力、及び支那、黃種、四萬萬人のような文字でいっぱいであり、人目を汚れる。我が公は古文を精通し、納得できない。今皇帝令を受け、文体を改正、義法重んずるべきである。新聞に載せる文章は、奇異な文字がまた目に入れると、我が公はこういうことを勧めると誤解し、人の耳目を惑わすことになり、教育にも妨害する。(中略) 官僚たちも停止の方がよろしいと賛成する。)

張文襄公深惡新詞。至因此譴責幕僚。<sup>226</sup>

(張文襄公は新語彙に対して極嫌がり、幕僚を責める原因にもなる)

自梁啓超、徐勤、歐榘甲主持時務報、知新報、而異學之詖詞、西文之俚語。與夫支那、震旦、熱力、壓力、阻力、愛力、抵力、漲力等字、觸目鱗比、而東南數省之文風、日漸于詭僻、不得謂之詞章。<sup>227</sup>

(梁啓超、徐勤、歐榘甲が時務報と知新報を担当して以来、他の学問の奇異な語彙と西洋文の方言が現れ、例えば支那、震旦、熱力、壓力、阻力、愛力、抵力、漲力など様々な語彙がある。東部と南部、数多くの省が奇異な文章の風格を形成し、語彙と文章とは言えない。)

科挙制度の改革は進められ、新語彙の増加に対して反対の声が止まなかった。旧式教育を受けている人たちにとって、新語彙は理解し難く、逆に新しい知識人たちにとって、中国の古典的な語彙は理解し難いと感じていた。新語彙の増加に反対する理由として、沈国威(2010)は以下の4点を指摘している。

1. 日本語の語彙は上品ではない
2. 新旧・中国語と外国語を混ぜると、文体の統一性が破られた

<sup>226</sup> 柴萼(1926)『梵天廬叢錄』卷27、中華書局、第35頁。

<sup>227</sup> 湯志鈞(1982)『戊戌變法人物傳稿增訂本』下編卷八、中華書局、第602-608頁。

3. 訳語の限界が知らず、使用者は語意を正確に理解できない

4. 民族主義

中でも、「1. 日本語の語彙は上品ではない」は、最も重要な点であると考えられる。新語彙に対して、「文字怪異」、「鄙俚粗率」、「固欠雅馴」などと評価される理由として、新語彙が中国の經典で出典が記されないことが考えられる。沈国威の考察により<sup>228</sup>、日本の学者たちが「所有著述文辭、凡用漢文者、皆極雅馴（全ての著述や文章は、漢文を使うと極上品になる）」<sup>229</sup>と考える理由には、「仍系取材于中国經史子集之内、從未闌入此等字樣（中国の經典から出典であり、乱用されない）」<sup>230</sup>という考えが強い。即ち、中国の經典で出典があることが「上品」の条件であった。

新語彙を「下品」と捉えて使用しなければ、新語彙は中国の言語社会に入っていないが、上記の理由により新語彙の普及は難しい状況であった。一方で、新語彙の普及の方法として当時、主に二つの手段があり、一つは「奇字解」類の資料を編纂して、教科書や辞書の後ろに附録としてつけるか、或いは独自出版するかであった。最初の「奇字解」は、『和文漢読法』の第三十八節から第四十二節において収録される、と沈国威（2001）で指摘している<sup>231</sup>。「奇字解」の概念は、「中日同文」の日本語意識に基づくことである。ほとんどの教科書や辞書にも「和字」或いは「奇字」の分類がある。当時の代表的な教科書である『東語正規』（1900）の中にも、「庖丁」、「演説」、「野紙」、「改良」などの新語彙が収録されており、巻一では「和字、国訓、新字」及び「訓語、新語」、さらに巻二でも大量な和語が収録された。しかし、日本で言語教育を受けた著者は、「奇字」という概念の影響を受けず、巻一に収録する語彙に関しても言語学の角度から分析を行った。巻二では、単純な単語帳の形式を取り、翻訳が容易なものが多く、また意味

<sup>228</sup> 沈国威（2010）『近代日中語彙交流史——新漢語の生成と受容』、中華書局、第297頁。

<sup>229</sup> 張百熙等「奏定学堂章程 学務綱要」、陳学恂編（1986）『中国近代教育史教学参考资料』上冊、人民教育出版社、第547頁。

<sup>230</sup> 同上。

<sup>231</sup> 沈国威（2009）「和文奇字解について」、『言語接触とピジン——19世紀の東アジア』、白帝社。

の説明が省略されている語彙も少なくなかった。教科書の著者は、これらを簡易な翻訳道具としてではなく、外国語教育の角度から新語彙を解釈している。こうしたシステムは、速成学習や翻訳を求める中国人学習者には満足できないが、「奇字解」の形式も大量に産出される新語彙には適応しにくい。そこで、術語辞書がまだ出版されない時点で、知識人たちは科学的な試みを行った。

1904年の『新民叢報』第二号には、「新釋名」というコラムを設けるとの記載がある。知識人たちの新語彙に向ける視線は、より専門的な書籍へと移行し、術語、特に哲学、経済或いは法律などの語彙が多く現れた。このコラムで紹介された語彙は、有志者の学術研究の力になることを著者が期待している。

社會由簡趨繁、學問之分科愈精、名詞之出生愈夥。學者有志向學、往往一開卷輒遇滿紙不經見之字面、驟視焉、莫索其解、或以意揣度、而差之毫釐謬以千里、其敝也小焉、則失究研學術之正鵠大焉。或釀成謬誤。理想之源泉、所關非細故也。是以不揣綿薄、相約同學數輩、稗販羣書、為新釋名。<sup>232</sup>

（社会は簡単から複雑になり、学問も学科を詳しく分けられ、名詞がますます増える。学者は学問に志すが、本を開くと普段見られない語彙でいっぱいがあり、読んでも意味が分からない。意味を推測しても、非常に大きな違いとなる場合もある。たいしたこととは言えないが、学術研究の道を失うことが大事である。理想に係わることは重視すべきである。力を尽くして、同志を集め、広く資料集して、新釋名のコラムを開設する。）

「略例」では、このコラムを紹介しており、編纂者は一人ではなく、各編纂者がそれぞれの分類を分担している。日本の文章から新語彙を選出し、他の資料や翻訳を参考にし、哲学、生計学、法律学と形而下諸科学の四種類に分類されている。名詞のみ収録されているが、具体的な語彙の選択の理由は特に明記されておらず、出典と英語や日本語語彙も示している。翻訳用語を統一して、術語を定めることは目的で

---

<sup>232</sup> 『新民叢報』第三年第1号附録二、筆者が句読点を付く。

ある。<sup>233</sup>

「新名詞」は、根拠がある複合名詞であるのに対して、「奇字」は根拠のない怪異文字である。そのため、新釋名は中国經典から語源の考証を求めず、各語彙の根拠を意味解釈の形式で並べただけである。

「新名詞」は、一般的な「奇字解」と異なり、少数分野の新語彙を対象とする。ここから、著者が科学的な内容を規範的に編纂する意図が見える。そして、編纂者はこれらの内容を冊子にし、出版する計画もあり、新聞紙のコラムにしたのには、読者の反映を確かめるためでもあった。

予告を含め、「新釋名」が三号のみ出版された。以降出版が停止された理由は不明である。三号には合わせて新名詞「社會」、「形而上学」、「財貨」の三語を収録した。この三語は、第三年第二号に収録され、「財貨」に対する説明の第二部分は第三号に載せられた。なお、「社會」及び「形而上学」は哲学類、「財貨」は生計学類に属する。

「社會」は英語、ドイツ語とフランス語三つの語彙を示し、「採譯日本建部遯吾社會学序説及教育学術研究會之教育辭書（日本の建部遯吾の社会学序説及び教育学術研究会の教育辭書の一部により翻訳する）」<sup>234</sup>、「形而上学」は英語語彙のみを示し、教育辭書から翻訳された。

そして「財貨」は英語とドイツ語語彙を示し、「日本金井延社會經濟学（日本の金井延の社会経済学）」から採録し翻訳されたものである。

各語彙に対する解釈は、しっかりと分析されており、翻訳だけではなく、各言語での使用方法まで説明されている。さらに、編纂者は個人的な意見を加え、当時の中国語訳には正確に翻訳されておらず、日本語の訳語を推薦している。例えば「社会」は、五つの基本定義に加え、「合此五者則「社會」之正確訓詁（この五つを合わせて社会の正確な訓である）」<sup>235</sup>と説明しており、動物社会、植物社会などは仮借で、「中国於此字無確譯、或譯為人羣、未足以包舉全義、今從東譯（中国はこの語彙に対して正確な訳語がなく、人の群れと訳す場合があり、意味を全て表せなく、今は日本訳を従う）」と勧めた。そして「形而上

<sup>233</sup> 具体的な内容は本文の附録三に書いてある。

<sup>234</sup> 『新民叢報』第三年第二號附録二。

<sup>235</sup> 『新民叢報』第三年第二號「新釋名」、第3頁。

学」の説明では、日本語訳の原因は「不能得簡省之詞以譯之。因取易繁之語、錫以今名(簡略に訳さなく、複雑な語を取り今の訳語になる)」であることを指摘した。最も長い解釈を取り扱う「財貨」は、文中に挿入した注釈を通じて、言及する法律や経済に関する術語を説明し、当該語彙の概要が図表の形式をまとめコラムの最後に附録されている。

「新釋名」の停刊理由が何であったのかは不明であるが、筆者の見解では、専門語彙に対して読者の受容度が低い、ということが大きな原因ではないかと考えている。最も重要な原因は、漢字で表す語彙の根拠を、中国經典ではなく西洋書籍から探し出すことである。ところで、この「新釋名」の試みから、当時新名詞に対する翻訳はさらに専門化になることも見られる。一方、語彙の説明に関しては、中日同文意識の限界を破り、より正確な日本語訳語を薦め、当時中国の知識人たちの日本語意識と新語彙に対する観念の変化も見える。こう見ると、「新釋名」は「奇字解」とは言えないが、詳細な説明を加えているところから見ると、中国の知識人に対して語彙の出典の重要性を垣間見ることができる。出典がない語彙は「奇字」であり、その後出版された各種「奇字解」類の書籍もその証拠である。

ところで、「新釋名」のようなタイプの書籍が出版されるということは、単純な「奇字解」のような書籍では知識人たちは満足できず、簡単に調べられても新語彙の普及に有利ではないと言える。新語彙は中国の古典からの出典ではないため、粗野な語彙と考えられ、語彙の上品さはその「出身」で決められていた。下品の原因で使用を避けたら、新語彙は中国の言語社会において受容の困難さは想像できる。「新釋名」の停刊後も、「奇字解」類の書籍は出版されたが、かつて漢字をはじめ、文字と文化は日本に伝わり、日本に大きな影響を与えた中国が、日清戦争の戦敗により、日本から逆流する新語彙に対して、抵抗な気持ちを持っていることも当然である。そのため、新語彙は日本のものではなく、本来中国の古典語彙であることを証明しようと、語彙の語源を探す方法がある。こうした「西学中源説」の「日本語版」に夢中になる知識人が少なくなかった。新語彙を広げることが本来の目的であるが、一方で日本語に抵抗する民族主義の側面も伺える。この時期の代表作として、但燾の『日本語古微』が挙げられる。

### 5.2.2 『日本語古微』

著者は、但燾（1881－1970）、字は植之である。別号天囚・天囚居士・觀復道人など、中国湖北省蒲圻（今赤壁市）の出身で、詩人、翻訳家である。光緒二十九年（1903）、日本に渡り、師範速成班から後に日本中央大学予備班に入り、英仏学科を卒業した。日本に滞在期間中、但燾は当時日本に行く視察官にも協力を依頼して、中国の古典書籍を大量収集した。その後、アメリカのエール大学に進学する計画は、革命活動に参加するという理由で中止になった。1934年、国民政府で秘書として働き、1946年に国史館副館長を担任した。1948年に辞職した後、台湾へ渡り、1970年、享年89歳で亡くなった。著作には、『觀物化齋詩集』、『台員集』、『日本語古微』などがあり、1903年『湖北学生界』の創刊号では、近代最初の清史に関する論文「黄黎洲」を発表した。訳作には、『正則英文教科書』、『モンテッソーリ教育法』などがある。

『日本語古微』は上下二巻一冊本で、日本秀英社から出版され、表紙には「觀物化齋藏版」という文字が書かれている。正文前に「但植之著述總目」があり、但燾の作品を紹介している。中には『海外叢稿四卷』（出版）、『周禮政詮二卷』（別名世界最古之憲政 出版）、『觀物化齋隨筆』（印刷待ち）と『国民英文教科書三本』（出版）などを含め、前の二冊の書名の後ろには、盛宣懷、李家駒<sup>236</sup>、大江敬香<sup>237</sup>の推薦文章と書評が書かれている。『周禮政詮二卷』に対する推薦文章で、盛宣懷は「近今學子與譚政治文教、無不抑中而揚西、而不知東西各國現行之政治、大半本諸中邦古先哲王之遺制、日本同種同文、尤多脗合（最近學生たちと政治・文教を話すと、皆中国は抑えられ西洋を提唱し、各國は今行った政治は、半分以上は中国五大先哲や皇帝の遺制であることを知らない。日本は中国と同種同文であり、ぴったりするところ

---

<sup>236</sup> 李家駒（1871-1938）、字は柳溪である。1907年大使大臣として日本に渡航した、1909年には理学部左侍郎に就任した。

<sup>237</sup> 大江敬香（1857－1916）、字は子琴であり、別號は楓山、愛琴などがある。慶應義塾から卒業していた。明治11年に静岡新聞、後神戸新聞の主筆を担当した。明治24年職を辞め、31年漢詩雑誌『花香月影』を創刊し、41年『風雅報』を創刊した。

が多い)」<sup>238</sup>という言論があり、当時の知識人たちはまだ日本または世界各国に対する文化優越感を抱き、「中日同文」の意識は主張されることがわかる。これが「語源考証学」の基礎となったのは言うまでもない。そして、日本の維新は中国に従うことを指摘して、「維新者非維新也、復古而已（維新は維新ではなく、レトロである）」と評価され、盲目性も垣間見ることができる。

序言には、「宣統二年正月中浣蒲圻但燾植之甫序於日本年東京時遊学之第八年」<sup>239</sup>と書かれており、本書の印行年は1910年であると推測できる。同じく、当時著者は少なくとも八年間日本に滞在していたことも推測できる。著者は長期に渡り日本に滞在した経験により、明治維新以来日本における西洋の新語彙の使用・受容状況をよく理解する。そこで中国の知識人たちは抵抗する必要はない、新語彙というものは、中国の古籍から出典が捜すことができるから、大胆に使うはずである、と著者の意思が見られる。そして、但燾の個人履歴、或いは序言の内容から、著者本人はこの種の本を編纂する意図を持ち、中国社会の文明を実現する役割を担おうとしていたと考えられる。「新釋名」も『日本語古微』のように語源を探す手段も、同じく新名詞を引き入れる目的から出発し、改革の思想を広げ、中国社会の文明を促進する期待を持っている。

日本當隋唐之際、通好之使節、負笈之學士、求法之縉流、往來萬域者絡繹於道。政治、文學率多準式中土、乃至宮室、衣服、語言、俗尚、亦寢濡染。習焉不察、非一朝一夕之故矣。明治維新、西方文物輸至此土、庶物改觀、語言之禁尤甚。號稱博士以專門之學鳴於世者、競稽旁行文字、撮其新義、以譁世取名於漢土、古書雅記、瞠目不解其講義纂述、言冗文僂、不稱其學、先哲有言、文以載道、陳義雖高、攻學雖勤、而辭不足以達之以學。（中略）爰於課餘、取日語之淵源於中土故籍者、排比為二卷、以付手民、庶東都人士讀之、而生水源木本之思。中土學子見之、自此不致駭為域外奇字、深閉固拒、不

---

<sup>238</sup> 但燾（1910）『日本語古微』、第3頁。

<sup>239</sup> 但燾（1910）『日本語古微』、序言、第2頁。

肯寓目於文明之治、或不無小補。<sup>240</sup>

（日本は隋唐の時代から、使節を派遣し、学士と僧侶も、往来が絶え間なく続く。政治、文学は中国を基準として、宮室、衣服、語言、風俗も習う。長く接触すると感じられないが、一朝一夕のことではない。明治維新により、西洋文明が日本に伝われ、面目を一新し、言語は最も変化があるのである。専門的な学問で有名な博士たちは、西洋本により新語彙をまとめ、意味も理解せず、中国でも使われ、学問とは言えない。文章は道理を記載し、深刻な主旨を持っても、勉強しても、意を尽くさないことも、先哲も指摘した。（中略）授業の余暇、日本語の語源を中国古典から取り出し、二巻の書物をまとめて刊行する。本書を読むと、日本人が源を知り、中国人が外国の奇字と思い、抵抗があり、文明に見られないことには、多少役に立つと思う。）

本書は、語彙の解釈と説明に加え、辞書の役割も備えている。語彙の順序に規則は無い。上巻には 191 語（目録には 16 語欠く）、下巻には 122 語（目録には 2 語欠く）、合計 313 語が収録されている<sup>241</sup>。日本語の単語を上置き、読み方を表示されない。中国語の解説はその下にあり、中国古籍の出典を挙げる。上巻「一向」から下巻「思想」まで、右側が日本語の単語、左側が中国語の解説という形式に変わっている。

寺參 日語謂赴寺禮拜者曰寺參、中国屬吏謁長官於公署曰  
衙參、其義同

旭日 詩旭日始旦本此

語彙の品詞分類から見ると、動詞、名詞の数が大半を占める。一字の語彙は 38 語（上巻 24 語、下巻 14 語）、三字の語彙は 4 語（上巻）、四字熟語が 3 語（天長地久、作戰計劃、詐欺取財）収録されている。

---

<sup>240</sup> 上掲、第 1-2 頁。

<sup>241</sup> 本文の附録四に収録する。

残りは全て二字の語彙である。主に日常生活で使われる語彙であるが、政治、法律に関する語彙も収録される。

語源とする中国の古籍は、四書五経、仏経など、多岐にわたる。解説方法は、出典を明記し、日本語の語彙を含む語句を取り出し、日本語との関係を説明している。なお、一部の語彙（「昆布」、「受持」など）に関しては、日本語での使用する頻度が明記されている。

中国の語源との関係は、主に「本此」（これを元とする）、「仿此」（これを真似する）、と「義同」（意味が同じ）三種類に分類されている。また、「義略同」、「義亦通」、「見此」などの言い方も見られる。「本此」と解釈する語彙が一番多いため、ここでは他の語彙を以下のようにまとめた。

- 仿此：出生、国法、理髮、鉛筆、下手、發明
- 義同：寺參、奥、蒲團、名刺、租税、咄、得得、張本、紛、下劣（意同）、被服、試補（與中文試用之義同）、講習、選舉、庶務、番、坪、墮落、縁故、志願、勉強、判事、偽造、適用、避暑、金、注目、調、息、承、不屈、役、控（義通）、造作、相違、衤
- 義略同：嵐
- 見此：七寶、屏風、本職、士族
- 義亦通：亭主、不埒
- 同此：輜重
- 義有歧：生理、折檻
- 他：湯（“湯”字義同、詳しく説明なく、解釋の中に「浴堂」と「浴」も含まれている）、藏（源於此）、聖神、負擔、薪炭、旅行、女史、澤山、物理（甚雅）、国（沿舊稱也）、簞笥（日人以為一物非也）、金貸（非奇字亦異杜撰也）、界、萬（有古義焉）、演説（散見佛經）、法理（有差矣）、林檎（名舊矣）、憲法（仿于有周矣）、裁可（固有所本矣）、国民、普及、一揆、專制（非杜撰也）、左官（待考）、天長地久（見長恨歌）、利口（初系假用後遂延為通稱）、浪人（見柳子厚李赤傳）、驛、省、萬歲（僭妄）、徵兵（見唐尉遲樞南楚新

聞)、交番(交與更同音故誤)、料(廣其義)、秘書(失其義矣)、屬(不謀而同)、秩序(中国近襲用之)

例えば「負担」のように中国であまり使わない語には、日本語の意味を先に解説する場合もある。日本語の意味を説明している語彙に関して、以下にまとめた。

聖神、負擔、薪炭、和田、旅行、女史、澤山、幕府、給事、簞笥、金貸、界、性、出生、挨拶、林檎、憲法、裁可、国法、理髮、寺參、書取、元首、下手、願、奥、發明、一揆、一通、幹事、區、約束、主計、當番、專制、鷹揚、脚氣病、左官、生理、嚙、邸、上品下品、七寶、天長地久、自治、兔角、逐電、利口、稽古、啓上、結構、嵐、鳥居、白徒、姫、子、家督、娘、一端、霖雨、浪人、亭主、普請、器量、取次、但馬、折折、鼯鼠、披露、折角、馬鹿、阿房、用事、妻君、典獄、師匠、被服、假名、作業、試補、受持、歳暮、猶豫、販賣、理窟、周年、講習、氣分、驛、道具、省、職業、控訴、復古、萬歳、大化、學習、遠慮、訪問、一局、番、坪、交番、根性、勉強、武庫、料、寶應、秘書、性分、金、小言、洗濯、無法、天保、銓衡、心細、行啓、面白、貸、貸貸借、監事、監察役、太廟、太、按摩、都督府、上州、下關、總領、調、息、於、承、不屈、役、控、不埒、仕、外人、獨身、寮、統監、總監、開業、古物、見物、進物、同意、内職、委付、告訴、本職、倉庫、公使、詐欺取財、造作、平均、相違、士族、作戰計畫、掃除、入用、割烹、折檻、我慢、惡口、旅館、意匠、篆刻、奉公、奇麗、下女、婢、屬、秩序

「書取、性質、条件、監事、条例、思想、日本民法法連」など、解説には英語訳を記している語彙もある。また、「雅馴」に言及する語彙は、「物理、裁可、驛」の3語がある。

現代日本語の由来は、普通翻訳、仏經、古典、漢訳西洋書と好書(明宋時期の通俗小説)である。日常生活には多数の仏教用語が活用され、

本来の意味を踏襲しても、同形異義であっても、漢訳仏經を通じて借用する梵語音訳の語彙もある。仏經に関する知識がなければ、こういう語彙の語源を考察することができない。筆者がこれまでに調査した語源考証に関する書籍の中では、本書が最も古い仏經出典に言及したものである。仏經関係の語彙は、「界、性、演説、機關、法理、普及、證明、兔角、亭主、普請、下劣、受持、意識、道具、墮落、緣故、志願、根性、莊嚴、我慢、惡口」など 21 語あり、『法華經』、『藥師經』などの仏經に関する語である。中でも、「界」と「性」の 2 語は、西洋書籍の翻訳に言及した語である。

界 日人喜用界字、如政治界、商業界。始以為直譯歐文、及觀佛書、如眼界、色界、禪界、識界、塵界、三界、法界等字、不一而足。始悔曩日之不學。

性 日人譯歐西文法有男性女性之分、佛書有自性、種性等稱。日語當本此。

上述の例から、日本語で仏教用語を使って西洋語彙を直訳することが推測できる。例えば、ドイツ語の語尾に「界」があり、日本語に翻訳する場合はそのまま直訳する。現在、「界」と「性」は共に接尾語として使われ、著者が例語として挙げている「政治界」、「商業界」も同じ使い方である。これも、当時こういう接尾語は既に中国国内で使われたことも分かる。

一方、「国民」、「憲法」のような中国社会で流行している語彙に関しても、本書では多数収録されている。これも序言の「文明之治」に対する期待を表した。そして、一部の語彙に対する説明文には、中国の知識人たちは本来の語彙の意味を忘れ、学習不足を指摘するところもある。例えば、「昆布」、「藏」、「聖神」などがある。特に「昆布」は本書の最初の語彙として、率直に批判する説明文の言葉は、著者が勉強不足の知識人に対する残念さも見て取ることができる。

昆布 本草綸布一名昆布、出高麗、如卷麻、黃黑色。今海苔紫菜皆似綸。恐即是也。按昆布之名、日本市井皆曉、而吾國士

大夫知之者甚尠、科舉取士、学子不讀書、其陋逐一至於此。

藏 禮記月令穀藏曰倉、米藏曰廩。又史記老聃為周藏史吏。  
今日本大藏省之名、吾国多有不解其意者、不知実源於此。

もちろん、こういう語源考証の方法から中国知識人の民族主義が見られる。そのため、日本語に対する批判もある。「女吏」、「簞笥」を例に見てみたい。

女吏 日人稱閨秀曰女吏（不限於已嫁未嫁）。按禮女吏乃女奴曉書者、是以卑稱加之於人也。亦不察之甚矣。

簞笥 日人所用以貯衣物之具曰簞笥。公羊昭二十五年傳注、圓曰簞方曰笥、日人以為一物非也。

著者は、日本で八年間の滞在経験があり、ある程度の日本語知識があったと考えられる。具体的にどのような日本語教育を受けたかは不明であるが、語彙の説明から、著者が日本語の語彙に対する理解は日常会話程度であったことが推測できる。このため、本書に収録された語彙は主に日常用語である。例えば、「挨拶」に対し、以下のように解釈されている。

挨拶 日語謂初見寒暄曰挨拶。揚子方言強進曰挨、正字通。  
今俗凡物相近謂之挨。拶、逼也。案挨拶云者、蓋與人接近而陳辭之意。日語挨拶二字義當本此。

「挨拶」という語は、『広辞苑第六版』では次のように書かれている。

あいさつ【挨拶】①〔仏〕禪家で、問答を交わして相手の悟りの深淺を試みること。<sup>242</sup>

---

<sup>242</sup> 新村出等編（2008）『広辞苑 第六版』、岩波書店、第5頁。

また、『東語正規』でも、「相見禮」<sup>243</sup>と簡潔に説明されている。しかし、著者の目的は、日本語教科書を編纂することではなく、語源考証にあるため、このような解釈に物足りなさを感じていたのではないかと考えられる。

その他に、「奥」という字は、黄遵憲は遼語（遼東半島）から生まれた字であると指摘しているが、著者は言及していない。

さらに、「金貨」に対しても次のように解釈している。

金貸 日人以金錢貸人為業者、輒榜其門、曰金貸。莊子莊周貸粟於監河侯、曰以金貸汝。史記貨殖傳、子貸金錢、是金貸之名。固非奇字、亦異杜撰也

ここから、日本語の「金貨」は名詞として使われることが分かる。しかし、中国語では、動詞は語彙構成の位置にこだわらず、現在でも「文選」、「筆洗」のような語彙がまだ使われている。よって、語彙の構成形式から見ると、中国語で「金貸」は特別の存在とは言えない。しかし、著者は、中国語の「金貸」を、語彙ではなく動詞と名詞からなる短文として解釈しているが、その根拠は明確ではない。この他にも、こうした根拠が明確でない語彙は本書の中で多く見られる。例えば「組織」、「清酒」、「気分」、「面白」などがそうである。これらを見ると、著者が中国古典に対する知識はあっても、言語学に関する研究はそこまで深く進めないことが推測できる。

一方、上述のような解釈する方法から、語源考証は目的性を強調する方法であることが見られる。これは語彙の正当性を証明するために使われ、中国の伝統的な旧式の小学校教育方式である。即ち、語彙の正確性は中国古典で使われているかどうかによって決められる。出典は使用の基礎になり、百科全書類の標準或いは科学的な方法で定められていない。そして、一部の語彙は「文字列検索」のような方法で説明を行う。即ち、中国古典から同じ文字を探し出し、この二つの文字は語彙を構成しない場合もある。例えば、「社会」の出典には、「社」と「会」の二文字が連続ではない。「亭主」は一つの文字のみ説明する

---

<sup>243</sup> 唐宝鏐、戢翼翬（1900）『東語正規』卷二、第93頁。

か、あるいは「寺参」、「當番」などのような「同義語」を挙げて出典を証明している。また、「願」のように、古典から見つからない語彙に関しては、日常用語で当該語彙が中国から伝わることを証明している。こうした語彙に対する説明は、意味解釈や語源考証とは言えず、語源は中国語であることを説明しているにすぎず、「中日同文」の日本語意識が、中国の知識人に対しどんなに影響を与えているかもここから見受けられる。

日本語の新語彙の語源は中国の古籍にあることを証明するために、この種の本が編纂された。収録された語彙と古代中国語との関係は、以下の四点にあると考える。

- 1) 当時の新語彙は元々中国語の古代語彙であり、用法も変わらず、外来の新語彙ではない。(例)「旭日」
- 2) 中国の古代語彙と若干異なり、時代と共に変わる。(例)「嵐」
- 3) 文字だけの連用、或いは一文字の語彙の連用で、語彙の意味とは関係なく、品詞の分類が異なる場合もある。(例)「組織」
- 4) 連用する例がない、或いは語彙を構成する文字の中で、一文字だけの出典を挙げ、解説している。(例)「歳暮」

上述のように、清末の知識人たちは日本語と実際に接触することにより、日本語を外国語として認めていたが、「中日同文」の日本語意識は中国社会の一般常識と言っても過言ではない。日本の書籍を翻訳し、西洋知識を学ぶ過程において、日本語学習の重要性も増してきた。『東語正規』のような外国語教科書で系統的に日本語を学習するより、速成の学習方法に傾く。『和文漢読法』の出版は、こうした要求を満たした。しかし、この本は中国社会に新たな日本語の学習方法をもたらしただけでなく、「奇字解」という新語彙の普及手段も知識人たちの視線を引きつけた。「奇字解」と速成学習の相互作用によって、日本語学習をより良いものにした。さらに、新語彙の普及と日本書籍の翻訳にも、「奇字解」の役割が無視できない。

次々に生み出される新語彙に対して、科学ではない日本語認識に基づく「奇字解」の不足も軽視できない。「奇字解」と比べると、新

語彙の根拠を探す「新釋名」は、科学的な方法を試み、新語彙の普及を目指す。しかし、一部の知識人は「奇字解」の不足に気づき、コラムを設立したが、理由が分からず中止するのは、読者には納得できないことであつたに違いない。文化上の優越感による民族主義が一般常識である時代では、西洋書籍から漢字語彙の根拠を探すことは良い選択とは言えない。そこで、中国古典による語源の考証というのは、当然のことである。

語彙の根拠を探す理由には、通常二通りあると考える。一つは、記憶を深めるためで、例えばラテン語からの医学語彙がそうである。もう一つは、語彙使用の正確な知識を普及するためである。『日本語古微』は、この二通りの目的以外に、民族主義の感情の原因もある。敗戦によって、盲目的な優越感は下がったが、「中日同文」の日本語認識は知識人に対してまだ一般常識であつた。こうした環境の下で、中国社会に新語彙を受け入れるため、語源が全て中国の古籍にあることを証明しようとする本書が出版された。もちろん中には、「会社」のように全く中国語から影響を受けない外来語彙もある。しかし、『日本語古微』のような語源考証は時代交代の時期で中国の知識人たちのやむを得ない選択でありながら、科学ではない日本語認識に基づく当然である試みであつた。新しい事物に対する不安は、恥ではなく、広い範囲で新語彙を納得できる方法を探求し、このような語源からの試みも当時の知識人たちの勇気であつた。普通教育を受けられない一般人まで普及することは困難であるが、新語彙を受け入れ、社会的な影響を与えた。

### 5.3 本章のまとめ

日本語を外国語として学習する過程において、清末期は最も重要な時代である。清末期には、百冊以上の教科書が出版された。さらには辞書と「奇字解」が編纂されたことは、中国人の日本語学習に大きな役割を果たした。

辞書と「奇字解」は中国人の日本語学習、特に自主学習に効果的である。当時、中国では学校教育はまだ普及しておらず、日本で使われている教科書は日本人向けのものが多く中国人には使えなかった。そ

のため、自主学習をするにしても、まず教科書や学習資料を集めることが困難であった。そのため、多くの日本語辞書は、発音、文法に関する内容も収録されていた。ここから、当時の中国人が日本語学習に強い意欲を持っていたことが伺える。こうした辞書は、清末における中国人向け辞書の大きな特徴であり、出版時期が早いものほど顕著である。

そして、「奇字解」は普通の辞書や語彙教科書と比べると、出版数が大きな差を持っている。しかし、「奇字解」が他の教科書より注目された。例えば、教科書や辞書にもほとんど「和字」、「奇字解」の分類がある。辞書と「奇字解」は中国人の需要に応じて、当時の日本語学習する様子を反映する。一方、「字典」から「辞書」までの変化は、中国語言語学の進歩も見られる。この文字から語彙への変化は、新語彙を受容するためには避けて通れない道である。辞書または「奇字解」のような辞書機能を備える書籍が出版されることは、外国語学習において、教科書が出版されるのと同じくらい必然的な一環である。辞書の種類には、口語、術語、作文などがあり、ここから中国人が日本語を外国語として学習する過程が伺える。

辞書や「奇字解」は、翻訳に便宜を提供し、新語彙の普及と言語学・文法の教育にも影響がある。そして、辞書や「奇字解」は、当時の知識人にとって、最初は翻訳の道具であったが、後に「奇字解」は目的性を強く持ち、翻訳或いは新語彙の普及を目指す目的に変わって行った。簡単な訳語から語源考証まで、科学的とは言えないが、中国人の知恵と努力も垣間見ることができる。これは「中日同文」の意識に影響される日本語学習者に対して、辞書より受け入れやすい手段であった。

一方、辞書は「術語」の翻訳と受容に関しては、大きな役割を果たした。西洋文明の新語彙に対して、「奇字解」、特に語源考証の角度からの「奇字解」より、辞書の説明は、専門的で且つ正確である優勢を持っている。辞書は、収録する語彙数も「奇字解」或いは語彙類関係の教科書より多く、特に術語の収録に重点を置く傾向が見える。その上、各学科の知識も広げる役割を担う。当時、日本書を翻訳することは、西洋文明を習うことが本来の目的であった。この点から考えると、

辞書、特に術語収録を中心とする辞書が、本来の目的と合致している。

最後に、辞書から当時の知識人たちの日本語に対してどのような認識を持っていたのかが見て取れる。「奇字解」は「中日同文」に基づく産物であり、語源考証を行うことも文化上の優越感を満たす理由でもある。これは「奇字解」だけが持つ特徴とも言える。もちろん、辞書に収録される「奇字解」の部分の内容は上述した通りであり、特に中国人により編纂された辞書にはこういう形式が多くみられる。また、辞書の種類と内容の変化から、中国人が「読む」ための学習以外に、「聞く」、「話す」、「書く」に至るまで、全般的に外国語として学習しようとしていたことがわかる。これも、中国人が科学的に日本語を扱うことを反映していると言える。ちなみに、日本人が編纂する辞書に収録された発音、文法に関する内容は、専門教科書と比べても決して引けを取らないすばらしい辞書もある。これにより、正確な日本語知識を伝え、中国人の日本語認識に影響を与たのであろう。

清末における辞書と「奇字解」は、時代性を持ち、限界性もあった。長い日本語の学習史においてはわずかな時期であるが、中国人が日本語学習に対して探索した証であり、日本語を外国語として受け入れ、認識する過程で看過できないものである。この時期の試みを乗り越えて、後の辞書編纂、さらに日本語学習にも、大きな影響を与えたと言える。

## 第六章 結論

中国、そして中国人にとって、清代は特殊な時代である。満族の統治により、異民族の言語に対する受容と学習は既に国民の日常生活に染み込んだ。またこの時代、海外諸国は産業革命を通じて、次々に近代化国家になった。すなわち、中国がだんだん国際社会における優位性を失った時代である。本来、中国人は「同文」の日本語認識を持っていた。こういう観念の影響で、日本語はもちろん、日本という国に対しても重視しなかった。清代に入ると、中国知識人たちは「中日同文」の日本語認識を持ちながら、日本という国と実際に接触し、注目し始めた。言語における自慢とともに、軍事・政治・経済などの方面で日本に学ぶ謙虚さも持っていた。こういう状況で、中国語と日本語の異同に気づき、単純な「同文」と思わなくなった。文字と文法などが全く違う言語である日本語を、外国語として学習する。確かに社会全体から見ると、「中日同文」の認識は一般的であったが、この時代は科学的な日本語認識を持ち始め、大切な過渡期であることを認めなければならない。

また、この時期に相次いで起こった戦争により、自身の国力の不足と限界を認識し、外国の先進技術と文明を輸入しようとする風潮が高まった。西洋言語の学習や書籍の翻訳は、全てその目的を実現するために行われたのである。敗戦後、明治維新に成功した日本にも注目しはじめ、距離における便利さだけでなく、西洋言語と比べて漢字を使っている日本語のほうがより都合がよいとされた。そして、日本語学習も西洋言語と同じ使命が与えられ、先進技術と文明を輸入する際の道具とする実用的用途が拡大されたのである。当時の中国学習者に対して、その実用性は「翻訳」のことである。もちろん、日本語を学習する目的は貿易や生活における利便性の追求、日本語研究、或いは個人価値の実現などがある。しかし、清末の日本語学習は、特に初期の場合、素早く日本書籍を翻訳することが最優先であったため、さらに科学ではない日本語認識の影響を加え、発音、文法などの内容を省略した教科書が多かった。

こういった現象も、外国語、特に日本語学習史の観点からみると特

殊な時代であったと言える。中国人の日本語に対しての記録は単純な方言から外国語教育の形に移り変わった。科学ではない日本語認識による影響はまだ強いが、外国語教育が一つの科目として徐々に発展し、日本語学習も外国語学習として進んでいった。教科書は外国語教育学設立の欠かせない存在であるが、清末の西洋言語、特に英語の教科書は、残された数が日本語のものより少ないため、学習方法或いは言語分析に対する調査が難しいことが原因である。日本語の場合は、多数の教科書が残され、歴史・言語・文化などの角度から考察できる。さらに、清末に限らず、中国人の日本語教育史、留学史の研究に対しても、重要な資料である。本論文は、清末に出版された教科書を分析し、こういった教科書を使っていた学習者たちが習得する内容と方法を明らかにするものである。

全体から見ると、方言として日本語を記録している『東語簡要』（1884）から、中国人による編纂した最初の科学的な日本語教科書である『東語正規』（1900）が出版するまで、日本語教科書は水準において飛躍的である。これは、中国人の日本語に対する認識の変化だけではなく、日本語を学習する意識と方法の変化と言える。この進歩により、教科書の分類と収録される内容はますます細密化され、目的性が強く見えるようになった。例えば、語音は最初切音で表記されたが、だんだんとローマ字で表示されるようになり、さらに口腔縦断面図を添付した説明になった。そして、語彙の分類は『東語簡要』の18類から、十数年間で増大し、『東語正規』では46類までに分類された。その後、辞書の出版により、語彙の分類と数量、新語彙の受容もさらに拡大された。文法においては、「虚字」についての一知半解の紹介から、品詞類に対する詳細な説明まで掲載され、両言語の文法における相互に影響を与えることも見られる。例えば、中国語の文法に「副詞」という術語がなかったが、『東語正規』（1900）の中にこの術語を引き入れることは最初である。さらに、辞書に各学科の術語を収録して、術語の導入により、新語彙と新しい技術の普及にも大きな影響を与えた。これは、中国人が自発的に日本語を学習した証であり、中国人の日本語の学習経験による進歩と言える。

もちろん清末における教科書は時代の制約もある。例えば、当時の

日本語教科書の出版状況に対して、以下のような叙述がある。

近來之日語書、汗牛充棟、或由通漢文之日人所著、徃々以漢文不足之故、僅能粗淺解釋、至其微妙而難於漢譯之處、則不漢譯以掩其短、或爲通日語之華人所著、其解釋詳明者固不少、然徃徃以日語不足之故、多牽強附會、以達其欲說之意、致日語有失真之憾。

244

（最近の日本語教科書は、汗牛充棟であり、漢文を通じる日本人が作られたものは、漢文知識の不足により、浅はかな説明しかできない。微妙で漢訳しにくい場合は、訳さず短所を隠す。或いは日本語を通じる中国人が作られた教科書である。詳しく説明するものが確かに多いが、日本語能力の不足で、主観的な意味を表すため牽強附会の場合が多く、残念なことに日本語の意味は元のままではない。）

これによると、日本語学習は当時日本語を外国語として認識せず、翻訳などを求める速成教育状況であったことも垣間見ることができる。

清末の日本語教科書に対する分析を通して、当時の教科書の特徴が見られる。28年間に、数量の変化が非常に著しく、1906年に出版数のピークを迎えた。これは日本留学の状況を反映するのみならず、日本の先進技術の学習に対する要望も垣間見ることができる。そして、中国学習者の状況と需要に応じて編纂されたことは、清末における日本語の教科書のもう一つの特徴である。清代以前と比べると、当時の中国人は自己流の学習方法を模索し、正式な日本語学習と言える。日本語学習の初期、三冊の教科書が出版されたが、当時参考にできる正式な日本語文法書はなく、語彙の収録も清代以前の記録しか参照できなかった。そして、日本留学のブームが高まったことにより、著者は日本に留学する意図を持つ中国人を対象として教科書を作成したのである。こういう単純的な対象向けの教科書には、当時の日本語の学習傾向が見える。本場の日本語学習、在日生活の交流に役立つことを

---

<sup>244</sup> 著者不明（1907）『日語用法自習書』、凡例。

期待する、というものである。また、正確な日本語を修得することにより、日本の新知識を取り入れることも期待された。この日本語学習状況において最も重要なことは、新しい外国語教育方法をもたらしたことである。著者が就学していた日本学校の教師達は外国人にどのように日本語を教えるかについても考えており、教授方法から教科書作成まで試みたことも推測できる。また、著者が教わった内容は『東語正規』（1900）などの教科書の中に反映された。

一方、日本留学ブームが起こったため、日本人教師も中国人への適切な教育方法を試行し、清代留学生はその影響を受け、科学的な教育方法と学習経験を中国国内までもたらした。松本亀次郎を代表とする日本人教師達は、教育現場で中国人の特徴を観察し、有効な指導方法をまとめ、正確な日本語知識を教授した。また、教授法からは学習者の情報も見られる。例えば、『言文対照漢訳日本文典』（1904）では文構造の角度から文法を説明している。これは当時、日本語の文法システムはまだ完成していなかった理由はもちろん、学習者たちが伝統的な「字」に基づいた文法説明に対して満足できなかったことも原因であろう。長い時間をかけて重版されたことにより、学習者たちが既に文法の重要性を認識していたことも証明できる。そして、『言文対照漢訳日本文典』（1904）のような版を重ねた文法教科書から、日本語文法の変化が見られる。口語と文章用語の区別はもちろん、品詞の分類の変化も明らかに見える。例えば、1904年に出版した『言文対照漢訳日本文典』の第三版では、まだ「形容動詞」という分類がなかったが、1935年に出版した第38版に書いてあった。文法や会話に対する学習の需要には、日本語学習の目的と方法の変化が見られる。もちろん、当初の目的は交流上の不便を解決するためであるが、上述のように、清末において日本語学習には、民族主義や新しい文明を輸入する使命が課された。それも速成の教授法と学習法が主流となる原因である。日本の学校でも「普通科」と「師範科」に分けられた。しかし、日本語に対する認識が深まるにつれ、意味を推測して「読む」ことだけでは不十分である、発音・会話・文法など、系統的な日本語知識を把握しないと、翻訳も舌足らずで意を尽くさない。この点に気づいた中国人学習者たちは、完全な外国語学習が必要となった。

そして、外国語を学習し出すと、辞書が必要な道具として登場したことも当然である。清末における日本語の辞書は、辞書だけではなく、教科書の機能も持っていた。特に初期の辞書には、ほとんど発音と文法の内容を収録した。質的には、専門的な教科書にも負けず、詳細を尽くしている。辞書や「奇字解」のような辞書機能を備える書籍が出版されたことは、外国語学習において、教科書の現れと同じく必然的な現象である。辞書の種類は口語・術語・作文などがあり、それは中国人が日本語を外国語として学習する過程であることも見てとれる。「奇字解」は「中日同文」の意識に影響される日本語学習者に対して、辞書より受け入れやすい手段である。中国の伝統的な知識人たちは、中国の古典著作から日本語語彙に対して「語源考証」を行い、民族のプライドを保つための手段である。しかし、たとえこのような科学ではない方法であっても、新語彙の普及を拡大してている。清末における辞書と「奇字解」は時代性を持ち、ゆえに限界もあった。日本語の学習史において、ほんの短い時期ではあるが、これは中国人が日本語学習に対して模索した証明であり、日本語を外国語として受け入れ、認識していった過程で看過できないものである。この時期の試みを乗り越えて、後の辞書編纂、さらに日本語学習にも、深い影響を与えたと言える。

本論文は清末における日本語教科書に対する分析を通じて、当時の日本語学習の様子を考察した。外国語の学習において、中国の伝統的な言語学習法は適切ではない可能性がある。特に、日本語が中国語と同じ漢字を使用しているという利便性が高い点も、中国人学習者が適した日本語学習法を探す障害である、といえよう。そのため、清末だけではなく、現在でも日本語に対する不完全、或いは不科学的な認識が存在している。外国語教科書を編纂することは、教育を受ける過程を表すことに限らず、外国語の受容と学習の過程も反映するものである。この過程で、中国人の知識欲と智慧が見てとれる。外国語教科書の編纂は、試みが成功或いは失敗したか、品質がいかなるものであったかを問わず、後の研究者に対して、貴重な参考資料となっている。例えば、清末における日本語教科書の編纂方法は、今でも用いられている場合もある。当時、『東語完璧』(1903)

は速成会話の面で、右に出るものはなかった。言語の実用性に重点を置いている解説など、現代の速成会話教科書の範例と言える。

同時に、一つの社会における外国語に対する受容状況は、該当言語の教科書の変化からも一見できる。例えば、術語—特に文法の術語である。中国語には存在しない概念を正確に学習者たちに説明することは、外国語学習において、簡単なこととは言えない。さらにその言語が、まだ外国語として認識されず、社会全体のなかでは認知の初期段階に置かれていた場合、語彙の引用と翻訳状況から、当時の中国人の新語彙に対する受容の程度がわかる。清末という短期間に、日本語の語彙の意味は正確に伝えられていた。これは、政府による学習の提唱はもちろん、知識人たちの努力も無視できないものである。例えば、「奇字解」という特殊的な語彙学習法がある。これは、時代に限定され、必ず淘汰される存在であるが、新語彙の受容、辞書の編纂、そして日本語の学習に対して、一定の意義を持つ。

二つの言語を対照して相違点を探し出すことは、外国語を学習する方法の一つである。しかし、清末では、日本語の漢字からの影響を受けた中国人が多数であった。同時に、敗戦によって、日本語学習に対する意義も、巨視的な背景からの学習であると受け入れることができなかった。これも時代の限界性であるが、こういう視点を表す教科書の存在も認めなければならない。最も典型的なものは、日本語の文字である。当時、西洋言語に対する学習は既に形ができていたため、英語の基礎を持つ知識人は少数ではなかった。『東語入門』（1895）のような教科書は、日本語の文字に対して英語のアルファベットと類比して、知識人に受け入れられやすい部分もある。もちろん、多数の教科書はやはり仮名と中国語を対照的に説明したが、英語との比較は、著者が日本語を外国語として見ていたことを反映している。ゆえに、現在の視点から見ると、清末における日本語教科書と日本語学習法は、参考にする価値があり、中国人の日本語学習史において、基礎を建てる時期といえよう。

## 参考文献

### 論文類

#### 日本語

- 木村晟（1973）『『遊歴日本図経』の日本語彙について』『駒沢大学文学部研究紀要第 81 号、第 83-133 頁
- 平徳沖菊（1943）「支那人の日本語研究」『日本語』第 3 巻第 4 号、第 54-66 頁
- 谷口知子（2011）「伊澤修二の日本語教材 『東語初階』・『東語真伝』」関西大学東西学術研究所紀要第 44 号、関西大学東西学術研究所、第 341-355 頁
- 実藤恵秀（1942）「支那人の見たる日本語」『日本語』第 2 巻第 10 号、第 30-38 頁
- 永野賢、鄭高詠（1993）『大矢透「東文易解」の編纂意図—中国人に対する日本語教育の草創期における先人の苦心』『日本語学』7 月号、第 86-97 頁
- 濱田敦（1940）「国語を記載する明代支那文献」、『国語・国文』第 10 巻第 7 号、第 9 頁
- 藤村道生（1967）「治初年におけるアジア政策の修正と中国—『清日修好条規』草案の検討—」『名古屋大学文学部研究論集 44・史学 15』、第 3-26 頁
- 吉岡英幸（2000）「明治期の日本語会話教材」『早稲田大学日本語教育研究教育センター紀要』第 13 号、第 129-139 頁
- 吉岡英幸（2002）「明治期の語法型教材」『早稲田大学日本語教育研究教育センター紀要』第 15 号、第 133-146 頁
- 吉岡英幸（2005）「松本亀次郎編纂の日本語教材--語法型教材を中心に」『早稲田大学日本語教育研究』6、第 15-27 頁
- 渡辺三男（1962）「吾妻鏡補所引の日本語彙—校本『海外奇談国語解』—」、『駒沢大学研究紀要』20 号、第 20—21 頁

#### 中国語

- 坂本哲平（2009）「丁福同譯釋『中等日本文典譯釋』小考」『日本近代語研究』第 5 号、第 157-175 頁

- 陳娟 (2012)「初期中国人編纂の日語教材——以『東語簡要』、『東語入門』、『東語正規』為例」東アジア文化交渉研究第 5 号、第 281-303 頁
- 陳娟 (2013)「『東語完璧』之研究」『或問』第 23 号、第 89-106 頁
- 陳娟 (2014)「清末における日本語の辞書——中国人学習社を対象として」東アジア文化交渉研究第 7 号、第 519-530 頁
- 黃彬 (2008)「關於漢譯日本詞典及其詞彙」中日研究生國際論壇 2008 漢語漢文化論叢書、第 229-248 頁
- 江家發、紹甜甜 (2011)「晚清化学圖書翻譯出版的特点与走向」『大学化学』第 26 卷第 6 期中国化学会、第 81-86 頁
- 李小蘭 (2002)「清末日語教材之研究」浙江大學修士論文
- 李小蘭 (2003)「試論清末東文學堂日語教科書」『解放軍外國語學院學報』第 2 期、第 38-42 頁
- 李小蘭、史占泓 (2004)「清末日語教材的特點及其影響」『日本學論壇』第 4 期、第 41-47 頁
- 李小蘭 (2006a)「清季中国人編日語教科書之探析」『杭州師範學院學報 (社會科學版)』第 4 期、第 97-102 頁
- 李小蘭 (2006b)「丁福保與日語教科書」『日本思想文化研究』第 7 期、第 91-97 頁
- 孫海鵬 (2007)「「遼東詩壇」研究」『典籍文化研究』中国歴史文献研究会大連図書館、第 25-86 頁
- 沈国威 (2006)「黃遵憲の日語；梁啓超の日語」『或問』第 11 号、第 137-148 頁
- 沈国威 (2008a)「關於「和文奇字解」類資料」『或問』第 14 号、第 117-128 頁
- 沈国威 (2008b)「日漢辞典的黎明期」『或問』15 号、第 75-84 頁
- 沈国威 (2009a)「近代東亞語境中的日語——從「方言」到文明的載體」『或問』第 16 号、第 85-97 頁
- 沈国威 (2009b)「日本発近代知への接近——梁啓超の場合」『アジア文化交流研究』第 2 号、第 217-228 頁
- 沈国威 (2010)「日語難嗎？——以近代初識日語的中国人為說」関西大学東西學術研究所紀要第 43 輯、第 119-130 頁
- 王敵非 (2010)「清代滿文讀本會話類文獻研究」『滿語研究』2010 年第

1 期、第 55-63 頁

吳馳（2012）「由文到語」湖南師範大學博士論文

謝青（1995）「論清末留學畢業生考試」『歷史檔案』第二期 中國第一歷史檔案館、第 100-104 頁

許海華（2008）「近代中國日語教育之發端——同文館東文館」『日語學習與研究』第 1 期、第 52-58 頁

左玉河（2008）「論清季學堂獎勵出身制」『近代史研究』第 4 期、第 45-57 頁

周君閑（2007）「晚清留學畢業生獎勵制度研究」南京師範大學博士論文

## 單行本類

### 日本出版

埋橋徳良著（1999）『日中言語文化交流の先駆者-伊沢修二の華音研究』白帝社

内田慶市（2009）「ピジン——異言語文化接触における一つの現象」、『言語接触とピジン』白帝社

大槻文彦（1891）『語法指南』、北原保雄、古田東朔編『日本文法研究書大成』勉誠社

大友信一氏・木村晟（1972）『東語入門本文と索引』汲古書院

沖森卓也編（1991）『資料日本史』桜楓社

大友信一・木村晟（1972）『吾妻鏡補所載海外奇談国語解・本文と索引』小林印刷

京都大学文学部、国語文学研究室編（1968）『纂輯日本譯語』、京都大学国文学會發行

古典研究会（1974）『和刻本明清資料集』汲古書院

外務省編纂（1949）『日本外交文書』日本国際連合協会

黒木彬文、鱒澤彰夫編・解説『興亜会報告』（1879）興亜会・亜細亜協会

佐々木揚（2000）『清末中国における日本観と西洋観』東京大学出版会

佐藤三郎（2003）『中国人の見た明治日本——東遊日記の研究——』東方書店

長澤規矩也編（1973）『和刻本漢籍隨筆集』汲古書院

- 酒井順一郎（2010）『清国人日本留学生の言語文化接触——相互誤解の  
日中文化教育交流』ひつじ書房
- 実藤恵秀（1943）『明治日支文化交渉』光風館
- 実藤恵秀（1970）『増補中国人日本留学史』くろしお出版
- 実藤恵秀（1973）『近代日支交渉史話』春秋社
- 新村出等編（2008）『広辞苑 第六版』、岩波書店
- 関正昭、平高史也（1997）『日本語教育史』アルク
- 関正昭（1997）『日本語教育史研究序説』スリーエーネットワーク
- 福井久藏（1934）『増訂 日本文法史』成美堂書店
- 福島邦道（1993）『日本語館訳語攷』笠間書院
- 藤井（宮西）久美子（2003）『近現代中国における言語政策—文字改革  
を中心に』三元社
- 松本亀次郎（1931）『中華留学生教育小史』東亜書房
- 松本亀次郎（1935）『日語肯綮大全』有隣書屋
- 宮島誠一郎（1882）『宮島誠一郎文書』早稲田大学図書館所蔵
- 落合直文、小中村義象（1893）『中等教育日本文典』東京博文館
- 六角恒廣（1984）『近代日本の中国語教育』不二出版
- 六角恒廣（1988）『中国語教育史の研究』東方書店
- 六角恒廣（1989）『中国語教育史論考』不二出版
- 六角恒廣（1999）『漢語師家伝—中国語教育の先人たち』東方書店
- 陳捷（2003）『明治前期日中学術交流の研究—清国中日公使館の文化活  
動』汲古書院
- 陳生保（2005）『中国と日本—言葉・文学・文化』麗澤大学出版会
- 黄遵憲著、実藤恵秀豊田穰訳（1968）『日本雜事詩』平凡社
- 鄭其照著、内田慶市、沈国威編（2013）『字典集成——影印與解題』東亞  
文化交渉學會
- 劉建雲（2005）『中国人の日本語学習史——清末の東文学堂』学術出版  
会
- 沈国威（1994）『近代日中語彙交流史』笠間書院
- 汪婉（1998）『清末中国對日教育視察の研究』汲古書院
- 王寶平（2005）『清代中日學術交流の研究』汲古書院
- 徐敏民（1996）『戦前中国における日本語教育』エムテイ出版

嚴安生（1991）『日本留学精神史—近代中国知識人の軌跡』岩波書店  
閻立（2009）『清末中国人の対日政策と日本語認識—朝貢と条約のはざままで』東方書店  
鄭子瑜、実藤恵秀（1968）『黄遵憲与日本友人筆談遺稿』早稲田大学東洋文学研会  
朱京偉（2003）『近代日中新語の創出と交流—人文科学と自然科学の専門語を中心に』白帝社

## 中国出版

陳学恂編（1986）『中国近代教育史教学参考資料』人民教育出版社  
富俊（1809）『清文指要』重刻三槐堂藏版  
馮澤夫（1860）『英話注解』出版社不明  
馮紫珊（1902）『新民叢報』芸文印書館影印  
馮天瑜（2004）『新語探源——中西日文化互動與近代漢字術語生成』中華書局  
何如璋（1983）『使東述略』鐘叔河主編『走向世界業書』湖南人民出版社  
黃慶澄（1983）『東游日記』鐘叔河主編『走向世界業書』湖南人民出版社  
黃遵憲著、陳錚編（2005）『黃遵憲全集』中華書局  
蔣英豪編（2002）『黃遵憲師友記』上海書店出版社  
劉英傑（2001）『中国教育大事典：1840-1949』浙江教育出版社  
梁啟超（1988）『飲冰室合集』中華書局  
李運博（2006）『中日近代語彙の交流——梁啟超の作用と影響』南開大學出版社  
馬建忠（1898）『馬氏文通』商務印書館  
慶桂、董誥等編（1986）『清高宗純皇帝實錄』中華書局  
史鵬校（1983）『羅森等初期日本游記五種』鐘叔河主編『走向世界業書』湖南人民出版社  
齊如山（1989）『齋如山回憶錄』中国戲劇出版社  
孫希旦撰/沈嘯寰/王星賢點校（1989）『礼記集解』中華書局  
沈國威（2010）『近代中日詞彙交流研究——漢字新詞的創製、容受與共享』

中華書局

- 湯志鈞（1982）『戊戌變法人物傳稿增訂本』中華書局
- 溫廷敬（1926）『茶陽三家文鈔』補讀書廬
- 文慶等編（1972）『籌辦夷務始末・同治朝』聯風出版社影印
- 王韜（1985）『扶桑日記』鐘叔河主編『走向世界叢書』岳麓書社
- 王錫祺（1985）『小方壺際齊輿地業鈔』河南大學歷史系資料室
- 王桂主編（1993）『中日教育關係史』山東教育出版社
- 汪向榮（2000）『日本教習』中國青年出版社
- 王孫榮（2008）『「餘姚六倉志」編纂始末』浙江省中日關係史學會中日  
地方志比較研究課題組  
[szbftp.cixi.gov.cn/szbftp/html/difangzhi/-id=253.htm](http://szbftp.cixi.gov.cn/szbftp/html/difangzhi/-id=253.htm)
- 吳馨、姚文枬等編（2004）『上海縣續志』北京圖書館出版社
- 熊月之（1994）『西學東漸與晚清社會』上海人民出版社
- 鮮明（2012）『清末中國人使用的日語教材——一項語言學史考察』中央編  
譯出版社
- 佚名（1758）『清話問答四十條』刻本
- 佚名（1774）『清語易言』改訂刻本
- 佚名編（1970）『清光緒朝中日交涉史料』文海出版社
- 佚名編（1983）『同治甲戌日兵侵台始末』文海出版社
- 柴萼（1926）『梵天廬叢錄』中華書局
- 中央研究院近代史研究所編（1972）『清季中日韓關係史料』中央研究院  
近代史研究所
- 張之洞著（1990）『張文襄公全集』中國書店影印

## 日語教科書

- 玉燕（1884）『東語簡要』出版社不明
- 陳天麒編譯（1895）『東語入門』出版社不明
- 唐寶鐸、戢翼翬（1895）『東語正規』出版社不明
- 徐東泰（1901）『貿易業談』文尚堂
- 泰東同文局編（1902）『東語初階』泰東同文局
- 大矢透（1902）『東文易解』泰東同文局

王鴻年（1902）『日本語言文字指南』出版社不明  
吳啓孫（1902）『和文釈例』華北譯書局  
新智社編（1903）『東語完璧』新智社  
松本龜次郎（1904）『言文對照漢譯日本文典』中外圖書局  
新智社編（1905）『實用東語完璧』新智社  
菊池金正（1906）『漢譯學校會話篇』誠之堂  
高橋龍雄（1906）『漢譯日語文法精義』東亞公司  
松下大三郎（1906）『漢訳日語階梯』誠之堂  
田村松之助（1906）『日語教程』成城學校  
著者不明（1907）『日語用法自習書』出版社不明  
竹内善朔（1907）『日本俗語文典』新智社  
松本龜次郎（1908）『訂正増補第二十三版言文對照漢譯日本文典』国文  
堂書局  
但燾（1910）『日本語古微』出版社不明  
彭文祖（1915）『盲人瞎馬之新名詞』秀光社  
松本龜次郎（1935）『訂正増補第二十三版言文對照漢譯日本文典』国文  
堂書局

## 附録

### 附録一 『東語正規』文事類と『東語完璧』文事門の語彙

『東語正規』卷二 散語 文事類<sup>245</sup>

文章 文法 字 字引 和文 漢文 片假名 平假名 楷書 草書 隸書 篆書  
横文字 本 書籍 書物 目錄 職員錄 學問 稽古 寫 筆 鉛筆 石筆 墨  
白墨 硯 紙 罌紙 箋紙 封袋 表書 手紙 返事 書置 繪 油畫 活字 活  
版 新聞 印 印肉 押紙

政事文牘類<sup>246</sup>

新任披露 出勤 敘任 代理 非職 免職 取扱 方針 罪人 原告 被告 加  
害者 被害者 首倡者 賛成者 誤殺 毒殺 強姦 脱稅 盜 強盜 追剝 訟  
立合 追拂 取締 取押 拘引 不正當 罪言渡 禁錮 懲役 死罪 吟味 取  
糺 糺 申立 承諾書 願書 辯護士 国書 條約 免狀 敕令 省令 信任狀  
認可狀 委任狀 明細書 届 上申 鑑割 指令 禦觸 廣告 公告 言宣 奏  
文

『東語完璧』第六篇 單語 文事門<sup>247</sup>

文章 文法 和文 漢文 歐文 文字 字引 片假名 平假名 楷書 行書 草  
書 隸書 篆書 横文字 英文 佛文 獨文 本 書物 學問 稽古 復習 寫  
筆 眞書 水筆 朱筆 繪筆 繪具筆 鉛筆 木筆 石筆 石盤 墨 墨壺 白墨  
朱墨 硯 朱硯 紙 卷紙 半紙 西洋紙 罌紙 唐紙 色紙 半切 張紙 不審  
紙 狀袋 上書 手紙 返事 書置 活字 活版 新聞 雜誌 歷史 国史 紀事  
地理 地圖 哲学 文学 理学 化学 科学 曆 詩 歌 新體詩 段落 擡頭  
横額 横物 豎額 豎物 二幅對 一幅物 版本 早書 偽物 偽筆 梵字 畧  
字 折本 折手本 石摺 覺書 折目 乳筆 樂書 落字 落丁 寫物 能書 能  
書<sup>248</sup> 懷中本 草稿 卷物 輪講 本箱 番號 絶板 絶板書 表紙 表具 手  
習 清書 畫 彩色畫 印 印肉 印形 押紙 手習雙紙 筆立 肉池 印石 冠

<sup>245</sup> 唐寶鏐、戢翼翬（1900）『東語正規』卷二、第95頁。

<sup>246</sup> 上掲、第94頁。

<sup>247</sup> 新智社編（1903）『東語完璧』、新智社、第550頁、『東語正規』文事類  
と同じ語彙に下線を引く。

<sup>248</sup> 読み方は「ノーショ」と「ノーガキ」である。

冒印 遊印 文鎮 文臺 見臺 硯箱 筆架 古筆 燒筆 筆鞘 水入 金紙 絹  
地 筆洗 智識 道理 記憶 想像 上手 下手 骨折 勤 惰 才能 志 實驗  
課業 希望 油斷 只會 願書 條約 国書 敕令 省令 認可狀 免狀 委任  
狀 明細書 屆 上申 鑑割 指令 公告 奏問 音信 新任披露 出勤 敘任

## 附録二 『東中大辞典』に「中名」を提示する語彙<sup>249</sup>

丁字（丁香）、丸子（金鼈）、丹頂鶴（朱頂鶴）、亞兒哥爾（酒精）、亞鉛（南名鋅北名□）、光參（海參）、分蔥（冬蔥）、加留謨（南名鉀北名金灰）、加爾休謨（南名鈣北名鰕）、千鳥（呼潮又水喜鵲）、南京豆（落花生）、南京黃櫨（烏臼木）、哥巴爾特（南名鈷北名鏽）、唐ノ芋（紫芋）、問荊（筆頭菜）、土當歸（羌獨活）、地螢（螢蛆）、地蟲（蟻螞）、夕顏（瓠）、大麥（麩）、天蠶蟲（天蠶）、太藺（莞）、太刀ノ魚（帶魚）、奧列夫油（橄欖油）、娶ガ皿（石燐）、安質母尼（南名銻北名金吐）、寒暖計（寒暑針）、尾長猿（果然）、山桃（楊梅）、山桑（鷄桑）、山犬（豺）、岩鹽（石鹽）、巴留謨（南名鋁北名鍾）、巴拉的鳥謨（南名鈹北名鈹）、平蜘蛛（壁錢）、幻燈（影燈）、弗素（南名弗北名弗）、摩里普典（南名鉬北名鉬）、斯特侖矩謨（南名鎢北名□）、日暮（茅蝟）、昆布（海帶）、晴雨計（晴雨針）、朝顏（牽牛花）、柚子（柚）、棒蘭（釵子股）、棒振蟲（子子）、檀（衛矛）、檜扇（射干）、水素（南名輕北名輕）、水葵（浮薔）、水銀（南名水銀北名汞）、沃素（南名碘北名□）、活動寫真（影戲）、海松（水松）、海仁草（鸕鶿菜）、深山鴉（山鳥）、混凝土（紅毛坭）、滿淹（南名錳北名錳）、火魚（角魚）、炭素（炭）、烏瓜（栝樓）、烏拉紐謨（南名鈾北名□）、無患子（木樓樹）、磷（南名磷北名砒）、燒明礬（枯礬）、燕子花（紫花蓀）、犬（狗）、狎（拂菻狗）、玉蔥（洋蔥）、甘蕉（香蕉）、白金（南名鉑北名白金）、目高（丁斑魚）、真竹（若竹）、砒素（南名□北名石信）、硝子（玻璃）、硅素（南名砂北名砂）、礪素（南名石布北名石布）、窒素（南名淡北名硝）、米蟲（蛄□）、緋鯉（金鯉）、耶迭爾（以太）、耶克斯光線（透光）、胡瓜（黃瓜）、臭素（南名溴北名□）、蕁環（縷斗菜）、萍蓬根（骨蓬）、萬兩（硃砂根）、萬年茸（紫芝）、葦切（剖葦）、蒼鉛（南名金秘北名金粉）、著荻（鐵掃帚）、蓑龜（綠毛龜）、蔓荔枝（苦瓜）、藪蚊（豹脚蚊）、藪肉桂（月桂）、蚌（沙箭）、衝羽根（胡鬼子）、豆蔻（草豆蔻）、貽貝（淡菜）、賽門物（紅毛坭）、酸素（養）、金襖子（石雞）、金魚（錦魚）、釣鐘草（沙參）、銀杏樹（鴨脚子）、阿爾密紐謨（南名□北名鉬）、雄麻（枲麻）、雛桔梗（細葉沙參）、頰白（黃道眉）、魚狗（水狗）、魚鳥（拙老婆）、鹽素（南名綠北名鹽）、

<sup>249</sup> 入力できない文字は□で表示する。

麻格涅休謨（南名鎡北名鎡）、獺ノ木（冬青）

### 附錄三 新釋名凡例

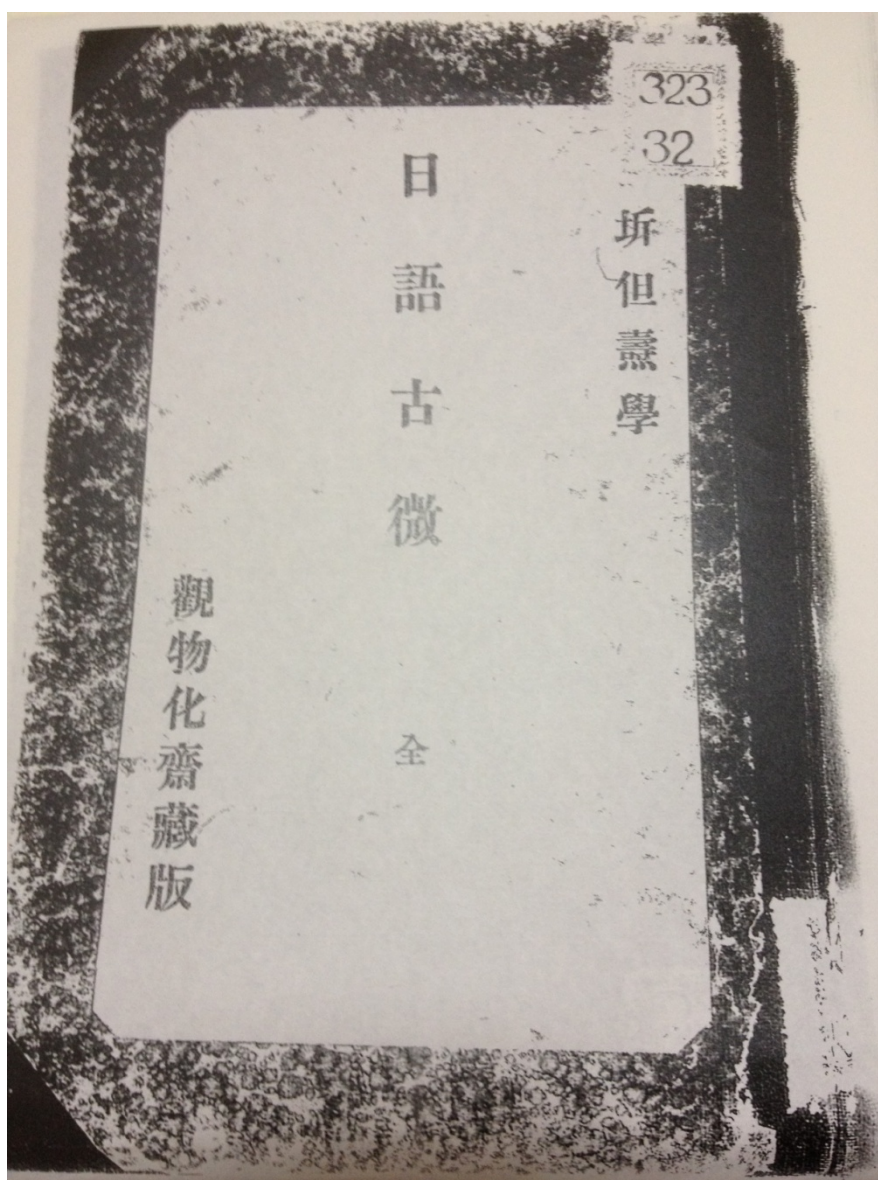
- 一、 本編由同學數子分類擔任
- 一、 本編雜采羣書、未經精細審定、其間或有舛誤衝突之處、亦所不免、蓋本編乃稿本、非定本也、但所采必擇名家之書、庶幾不中不遠
- 一、 本編每條必將所據某書或參考某書注出
- 一、 諸名詞或有含義甚廣、諸家所下界說至今紛紛未衷一是者、編者安敢謂今口所解足為定案、惟廣陳諸義、擇一而從、其是非待學者之鑒別而已
- 一、 本編所釋諸名隨手譯述、未嘗編次、整而齊之、待諸成書之後
- 一、 本編於各名詞皆附注英文、其非採用日文者、則並日文注之以便參考
- 一、 本編於本報每號之末附印數葉、蟬聯而下以便拆釘
- 一、 本編現擬編述各門如下
  - 一、 哲学類[道德学、論理学、社會学、教育学等並附屬]
  - 二、 生計学類
  - 三、 法律学類
  - 四、 形而下諸科学類
- 一、 以上分類法極知不確當、不包括、但稿本取其便耳、其本名詞之專、屬於本類中某科者皆注出之<sup>250</sup>

---

<sup>250</sup> 『新民叢報』第三年第1號附錄二。

附録四 『日本語古微』表紙と収録した語彙

『日本語古微』表紙



## 『日語古微』に収録した語彙

### 卷之上

昆布 月給 湯 藏 聖神 負擔 薪炭 和田 旅行 女史 澤山 幕府 給事  
物理 組織 国 簞笥 金貸 界 萬 性 演說 機關 法理 出生 動物植物  
音樂 挨拶 林檎 憲法 裁可 国法 国民 理髮 寺參 書取 元首 鉛筆 市  
長 清酒 倫理 普及 證明 許可 下手 願 奧 發明 一揆 一通 幹事 區  
約束 主計 當番 專制 鷹揚 脚氣病 左官 生理 噂 邸 上品下品 七寶  
天長地久 蒲團 名刺 自治 租稅 一向 咄 折骨 褒美 得得 兔角 張本  
逐電 利口 稽古 啓上 結構 嵐 驟雨 鳥居 白徒 姫 子 家督 娘 桂 纏  
袍 紛 一端 旭日 霖雨 澍雨 凜塗 新田 什物 家具 佃 執事 浪人 亭  
主 普請 器量 取次 但馬 折折 鼯鼠 披露 折角 下劣 馬鹿 阿房 地租  
用事 治安 妻君 兵事 典獄 軍人 師匠 書記 被服 假名 作業 聚會 試  
補 徵發 受持 意識 歲暮 範圍 猶豫 販賣 理窟 準備 周年 講習 氣分  
驛 發揮 名譽 政法 道具 省 大陸 職業 忠實 控訴 選舉 家族 法令  
義理 復古 萬歲 大化 国體 學習 過失 遠慮 徵兵 庶務 訪問 一局 田  
舍 參政 性質 番 坪 交番 墮落 緣故 志願 根性 勉強 法制 輜重 門  
閤 屏風 武庫 會計 料 異議 判事 偽造 忠告 適用 避暑

### 卷之下

寶歷 條件 徵令 舞蹈 作用 立憲 王国 征伐 秘書 著作 風俗 性分 人  
情 建国 金 百姓 品物 萬国 文明 事業 利用 小言 開国 洗濯 無法  
天保 信用 安甯 天保 公用 簡易 往來 變化 近古 注目 銓衡 莊嚴 心  
細 碌碌 騷騷 草草 色色 能事 行啓 婚姻 面白 貸 貸貸借 監事 監察  
役 太廟 太 按摩 職務 都督府 上州 下關 總領 顧問 調 息 於 承 不  
屆 役 控 不埒 仕 外人 獨身 寮 統監 總監 開業 古物 見物 進物 質  
問 同意 珍事 冒險 閉口 獨立 中立 內職 一元 法曹 委付 告訴 本職  
倉庫 公使 詐欺取財 造作 條例 平均 相違 士族 作戰計畫 掃除 入用  
割烹 折檻 我慢 惡口 結婚 準 旅館 書信 溫室 意匠 篆刻 奉公 奇麗  
貴族 下女 思想 衤 学生 生徒 教官 屬 秩序

## 附録五 1884-1912 年主要な日本語教科書一覧表

この一覧表は、1884-1912 年主要な日本語教科書を収録した。関西大学外国語学部沈国威研究室が作成した「近代日本語教科書一覧（初稿）」をもとに、筆者が『第二次大戦前・戦時期の日本語教育関係文献目録』（文部省科学研究費補助金による総合研究（A）研究成果報告書）、『増補中国人日本留学史』（実藤恵秀、1970 年、第 62－64 頁）、『実藤文庫目録』（東京都立中央図書館により作成）、「（資料）『日本語教育史』資料調査 1991 年・中国」（斉藤修一）、『中国人の日本語学習史——清末の東文学堂』（劉建雲、2005 年、第 274－279 頁）、「清末日語教材之研究」（李小蘭、2002 年、浙江大学修士論文）等の資料より情報を補い、まとめたものである。版を重ねた教科書も含め、合計 143 項目を整理し、出版年代順に並べている。著者名と発行者名は実物に書いてある情報に基づき、書誌情報がない場合は「不明」と記入した。原書の出版年は全て元号で記されているが、読者の便を考えて西暦も記入した。

1884-1912 年主要な日本語教科書一覽表

No	書名	著者	発行地	発行者	西暦	元号
1	東語簡要	玉燕	上海	不明	1884	光緒 10
2	東語入門 2 卷	陳天麒編	不明	不明	1895	清光緒 21 刊
3	東文典	柏木重総著	東京	磯部太郎兵衛	1896	明治 29.6
4	訂正中等国文典上中下三卷	三土忠造	東京	富山房	1898	明治 31
5	東語例	物集高世著	東京	六合館	1900	明治 33
6	東語文法提綱	薛琛	不明	東學會	1900	明治 33
7	東語正規 3 卷	唐寶鏐、戢翼翬共著	上海	作新社	1900	明治 33 刊
8	和文漢讀法	梁啓超、羅孝高合著	東京	勵志會	1900	清光緒 26 刊
9	東文典問答	丁福保著	上海	文明訳書局	1901	清光緒 29 刊
10	漢訳東文読本	王国章訳	上海	普通學書室	1901	清光緒 27 刊
11	和文漢譯讀本 4 卷	坪内雄藏（逍遙）編、沙頌□、張肇熊訳	上海	商務印書館	1901	清光緒 27 刊
12	寄學速成法		杭州	不明	1901	光緒 27
13	貿易叢談	徐東泰、井上孝之助	不明	文尚堂	1901	明治 34.5

14	日本俗語文 典	金井保三 著	東京	寶永館	1901	明治 34.7
15	日本俗語文 典	松下大三 郎著	東京	誠之堂	1901	明治 34.8
16	日語入門	長谷川雄 太郎著	東京	善隣書 院	1901	明治 34 刊
17	語學叢書	赤堀又次 郎	東京	東洋社	1901	明治 34
18	中等日本文 典譯釋存 1 編 (初編)	三土忠造 著	不明	教育改 良會	1901	清光緒 27 刊
19	東文動詞彙	佚名	不明	中華書 局	1902	明治 35
20	東文課本	熊文信三	杭州	東文學 社	1902	明治 35
21	東文新法會 通	廖宇春	不明	東亞善 隣學館	1902	明治 35
22	東文易解	大矢透等 著	不明	泰東同 文局	1902	明治 35
23	東語初階	泰東同文 局編	東京	泰東同 文局	1902	明治 35.8
24	廣和文漢讀 法 (普通東文 促成法)	丁福保 (疇 隱主人) 著	上海	不明	1902	清光緒 28 刊
25	和文漢讀法	沈翔雲編	東京	秀英舍	1902	明治 35.7
26	和文奇字解	陶珉	東京	東京訳 書彙編 社	1902	明治 35
27	和文釋例	吳啓孫著	北京	華北訳 書局	1902	清光緒 28 刊
28	日本文典大	鈴木忠孝	東京	大成學	1902	明治

	綱	著		館		35.2
29	日本語言文字指南	王鴻年	東京	東京王 愴齋	1902	明治 35
30	新編日本語 言全集・漢譯 日本新辭典 合璧 附日本 新書介紹目 録	和田正太 郎 著	東京	博文館	1902	明治 35 序刊
31	支那交際往 來公牘	吳泰壽	東京	泰東同 文局	1902	明治 35
32	東語課程	夏甸南・ 董見如輯	上海	上海書 局	1903	
33	東語完璧	新智社編 輯局編	上海	新智社	1903	清光緒 29 刊
34	東語真傳	泰東同文 局撰	東京	泰東同 文局	1903	明治 36
35	漢文典 2 冊	豬狩幸之 助編王克 昌譯	杭州	杭州東 文學社	1903	光緒 29
36	漢譯法文典	松井知時 編京師譯 學館譯	上海	上海開 明書局	1903	光緒 29
37	日本近世文 典	劉麟	不明	中國教 育普及 社	1903	光緒 29
38	日本語教科 書第一卷 口語語法用 例の部 下	宏文學院	東京	金港堂	1903	明治 36
39	日文教程	成城學校 編	東京	成城學 校	1903	明治 36.2

40	日語獨習書	郭祖培、熊金壽著、村上恵遵閱	大阪	東文學堂	1903	明治 36.8
41	中等日本文典譯釋 3 編	三土忠造著、丁福同訳	上海	文明書局	1903	清光緒 29 刊
42	言文対照漢訳日本文典	松本亀次郎著	東京	中外図書局	1904	明治 37.12
43	和文漢譯讀本（日本讀本）存 2 卷（卷 5、6）	坪内雄藏（逍遙）編、長尾稔太郎訳	上海	商務印書館	1904	清光緒 30 刊
44	日語音字例解	沈晉康	東京	東京清国留學生會館	1904	光緒 31
45	四書和文必讀	岸田太郎訳、陳秩元編、謝廣榴校	神戸	幸彰號	1904	明治 37 序刊
46	東文法程	商務印書館編譯所編	上海	商務印書館	1905	清光緒 31 刊
47	東亞普通讀本存 1 卷（4 卷）	伊澤修二著	東京	泰東同文局	1905	明治 38 刊
48	東語初階	泰東同文局編、伊澤修二閱	東京	泰東同文局	1905	明治 38.4
49	東語簡要	葛夢樸編	東京	日語講習會	1905	明治 38 刊
50	東語士商叢談便覽	金国璞等著	不明	田中慶太郎	1905	明治 38.6

51	東語速成篇	宮沢文次郎、張毓靈 訳	東京	東亜堂	1905	明治 38.6
52	獨習自在日 語捷徑	金島苔 水、広野韓 山著	東京	青木嵩 山堂	1905	明治 38.9
53	漢訳日本辭 典	東亜語學 研究會編	東京	吉川弘 文館	1905	明治 38.11
54	清人適用日 本語典 3 卷	井上友吉 著	東京	青山堂	1905	明治 38.7
55	日本俗語文 典	吳初、孟先 著	東京	吳初、孟 先	1905	清光緒 31 刊
56	日本文典課 本	大矢透著、 鐘廣言校	東京	泰東同 文局	1905	明治 38 刊
57	日本語範	孫培	東京	清国留 學生會 館	1905	
58	日華會話筌 要	平岩道知	不明	岡崎屋	1905	明治 36
59	日清語學金 針	馬紹蘭等 著	不明	日清語 學會	1905	明 38.9
60	日語捷徑一 名日語文法 栞	長尾永五 郎著、和田 純校閱	東京	誠之堂	1905	明治 38.2
61	日語音字例 解	沈晉康	東京	清国留 學生會 館	1905	明治 38
62	日語用法彙 編	畢祖成・ 李文蔚	東京	清国留 學生會 館	1905	
63	新撰 日本 文法教科書	木野崎吉 辰・楊政	東京	奎文館	1905	明治 36

64	中華人適用 日華會話入門	本間良平	不明	大阪屋 號	1905	明治 36
65	中日文通	張鴻藻	東京	清国留 學生會 館	1905	明治 36
66	標品字典	黃廣編	東京	清国留 學生會 館	1906	清光緒 32 刊
67	東文典表解	上海科學 書局編輯 所	上海	上海文 明書局	1906	明治 39
68	東文漢訳軌 範	門馬常次 著	東京	東亜公 司	1906	明治 39.7
69	東文教科書	小山左文 二	不明	三松堂	1906	明治 39.8
70	東語集成	金太仁作 著	東京	東亜公 司崇文 書局	1906	明治 39.8
71	東語簡要	葛夢樸編	東京	細川小 三郎	1906	明治 39.10
72	東語練習 舌切雀	杉房之助 編、周頌彝 訳	東京	東亜公 司	1906	清光緒 32 刊
73	東語異同弁	張毓靈等 著	不明	春清堂	1906	明治 39.3
74	改訂日本語 教科書	宏文學院 編	東京	有隣書 屋	1906	明治 39 刊
75	漢和對照日 語文法述要	難波常雄 著、觀瀾社 編	不明	觀瀾社	1906	清光緒 32 序刊
76	漢文註釋東	小山佐文	東京	三松堂	1906	明治 39

	文讀本	二著		書局		刊
77	漢訳東文法 彙編	獨一訳社	東京	清国留 學生會 館中国 書林	1906	明治 39
78	漢訳日本言 文課本	振武學校 編	東京	泰東同 文局	1906	明治 39
79	漢訳日本語 典	佐村八郎	東京	六盟館	1906	明治 39
80	漢訳日語階 梯	松下大三 郎著	東京	誠之堂	1906	明治 39.1
81	漢訳日語要 覽	松村政親 著	東京	岡崎屋	1906	明治 39.6
82	漢譯日本語 文對照讀本	語文練習 社編	東京	語文練 習社	1906	清光緒 32 刊
83	漢譯日語文 法精義	高橋龍雄 著	東京	大橋新 太郎/東 亜公司	1906	明治 39.7
84	漢譯學校會 話篇	菊池金正 著	東京	伊藤岩 治郎/誠 之堂	1906	明治 39.8
85	和文漢詁	呂瑞庭編	武昌	謙吉書 社	1906	清光緒 32 刊
86	日本俗語文 典	竜文館編 輯局編	東京	竜文館	1906	明治 39.4
87	日本文典講 堂問答	菊池勉著	東京	中和堂	1906	明治 39.12
88	日本言文課 本存 1 卷（卷 1）	振武學校 編	東京	泰東同 文局	1906	明治 39 刊
89	日本語教科 書 3 卷	宏文學院 編	東京	金港堂	1906	明治 39 刊

90	日本語教科書第一巻 口語語法用例の部 上	宏文學院	東京	金港堂	1906	明治 39
91	日本語教科書第一巻 口語語法用例の部 中	宏文學院	東京	金港堂	1906	明治 39
92	日華時文辭林	中島錦一郎・林房之助	東京	東亜公司	1906	清光緒 33 明治 39
93	日華語學辭林	井上翠編	東京	東亜公司	1906	明治 39
94	日文教程第 1 編	田村松之助編	東京	成城學校	1906	明治 39.3
95	日語教程 2 卷	湘漁著	不明	湘漁	1906	清光緒 32 刊
96	日語全璧	文求堂編輯局編	東京	文求堂	1906	明治 39.2
97	日語新辭林	日清語學會編、佐村八郎閱	東京	富山房ほか	1906	明治 39.6
98	実用東語完璧	新智社編輯局編	東京	新智社	1906	明治 39.1
99	實用日本語法	岸田蒔夫著	東京	明文堂	1906	明治 39 序刊
100	實用日語篇	菊池勉著	東京	中和同文會	1906	明治 39 刊
101	文法適用東文教科書	小山左文二	東京	三松堂書局	1906	明治 39
102	文法應用東文漢譯軌範	門馬常次著	東京	東亜公司	1906	明治 39 刊

103	新日本文典 続	上田萬 年、福井久 蔵合著	東京	大日本 図書	1906	
104	新式東語課 本（卷 1）	中堂謙吉 著、伊澤修 二閱	東京	泰東同 文局	1906	明治 39、 40
105	言文對照和 文漢詰第 1 冊	呂瑞庭編	武昌	謙吉書 社	1906	清光緒 32 刊
106	中日對照實 用會話篇	唐木歌吉 著、王盛春 訳	東京	中東書 局	1906	明治 39 刊
107	東文奇字解	馮紫珊編	東京	中国書 林	1907	明治 40.3
108	東語大觀	吳人達著	不明	不明	1907	清光緒 33 刊
109	東語會話大 成	井上翠著 ほか	東京	国文堂 書局	1907	明治 40.4
110	東語自得指 掌	文求堂編 輯局著	東京	文求堂	1907	明治 40.7
111	東語自習第 2 編一蟹ノ仇 討	杉房之助 編、周頌彝 訳	東京	東亜公 司	1907	明治 40
112	東語自習第 3 編-桃太郎	杉房之助 編、周頌彝 訳	東京	東亜公 司	1907	明治 40
113	法政日語叢 編、民法第 1 卷	竹内利太 郎	東京	法政質 疑會	1907	明治 40.11
114	高等日本文 典課本	児崎為槌 著	東京	東亜公 司	1907	明治 40.5
115	漢訳 日本 語文法	松下大三 郎		誠之堂 書房	1907	

116	漢訳対照日語読本	小山佐文 二著	東京	三松堂 書房	1907	明治 40.6
117	漢訳日本口語文典	松下大三 郎著	東京	誠之堂 書店	1907	明治 40 刊
118	漢訳日語大辭典	新智社編	東京	上海新 智社東 京文局	1907	明治 40
119	漢訳學校會話篇	池金正	東京	誠之堂 書房	1907	明治 40
120	日本俗語文典	竹内善朔 著	東京	上海新 智社東 京文局	1907	明治 40.2
121	日本文典	芳賀矢一	上海	商務印 書館	1907	明治 40
122	日本語學捷徑	唐木歌吉 著、金太仁 作補訳	東京	金刺芳 流堂	1907	明治 40.5
123	日清對話編	松平康国 著	東京	東亜公 司	1907	清光緒 33 刊
124	日清對譯編	松平康国 著	東京	東亜公 司	1907	清光緒 33 刊
125	日語活法	大宮貫三 著	東京	早稻田 大學出 版部	1907	明治 40.4
126	日語名辭類篇	建南雲鶴 堂	東京	奎文館 書局	1907	明治 40
127	孝雀（日文獨修第 1 編）	雀巢真人 編、古洞逸 人訳	東京	竜文館	1907	明治 40.2
128	新式東語課本（卷 2）	中堂謙吉 著、伊澤修 二閱	東京	泰東同 文局	1907	明治 40

129	言文対照漢 訳日本文典	松本亀次 郎 著	東京	国文堂 書局	1907	明治 40 刊
130	中日對照日 語寶典	施呼本・ 果清阿編	東京	施呼本	1907	明治 40 刊
131	中學 日本 文法教科書	和田萬吉/ 李徵訳/華 文祺校	上海	文明書 局	1907	清光緒 33
132	東中大辭典	作新社編	上海	作新社	1908	清光緒 34 刊
133	和文讀本入 門	商務印書 館編	上海	商務印 書館	1908	清光緒 34 刊
134	日本文典要 義	岡沢鉦次 郎 著	東京	博文館	1908	明治 41.7
135	日語會話	島井浩 著	不明	不明	1908	明治 41.6
136	日本讀書作 文辭典	難波常雄 編	不明	東方社	1909	明治 42.5
137	日語讀本 4 卷	内堀維文 著	上海	商務印 書館	1909	清宣統 1 刊
138	同文新字典	伊澤修二	東京	泰東同 文局	1909	明治 41
139	日華辭典	善隣書院	東京	求文堂	1910	明治 43
140	日語古微	但燾	不明	著者刊	1910	宣統 2 年
141	新選日本大 辭典	新興社編	不明	新興社	1910	明治 43 刊
142	国民讀本參 照 日語科 話方教材卷 一・卷二・卷 六	山口喜一 郎	不明	不明	1912	明治 45
143	日語類解	金沢莊三 郎 編	東京	三省堂	1912	明治 45.3

## 附録六 1884-1912 年主要な日本語教科書の序言・凡例集

附録五の一覧表に基づいて、筆者が実際に閲覧した教科書及び辞書の序言、序言がない場合は凡例を以下にまとめた。合計 57 冊である。参考のため、日本人向けの中国語教科書も数種類含め、当時の学習環境の一端が垣間みることができよう。なお、表示できない文字は「□」を使って表示する。

序言・凡例集の書名一覧表

1. 『三国通語』(1876)
2. 『東語簡要』(1884)
3. 『日清韓三国會話』(1894)
4. 『日清韓三国通語』(1894)
5. 『日清韓往復文』(1894)
6. 『東語入門』(1895)
7. 『東語正規』(1900)
8. 『和文漢讀法』(1900)
9. 『貿易叢談』(1901)
10. 『日本俗語文典』(1901)
11. 『日本俗語文典』(1901)
12. 『東文易解』(1902)
13. 『東語初階』(1902)
14. 『和文釋例』(1902)
15. 『新編日本語言集全漢譯日本新辞典合璧』(1902)
16. 『東語完璧』(1903)
17. 『日語獨學書』(1903)
18. 『中等日本文典譯釋初編』(1903)
19. 『東語真傳』(1903)
20. 『言文對照漢譯日本文典』(1904)
21. 『東語初階』(1905)
22. 『漢譯日本辭典』(1905)
23. 『東文法程』(1905)
24. 『清人適用日本語典』(1905)
25. 『日本俗語文典』(1905)
26. 『日本文典課本』(1905)
27. 『日語捷徑』(1905)
28. 『續新日本文典』(1905)
29. 『東語速成篇』(1905)
30. 『標品字典』(1906)
31. 『東語自習舌切雀』(1906)

32. 『日華語學辭林』(1906)
33. 『東語集成』(1906)
34. 『日本文典講堂問答』(1906)
35. 『日語新辭林』(1906)
36. 『文法應用東文漢譯軌範』(1906)
37. 『東語異同辨』(1906)
38. 『漢譯日語階梯』(1906)
39. 『漢譯日語文法精譯』(1906)
40. 『漢譯日語要覽』(1906)
41. 『漢譯學校會話篇』(1906)
42. 『實用日本語法』(1906)
43. 『新式東語課本』(1906)
44. 『日語用法自習書』(1907)
45. 『東文奇字解』(1907)
46. 『東語會話大成』(1907)
47. 『東語自得指掌』(1907)
48. 『法政日語叢編』(1907)
49. 『日語活法』(1907)
50. 『東語自習 蟹ノ仇討』(1907)
51. 『漢譯日語大辭典』(1907)
52. 『日文獨修孝雀』(1907)
53. 『高等日本文典課本』(1907)
54. 『東中大辭典』(1908)
55. 『日本文典要義』(1908)
56. 『同文新字典』(1909)
57. 『日本讀書作文辭典』(1909)

## 1. 『三国通語』(1876)

### 自序

日ヲシテ見ル所ヲ新ニシ耳ヲシテ聞クと所ヲ新□シ以ヲ国歩ヲ進メント欲スルハ宇内萬国ノ最モ急トスル所ニアラズヤ抑□智ノ開明文物ノ隆盛ナル所以皆之レニ□ラザルハナシ夫レ本邦英佛ノ学開クテ□學茲ニ衰廢シ今ヤ伊太利ノ通商□□ニ行ハレ随テ此學亦將ニ興ラ□□□此秋ニ向フヤ宜シク速カニ其語ニ通曉セズンハアル可ラズ而メ其楷梯トナル書アルサ聞カズ是ニ於テ予佛伊ノ最モ須要ナル語ヲ採□集輯スルヲ各二千五百有餘之レニ和譯ヲ加ヘ遂ニ此一篇ヲ成スニ至レリ命メ三国通語ト云フ今印刷世ニ公ニスルハ唯斯學ニ従事スル者ノ萬一ノ裨益ヲサ計リ而メ所謂耳目ヲ新ニスルノ一端ニ供スルヲ庶幾スト云爾

明治九年第六月

## 2. 『東語簡要』(1884)

竊以中外通商、迄今已久、初時不過英、法美諸国而已、繼以泰西各国來者益眾、輯睦愈敦。仰見我朝深仁厚澤、敷被遐荒、視中外如一體、足使海国臣民廣開見聞。近則東瀛步武泰西、亦於通商各埠駐設領事、而上海首屈一指。且日人於租界建房屋、創市肆、鱗次櫛比、即茶寮之增艷鬥麗、亦可謂酒天花國中、別樹一幟矣。惟我之人欲啜茗消愁者、苦於語言不通、徒乎負負、亦豈非一憾事乎。余友玉燕居士、久歷東瀛、於該国語言文字、靡不精通。茲因公冗來滬、感時事之日新、嗤斯人之舌歧、爰將日本要語摘錄一編、付諸梨棗、以公同好。俾使中東人民和好益敦、懋遷益盛。

## 3. 『日清韓三国會話』(1894)

### 凡例

一本書ハ我軍人及ヒ渡行諸士ノ便宜ヲ計リ朝鮮八道府、州、郡、縣、ヨリシテ軍人用語及ヒ日用會話其他雜語等詳細ニ記述セシ者ナレバ軍人及ビ渡行諸士ノ本書ヲ誦読スルアレバ日清韓ノ談話ニ其用ヲ辨シ得ベシ

一本書巻首ニハ朝鮮語九十九音ヲ記シ而シテ升尚ホ子音母音ヨリ餘音、  
激音重音重音激音ヲ記シ學者ヲシテ朝鮮語音字ノ斯ノ如キナルヲ知  
ラシム

一本書ニ於テハ朝鮮字ヲ用ヒテ一々假名ヲ附シタキモ我国ニ於テハ朝  
鮮文字ノ活字不充分ニシテ速急ノ際ニ過ハズルヲ以テ朝鮮文字ニ代  
フルニかなヲ以テセリ

明治廿七年第九月 著者識

#### 4. 『日清韓三国通語』(1894)

##### 序

日清の戦争漸く酣ならんとする時書肆薰志堂の主人余に囑して三  
国通語を編ましむ

噫宜哉我軍連戦連勝すでに鴨緑江を超え九連城難なく陥り鳳凰城  
亦將に我占領に歸せり猶進んでは奉天を陥れ直ちに彼の王都北京を衝  
きその城頭に旭章旗の翻るをみることに瞬間にあらんのみ然る時は清  
の四百余州は我が往来すべきの地となるや必せり日清韓三国の通語の  
必需日一日より急なり余喜んで此書を作る

編者識

#### 5. 『日清韓往復文』(1894)

##### 凡例

一今哉世ニ日清韓ニ關スル往復翰文ノ刊行アルヲ見ズ□ニ本書ハ實際  
ノ書翰及ヒ新タニ交戦記事ヲ原トシ往復文体ニ叙述□タル者ヲ輯集  
セシ者ナリ看者其レ之レヲ了セヨ

一本書中記事ハ妄誕虚構ニ涉ラズ凡テ實事ヲ旨トシテ編述セシ者ナリ  
一本書中書翰發信者及ヒ受信者ノ人名等者實名ヲ以セス故ラニ假名ヲ  
用イタルモノトス

一本書書翰宛名場所等ハ公ニシ能ハザル者ハ○○所○○隊○○艦等ト  
シ故ラニ實際ノ名稱ヲ記載セザルモノトス看者其レ之レヲ咎ムル勿  
レ

一本書ハ童蒙ノ讀ミ易カラシガ為メニ行文ノ傍ラニ假名ヲ施セシ者ナリ

明治廿七年十二月 編輯者識

## 6. 『東語入門』(1895)

### 自序

嘗謂萬国之預言文字、既不能強同、則凡具有血氣心知聰明才力者、正宜各盡所學以期無所不通、造於無所不便而後快、自各国通商以來、我華人之攻讀英法諸文者、日甚一日、惟研究東學者寥寥、蓋亦苦於未得其門耳、按日本字與語同四十八字母、一字一音、聚音成言、就言見義、或兩三字成一言、或五六字成一義、間有七八字至十數字者、頗似西文拼字之法、以視我國之每字各具其義者、判然不同矣、余自乙酉年隨家大人使日本舉業之暇、習東西文語、在東京六年、該国語言文字畧能會通一二、愧未博究其奧、詎敢自矜有得出以問世、然既稍有所知又烏敢私以自秘、況兩國近又修睦、增開商市、東人之來我華者愈多、貿易日盛、易啓猜嫌、爰不揣淺陋輯譯是書、注以華音、既竣友人慫恿付印、因誌數語於簡端

光緒二十一年歲次乙未閏五月海鹽陳天麒自識

### 序

念祖茂才、我友喆甫觀察長嗣也、年少而志超、務為有用之學、平居潛心經史、習聞父師微言緒論、間有述課已逾、前者觀察參贊日東、念祖航海隨任、趨庭授學之暇、兼通東西語言文字、近以日人同上蘇杭兩郡效日東方言者頗眾、念祖乃出其所知、成東語入門一書、為問道之津梁、舌人之木鐸、俾貿易場中通問答者作先路之導焉、泰西同上五十年來、效英法方言著書者獨夥、而於東語缺如、使學者無從入門、未免遺憾、得此補之、可稱全璧、念祖果能用心於微者矣、念祖工詞賦帖括、夙承家學、長於詩古文辭、他日珥筆詞垣雍容備顧問敷陳古義闡發新猷當必戛、然異人可決之於操券也、而念祖殊弗以此為足、蓋其所志、有大者、遠者在謂士君子讀書稽古論世知人當明體達、坐而言者可起、而行世方多事、明洋務諳外情、本末兼賅、中西畢貫、庶幾乎有所裨益於

國家得著富強之實效、此其亟也、區區之東語、云何哉、此念祖平日所懷之志趣也、殊足嘉焉

光緒乙未閏月天南遯叟王韜序於滬北淞隱廬時年六十有八

## 7. 『東語正規』(1900)

歲辛醜之冬、期滿將歸、思謀輸入東邦文明、以享吾同胞之有志新學者、譯述之書、多至十餘種、已成莢矣、正謀付梓適東語正規又將次告罄、以東文之書、在中國發印、殊未便、故不能不在東付印、竊思我國當茲創鉅痛深之後、有志之士旋思磨蕩腦力、以為變法用、將來東渡留學者、更當不絕于道、則輸入文明之先導、不得不求之于語學也、爰將是書增入散語數十門、原刻古文聊齋數則、則芟夷之重付活版、攜之歸國以為吾國有志留學東邦者、豫備科之一助兼示肄習東文者以津梁也、惟以歸期迫切、蠅務紛繁所有、應加之處掛漏尚多、廣增輯補、尚待異日

光緒二十七年十月中旬著者識于依裝

## 8. 『和文漢讀法』(1900)

沈君即印和文漢讀法、以為內地讀東文者助意良厚也、第沈君所印數百本、不足應來者之求、同人因謀更印多本廣其流傳、以原印第六表所列和漢異義字尚多漏畧、搜輯增補者二百餘條、始於和文中常見之異義字十得八九、亦讀者之一便也、庚子六月勵志會敘

## 9. 『貿易叢談』(1901)

方今語學之道、布行於四海交際往來、頻通於五洲貿易輪流日漸繁隆、日清唇齒相鄰且又種文同屬、非歐美之所能及也、今時互相交接亦非昔之可比、然有語異之憾豈不吁哉、語言不通則事理不析、是於交際之道諸多障礙、今之屬易從新交接頻通貿易大振、幸有授話之舉、以便於世庶、徐公暢亭博學、廣識濶達時務、已亥夏、神戶商業學校聘請東來、充授語學教習、今已寒暄數易、公餘之暇同井上孝之助君合著貿易

叢談一冊、書成之期囑余為之序、余觀覽廻環皆貿易通時之詞、莊以東文輪述其詳實、便於學者益於商旅、有志華言者苟能觸通於交際之道、則無齟齬之憾矣。

光緒辛丑二月 張樹華謹識

宇内之趨勢ハ侵々トシテ進ミ、徒ニ一地域ニ齟齬タウヲ許サズ、政事ニ商業ニ其他百般ノ事物有無相交換シ長短互ニ攻究ヲ要シ、各国往來ノ頻繁ナル今昔日ヲ同シテ論ズベカラズ、然メ方今外国語ヲ能クスルノ士モ亦其人ニ乏シカラズ、然レモ多クハ歐洲ノ語ニシテ近ク清國ノ語言ニ至リテハ、之ヲ能クスル人、蓋シ寥々ノ感ナキ能ハズ抑モ清國ハ四億ノ人民ト四百餘州到ル處未ダ開撥セラレザル、無限ノ富源ヲ有シ、我ガ国トハ一葉帶水一日モ缺クベカラザル、唇齒輔車ノ關係ヲ有ス、地ノ遠近關係ノ大小ヨリ打算シ來ルモ、清國語ヲ學ブノ歐國語ヲ學ブニ比シテ急務ヲ感スル事寧ロ優ル有ルモ劣ル事ナカルベシ然ルニ從來歐州ノ語ヲ學ブノ衆ナルニ比シテ清國語ヲ學ブ人ノ寡ナ合書シテ僅ニ意ヲ通ズルヲ得ルヲ以テ自然等閑ニ附シ去ラレシニ外ナラズ然レモ書ハ以テ全ク其情ヲ盡ス能ハズ例令通ジ得タリトスルモ其間些少ノ差違アルヲ免レズ言語既ニ通セズ然シテ彼我ノ情誼ヲ親密ニシ唇齒輔車ノ關係ヲ實ニシ兩國貿易ノ發達ヲ望ム殆ド得ベカラズ今也清國語ヲ學ブ人漸ク多キヲ加エントス國家ノ為ノ慶スベキ也然レモ方今初學者ニ最モ利便ナル著書ニ乏シ今此ノ書ノ成ルヲ見ル句々皆刻下商業上適切ナル談話ニシテ尚附スルニ翻譯ヲ以テシ初學者ヲシテ習得ノ捷路タラシム予此ノ書ノ時事ニ適切ナルヲ贊シ聊一言ヲ添フ

辛丑四月 濱田逸洲

## 10. 『日本俗語文典』(1901) <sup>251</sup>

は□がき

此俗語文典は私が、明治三十年の二月より、支那政府から日本語を学ぶために派遣せられた留学生を引き受けて国語を教授するにあたり一定の規則を設けて之を授けた方がよからうと考へつきました時、

---

<sup>251</sup> 著者は金井保三である。

他からも其事を奨められたものですからつひやって見る気になりまして、それからは国語を外国人にしらせやうといふ点からばかりでなく、広く国語についての正確な智識を与へる階梯にもなるやうにと心がけまして、自分の関係する中外の学校で教授する際に、気のつきましたことをちよいといかきとめる様にし一方にはアススン、チエムバレーン、マコーレー諸氏の著書を参照しまして益を受け、三十一年の夏から秋へかけてやうやう一まとめにしましてすぐに自分が師事する上田文学博士に閱を請ひました、をりから、博士は公務多端の身となられ、私もまた草稿か手許になくなったため、つひ忘れがちで居ります中に歳月はずんずん過ぎてしまひましたが、昨年の暮になって、ふと思ひついて、旧稿を博士の許からもらひうけて来まして、更に修正を加へやうとして居ましたところを、書肆から請はれるまま出して世に問うて見る積り、になり大いそぎで二三個所に訂正を加へただけて、それを書肆の手に渡したのは、桜の花の、まだやうやう二三分ばかり美ひかけた頃の事でした、其後、時運は餘程進歩して、今はそこここから俗語の文典があらはれたり、或はあらはれやうとして居るそうですが私はまだそれらを参考に資する機会をもちませんのは残念な次第です、それで、自分ののはいよいよ印刷も終わりましたが、さて前後を見渡せば、自分ながら不完全なところをちよいとい見出します、けれども、印刷ずみの今日、最早如何ともいたし方がありませんからそれらは、此書が幸に世の賛成を得まして、版を重ねるやうになつた時を期して十分に訂正することにしまして、それまでは、先づ、謹んで博雅なる諸君子の示教を仰がうと思ひます、もし、一々此書の足らはぬ点と、不都合な点とを指し示されましたなら、私の本懷は之に過ぎたことはありません。

駒込の寓居に於て  
明治三十四年七月 著者しるす

11. 『日本俗語文典』(1901) <sup>252</sup>

---

<sup>252</sup> 著者松下大三郎。

## 例言

一、本書は、百般の科学発達せる今日未吾人が日常思想を通ずる所の活々たる我が大日本帝国の口頭語を研究せるものなきを嘆じ、聊斯學のために貢献する所あらむとして著作せるものなり。

一、国語は日常ワがしそうを通ずる殆唯一の方法にして、之を社会の上より觀れば社交の要具たり、国家の上より觀れば国民統一の要具たり、人類の上より觀れば人智發達の要具たり、万般の実用娛樂殆一として国語によらずして成立するものなし、国語は実に国家的個性の發して形にあらはれたるもの、国語の聞ゆる所国家あり、国語の通ずる所我が生活範圍なり、フムボルト曰はく国語は眞の故郷なりと、独逸の国歌に曰はく、独逸語の響く所凡てこれ独逸国と、国語は国歌の源因要状にして国家は国語の結果なり、国語なければ国家あることなく、国家の必要なく国家存立することあたはず、国語は実に国家の重鎮なり、されどこれ実に生々活々たる現代の口頭語をいふものにして、彼の唯單に筆頭にのぼる所の古語をいふものにあらざるなり、古語は今僅に筆頭に上るのみにしてまことは古代の口頭語なり、古語は古代における国家の要具にして現代における国家の要具は現代の口頭語なり、然るに我が国多数の言語学者ありと□も、いまだ生々活々たる我が現代の口頭語を研究するものなきは如何、我が国民の教育を司る小学中学に於て現代の口頭語を教へずして可なるか、方今、国字改良、国語改良、言文一致等の論盛なりといへども、これらの問題みな現代語の研究を待つて始めて決せらるべきものならずや、現代語の研究豈忽にすべけむや、とれ余が菲才を顧みずして本書を著はし、人跡未到らざる沃野を開墾して国家の宝庫たる新開地をつくり、且つは儒眠せる我が言語学界に一打撃をあたへんとする所以なり。

一本書は実に日本俗語文典の□矢なり、邦人の著書尙一としてあることなく、たまたま外人ブラウン、アストン、チャンバアレン等各その著あれども全く見るに足らず、アストンの日本俗語文典 *Grammar of the Japanese spoken language* の如き書冊堅牢紙数亦少なからざるを以て垣間見ること完全なる日本俗語文典の如くなれども、日本語を西欧文典の形式に充てたるのみ、吾人の参考書として何の価値

あるものにあらず、故に予が本書を編するに当つて、尋ねるに師なく、考ふるに書なく、著者ただ唯一の論理に携はり、言語の先天的形式を求め、壮大緻密なる此の一大国語を研究せるなり、故所説一として著者の創見ならざるなし、其の未しき節多きは創設の際また免るべからざるなり。

一、本書は明治卅二年十一月より国文学界に掲げたるが誤植甚少なからず、此の書に由つて訂正せられむことを望む。

一、予が国語法学に対する概念は本文四頁にのぶるが如く国語が客観にあらはし得る主観的（内容的先天的）法則とうの主観的法則を客観にあらはす客観的（外形的後天的）法則とを研究するものなりといふにあり、故に本書は全篇此の主意によりて説けり。

一、本書もと三百頁の小冊子著者が語法学に対して考ふる所の煩はしき科学的形式によって説くべくもあらず、此を以て便宜法により簡単なる形式によりて之を説ける所少なからず、その詳論は他日また公にするとあらむ。

明治卅四年七月

著者識 □

## 12. 『東文易解』（1902）

### 凡例

一日東之與中華、因為唇齒輔車之國矣、觀宇内之形勢、兩國宜相親相結、蓋莫急於今日也、而欲其相親相結、則莫先於意志之相通。意志之相通、則必藉語言為之媒介。此吾所以有是書之著也。

一此書之成也、有如臨渴掘井見獸作矢、故無暇顧事之漏脱與冗沓、加之、著者淺陋、不嫻華文、敘述不能達其意者頗多。有如舉例、從座右所獲而用之、草率之間、取捨不得宜、不免駁糅蕪雜之毀者不少、待欲後日再刊之時、芟削補修、以有所贖也。讀者幸諒焉。

一古來、為華人說讀東文之法者、蓋以此書為首。故書中所用之品目稱謂、不典者居多。實出於不得已、讀者勿以杜撰見尤幸甚。

一本書、主讀法而非說文法者。顧自文法觀之、則有闕漏、有蛇足、識者幸諒焉。

著者誌

### 13. 『東語初階』（1902）

#### 東語初階弁言

- 一東中交通垂二千載、隋唐時代我學於中、惟時有古今道有隆污、勢會遷流自不能避、今欲以摘擷於遐方者、輪引於比鄰、敢曰盡東亞之責任、亦聊以酬夙昔日之高情、階梯何在、語言其先、此本書之所由著也。
- 一通來讀東文者日眾、著東語初學本者日夥、此固我兩邦慶事也、所惜者都屬於貿易家、言本書有鑒於此故、於東文說例極備、宜於商賈、尤宜於文人學士也、蓋首則說明其體繼、復說明其用、俾學者習語作文之便、而終吸文明智識於無窮也。
- 一教育之道宜乎循序漸進、自淺及深、自易及難、否則徒使學者扞格耳、故本書首列五十音、所謂清音、濁音、轉音、拗音、長音、促音及音勢諸圖、各列漢英對照以便于學者俯拾、即是不取諸辛、是則不啻師承在前、授我發聲也、庶幾潛修闇學之士不患誤入歧途矣
- 一習外國語言者、貴乎強記、貴乎練習、而坐擁皋比者宜亦有方法以使學者之練習強記也、故本書會話之法、每單字始列字母拼音如「アナタ」是也、繼則拼音與漢字並列如「汝」<sup>アナタ</sup>是也、終則僅列漢字如「汝」是也、蓋始則憑拼音以溯漢字、則字母愈熟矣、繼則令其知某漢字即某字母相拚而成、音者及其某字母相拚成音、即成某漢字者則雙貫齊下矣、終則令其憑漢字以憶拼音、則證其記憶之興否也、學者苟遵此法、日就月將、則東西語言難易之別自憬然而悟其故矣。
- 一此書第一篇曰說話法、始於日用倫常、繼於進退周旋、終及於文法之變化、斯不獨為語言之次第、亦人世自然之順序爾。
- 一第一篇首揭日清兩國造句之方式、字分句析一目瞭然、即知兩國措辭不同之故、舉一反三是在讀者、世有敏學邃思之士、觸類旁通、推作幾千百句以補遺漏、是則不僅收練習之實、亦具徵無師獨學之自有驗也。
- 一第二篇曰問答之法、蓋風雨一堂、冠者六七不為唱和而為問答、庶幾蘊儲於口盧不致怠忙於酬應場也、所有漢字凡為前段注明拼音、後段續見、概不加注、亦寓懲動記憶之意也。
- 一篇中造句方式以□為記者、則可以名字或代名字補之以、、、為記者則可以動字或狀字補之、以△為記者則可以勢字虛字介字或聯字補之、

如介字中之「ガ」「ノ」「ニ」「ヲ」等字為語言時最要之關鍵、而使用亦屬最難、然篇中取譬縷析設引甚詳、亦不致有荊棘之慮也。

一自來語輕重譯、往往顧彼失此、此書原以東文為主、而以漢譯東俗語之難、倍於文章字裡行間、詎無引文牽義之弊、所幸此書曾經言語專科之馮君悅甫、岡本君郁周校勘、綦詳堪稱全璧、然或限以天然之畛域、非可強以筆墨相融洽、是非著者之所敢忽能無、望讀者之加意而辨別乎、世有淹雅匡其不逮幸何如之

明治三十五年仲夏之月

伊澤修二譯於礪川之同文局

#### 14. 『和文釋例』(1902)

##### 序

凡治一国之學問、必通其国之語言文字、而後精意微言、始能昭然而無疑、日本各學校皆設外国文字之科、其大學至以外国語相授受、學者往往通數国語言、其次亦大率能讀西籍、夫日本維新三十餘年、所譯之書歲以萬計、即不識外国文字其於各国學問之端緒、豈不足以粗明、然猶以為不足者、豈非以所譯之書雖眾其舛陋不文者、多不能傳載其義、即有能刻意以求顯達者、亦未必能無所掛漏、而學問之精微奧妙將欲盡窺其底蘊、捨治其国之文字、而固無由歟日本與歐洲文字絕異猶不避勞瘁、孜孜其業如此、而我国之文字與日本為同源、乃獨置之不顧、必藉二三譯言者之力、始可以涉獵其書、抑可異矣、考日本舊無文字、自漢學興後、其国人浸淫其幾千餘年及新學寢盛、學者始廢漢學而用和文、然紀實之處仍皆漢字、所謂和文者、不過以數十字為脈絡斡旋之詞、其大體與漢字固無異也、惟吾国之學者無書以道其源故、故欲問而無從耳、今著者之著、是編條析其例、幾無遺義、初舉其勾勒位置、漸及其文法變化由局戶而達堂奧、為初學慮至深遠、凡不識和文之人執其例而求之、旬月間必能盡通推其意、固將使天下之士、不藉譯者之力悉能讀其文、而後已是不啻取日本之文明、倒廩傾倉盡輸之於我国、吾知不數年間、民智之開必有百倍於今日者、則是書有益新學之功、豈微也哉、至知者漸眾、則譯書者亦皆知所儆戒而不敢徒綴浮辭、苟且以塞責、是又著者

之隱以維繫於無窮者歟。

光緒二十七年十二月南宮刑之襄

#### 和文釋例序

今謀新之士輒曰、渝民智莫急於譯書、而從東文轉譯西書尤為事半而功倍、斯說也、余以為不然、夫西書當譯、東書不當譯、何則東土文字盡興、吾同其所異者不過數十虛字之間耳、得其鉤勒聯貫之法、循而讀之、與漢文無以異也、然則學者亦求自通之、而已奚煩遙譯之勞乎、且譯書之弊不勝言、襄見日本之能漢文者所譯書、取元書參而讀之、其意義歧出者、往往而有吾土之所自譯蓋可知矣、近者南方有出重資募譯法學書者、譯者喜趨其利、其尤捷者至於月得數十百金、問其譯之之法則、僅就虛字間顛倒序次之、書中所言、譯人不能自解也、孟子曰、以其昏昏使人昭昭、悲夫。夫西書所以有待於譯者、以其文字絕異勢、固未可倉卒通也、然苟欲從事其學、猶將探幽索隱、期盡得其蘊奧而不能、徒恃乎譯書、況乎東土文字之興吾同出一源者乎、日本未通中國之先、其習俗相去萬里、自漢學東來、士大夫慕東方之文治者、覃思極慮、作為假名之字漢文和讀之法以詔其國、由是國中無人不識漢文、寢假以漢音、易其語言者且十八九矣、嚮使漢學初來之時、一二先覺者僅取漢文之義理、傳而譯之、而不思委曲求通之道、則謂日本至今無一人能知漢文可也、今者吾國士大夫既有慕於彼之新政、思欲考攬其載籍、捨明明可譯之文字、曾不一推究、唯是束手仰面、舉天下以聽命於鞬象之流、亦見其不好學矣、因取彼中講習文義之書、輯而錄之、且為發其例、穎者數日、鈍者旬月可以盡通其故、自讀和文之書、海內君子有欲曠觀乎、域外者或者其有採與。

光緒辛丑年冬十二月桐城吳啓孫自序

壬寅秋七月重定刊行

#### 15. 『新編日本語言集全漢譯日本新辭典合璧』（1902）

##### 序

我邦於支那同文之國也、自古交通往來頻繁、惟方言各異、乃一憾事、甲午以來彼都人士鑑於墨守故步之非、連翩東渡留學我邦、學習各

種經世之學、是以至今而情誼更形親摯邇、又清国朝野銳意維新、廣開學校教科之書、大半折衷我国文字、蓋欲求進步之速、不得不以我国文字為先導也、然和文易於譯書而難於語言、何則譯書、則能文之士略明文法之變化即可操觚從事、若語言則別有語訣、非時相會話即不能脫口而出、浙水王君遊學我邦有年矣、於我国文字久已躋等堂奧、惟時慨日清語言文法鮮有善本、致於初學者入門頗非易々、爰取昔日語言文法所有心得之口本重加編纂、務使學者讀是編而於譯者會話兩得其益、復以字典為爾書之總、匯習和文者所不可不備、乃選帝国大辭典、言海兩書、擇要譯錄於和文奇字、更不厭繁瑣詳加註釋、復輯和文釋以漢義、編為新禮和文讀本、後附日本文法舉隅、日本新書介紹目錄為讀東文之指南、題曰新編日本語言集全漢譯日本新辭典合璧昨攜以眎、余盥讀一過、不禁叫絕、窮攷其書、禮例美備、足為和文教科惟一善本、嗟乎、使清国有志之士讀之三月即可與我人會談、即閱吾国新書亦無開卷茫然之歎、至已通東文者讀之尤有觸緒貫通之妙、誠讀東文者之枕中鴻寶瑯環秘笈也、嗚呼、王君之心可為至矣、然我推王君之心蓋不僅為便語言文字起、見其志欲普清国文學之士讀是書以速通東文、然後徑渡我邦攷求政治法律各種專門之學、得門而入事半功倍、他日歸国後上以輔朝廷之振興庶政、中以廣益學校樂育英才、下焉者、所足以改良百工事業、使清国日進文明、安知不於是書基之耶、東亞之興拭目以俟矣。

明治三十五年九月下浣  
日本高等學校教員 和田正太郎撰

#### 16. 『東語完璧』（1903）

今之天下、一列邦之天下也。居今思昔、其所以釋畛域之念者、莫先于辭令。辭令之不工、則畛域亦因之而難化。古人所以有草創、討論、修飾以及潤色、詳審精密、各施所長、以之應對諸侯、鮮于敗事。故孔子善之仆于駐華星使鄭公甫固旃者約仆至东充当台灣協會會學校華語教习仆忝列此席、抱歉殊深。得暇時欲習東語、坊本雖多而尽善尽美者鮮現。茲于友人得獲此集、悉出自華日諸名手編訂、由一貫以及千仞進退周旋、无美不備、洵可謂便于士大夫以逮商旅、且于古人善于辭令之旨、

庶几近焉、吾人能奉之圭臬乎。爰為之序、以述顛末云。

于江戸四一閣

光緒二十八年癸卯清和月 燕京 馬紹蘭 序

## 17. 『日語獨學書』(1903)

### 自序

中国自開海禁以來、環球各國皆梯航而至、而外洋之文明亦漸輸入焉、此交涉之原因、即文明之起點、居今大洋交通之世處、茲物競擇天之時、稍識時務者莫不以通洋務為先、夫通洋務必先通文字、通文字必先通言語、而通語言莫如東洋為最近、蓋中東兩國各處一洲、相交最切、文字相似而政教又多可取法者、故中之於日留學也、遊歷也、賽會也、採購也、負販也、孜察也、一切行旅之繁及交際關繫之重、較之他國為最著焉 日本名士村上君篤念同文、熱心覺世、命駕金陵創設東文學堂、授普通等學於我國之新少年四載、於茲文明之進化思想之發達饒有成效矣、生等從學最早於言語一門獲益尤深、肄習之餘、取平日各種譯本并語學、全課詳繹彙纂積而成帙、顏曰日語獨習書、更與村上先生刪定而潤色之、生等不敢自私爰付、剗剗以公諸同胞之有志斯學者籍表、吾師村上君薰陶之澤、謹述本末、匪敢言序。

光緒二十九年月下浣 明治三十六年六月中旬

金陵東問學堂言語卒業生

郭祖培 熊金壽 仝序

## 18. 『中等日本文典譯釋初編』(1903)

### 例言

- 一原書名中等國文典、今因譯釋者、購讀者均係華人、故改今名。
- 一是書譯文與原文並列、譯者或有謬誤、讀者亦易匡政、且初學又得與原文參核、而得譯書畧法。
- 一每節後列釋要、凡字之不經見者、句之猝難解者、文法之關繫緊要、而原文未及者、或原文略及而不詳者、均分條詮釋、務求詳盡淺顯、

俾讀者立解、萬不敢心存秘匿、稍涉含糊誤我同學。  
一書中所引之句、有古語、有俗諺、有詩歌、直譯意譯頗費經營、然支離累贅仍所不免、幸原文俱在、閱者諒諸。  
一原書凡三編、每編自為首尾而又各分淺深、為彼国最通行文本、譯者一仍原書次第、分為三編、不敢稍顯紊亂。

光緒壬寅三月譯者識

## 19. 『東語真傳』(1903)

### 序

方今宇內之大勢、因人口增殖之結果、而成生存競爭之活劇、愈激愈烈、而優勝劣敗之事實、歷歷可徵矣、歐美各国、權勢日強、逞其憑陵之念、而所向無前、顧我東亞、何以當之、綢繆未雨、古訓為昭、苟為国民者、不奮發興起、以養成取之氣象、曷能免危機乎、嘗讀古人詩、至国破山河在、春城草木深之句、不能不為今日之波蘭印度悲也、嗚呼今日之東亞、斷非春夢方酣、高枕長臥之時矣、不觀乎我国維新以來、改更政體、振興教育、厘革兵制、卓勵風發、積以幾月、至今為宇內強国之一、足與歐美各国并轡馳驅也、今如中国、亦欲刷新百度、努力經營以發揚国威、則明治往事、可以為師也、儻期之乎、宜以日本語為關鍵而講究日本書籍、不是獨為修西學之捷徑、抑亦可見日本當時取捨西學之苦心也、凡物質之學、則取諸西洋、固不待論、顧精神之學、如道德宗教、則取捨之間、不可不慎重者、何也、蓋古來儒教佛教等所傳之道德宗教、是亦精神之學、足以維持国民之綱紀、化成歷世之風俗者久矣、故當捨則捨、當取則取、比較對照、鎔冶陶鑄、折衷東西兩洋、方足以立人道之極、吾邦人覃思于此、備費審查、一旦中華人士、講究及此、則吾邦人所歷之徑路、亦中華人士所不能避也、伊則修二君創立泰東同文局、嚮有東語初階及東文易解之發行、今又有東語真傳之新刊、余喜而序之、蓋如此書者近可當交際貿易之便、由此階梯而登堂、則道德宗教之文章、亦可以講究也、新機轉開文連煥發、謂此書無裨補於萬一乎。

明知三十六年一月七日  
文學博士 井上哲次郎識

## 20. 『言文對照漢譯日本文典』(1904)

凡學他邦言語之必待于文法書、比學自国言語、更加甚焉。是通彼我皆然、清国人之修我日本語者、欲得良好文法書、固其所也、顧現今文法書之行於世者、不乏其類、然其主文語者、則密于古、而疏於今、主口語者、則或流理論、或誤標準、粗漏杜撰、未足以中選、是教育者之所深以為憾也。松本龜次郎氏在我弘文學院、教日本語于清国學生、有慨於此、頃編一書、題曰言文對照漢譯日本文典。請序於予、予受而讀之、文語口語、對比說明、舉例示證、附以漢譯、丁寧親切、曲得其要、其益于中国學生、決非淺鮮也。蓋我口語文法、諸說未定、人迷去就、本書之出、別具一成案、可以供世人之研究討議而有所進盡於學界矣。何翅益于中国學生雲而哉。是為序

明治三十七年七月 嘉納治五郎

## 21. 『東語初階』(1905)

韓譯重刊 東語初階敘言

是書者、成於日清兩國同人中篤學能文者之手、體會入微、口吻華肖、膾炙於中華者久矣、既上供大清国

皇太后

皇上

兩陛下乙夜之御覽、亦下蒙各省當道鉅公採擇之榮、故彼處學校中凡列有東語科者莫不援此為教科善本焉、竊惟清韓皆吾隣也、既便益於甲隣、尤不可不便益於乙隣、況韓京南北鐵路開通伊邇、自後交際日繁往來月密、彼此語言相互為用者、愈覺不容緩矣、且聞韓國學校中無不設東語科、而韓國士大夫皆樂習東土語言、今是書譯成出於世、洵為一般切磋之助、苟使朝絃昔誦自、然諧熟於不知不識之間、然則既經風行於禹域者、亦可卜風行於箕土矣、蓋道途之交通不離乎舟車、而意思之相達實貴乎語言、藉以暢達兩國士民之交情、不獨泰東同文局推廣之榮、亦足以增長兩國國際之幸福、故叙此一言云邇。

明治三十八年三月 伊澤修二謹識

東語初階初版序言

- 一東中交通垂二千載、隋唐時代我學於中、惟時有古今道有隆污、勢會遷流自不能避、今欲以摘擷於遐方者、輪引於比鄰、敢曰盡東亞之責任、亦聊以酬夙昔日之高情、階梯何在、語言其先、此本書之所由著也。
- 一通來讀東文者日眾、著東語初學本者日夥、此固我兩邦慶事也、所惜者都屬於貿易家、言本書有鑒於此故、於東文說例極備、宜於商賈、尤宜於文人學士也、蓋首則說明其體繼、復說明其用、俾學者習語作文之便、而終吸文明智識於無窮也。
- 一教育之道宜乎循序漸進、自淺及深、自易及難、否則徒使學者扞格耳、故本書首列五十音、所謂清音、濁音、轉音、拗音、長音、促音及音勢諸圖、各列漢英對照以便于學者俯拾、即是不取諸辛、是則不啻師承在前、授我發聲也、庶幾潛修闇學之士不患誤入歧途矣
- 一習外國語言者、貴乎強記、貴乎練習、而坐擁皋比者宜亦有方法以使學者之練習強記也、故本書會話之法、每單字始列字母拼音如「アナタ」是也、繼則拼音與漢字並列如「汝」<sup>アナタ</sup>是也、終則僅列漢字如「汝」是也、蓋始則憑拼音以溯漢字、則字母愈熟矣、繼則令其知某漢字即某字母相拚而成、音者及其某字母相拚成音、即成某漢字者則雙貫齊下矣、終則令其憑漢字以憶拼音、則證其記憶之興否也、學者苟遵此法、日就月將、則東西語言難易之別自憬然而悟其故矣。
- 一此書第一篇曰說話法、始於日用倫常、繼於進退周旋、終及於文法之變化、斯不獨為語言之次第、亦人世自然之順序爾。
- 一第一篇首揭日清兩國造句之方式、字分句析一目瞭然、即知兩國措辭不同之故、舉一反三是在讀者、世有敏學邃思之士、觸類旁通、推作幾千百句以補遺漏、是則不僅收練習之實、亦具徵無師獨學之自有驗也。
- 一第二篇曰問答之法、蓋風雨一堂、冠者六七不為唱和而為問答、庶幾蘊儲於口盧不致怠忙於酬應場也、所有漢字凡為前段注明拼音、後段續見、概不加注、亦寓懲動記憶之意也。
- 一篇中造句方式以□為記者、則可以名字或代名字補之以、、、為記者則可以動字或狀字補之、以△為記者則可以勢字虛字介字或聯字補之、如介字中之「ガ」「ノ」「ニ」「ヲ」等字為語言時最要之關鍵、而使用亦屬最難、然篇中取譬縷析設引甚詳、亦不致有荊棘之慮也。

一自來語輕重譯、往往顧彼失此、此書原以東文為主、而以漢譯東俗語之難、倍於文章字裡行間、詎無引文牽義之弊、所幸此書曾經言語專科之岡本君郁周之繙譯、茲又得張君少培之訂正交定、而其句話文章自較前版為穩愜、尤附以官話四聲所謂精益求精矣、再訂纂詳堪稱全璧、然或限以天然之畛域、非可強以筆墨相融洽、是非著者之所敢忽能無、望讀者之加意而辨別乎、世有淹雅匡其不逮幸何如之。

明治三十五年晚春之月 伊澤修二識於礪川之同文局

## 22. 『漢譯日本辭典』(1905)

### 凡例

- 一、此書為清國學生學日語日文者蒐輯普通所用語言貳萬三千一百五十、而一々漢譯之、古語鄙語不要緊者則缺如。
- 一、語言排列、一由五十音圖之順序、例如ア、アア、アイ、アイキヤウ、アイコク、……イ、イアフ、イイエ、イウイウ、……ウ、ウイウ、ウウウ、ウエン、ウカウカ。
- 一、濁音次清音、例如ガウ次カウ、キジ次キシ、ザンジ次サンジ。
- 一、半濁音次濁音、例如パン次バン、ペン次ベン。
- 一、撥音ン次ム、例如キン次キム、サンシ次サムシ。
- 一、促音ッ次清音ツ、例如カッテ次カツテ、サッキ次サツキ。
- 一、長音符一次無之者、例如テール次テル、メートル次メトル。
- 一、拗音次二個直音、例如イシャ次イシヤ、ジャウ次ジャウ。
- 一、綴字法（假名遣）<sup>カ ナ ヅカヒ</sup>、一由慣例、所以多同音異字者、今表示之於左（中略）
- 一、此書所揭之動詞形容詞助動詞、皆係於第三變化即終止法、故若欲求「行カズ」<sup>ユ</sup>「高キ山」<sup>タカ ヤマ</sup>「知ラシメバ」之「行カ」<sup>ユ</sup>「高キ」<sup>タカ</sup>「シメ」、則須先照語尾變化表而知其終止法「行ク」<sup>ユ</sup>「高キ」<sup>タカ</sup>「シム」、而後求其所在。
- 一、口語動詞形容詞附之於文語動詞形容詞下、故若欲求「起キル」<sup>オ</sup>「越エル」<sup>コ</sup>「長イ」<sup>ナガ</sup>「涼シイ」<sup>スズ</sup>、則須先按語尾變化對照表而知文語「起ク」<sup>オ</sup>「越ユ」<sup>コ</sup>「長シ」<sup>ナガ</sup>「涼シ」<sup>スズ</sup>、而後求其所在。
- 一、大字右傍所注細字、示其音、例如オホシ<sup>オ</sup>音オオシ、カウシ<sup>コ</sup>音コウ

シ、セウサ音ショウサ等。

一、[] 内之字、普通所用之漢字也、就其中日本獨用之清国不用之、例如「相圖」「勘辨」「差支」「田植」「榊」「辻」「付込ム」等者、附一線於右傍一區別之。

一、「」内之文示其用例

一、◎下所錄者異音同義之語也、

一、此書所用略語右開

(中略)

一、看此書者須先一讀別所揭語法撮要。

一、此書稿籠成而余遽有西蜀之行、行李匆忙、還無校訂訛謬補綴脫漏之暇、魯莽杜撰之譏、余固不免也、日若有改印增刷之時、則庶幾刪正修補以一新面目、中外君子幸諒焉、

明治三十八年十月  
於東京上六番町僑居  
難波常雄識

## 23. 『東文法程』(1905)

文治肇興、書契乃作、綱紀萬事、厥用斯宏。先民有言、讀書須識字、又曰辭尚體要、此在吾国文字而已然也。自瀛海互通交關旁午、朝野之士覽世變之方殷、知事己之非計、思所以師人之長、益己之短、由是廣採方言、甄求治要、凡夫律法、軍紀、財賦、教育經国之大端、旁及天算輿地圖畫、格化專門之邃詣、咸博攬而詳譯之、顧壤地之交、近在眉睫、風教所被、不遠古初、西之遠而難紀不若東之近而易徵也、於是向所欲得之於西者、近且借逕而兼取之於東。自京師建立東文學社、而各行省靡然向風、黌舍之設邑邑相望、然其為例、蓋繁致用亦異、徒觀其點畫之波折比合之能事、視吾国文字若有源流本末之可言、而抑知其審虛實辨剛柔擬議於動靜之間、斟酌於斷續之際、差以秒黍、違若邱山、苟以治中文者治之、非北轍而南轅、即削趾而適履、而欲隱括其義法、俾如有定程之不可喻。蓋戛戛乎難之矣。吳君幼蓮夙精斯藝、所著東文法程、隨事立例、舉一反三、前以撰稿歸諸本館、爰就東邦名彥、蒐討異同、衡量簡繁、凡輯為書十九章、誠譯學之津梁、徵文之梯級也、近當彼国朝野、勵精文治武烈、駸駸乎、凌轢歐米、震耀古今、然而国

步之強、視乎教化、教化之進、基于文言、是則茲書之出、固覩人國者之符契也歟、校訂畢、役爰為弁其事於簡端。

光緒三十一年二月商務印書館主人敘

## 24. 『清人適用日本語典』(1905)

語言之學、在熟耳、然亦須要得其法、譬之航海賴針、獲魚用筌、則如本書蓋亦學語者之針筌也

明治三十八年

七月十八日

護美謹題

清人適用日本語典凡例

一是書三卷、專為支那學生欲學日本語典之教程、故概從其簡、若人人意中語、胥以闕如。但、運用之權、自在於教授者也。

一是書、非敢取余一人之語、強就臆說、固無論也、且大約係余教授中誦習者、至於語屬艱詰、及關切支那文法、有待證引者、亦註釋一二於上端、學者宜究心焉。

一是書日本語典也。惟要習熟日本語。故若漢釋例語、乃強從日本語、以上下之耳。但於其間施注脚、以古文辭與現行文、各任學者之意、可也。

一余學識謏陋、加之倉皇付印、故或不免有繆戾之處、然俟諸後日、則正其訛、削其衍、補其不足矣、大方君子不惜賜教、幸甚幸甚。

明治乙巳東方之神太皞乘震執規司春之時於大日本東都

著者識

## 25. 『日本俗語文典』(1905)

日本俗語文典序

自大和風煦拂東吹、識時之士發其號呼之聲、曰譯書、譯書於是作為解和文之便捷、諸法以饗多士、其陳義不可謂不高、其用心不可謂不

苦、此誠以間接輸入文明之導線也、然今日之譯界成為人所詬病者何哉、雖精深淹貫者固有其人而率爾、操觚者大都粗知和文之表面、不識和文之真相、蓋和文之真相俱由俗語胎育而出、非僅就助詞顛倒之所能得其意義也、夫人類發生時代、原無口語文語之別、至後乃漸有文字、蓋口語者文字之母、文字者口語之化身也、然日本之語言文字雖顯判兩途、要之不識其語言而欲明其文字者難矣、況語言更為交通上之便利乎、抑聞之口舌具而不能作語者為之啞、列於廢疾之一、我國之留學日本者、數達八千人以上、其對於日本而不等於啞者幾人哉、吾不知其所求之學問從語言上得之乎、抑別有所為授受之道耶、抑又聞之語言者能隨國勢為升漲力、英以勢力冠地球、其語言通行最廣、達一百十二兆余人、當今日本蓬勃之象、人所共知、其將來勢力所及達於何等地位、雖不可知、然其語言之流通有升漲而無墮落、可就吾人之判斷力、不難一言決也、然則以個人之學問言、不得不學日語、以世界之大勢言、尤不得不學日語、至若兩國交際上之關係、更無論矣、雖然吾國人之知此者亦豈鮮哉、意者殆無善本為之啓發乎、吾國所出日語之書、名目甚夥、然除堆砌裸語外、無一稍及於語言上之文法、幾若文法者、為日文之專有物而非日語所得延用者也、噫異矣、不觀夫他國人之對於日本乎如 Aston.Bhamberbain.Imbrie 諸氏均著有 Japanese Idiom Grammar.美備無缺在彼文字絕異猶不避勞瘁若是、而我文字同源、且有密切之關係、反置之不顧、不獨學問上之缺點、抑亦吾國之羞也、是書之作非敢媲美外人、亦獨為學日語者一關門徑云邇。

著者識

## 26. 『日本文典課本』(1905)

日本文典課本 例言

- 一此書為華人之學日文日話者、用華文論述日本文法者也。論述之也、渾思精究、勉簡明而得要矣。
- 一此書、日文之引例、主皆採於經史之譯文、是經史之文、華人之所諳熟、而且與日文其結構畧相同、故對照、兩文則字句之意義與其位次並不俟他指授而可直自會得也。
- 一此書論文法、每節踵以話法、舉文例。每句對以話例、文話兩兩併論、

是以先知文法、而後直學話法、則文話之異同分明且兩者互相待、頗易解也。

一凡日本文法之立名也、雖非家々無少異、而其間自有普通於世間者、此書採而用焉、但其字面不慣華人之耳目者不尠、然日本文法之立名、固如斯耳、讀者諒焉。

一此書前半日話之傍、記華話、明其義、而至後半止之、是以至後半則可、既習熟不必要之也。

明治三十八年十月

著者識

## 27. 『日語捷徑』(1905)

凡例

此書主著為清韓兩國之留學生、以為日語研究之捷徑、雖然歐米諸國人之學日語者亦當以此書為珍也。

一書中所為漢譯、用此（）號表以記其內者、大概日本慣用之字也、雖然記五十音圖之片傍者、是示北京音也。

一日清韓等諸國者是東洋之同種同文國也。雖然於記名物、往往有異其文字而同其意義者、譬之如日本之辨當與手盥是清國之晏仔（書晏亦可也）與面盤矣。如此者實因其國人之習俗使然也、余雖就各其人頗深驗之、猶恐未能為無疵璧、幸世之博識之士以教其所不及焉、

一此書專撰日用之要語、由漸入深而書之、使學者易識而易記也、誠能從此用功則日就月將、學有緝熙於光明矣。

一凡外國人之難於學日語者、不獨在於音、而在於助辭、故此書專用力於斯、兼引漢字之同意者以解之、若漢字無有當其字者、則必詳解其意矣、凡助辭之解必用此（-）號表表之、使學者一目瞭然也。

一此書專以日本之片假名文字而著、傍以漢譯解之、

一此書於首先用簡易之單語、次將其單語造成言語、使學者可以變通自用、然當造句所要助辭之用法、則以一貫之道而詳說明於後矣。

一此書雖小冊子、然亦待多年之經驗而著、非一朝一夕之故也、學者不可以其近而忽之也。

明治三十八年一月 長尾永五郎識

## 28. 『續新日本文典』(1905)

### 凡例

本書は普通の記載的文典を学習せる生徒に対し、国語沿革の大要を知らしめむことを目的とす、されば中学校の最上級若くは師範学校其の他の学校の教科書に宛つることを得べし。

凡文典を学ぶは、国語の正しき使用法を会得することその一なり、人性を高雅ならしむべき、一国の文学を咀嚼すべき基礎を形つることその二なり、推理考察に関する心的作用の発達を資けしむべきことその三なり、かの実用的並に記載的文典は、よくこれらの目的を達すべし、されど、この他に、国語にたいして尊重の念を深め世界に於ける自国語勢力の発展を望まむには、国語の由来する所を究め、その変遷を明にし、且他国語との関係を明にせざるべからず、故に記載的文典を学習せる学生に対し、更に国語沿革の大要を授くべきは理の睹易き所、本書はこの目的を充さむが為に公にしたり、但し徒に高遠に馳せ実益をえざらむことを慮り、常に各種字の文法的形態を練習するに便よき例を以てしたり。

本書はなるべくその時代を代表せる書中より、趣味に富める数多の例を抽き出で、一々出典を挙げたり、而してこれおをその性質用法によりて練習するときは、音韻語法の変遷を知るのみならず、通常に記載的文典にいへる文法上の形態を熟知せしむることを得べし、例へば上古の部に於いて、格を示す後置詞につき練習するときは、名詞・代名詞か動詞・形容詞に対せる一切の関係を網羅して知らしめべく、奈良朝時代に於いて、外国語の転来の條を授くるときは、併せて清音・濁音・拗音・促音・撥音等の名称性質種類等を明にすべく、平安朝時代に於いて、物語類の発生及その語彙を説くに方りては、音便・通音・約音・略音等を知らしむるを得るが如し。

本書は正編に於いても文章を経とし品詞を緯とせる如く、文章に重きを置きたるが故に、語法を説くと共に文体の説明をも所々に加へたり、こは思想の散漫を防ぎ、枯淡に陥るの弊を救ひ、その効果をして一層顕著ならしめむことを欲すればなり、

本書には付録として日英佛独四国語の使用範圍図を添へたり、こは将来大陸及その他に向ひて、大に発展すべき我国語が、世界の有力な

る他の国語に対し、目下如何なる状況にあるかを、一目瞭然たらしめむとの微意に基きてなり。

本書の教授に関しては、新日本文典教授参考書五巻を参酌せられむことを望む。

明治三十八年八月 著者識す

## 29. 『東語速成篇』(1905)

### 例言

本書は官話速成篇口総訳にして対修の便に供せむが為め編述せし物之を東語速成篇と称するは一は以て清国人にして本邦語を学ぶ者の参考書たらしめん事を期したれば也而も発口の日時頗る急を要せしを以て印刷傍訓等の上に於て多少の誤謬を貽すの已むを得ざるに到りたるは深く遺憾とする所也以後重版の機を得ば每次必ず之を校訂して以て其誤なさを致すべし看者諒焉

明治三十八年六月中浣 編者識

## 30. 『標品字典』(1906)

### 序文

近時支那ノ学者遠ク東瀛ヲ涉リ我国ニ游学スル者実ニ万ヲ以テ数フルニ至ルソノ志ス所ハ政法ニ教育ニ実業ニ種々ノ学芸其精ヲ採リ其奥ヲ窮メ各自文教ノ基礎ヲ建テント欲ス然シテ我国人亦彼士ニ渡リ親シク其实情ヲ究ムルモノ日ニ月ニ多キヲ加ヘ往来頻繁ニシテ親交益深シア・洵ニ空前ノ盛況ト謂フベシ黄越川君ハ嘗テ武林ニ在リデ我国文字語言ヲ研究シ訳書頗ル多ク好学深思ノ士ナリ明治三十七年夏我国ニ漫遊觀光ノ旁テ体育ノ業ヲ脩メ同年回国ノ途上リ三十八年冬再タビ我国ニ游学セラル聞グ君日本字典ノ書種類多シト雖モソノ性質変化筆ヲ分明ニシ垣間見ること直ニ文字ノ意義ヲ解シ其所属ヲ知ルニ便ナル良字書ナキヲ憂ヘ拮据勤勉幾歲月ヲ閲シ今コノ標品字典ノ著アリ蓋シ支那ノ学者ヲシテ日文日語ヲ学ブノ楷梯ト為セント欲スルナリ余ト君辱知多年一言ヲ辨センコトヲ請フ受ケテ之を閲スルニ固有ノ字典ト其

体裁ヲ一洗シ専ラ實用ニ応セントス簡求正確區別詳明ニシテ啻ニ支那學者ノミナラズ我國人ノ漢文ヲ學ブニ於テ其裨益スル所亦淺鮮ニ非ルベシ君著述ノ精神ハ例言ニ詳盡セリ余不文ヲ以テ之ヲ辭セズ聊カ數言ヲ陳述シテ其責ヲ塞キ他山ノ石タルヲ得バ幸甚ナリ

日本樋口龍縁識

### 31. 『東語自習舌切雀』(1906)

#### 序

余が初めて日本昔噺の編述に着手したのは、実に今から十五六年前の事である、当時余の此事に出たのは、畢竟我邦の少年子弟の為に、従来口から口へ伝へられたものを目から目へ伝へやうとしたに過ぎない。

然るに此種の書は、一面、風俗、人情を察し、一面、言語、応接を学ぶのに、最も便利なるものとして、更に読者を意外の方面に得た、余が後に赴任するに至った、彼の伯林の東洋語学校を初め、諸外国に於ける日本語研究所、若くは本邦に渡来して、新たに国語を学ぶ者の為に、其入門の教科書に用ひられた如きは実に豫期以上の事であった、

さればその英語対訳は先に英語婦人某々氏等の手に依て、已に完成を告げたのであるが、今又新に杉氏が我が国語練習の目的を以て清国人適用の読本を編まるるに当り、その資料を同じく日本昔噺から採られたのは、余の頗る喜ぶ所である、

東語自習第一編舌切雀成を告ぐるに当り、余は日本昔噺の編述者と云ふ縁故から、其序文を求められた即ち所感の俣をここに誌す、

明治三十九年十二月

巖谷小波識

### 32. 『日華語學辭林』(1906)

#### 例言

本書ハ編者ガ支那語學習ノ傍自己ノ記憶ニ便ズルタメ種々ノ語ヲ蒐集シ来リシモノノ中ヨリ必要ナルモノノミヲ択ミ之ニ解釈ヲ施シタル

モノニテ邦人ガ支那語ヲ研究スルノ参考トシ且ハ清国人ノ日本語ヲ研究スル者ノ為ニ資セント欲スルナリ。

本書語詞排列ノ順序ハ岡本正文士氏編支那声音字彙ニ拠リ發音及ビ四声ノ順序ニ排列セルモノナリ。

書中官制ニ関スルコトハ皆現代ヲ標準トシテ解釈シタリ地名故事俗諺等ハ支那語読本又ハ會話書中ニ散見セルモノ又ハ顯著ナルモノニテ編者ガ特ニ必要ト認メタルモノノミニツキ解釋ヲ施シタリ。

書中文字ノ傍ニアル○ハ四声ヲ表ハス符号ニシテ左方下隅ニアルハ上平左方上隅ニアルハ下平右方上隅ハ上声下隅ニアルハ去声ナリ即チ阿ハ上平埃ハ下平矮ハ上声碍ハ去声ヲ表ハスガ如シ中ニハ・ノ如ク黒圈ヲ以テ四声ヲ表ハシタルモノアリコレハ有氣音ニ限ルト知ルベシ又英字ノ傍ニ 1 2 3 4 ト附セルモ四声ノ符号ニシテ 1 ハ上平 2 ハ下平 3 ハ上声 4 ハ去声ナリ。

發音ハ片仮字ヲ以テ各字ノ傍ニ附シタルガ支那語音ハ我ガ仮字ニテハ完全ニ表示スル能ハザル處頗ル多キヲ以テ其正確ナルヲ知ラント欲セバ各欄ノ初ニアル英字ニ拠ルヲ便ナリトス。

仮字ノ上ニ・・ノ二点ハ噤口音（ハ喉音）ハ捲舌音ヲ表ハスマタヂハチノ舌尖音ニシテ英音ノ ti ニ当リラリルロハ ja ji ju jo ニテ發音ノ工合ハラリルロノ如ク更ニ舌頭ヲ硬クシ音ノ摩擦ヲ強カラシムベシ又音尾ノヌハ窄音ンハ寛音ヲ表ハスモノナリ。

明治三十九年四月

編者識

日華語學辭林者、予曾學習清国語言之暇、隨聽隨記者、日積月累遂為一篇、乃特選擇其必要者萬餘、解以日本俗語、欲一一為清国人士學習東語者津梁、一以為日人學習清国語言者階梯也。

此書語詞排列、總據英国字母次第而定、故學者因其字音、從英国字母順次索之則可、或據卷首所附索引、先知其言語所在張數、更就其張數索之亦可、蓋索引隨字劃多少定次第、其右側數字則示其張數也。

書中東語、悉皆附以假字、學者通達假字、則書中東語如指其掌、今為學者少說明假字。

假字則清音字五十、濁音字二十、半濁音字五、鼻音字一、其數總

七十六、可以表記百般之音、其字劃極簡、而其運用無極。

(後略)

明治三十九年四月 編者識

### 33. 『東語集成』(1906)

凡例

國家之隆替、關於學術之盛否、學術盛則國以強、學術不盛則國以弱、此學術之所以不可不講究也、近時清國、學風不振、承學之士、爭相取道東來以速希有成者、已滿萬餘人、蓋東學者、吸聚歐美之學術之粹、融化之以固有之學、故能治東學、已得世界學術之大半矣、然欲治東學、必讀東籍、欲讀東籍、必肄東文、欲肄東文者、必需就師、就師肄業、必先要學東語、學東語必於其語言之程式、及其語言變化之故、揭而出之、使有途徑之可尋、而後能以東語解師之言說、能讀東籍、窺東學、此本書所由為當務之急也。

本書分為上中下三卷、上卷載以東語文典、中卷載以語彙集、區分名詞篇、動詞篇、形容詞篇、副詞篇、動詞篇以下所集之句節、凡千九百、下卷則分為二篇、日語法篇、日會話篇、會話篇、記述詳明、適切於實際、讀者若熟習之、凡於日常之語言、交際場里之應酬、均不見窘東焉。

書中語言多系直譯、切於存其真也、但苟非練句選言、往往有生硬不為句者、且有日清文法不能盡同者、有彼此文字為之不能強同者、因而譯文與原文、字一而意義各殊者、故譯而傳真、尤為不易、凡若此類、往往從意譯以免支離、本書稿成附鉛鐫也、偶有宏文學院講義錄之事、辨務多端、迄無寸暇、本書校讐失檢之處、錯誤之處、容或不免、尚冀同志、糾而正之、以使臻其完備、本書上卷前半系有人望月君之所編述以謝之。

明治三十九年七月廿五日於礪川寓處 著者誌

讀本書者、須參考左之書、必有所發明者、即友人松本君松下君所著之書為最宜。

松本龜次郎著 言文對照漢譯日本文典

松下大三郎著 漢譯日語階梯

鈴木暢幸著 日本口語文典  
吉岡郷甫著 日本口語法

#### 34. 『日本文典講堂問答』(1906)

##### 凡例

- 一 私ガ清国留学生会館デ文典ヲ授ケル際、学生諸君カラ常ニ種々ナ質問ヲ受ケマスガ、一々此レニ答ヘナケレバナラヌ為ニ空シク時間ヲ費シ教授ノ進行ヲ妨ゲル事ガ屢々有リマス、因ツテ此ノ煩ヲ避ケンガ為ニ、教授ノ際、屢々起ル問題数十ヲ集メテ一々此レニ解答ヲ附シ、此ノ一冊ノ問答体トシタノデ有リマス。
- 一 各単語ニ就イテ、一々詳細ナル説カラ、助詞ナドノ中ニハ、学生諸君ノ解リ難カラウト思フ語モ有リマスガ、其レ等ハ一切載セナイ事トシマシタ。
- 一 此書ハ実ニ扁々タル小冊子デハアリマスガ、凡初学者ニ益ノ有ル問題ハ大抵網羅シタ積リデス、別ケテ第二十三問カラ第三十三問迄ハ初学者ニ取ツテ最モ重要ナル事柄デスカラ、軽々看過セラレナイ様ニ願ヒマス。
- 一 此書ニ収メテ在ル問題ハ大抵松本亀次郎氏ノ漢訳日本文典ヲ授ケル際起ッタ問題デスカラ、該書ヲ自習スル人ノ為ニハ特ニ便利ガ多カラウト思ヒマス。

明治三十九年十二月

於東京牛込僑寓

著者識

- 一不佞在清国留學生會館授交典之際、常受學生諸君種種之質問而以不可不一一應答之故不免空費時間、有妨教授進行之事屢次生起之問題數十、一一附諸解答、而編一冊問答體。
- 一就各單語一一下精細之解說非本書之目的、想助詞等之中、或有學生諸君難得而解之語、然此等之語、本書一切不載焉。
- 一本書中有甚不足言之問題、例如第十三問者、然於初學之士、則此等

問題亦頗為重要之問題、以故對於此等問題亦附以詳細之解答矣。  
一此書實為扁々之小冊、然凡問題有益於初學者則期大抵網羅無遺矣、  
就中自第二十三問至第三十三問者、在初學者為最重要事項、請勿輕々看過為幸。  
一此書所收錄之問題者、概系授松本龜次郎氏所著漢譯日本文典之際而生、乃信此編之輯為自習該書者特多便利也。

明治三十九年十二月於東京

牛込僑寓

著者識

### 35. 『日語新辭林』(1906)

序

吾宏文學院教授佐村八郎君、頃著日語新辭林、求序於余、余披而閱之、分部別書、一倣康熙字典、而每語皆本北京官話、以索東京語、可得直施之口語、比之舊來辭書、依五十韻、排列日本語、附以漢譯、或併舉文語口語之類、有自異其撰者、在清国學生之初學我邦語者、實為便利、余喜此種書之先由君而成也、將稱揚以介於世、獨憾公私匆忙、未遑細閱、然微之君平生、知其決非杜撰孟浪之作矣、君嘗著国書解題、揭古今国書要領、凡二萬五千餘部、今又著此書、其用力雖不及前者之大、至有關於世則一也、乃為弁一言。

明治三十九年六月

東京高等師範學校長 宏文學院長

嘉納治五郎撰

### 36. 『文法應用東文漢譯軌範』(1906)

敘

近時清国人之遊學吾邦者、日加多焉、而其讀邦人著書、雖所用文字相同、常有隔靴搔癢之嘆、蓋由東西語言之法各異也、門馬常次君在我宏文學院教清国學生數年、常有憂於此頃、著文法應用東文漢譯軌範、自假名種類、漢字音訓讀法至綴文屬辭敘事議論諸體、一一舉其例證、

頗易通曉、余知他日兩国情義通好、親厚如一者、此書未必不為其端緒也、及其序為并一言

明治丙午六月  
弘文學院長嘉納治五郎

### 37. 『東語異同辨』(1906)

#### 自序

余自庚子春抵東京、習日語歷寒暑四五度、經師友數十人始獲稍潰門徑、其難可知矣、テニヲハ文法之難也、吳訓並用讀法之難也、半濁音不易發、暗ツ字不可顯、此又口音之難也、不知此種難法、皆在初學一經指陳即可領會、而余謂尤有一至難者係字同音同意異者、其國人發於天然辨之甚易、而在學者間之不惟初學者苦之、即久於學話者亦時有誤會之虞、故余不揣譯陋、按日本國語異同辨推廣是編、別以輕重未知有俾於講求日語者否。

光緒三十一年五月 著者自識

余和來東與同人談日語一科、無不以句口輻格磔為難、嗣覽各日語教科書概皆我邦先知之士枳其門徑、着導後覺別類引伸俱臻美善、學者間能博覽強記、不待師承當可升堂入室、及至入學受課、每見同此字母而口吻略異、義能遂殊殆悟、日本字母有限此界、言詞無窮、無論如何分配、萬難免其雷同烏乎、輕重長短之別界乎、微芒毫釐少謬懸絕千里、使非口授心傳誰知烏之雌雄、爰友張君贊鄉弱冠從遊來、東日語精熟八、咸欽慕、今著是編特為研究此等要素、條析縷分頗費授罹、惟愿有志之士先以此書為審別庶侃之向、道不致有書藝談之口、余雖不敏未淺東文奧突、然權張君樂育之苦心、因表明以質助博種君子、張君可為能使八規短并能與人於巧耶否乎、是序。

年季冬平皋 原峯實淺于東識

當今之世、交涉益繁、競爭益亟、吾國大局一變再變、日弱一日、迄今已至極點、皇祖國竟有岌々可危之勢、於是志者慨然於東渡之思、然既求學外洋而不通其語言文字、殊為恨事、吾國因此望洋興歎者豈少

也哉、乃者負笈東來暫從事於日語、既鮮同人切磋、又無善本參攷、荏苒年餘尚未得其門徑、即如キ有牡蠣柿子之分、カミ有上頭神紙之異、差之毫釐失之千里、古者言語列四科之一、子產有辭鄭國賴之、聖人許爲能事、是言語國爲世界之要務、張君贊鄉著日語異同辨無分析之工、措詞之巧使後之學者均可折衷一是、無格々不入之苦、無有益於學界也、固深其有益於國家也、尤甚嗚呼、人盡知著者之命意精而不知良工之用心苦矣。

光緒三十一年十一月  
上澣蓮心道士序

### 38. 『漢譯日語階梯』(1906)

#### 例言

- 一、是書本旨清人之欲學日語者、論日語之構造、以明集單語成句讀、連句讀表思想之法、
- 一、凡欲學他邦之語、口能語之、耳能聽之者、須先知道其國語之構造、國語從句讀而成、句讀從單語而成、單語從音韻而成。寫音韻者文字也、故此書首輪文字、明其所以寫音韻、次論單語於句讀、明其所以表思想之理法。
- 一、此書以日語成之、別以漢文譯之於鰲頭、讀者先就譯文學日語之構造、以略通之、則更進讀原文、方此時不俟譯文而力能解之、則可以謂既稍通日語者。
- 一、此書漢譯之法專從直譯而不從意譯、凡譯文之法有二、直譯義譯是、以務存原文之形勢、明部份之意義爲本旨、而不顧譯文之巧拙者、直譯也、以專尚譯文之妥當、明全文之意義爲本旨、而不拘原文之形勢者義譯也、直譯措重於原文、而意譯措重於譯文、互有得失、然學外國之語者、要知道其國語之構造、非以直譯、則日語之構造、不可得而明、故此書用漢譯也、專從直譯之法、其文之巧與拙、固非所拘也、讀者諒焉。
- 一、此書所說、專係東京人之日常所用、至於文章之語與方言卑語則不敢說、學日語者獨通口語而可以與日人相語、可以於學堂聽教習所講、文章之語者讀書之用而已、宜先口語而後文章、東京語者所謂標準語

也、日本雖有方言、而東京語則廣通、自九州以至北海道、以東京語而不通者未有之也、宜取東京語而捨方言。

一、此書示語之構造以成語圖式者、用□等之記號以待實字、其所示各有區別如左

(中略)

一、此書紙數僅二百有餘、其本旨在於示日語構造之大要、固不可以曰詳細、其稍高尚之書予有別撰之之意、稿將成、其出世之日、好學之士其幸就繙之。

### 39. 『漢譯日語文法精譯』(1906)

#### 自序

余曩教日語於英米人、我學未深、我智尚淺、不能譯日語、使之適切於英語、值英米人質問、不能使解脫妥當、往往究於述日語之意義矣、因謂日人不能說日語之法則、是國人之恥辱也、國家之恥辱也、爾後傾心於國學、且閱讀英米碩儒所著日語文法書、疑團愈深、晦澀愈多、當此時、吾邦學者不敢說口語之法則、偶說之、則杜撰淺薄、流乎獨斷、疎於實際、偏乎理論、遠於實事、更不足以充我意、而日語之擴張發展、月進年增、世或說言文一致之必要、或說標準語制定之急務、余亦附驥尾、助長尤力、偶清國留學生來集於東京、習日語學日文者、日月加多、於是、日語文法之研究、始難空理、進於實際、日語教習諸家說著漢譯日語文典書類三四續出、加之清人所著日語文法書類亦多、余蒐收之、得二十余種、一々披閱、則惟見片々語錄、與零碎文法、無復說日語之屬至要至難者、余私慨之、昨年初秋、畏友前都城高等女學校長市橋虎之助君、建設東京實科學校、欲授理化數學等之實科於清國留學生、蓋君夙慨留學生教育之不懇切不周到、期誠實指導、以利遠來之學生、其事業要巨資、素非營利、於是、斯道泰斗高等師範學校教頭後藤牧太先生、諾為校長、市橋君乃求余為日語教習、余喜其能救時弊補世道、蹶起應之、本書即余所講之第一回日語文法教案也、研鑽未至、瑕疵未理、而課本之急、不容完璧、倉皇上梓、讀者其察焉。

明治三十九年六月二十日

凡例

東西言語相距遠矣、今從印歐言語學所說、則歐米語爲曲折語、日本語爲漆著語、支那語爲單綴語、而曲折語說曲折語、是歐米比較言語學也、曲折語說漆著語、是當今少數之言語學也、漆著語說單綴語、是世界未曾有之言語學也、本書說日語、以對比漢語、兩國語本相異、唯有共用漢字、從此說彼、從彼說此、洵爲至難、故今參酌歐米言語學之原理、不必倣其輦。

本書簽曰精義、然是現今漢譯日語文法書類之最精義耳、未足以收余所期之精義也、蓋避理論、主實用、簡進乎繁、粗入於精、易趨于難、每章每課、細設練習問題、是爲本書本書之特長焉。

本書參照英米言語學書及語學教授書以編之、然日清兩國比較文法、共用漢字、不得必從泰西學說也。

本書漢譯文字。皆爲直譯、不免漢儒之嗤笑、然欲使日語之組織及其文法之構成、適合漢語、則不得不直譯、而直譯猶難通意者、則譯以最普通之清文、不遑問文之巧拙也。他日重版、則宜訂正補修焉。

本書平假名示日語綴字法、片假名示其發音、故平假名、附以片假名、又揭發音圖、以便音聲。

本書品詞、每編異次、蓋是余苦心所存也、又所自信其最能從語學習得之法則也、讀者若披第一編至第二編、第二編至第三編、進乎第四編及第五編、則余所述之意義解說、愈彰愈明、一跬一步、從卑登高、遂達其頂、眼界闊然、疑團雲散矣。

余嚮國語新文典、清人漢譯之、剗剗將竣、故本書不復說文語文典、人若欲知文語之法、則就此漢譯書可也、蓋精於口語法、則文語法易々耳、不知口語法、欲習文語法、如無羽學翔、不可不思也。

日清兩國、交通日密、彼此國語解說之書、其巧與拙、大關於兩國語交換發展之遲速、蓋世界方剖、爲東洋、爲西洋、而東洋獨立之國、唯見日與清、此兩國唇齒相依、其國語亦宜永存、豈容歐語之侵略乎、嗚呼國語之盛衰存亡、即國家之盛衰存亡也、一文法書、所揭雖小、所關甚大、余夙夜憂慮、自忘淺學不才、漫編此書、願清國學者、亦幸說其語法、必同感於余矣。

40. 『漢譯日語要覽』(1906)

自序

近時清国學生來學於我国者漸多、隨而爲此學生關於語學者書之發行者亦甚多矣、雖然爲新進者日常暫不可欠必要適切之言語、而簡便獨修之好著甚稀矣、夫入異邦而忽感不便者、在於言語不通、而學其言語者自有序次在、不費十數月之日子、則不能通達此間、自他之不便、夫幾何乎、來學於余塾、清国學生等常遺憾之、促有切實、而各可足辨日常大概之要件、簡便獨修書之著、於是詳聽其希望要項以編此書、素不過補一時之急者、幸有資益者則余之本懷也。

明治三十九年六月 格致塾主 松村政親

41. 『漢譯學校會話篇』(1906)

緒言

- 一、近者清国學生、來遊我邦者日益衆、欲研究各種學科、必先以日語為引線、但學習之始於教室授受之際、務期言語速通、問答無礙、斯為最要之點、本書之編述實具此意。
- 一、本書以平易簡明為主、俾稍解日語者、亦可借為獨修之資、其內容分為文字、語法要例、教室會話、語法摘要四篇。
- 一、本書既以教室授受之際、言語速通、問答無礙為主要、故語法要例、語法摘要皆不過為教室會話之一助而已。
- 一、本書漢譯、但求意明詞達、於普通清語、不無缺點、所謂直譯者是也、方言之難統一、亦事之無可如何耳。
- 一、本書多揭練習問題、俾以之為教科書者、便於取捨、以之為獨修用者、便於記憶、其卷末所存之餘白、所以使讀者任意補其必要之詞、以完全本書不足之意。
- 一、本書編輯之時、多得留學我国岑祖蔭張榮楣二君之助、記此以鳴謝悃、

明治三十九年八月

光緒三十二年六月

著者識

#### 42. 『實用日本語法』(1906)

##### 自序

近者於諸種方面、日清交通日繁一日、彼我互相往來、或從事於諸種之實業者有之、或從事於學術之研鑽者有之、而人世交際之緊要機關、厥惟言語、日人之渡清者、以知清語爲必要、等之而清人之來日者、故亦不先通日語則不可也、邇來爲是等人士所著之書如鯽矣、然大都組織甚雜、其所蒐集之語雖甚夥、而欲其應用之廣則甚難、又僅僅以兩國之語對譯、而不加以詳細之說明、故不免有隔靴搔癢之憾、了然而記憶之、殊非易々、抑學外國語者、記誦之多故必要矣、又與己國之語對譯、亦必要之事也、雖然不並其法則而學之者、不能真知其國語、因知而應用之廣必不能從其法則、秩然而學之、則能深明其國語之性質與其組織、因之而應用、自能廣矣、余適於清國留學生有教授日本語之任、既一終其日本語法之講義、學生中有爲其友多不能直接聽講義者、又欲爲一己反復練習之計、頗以付印請、乃於舊所用之草案、加以更訂增補之、即此書也、以急於刊行匆卒付梓、雖在鄙人亦決不認爲完璧、擬俟重版時、再改訂增補之可耳。

明治叁拾九年七月 於東京牛込之寓居 著者識

#### 43. 『新式東語課本』(1906)

##### 新式東語課本序言

夫人之立世成務也、其藉以感通情意傳達思想者、唯言語耳、然世界各国文字各異、而言語亦各異、故欲廣通世情、熟達時務、非學外國語言文字不可、近時中國新學方興、與我日本交際日密、故其求新學、變舊法、借助於我日語者居多、雖然日語之學談何容易、近來所出日語科書、汗牛充棟、而求其次序井然、由淺及深、由易入難於言語之學、無間然者蓋鮮矣、編者有感於此、而成是書焉。

人或謂夫載籍者、熟讀玩味、則意義自通、何必有取於是書所定之

教授法、曰、是誠不明語言之奧義之說、固難免貽淺見於譏也、何以言之、文字者、雖爲表明意義之符號、僅就其一面學之、則不過學死符號耳、且言語者、藉音聲以表意義、亦雖同是符號而有生機焉、吾人講求語學也、非學死符號也、由是觀之、言語者主、文字者客也、言語主於聽、而非一視所能盡也、然是之不察、每拘舊習、顛倒本末、斯亦淺矣、使受教者遲々不能上達、亦不足怪也、

問者又云、然則文字可棄而不顧乎、曰否、文字者、有關於讀法作文、攻乎此者、宜注全力於文字、以究意義、何可棄耶、而在東亞同字之國、爲尤重、故此書語法與讀法並重、以明其有密接之關係也。

夫歐美國、語脈大略相同、所異者、不過發音綴字而已、故彼於言語之學、每事半而功倍、日語華語則不然、語脈既不相同而發音亦有東西古今之變、編者反覆推究而實驗者、已七年於茲、聊有心得、故敢獻諸學界、以備參考之資焉。

且夫歐美國語學諸大家、其於教授之法各有所見、焦心積慮研究無餘、編者寡聞、未知東亞諸國、刻下教授外國語方法何如、唯藉己所實驗、獲此一篇答案、是此課本之所以成也、學者於東語初階、既學語法、次用此書、則可不多勞而收實效、今略舉是書特點、並詳陳教授須知事項如左、

一是書專注意於語法。

一據言動相關之理法、使學者與動作共發言語。

一以實物教授爲主、而臨時利用繪畫照相等事。

一不使學者徒視文字、而記憶其形、務使聽音聲、視形容而記憶其義。

一不授孤立無味之名詞、而授連續有趣之語句。

一題目自日常親炙者、漸次及新奇高達者。

一練習言語、同時使知風俗、慣習地理制度。

對以上特點、並舉臨教注意條項、如左、

一勿漫發意義不明語句。

一非學者理會意義、決不可教國語。

一由此見解、豫以華語、明白語句意義、然後彼此對照、以教授國語、但不可忘專主聽覺。

一動詞使用法尤要細心教授、活用言語之妙、重在使用動詞方法何

如。

一動詞時化法、須臨機練其使用法、令學者莫於應答之際、誤其行為之爲過去、爲現在、或爲未來。

一假雖正發言語爲規範、在未慣熟外國音者、誤聽正音甚多、故其際引證東語初階、宜詳細教發音法。

一在語學一科、書籍資參考及復習爲原則、教授言語之際、不可令學者看書。

一令學者互相努力對答、教授者要細心改正其訛誤及語勢等。

一對答之際、宜發以高聲、且使其語調近實際。

一話題於本書以外、隨時選句於照相繪畫等事、全始終而教之、可爲有趣味對答。

一屬各章末應用對話、在綜合該章而更新記憶、且可擴充用語之範圍、以期自在應用、教授者、宜按其趣旨。

一對答門用語、依對答者之階級而異矣、教授之際、要注意其語勢及音調。

一練習門、爲學者對答之豫備而設、故教師宜勤授之。

一第三章以下、將練習一門省去、以免繁冗、教授者既熟知問答之法何如、嗣後宜擇其可者用之。

一譯語中、有日本特有之物、又其存原語、較諸譯華言、反形利便者、此類概採日語、而另附注釋、教授者諒之。

一日語及華語、既根本相異、其對譯頗難、加之編者未熟華語、唯勉期不誤對照、且不失意義、故其譯語不免有澀滯之嫌、學者諒焉。

一漸次進到下卷、學者既可以通讀新聞、故教者宜聯結俗文兩語、總括讀法之下。

以上列舉不過表明其梗概、然熟讀玩味、練達教授各法、亦足以育現下有用之材矣。

今夫宇宙之廣、萬物之多、話海汪洋、任學者採擇、或取而爲金玉之篇、或棄而如塵芥之細、皆存乎教師之才耳、此篇所輯、不過蒼海一滴之水、伏祈世上博雅君子、勿吝雅教、不獨編者、荷有榮光、庶幾有益於善鄰之誼云爾。

明治三十九年丙午年初夏 於東京 中堂謙吉識

#### 44. 『日語用法自習書』(1907)

余謂日本語法難於文法、於是畏難者遂專學文法、置語法於度外、以為即不能操日語、能看日文足矣、竊謂爲是言者、是專指明治初年之日文言之耳、彼明治初年之文章、大半由漢文一轉而成者、故精漢文者之於日文、有數日小成數月大成之效、至若今日之文章、若新聞雜誌、若大學專門發行之講義錄、悉文與語參半、如不通語法而看此等文章、終不免於杆格不通、讀者讀其大意、自以為通、而問心實不了然、然則僅欲看日文者、已不能不研究其語法矣、矧彼肄習專門者、口欲操日語、耳欲聽日語、手欲寫日語、苟不研究語法、而專用力於強記、勢必至口言之而弗能達其意、耳聽之而誤會其意、抄寫講義時、稍有遺漏、即不能補足其意、是皆不通語法之咎也、鄙人等有憾於此、特著是書、以餉同志、茲請述其特色於左、

- 一、近來之日語書、汗牛充棟、或由通漢文之日人所著、徃々以漢文不足之故、僅能粗淺解釋、至其微妙而難於漢譯之處、則不漢譯以掩其短、或爲通日語之華人所著、其解釋詳明者固不少、然徃々以日語不足之故、多牽強附會、以達其欲說之意、致日語有失真之憾、本書則由會在外國語言學校清語科卒業之日人、及久留學日本、能操日語演說之華人合著、無論如何微妙難解之處、運兩人之精心、務必闡明其意而後止、至若日語之結構變化、則操縱自如、絕無牽強、是爲本書之第一特色。
- 二、語法中之最難者、莫如助詞接續詞助動詞、本書於此三品詞之用法、詳盡無遺、此外品詞亦不遺漏、與助詞助動詞相連接而有變化者、是爲動詞助動詞形容詞、本書爲便學者自習計、先注明某助詞或助動詞用於某用言、動詞、助動詞、形容詞、)之幾段變化下、則爲何意、其次解釋動詞助動詞形容詞之性質、及其語尾變化、其次爲動詞助動詞形容詞語尾變化之表、其次摘其日常必用之動詞形容詞、分類彙集、(如動詞則分四段、活用上二段活用下二段活用、上一段活用、下一段活用、各爲一類、變格各爲一類、形容詞則分ク活用爲一類、シク活用爲一類、)而以漢譯對照之、俾學者覽此書而有完全自習之樂、是爲本書之第二特色。
- 三、學日語之次序、由單語而用法、既熟單語、又知用法、自不難結合之以成一段長話、然不舉其例、學者仍不了然、本書於用法既

畢後、附以演說模範、(多演說之通套語、日語稍有程度者、摹倣此模範、而參加議論、以充暢其說、即成雄辯、本編特摘錄著者實地演說一段、以示其例、即由數多之用法、結合數多之短語而成者、夫語言之最長者、莫如演說、既能演說、則用以辦交涉、談學理、如操左券矣、是爲本書之第三特色。

著者識

#### 45. 『東文奇字解』(1907)

凡例

一書中所列各字系其字與漢字同、而其義則大異者、及數字連屬漢文中向無其字而另具一義者、故曰奇字、諸伊呂波文概不列入。

一是書照康熙字典分部、以筆畫之多寡定先後之次。

一部中所列各字、自一字至五六字不等、凡遇二字以上之字、其筆畫以第一字爲主。

一各部中首字相同者、先列單字、餘以字數多寡爲次。

一是書因匆促付梓、失漏之處在所不免、閱者諒之。

著者識

#### 46. 『東語會話大成』(1907)

夫中日兩國同洲同種同文字、所稍形隔閡者惟語言一事耳、曰自己子黍即誤有習華言之外國語學校中、自甲午之還始增東文一科於京師同文館、然學者系適寥寥數十人也、近年我國風氣漸開、來東留學者已逾萬數千人、故日語教科書亦日出不窮、然欲求盡善盡美者、殊系可多觀、蓋著者僅就本國之意著想、而未能針對我國口語言也、井上君有憾於此、且講求華語有系又係名教大家於具之出其精深之腦力、紬其細密之心思、著東語會話大成一書、譯之北京通用官話、使讀者開券有益、趣味環生、得通日語於談笑之際、系爲留學界中人宜鍍金事口、且可爲華語教科書中又增一異彩也、今已付梓、想洛陽紙貴之風行、將見於江戶之市焉。

東京帝國大學講師張廷彥拜序

口士 西小元讓敬書

今之世界、一交通之世界也、而所以使世界交通者、何亦語言而已、然以素不相聞之語、一旦從事詰屈聱牙、啞々學之而期、期難吐以、故學歐語如牛毛而能與歐人暢談者如犀角也、雖然歐語之難學者以文字之不同也、以吾亞東之同文、似言語之相通當易易矣、顧何以吾国之通支那語者、不見其多、而支那之通吾国語者雖多而精者亦罕是、豈同文之猶不易解耶、毋亦所以指導之書有未盡善者乎、教支那語者、吾不敢知、若夫教吾国語者則吾竊有所不滿也、何也、凡以吾国之語教授彼邦之人、非徒之吾国語而已、必當通彼邦之語言文字、合而衡之以彼邦意義解釋吾国之俗言、隱微必達曲折、求明斯學之者事半而功倍也、而試問完全無缺者有幾乎、何意吾友井上翠君所著之東語會話大成能彌此缺也、蓋君先世為姬路藩儒臣、故君幼傳家學精通漢文、長而習普通學於其鄉國中學校後、即習支那語於東京外国語學校、若夫吾国之国語国文則升堂入室矣、君即通彼邦之語言文字又精於吾国之国語国文、以故在宏文學院教授支那學生之日語、循々善誘、使學者津々有味、卓有令名、今本其所學以證之於經驗而著爲此書、非特簡要而不漏通俗而不鄙、而其合二国之語以互相解釋者誠所謂曲而能達、無意不宜者也、故此書之成非但支那學生得學日語之捷徑、即教日語者亦可奉之爲圭臬云。

明治四十年四月宏文學院教授 松本龜次郎序

#### 例言

- 一此書予日語教授之稿本也、試之實地有年於茲、爾來改稿再三、去繁就簡、拔萃削煩、取捨選擇、漸得一百課乃付剗氏上梓、若得爲日語學習者之一資則幸甚。
- 一此書分為第一音韻及單語篇、第二問答篇、第三說話篇之三篇、第一篇更分為十一課專說明音韻及單語、蓋爲學習者築根柢也、第二篇分爲七十八課、自所有學習場中之用語至日常酬應之語悉收在篇中、習熟此篇則對話之運用得宜、可以無遺憾、第三篇分爲十一課、舉諸種說話以便長話之學習、習熟此等長話則日語可以大成也。
- 一此書各課末尾設練習之一欄、以練習語法或補足會話、不可輕輕看過也。
- 一此書譯語請吾師松雲程先生得校閱之榮、邦人之欲學支那語學者、亦

須就而參考。

明治四十年三月 編者識

#### 47. 『東語自得指掌』(1907)

##### 東語自得指掌序

日清交際日益親密、清国紳商之遊歷、學生之往來踵相接也、然凡至東瀛者、欲考求政治研究學問非精日語不可、書肆所售日語書雖多而苦無完全之善本、本局深以為憾、曩編日語全璧公世、然浩瀚未便攜帶、茲新撰袖珍東語自得指掌一卷付印、此書分八章、凡字音造語造句文法會話雜話尺牘等日常所用語言選擇無遺、更以漢字切音、日本口音付字旁以便學者、即為本書特色、欲深通日本語言者可以讀日本全璧、欲遊歷日本之紳商學生諸君等、先就此書自學、即辨日常之事必有餘師矣。

明治四十年盛夏 文求堂編輯局識

#### 48. 『法政日語叢編』(1907)

落葉蕭蕭、寒蟄唧唧、肥馬嘶金風、紅葉染繁霜、天地為添憂、山川為加悲、士之有志者感慨不已、豈可空過此秋哉、乃著一書自序、曰嗚呼古來稱文明国、其民必富於法政之智識、徵諸歐米、炳乎若日星、清之未稱文明国、蓋其民乏於法政之智識之所致歟、夫清之於日本、其所關不啻唇齒輔車、故為士者苟處當世、欲立東洋百年之長計、則當盡力其国民之教育也、不然而徒大言壯語以如議東洋前途、亦是兒戲耳、余素薄識短才、而自任以使清国民得法政之智識、往年為其国民修法政學者編輯法政質疑錄者、每月一次發行以指導之、今又深鑑東洋大勢、乃有斯著、名曰法政日語叢編、雖專便於清国民修法政學者、及依日語而受教授者、又為紹介日語於彼国上流之一大機關、且苟欲出入于我国上流之交際場里、而求知己於後髦、亦不可不由此編焉、噫清国之廢興存亡即東洋之廢興存亡也、清国民而真注意東洋前途者、備斯書於座右、當期他日大成矣、若夫悠悠送歲月、豈大丈夫之志哉。

明治四十年十一月 著者識

#### 49. 『日語活法』(1907)

##### 序

我邦與清公私交際日親、彼国學生來遊斯土者、年多一年、或考查制度文物、或研究學術技藝、然其人多不會日語、均介翻譯、而後始通未免有隔靴搔癢之歎、於是數年依賴、我国人士為清人設學堂者、特置日語一科、圖補其不足、吾早稻田大學亦曩特設請過留學生部於其第一年功課、則日語最多、而教科書之可依予甚憾之、欲於本校別編一書久矣、頃日將是大宮君貫三懷其所編日語活法來示予執而讀之、秩序井然、條分縷析、而其講解懇切、詳細最適于初學語法者、予謂既有此書用為課本、不亦可乎、即俾付于剞劂矣、夫千里東來、考查制度文物研究學術技藝者、先就本書而學語法、則庶乎無隔靴之感、且兩國公私交際將益加親密、豈獨編者一人之喜乎、本校既以本書為課本、予因之為序。

明治四十年三月

早稻田大學學監法學博士 高田早苗

##### 日語活法序

言語活機也、時因遷人因以用焉、今之清国百度維新士皆競奮於學、不憚遠負笈出游而我邦。

昭代之世斯文維隆欲贊文化而報舊德於是乎、我邦之士以我邦語言教之鄰邦子弟之事、始起焉、早稻田大學講師大宮君雪山篤學愛才之士也、夙體善鄰之誼、教育清国子弟有年於茲矣、今也又著一書來而示余、余受讀之全篇四章、決不泥古、慎避奇袤、捨迂取實、匪繁匪粗、講之無躐等之、弊述之罔遲時之病、庶幾厚、固鄰邦之友誼昭垂。

皇国之謨烈矣、斯書名曰日語活法、蓋是以活機活用之於活世界之意歟、因以為序。

明治四十年四月早稻田大學清国留學生部主事 青柳篤恆識

##### 緒言

此書特為供於清国留學生日語科教程用、編成者假定其學期為一年、以期教了口語構成之大體、故就其為至難者、敘其用法、說意趣、而不及名詞副詞感歎詞接頭語等也、蓋此等語日華略同其用法而特不要絮說也。

此書分為四篇、動詞助詞形容詞助動詞篇是也、而教授之便宜、上助辭篇、中間交動詞助動詞或併接續詞之二三、體材分類不整一。

形容詞篇中不說其法、讀者已學其變化、通動詞之法、則自然悟了矣、此所以此書次動詞篇、以形容詞而並舉形容語彙、讀者諒焉。

此書成勿々不得一々削正、不保無多少誤謬、讀者幸毋吝垂教、此書之成也、所負文學士富田才次、波岡茂輝二氏不貲矣、茲記以表感謝之意。

明治四十年四月 著者識

#### 50. 『東語自習 蟹ノ仇討』(1907)

序

語言者、交通之先資、學問之階梯也、負笈外邦、而語言不通、匪獨向學無所挾以赴其志、即起居動作之桎梏而不自由為何如乎、顧學語言之道、雖非獨修一室可為功、而其意味、有非講師所能口授、必待自己領悟者、杉房之助先生、有鑒於此、於是有自習篇之作焉、先生精漢文、素曉我邦語言性質、又授留學界日語者有年、前所著第一篇舌切雀、余從滬上來、即聞東返者、稱道勿衰、蓋以原文後、以漢文直譯兼能義譯、其譯文之意義、不背原文之形式、讀者就譯文以尋繹原文之構造、無俟旁人指引、自可升堂而入室矣、茲第二蟹之仇討將成、屬余敘言卷端、用是欣然以紹介先生熱忱於我留學界。

丁未上元節陶懋頤識於日京

#### 51. 『漢譯日語大辭典』(1907)

序

□自生民之初、有語言而無文字、人之漸進、書契以作、世界文化之發達、逐基礎於是矣、顧文字者、可大別而為二類、曰有義、曰無義、文字之國、前者尚己、至者若語言之國、則僅適於後者而已、要之無語言則文字無所造端、無文字則語言不能統一、二者故相維相繫、不可偏廢者也、文明進步、科學以盛、至今日而世界列國、且有所謂修辭學矣、夫辭而以學係之、是語言之影響、不讓於文字也可知、雖然語言文字矣、

脫不為之輯辭書、作字典以攷證之、尤將聚訟紛紜、各是其說、則語言文字者、遂足矣惑人焉耳、此又支那字典之所由作、歐米各國辭書之所由輯也、我日本素以語言國稱、而邃古及今、名儒碩宿、鮮有計及於辭書者、何哉、蓋中世以降、自支那寶儒佛書歸、凡百文物、多取則之、古人之集輯日語、輒以字書體例出之者、良亦由是、然以語言之國而無辭書、微特其為國之缺點、尤吾人所當引為憾事者耳、維新以降、學者之注力於此者、頗不乏人、若大概博士之言海、若物集氏之言林、若落合氏之言泉、若高橋氏之伊呂波字典、蒐羅宏富、至詳且盡、裨益國民、良非淺鮮、近數年來、支那人士之來遊吾國者、無幾蔑有、顧以語言不通、多所隔閡、即略解矣、而熟語故事、往往難之、敝社有見於此、乃請文學士竹園苞君為之王任、博採群書、著為辭典、佐以漢辭、識悉無遺、學士既致力於文典、而竹園夢花君之所得於辭典者、尤復不尠、復延林郭二君、詳加校正、窮年累月、煞費經營、廣益集思、自謂無憾先顏其名曰東文完璧、而是書內容、下至俚諺童謠、搜羅殆盡、可以糾先人之謬誤、為後學之津梁者、習日語者、若日手一編、當事半而功倍焉、遂改而為漢譯日語大辭典云是為序。

光緒三十三年丁未三月

新智社主識

#### 凡例

一 輓近、日本辭典之刊行於世者甚多、蓋取法泰西諸國之辭書也、弊社今參照諸書以輯此書、竊譯以漢語、故名曰漢譯日語大辭典。

一 日本辭典之、漢譯者、雖日益多、然細察其內容往往蒐集數百言附以譯語掛一漏萬不知凡幾、而譯語尤多不妥、微特不安、而盡失其本義者殆亦不可僂指、例如以味臚漉為醬油之類、是也、蓋味臚漉者、漉過味臚之器也、至醬油、則謂醬油、以器物、為食物、不當孰甚、此書既無旁考諸書、且質之師友、詳加校訂、以期美善、然而、千里長途或躋于址、幸觀者指正之。

一 以博士學士、而猶誤解邦語者、不少、如以隨一、為第一之義、以一生懸命為所懸命之誤、是也、然則今之學者之明梵典、尤無怪矣、是以、如其解說、輒失正鵠、余等雖不肖、而訂正者殆不可以枚舉、非敢自逞、唯恐誤後生耳。

- 一進來、著日本字典者、大抵以五十字幕、即阿伊烏哀歐之順次、配列其語、唯從其辭之次序、而不問字數之多少、蓋取法歐洲諸国之辭書、為可以此言議之也、然非諸語誦五十字母者、則搜索一語殆非易易、今、編此書、不倣先規、以字數區分之、欲使便覽者便于探求而已、然而、如其五十字母之順次、不敢雜錯之。
- 一此書、始揭原語、至末尾、復出其名詞等者、則揭漢文中之熟語也、施直線（-）於其字傍者、是也、而始舉原語、至末尾復舉同一熟字者則示原語之出於漢語也。
- 一原語之出於漢語、而異其意義者、亦不少、以若此者、不再表出之於末尾。
- 一此書、舉日語之古文例而施弧線（）於其下、且插入漢字、則解說其意義也、如動植物名、輒用此例使以知日清語之別、
- 一東西諸国之語言、皆有今古、雅俗之別、日語亦然、故此書亦記古言俗語之字、以區分之、而不記符號者、則普通語耳。
- 一各辭之下、記自動、他動、助動等字於弧線中者、皆文法之略語、蓋自動則自動詞、他動則他動詞、助動則助動詞之略、而自動、他動之下、復記四、下二、上二、上一、下一、加變、佐變、奈變、良變等之字者、則又語尾變化之略語、蓋四則四段活用、下二則下二段活用之略耳、又加變則加行變活、佐變則佐行變活、奈變則奈行變活、良變則良行變活之略、即謂五十音中卡克-伊庫給哥（加行）撒稀司塞索（佐行）那泥奴捏諾（奈行）拉利列洛（良行）之四行也、而變者、則別乎四段活用等之正格、云爾、又形一、為形容詞第一活用之略、形二維形容詞第二活用之略、欲知其詳當以第一篇日本文典互證之。
- 一各辭之下、施弧線而插入、名、代、副、形、冠、感、數、辭、接頭、接尾等字、亦文法之略語、蓋名則名詞、代則代名詞、副則副詞、形則形容詞、冠則冠詞、感則感歎詞、數則數詞、辭則助辭、接頭則接頭詞、接尾則接尾語之略耳、亦宜以文典、參攷覽者察焉。
- 一此書有施二點（"）及圈（○）於假名之右者、二點者濁音、小圈者半濁音之符號耳、又有施直線於二字之中間著、如シ-ヤ、チ-ヤ、ク-エ、ク-ワ等、則謂拗音、蓋合二假名、而生一音者、惟欲便于搜索、故往往依假名之字數、而配於各部、如曰醫者則其辭雖二音、而字數有三、故入於三字部中。

一此書有以ツ之假名、小書于右者、如マツチ、モットモ等、是謂促音、與尋常ツ字之音、又異、故小書以別之、其他如アフ之假字、復施オウ之字於其傍者、所以示其音便也、欲知其詳、則在文典。

一此書始以片假名記名詞等、至其説明、又往往用平假名者、欲使覽者一讀之下、可以知其二種之假名耳。

明治四十年四月

編者識

## 52. 『日文獨修孝雀』 1907

### 序

日本古話之膾炙於人口者、不一而足矣、於中、如此侍話最有名于世焉、舊名斷舌雀者是也、項者、雀巢真人以其名之不雅馴、改題孝行雀、譯曰孝雀、且補其不足者、使古話為新説、可謂勉矣、而至其骨目、則不敢改竄、蓋欲使不失古話之體裁也、其稿已成、使余譯之、余何能當也、然而、所以不敢辭者、蓋有説焉、夫近時日語之所譯於清文者、不為不多矣、而其對譯之不妥當者、亦不為不少矣、至其甚焉者、則以饌器、為食物、誤譯亦甚矣、翻譯之事、古人猶難之、不亦宜乎、余也、譯此冊子、句句對譯、欲以使知其徑路焉、雖然、文章之結構彼此不同其規、故言言、不可對譯者亦有之如竊惟、謂曰等清文、則置之於句讀、日文則置之於句尾、此例、非一二也、今譯文中、施弧線而重出前語者、唯對照其語句而已、固非關於文章之接續者、也請察焉、余之用意於此、既如是、是以、不敢辭讓、遂諾之庶幾欲學日文者、倘取捷徑於此、則譯者之勞、亦不徒然也是為序。

明治三十九年十一月 古洞逸人識

## 53. 『高等日本文典課本』 (1907)

### 凡例

一、本書ハ專ラ清国学生ノ日本文法ヲ學習セントスル者ノ為ニ教科書又ハ参考書トシテ著ハシタルモノニシテ著者ガ多年ノ經驗ニ基キ理論ト實際トヲ參案シテカメテ理會シ易カラシメンコトヲ期シタ

リ

- 一、本書ハ円周の統合法ニ依リ品詞ノ大概文書ノ大要ヨリ進ミテ品詞詳論ト篇ヲ逐ウテ歩一歩精確ニ文法上ノ智識ヲ収得セシメンコトヲ力メタリ
- 一、本書ハ帰納的方法ニ依リ数多ノ実例ヨリ一定ノ法則ヲ覺ラシメ更ニ演繹的方法ニ依リ幾多ノ例題ヲ与エテ応用自在ナラシメタリ然レドモ理会ノ容易ナルモノハ故ラニ此形式ニ依ラザルモノアリ
- 一、例題ハ多クハ漢唐以前ニ於ケル聖賢ノ嘉言名句ヲ抜キテ之ヲ訳シタリ固ヨリ彼此文体ノ異ナルタメ強ヒテ訳シ難キモノハ適宜斟酌ヲ加ヘタリ読者幸ニ諒セヨ
- 一、文法上ノ術語ハ成ルベク從來ノ普通ノ名称ニ依リ特ニ奇矯ノ新名ヲ附セズ是レ他書参考ノ際対照ノ便ヲ得シメンガ為ナリ
- 一、日本語ニ文語アリ口語アリ謂ハユル普通文ハ即チ文語ニシテ日常ノ会話ハ即チ口語ナリ日本語ニ通ゼント欲セバ二者共ニ忽ニスベカラズ本書ハ文語ヲ主トシ口語ヲ賓トシ之ヲ並述シ特ニ其必要ナルモノニハ比較対照ノ表ヲ掲ゲタリ読者就テ一覽セバ両者ノ異同稔然トシテ氷解スル所アルベシ
- 一、言文ノ異同最モ甚シキモノハ動詞助動詞ニシテ代名詞關係詞形容詞之ニ亜グ其最モ少キモノハ名詞ナリ故ニ異同ノ多キ品詞ハ言文其項ヲ分ケテ詳述セリ
- 一、從來ノ文法書ハ品詞ノ説明ニ意ヲ用フルコト深シト雖文章篇ニ於テハ多クハ隔靴搔痒ノ感ナキコト能ハズ本書ハ力メテ意ヲ此ニ致シテ之ヲ詳説セリ
- 一、本書編述ニ際シ特ニ上村晋小出植男両氏ノ助力尠カラズ特ニ附記シテ同氏ノ勞ヲ謝ス

著者識

#### 54. 『東中大辭典』(1908)

緒言

(上) 本書編纂之旨趣

十年以來、談變法者、咸主近師日本、朝野士夫爭言東學、忽忽至

今、時驅勢逼、亟待開明、東學之輸入乃大盛、青年子弟、負笈而往者以千計、彼邦人士、應各地學堂之聘而來者、亦以百計、此等內外學生、其研究學術、無非藉東文東語爲之津梁、於是操觚之士、審時所需、競濡筆而語書文典之著述、其既梓行坊間者、亦幾於汗牛充棟矣、雖然間嘗偏覽諸作、或則置重文法、或則專主會話、或者呆譯日本之古式辭書、其應用非偏而不全、則冗而寡當、求一能該括東語全體、且組織完備、可爲學生紹介學術之助者、憂憂乎其難、則安足以應我學界今日之要求哉、矧邇者譯事勃興、新書中十之八九、取材東籍、自普通學教科書、以至法政經濟理化博物等一切專門書類、莫不逐譯之、而其專門術語、則因中國尚無成語之故、往往襲用原語而不改、學者苟欲藉譯本以求新智識、勢非先盡通此等術語、有所不能、而彙輯此等術語之書、而又偏索出版界而弗可得、寧非憾事耶、夫以習東文東語者如此其盛、則東語辭典宜有善本、新書譯出如此之多、則新學辭典宜有專書、乃竟令學界失望若是、是不但操觚者之恥、亦業出版者之過矣、本社有慨於此、不度棉力、創意編一理想辭典、以餉學界、數年前、廣集中東通人、從事鉛槧、慘澹經營、孜孜不倦、銷磨光陰千有餘日、至本年夏始克蒇事、裒然成一巨冊、出而問世、雖未敢云登峯造極之作、然足以補坊間文典之缺點、而爲學界供給無量之利益、則尚敢自信、儻亦學界諸君子所共許所歟。

#### （中）本書之體裁

卷首揭日本文法大綱、就日本語法、加以簡明之解釋、且插入形容詞、動詞、助詞、助動詞之語尾變化表、以便於閱者參考辭典、本文爲漢字類、和字類、假名類之三、漢字類共三萬四千餘語、千四百餘頁、殆占本書之大部分、其排列之法、悉依康熙字典之次序、和字類共一百六十餘語、假名類共一千六百八十餘語、都三萬五千八百餘語、凡日本現用之雅語、俗語、新語、古語及政治、法律、經濟、哲學、倫理等形上諸學之術語、理化、博物、天文、地文等形下諸學之術語、以至日本書報、華譯新書中所散見之語、無不廣加搜採、羅列篇中、其注解之法、就尋常日用語、則用對譯法、以雅語、俗語分別解釋之、就專門學術語、則以時文體解釋之、而均以簡括明瞭爲主、蓋辭典之性質使然也、此外如內容之說明及檢出法等、詳載於凡例及索引指南、茲不贅述。

#### （下）本書命名之緣由

中国向例、凡外国語字書、不問性質如何、其署名皆以本国名冠首、而置外国名於下、例如以中語注解英語之字典、顏曰華英字典、以中語注解德語之字典、顏曰中德字典等是也、然本書則獨異乎此例、不曰中東辭典、而曰東中辭典、蓋有說焉、凡外国語字典（或辭典）可分為二種、一則以本国語注解外国語者、此種字典、其目的在使讀外国書者、檢出不解之語、而查其適合本国何語、故必列外国語於前、而置本国語於後、一則以外国語解本国語者、此種字典、其目的在使學者知本国某語當外国何語、故必列本国語於前、而置外国語於後、前者多用於讀外国語書時、後者多用於作外国文時、因效用相反、故體例亦殊、前者先呼外国名、而後者則先呼本国名、此等區別、限界甚嚴、絕不可淆混、世界各国、未有不遵此規定者、誠以不如是則不能區別也、試以英国言之、有英德字典（English-German Dictionary）、德英字典（German-English Dictionary）、英法字典（English-French Dictionary）、法英字典（French-English Dictionary）等可為明證、日本亦然、既有和英字典、復有英和字典、既有德和字典、又有和德字典、彼国大中小學校數十萬學生所常用之英語字典、即所謂英和字典也、今中国學界幼稚、故現所刊行者、多專為讀書用之字典、將來學術進步、漸由讀書而作文、則華英字典、中德字典等必相繼而發刊、使狃於故常逡巡不改、以非華英字典而混稱華英字典、非中德字典而冒作中德字典、則二者復何所區別乎、辭典為啓迪智識之利器、而阿世諧俗至是、良可慨矣、竊聞同業商務書館、近刊行英語大辭典、毅然矯正舊習、特稱華英辭典、可謂能忠於學界、足為出版界進步之徵、今本書之內容、以中国語文、注解東語、其體裁實屬於第一種、故援世界成例、題名為東中大辭典、後此擬另編一中東辭典、以與本書並行、茲慮閱者或有悞會、特書其題名之梗概如此。

## 55. 『日本文典要義』（1908）

### 緒言

一、此ノ書ハ、大学程度モシタハ高等学校程度ノ学生、中等教育以上ノ内外語学ノ一般教師、及ビ、既ニ或ル程度ノ語学教育ヲ受ケタル者ニシテ、日本文典ヲ独修セムトシテ適當ナル参考書ヲ得ザルモノ等ノ参考ニ供シ且ツハ、日本文典ノ組織ヲ劃一ナラシムベキ

新提案トシテ、世ノ国語学言語学ノ専門家ニ向ツテ、其ノ反省ト批評トヲ求メ、国語学ノ進運ニ多少ノ貢献ヲ致サムコトヲ期スルモノナリ

- 一、此ノ書ハ、前著日本文典原理ノ緒言中ニイヘル啓蒙日本文典ノ変形ニシテ、一方ニハ、自家最近ノ研究ニヨリテ、ソノ啓蒙日本文典ニイハムトシタリシモノヲ分割シテ三書トスルコトトシ其ノ第一書トシテ、混沌タル現時ノ国語学界ニ於イテマヅ攻究セラルベキ焦尾ノ急務タル、語ノ分類及ビ文素ノ分解ニ関シテ、日本文典研究ノ基礎タルベキ必需ノ知識ヲ開示セムトシタルモノナリ、(著者ハ、今ニオイテ、コノ書ノ外ニ、文素論(スナワチ、所謂文章論)ヲ中心トシテ、思想表白法ノ妙旨ヲ会得スベキ文典学ノ神髓的部分ヲ開示シタルモノヲ以ッテ、一書トシテ、続日本文典要義トイヒ、更ニ、声音論及ビ造語法ニ関スルモノヲ以ッテ一書トシ、続々日本文典要義トイヒ、現時ニアリテ必要トスベキ文典上細大ノ知識サ、コノ三書ノウチニ綱羅セムコトヲ予想ス、サレド、或イハ、時宜ニ応ジタル変化ヲ、其ノ設計ニ加フルコトブルベシ、)サレバ、コノ設計ノ下ニアリテハ、本書ハ、固ヨリ日本文典ノ全局ヲ尽クシタルモノニアラザレドモ、今ノ世上ニ於ケル一般教育界ノ状況ニアリテ、比較的安全ニ授業シ得ベキ文典上ノ知識ハ、殆ンド、語ノ分類文素ノ分解、――(此等ダニモ、実ニ根本的ノ大疑問トナリ居ルモノナレド)――及ビ、之ニ連帯シテ本書中ニ論及シタル諸種ノ知識ノ範圍ニ止リ、ソノ外ニ出ヅルコト甚少キヲ以ッテ、適当ナル素養ヲ有スル教師ハ、之ニヨリ中等教育モシクハ高等学校一年生程度ノ者ニ授クル教案ヲ立ツルコト容易カルベク、且ツ、本書ハ、合理的ナル論弁解説ヲ与ヘテ、其ノ条理ヲ示シ其ノ帰趣ヲ明ニシ、素養アリ主張アル人ヲシテ、――(誤解ニ出デタルニアラザル論争ヲ歡迎シテ相共ニ正理ノアル所ヲ攻究セムトスルハ実ニ著者ノ素志ナレド)――一起スマジキ疑團ヲ起シ試ムベカラザル論争ヲ試ムルガ如キ徒勞ニ服セザラシメムトシタルガ故ニ、幾分カ高尚ニ馳セタル所ナキニアラザレドモ、本書中ヨリ、其ノ論弁解説ヲ去レバ、大體ニ於イテ極メテ簡易ナル文典上ノ知識ヲ残スコトトナルベキガ故ニ、適当ナル指導ノ下ニ立タ

ムニハ、ヨク、中学卒業前後ノ学生ノ参考書タルコトヲ得ベシ、  
（本書ノ読者中、年齒ナボ弱クシテイマダ十分ニ發展セザルト頭  
腦ヲ有スル者ニシテ、別ニ指導者ヲ有セザルモノニ向ツテ注意ス  
ベキハ、カクノ如キ読者ハ、マヅ、第一編ヲ省略スベク、之ヲ読  
ムモ、モシ解シ難キ所アラバ、暫ク之ヲ度外シテ、其ノ外ヲ読ム  
ベク、又、一字下ゲタル本文大ノ註文スナハチ本註、及ビ細註ハ、  
本文ヲ読ンデナホ説明ノ足ラザルモノアルヲ感ジタル場合ノ外、  
之ヲ省略スベク、或ハ全体ニ亘ツテ之ヲ通読シナガラ、解シ難キ  
モノハ一切ソノママニ読過シテ、ソノ解シ得タルモノノミヲ昧ハ  
フコトトシ、省略シタルニヨリ・或ハ・ヨリ会得セズシテ読過シ  
タルヨリ、後文ニアラハルル術語ノ不明ヲ惑ズルガ如キ場合ブラ  
バ、索引ニヨリテ、其ノ解釈ノアル所ヲ搜リ、之ヲ檢按ジテ対照  
翫読スルコトトスベキコトナリ）

一、本書ハ、始メ、三百頁内外ノモノタルベキ約束ノ下ニ筆ヲ執リ  
タルモノナレド、上文ニイヘル用意ト、ワガ国語ノ性質上辞ニ関  
シテ特ニ注意ヲ深ウスベキ必要アルニヨリ・成ルベク其ノ解説ヲ  
尽クサムトシタルトニヨリテ、容量大ニ増加シ、勢、第五編ノ終  
末ヲ省約セザルベカラザルコトトナリ、マタ、第三編十八ノ註文  
中ニイヘル附録ヲ削リ去ルコトトセザルヲ得ザリシハ、著者ノ火  
ニ遺憾トスル所ナリ、然レドモ、コノ両者ノ削減省約ヲ行フニア  
ラザレバ、紙数ハ更ニ百頁前後ノ増加ヲ見ルコトトナルベク、コ  
ノ省削ヲ行フモノホ五割以上ノ拡張トナレリシ上ハ、ソノ省約ス  
ベキモノヲ省約スルニ論ナク、著者ノ今日ノ地位ニアリテハ、出  
版者ニ対シテ、ソノ附録二十六頁ヲ附載スルコトヲダニ要求スベ  
キ権能ナカリシヲ如何セム、蓋シ、現時ノ趨勢的大化大宝以来千  
二百余年ニ亘リタル紛糾ノ歴史ヲ有スル国語問題ノ大解決ヲ遂行  
シ・国民智能ノ發展及ビ民族的精神ノ死活ヲ左右スベキ至機ヲ伏  
藏スル国語千万年ノ大計ヲ定メザルベカラザル・重大ノ天職ヲ帯  
ビナガラ、イマダ十分ニ醒覺セザルワガ国民ハ、徒ラニ国語国語  
ト絶叫シツツモ、文典上ノ知識ノ如ク、真面目ナル研究的態度ヲ  
以ッテ迎ヘザルベカラザルモノニ向ッテ、甚冷酷ナルガ故ニ、本  
書ノ出版者ノ如キ大書林ヲシテ、ナホ、紙数多キモノノ売レ行キ

如何ヲ懸念スルコト甚シカラシメタリシニ依ルナリ（サバレ、第五編ニ於ケル省約ハ、之ヲ上註ニイヘル続日本文典要義ニ詳ニズベク、削除ノ附録モ、何等カノ方法ニヨリテ、別ニ公表スベキナリ）ココニ、附録ヲ省キシニツキテ一言ノ注意ヲ調ベムニ、第三編（十八）ニ五ツノ転活ノ名ヲ何々活トイフコトニ定メタルニカカハラズ、後ニ至ッテ、或ル転活ヲイフトテ、何々形トイヘル場合アレド、ソハ別ニ異ナル趣旨アリテニハブラズ、又、妄ニ混用シタルニモアラズ、或ル活用ノ語ニツキテ何々活ト言ヒテ然ルベキ所ヲ、「何々活ノ語形」トイフ義ニテ、直チニ何々形トイヒシノミナリト知ルベシ、サレド、コノ何々活ト何々形トハ、スベテノ場合ニ於イテ、全ク同様ニ使用シ得ベキモノニハアラズ、何トナレバ、何々活トイヘバ、広クアラユル活用ノモノヲ概活シテモ、マタ、或ル種類ノモノノミニツキテモ、ソノ或ル転活ノ意味ニテ使用セラルベキヲ、何々形（スナハチ、何々活ノ語形）トハイフベケレド、スベテノ種類ヲ概活シタル場合等ニオイテ、一定ノ語形ナキコトトナルニ方ツテハ、然イヒ難キコトトナレバナリ、「但シ、複数ノ語形ノ概念ヲバ立テ得ラルベキナリ」

一、文典上ノ標準ニツキテハ、一定ノ学理ニヨリ自然ノ条理ニ従フベキモノニシテ、コノ点ニ於イテハ十分ナル所信ヲ有スレドモ、トニカク、本書ノ主義ハ、必シモ或ル時代或ル文体ニ拘泥セズ、苟クモ今ノ文筆ニ上リ得ベキモノ、及ビ、読書ノ際ニ遭遇スベキモノノ、合法ノモノトシテ許スベキハ、成ルベク之ヲ包容シ得ベキヲ期シ、辞（ラニヲハ）ノ如キハ、殆ンド漏スコトナク、古今ニ亘リテノ主要ナルモノヲ挙ゲ、ソノ分類上ノ性質ヲ会得セシメムコトヲ期セリ、（但シ、余リニ古風ニシテ、其ノ性質モマタ、類推ニヨリテ知得シ得ラルベキモノ、其ノ他、特殊ノ事故アルモノニ於イテ、省略ニ附シタルモノナキニアラズト知ルベシ、）コレ、今ノ如ク、スベテノ関係ニ於イテ、殆ンド定形ナキニ似タル過渡時代ニ於イテ、妄ニ或ル特殊ノモノヲ対照トシソノ他ヲ抵排シテ文典界ヲ狭メズ、サレバトテ、妄ニ言文ヲ混淆シ妄ニ破格ノモノヲ許容スルガ如キ不規律ニモ陥ラズ、其ノ間ニヨク、言語変遷ノ勢ヲ利シ、語想相関ノ理ヲ明シ、未来ニ於ケル発展ノ余地ヲ辟イ

テ文典上自然ノ真理ヲ發揮セムトスル者ノ、正ニ選ブベキ道ナルヲ信ズレバナリ

- 一、本書ノ校正ニツキテハ、既刊日本文典原理校正ノ周密ナラザリシヲ悔ユルコト甚シキヲ以ッテ、勉メテ校正ヲ嚴ナラシメムトシ、遠隔ノ地ニアルニモカカハラズ、始メノ方ノ或ル部分ヲ除ク外、スベテ三校ヲ施セリ、今コノ緒言ヲ稿スルニ方ツテ、イマダ刷リ上ゲヲ見ザレドモ、誤植ノ如キハ、サマデニ多カラザルベシ、サレド、落葉ヲ掃フニ似タル校書ノ業、多少ノ錯誤ナキヲ保スベカラザルガ故ニ、刷リ上ゲヲ終レル後、更ニ精閲シテ正誤表ヲ添付スベシ、但シ、左ノ数項ハ、著者ガ、公私ノ匆忙ニ駆ラレ知ラズ知ラズ現行モシクハ下刷リノ校正漏レヲ起スニ至レリシモノニシテ、三校ノ際マデ心附カザリシヲ、後ニ発見シタルモノナルヲ以ッテ、特ニココニ挙ゲテ読者ニ謝スルコトトシタリ、(本書ノ読者ニシテ、既ニ日本文典原理ヲ手ニシ、或ハ、本書ヲ読ンデ更ニ之ヲ閲読セムトスル者ノ為ニイハムニ、同書ニ校訂漏レノ大ナルモノ一個所アリ、二七五頁六行「或ル文素ヲ成スベキモノヲ」ノ「文素」ノ下ニ「モシクハ、或ル文素ノ結合ノ、述定部ヲ成スベキモノ、或ル、述定部ノイチ部分ヲ成スベキ或ル文素ノ結合ヲ」ノ四十四字ノ説漏、コレナリ、コレ、本書著述ノ際ニ発見シタリシ所ナリ、其ノ他、同書ニツキテハ、忽卒ニ調製シタリシ・ソノ正誤表ニ漏レタル誤脱重複ノ、追訂ヲ要スベキモノ頗ブル多ケレド、ココニ学ケベキニアラザレバ、暫ク機会ヲ待ツコトトシタリ、「但シ、ココニ挙ゲタル一個所ノ外ハ、カクノ如ク甚シキモノハナク、心ヲ潜メテ前後ヲ推シセバ、会得シ得ラルベキ条理アル一二字ノ錯誤ノミナリ、タダ、一二八頁四行「意義ヲ有スルモノナルベキ先天的ノ」ノ十六字重複シタルハ、字数多キヲ以ッテ、其ノ例外トスベシ、」サレド、誤説ニヨリテ文義ノアキナラザル所アルヲ感ズル読者ニシテ、下間ノ勞ヲ敢ヘテスルコトアラムニハ、著者ハ、徳義上、其ノ答申ヲ怠ラザルベシ、著者ハ、本書ヲ手ニスル読者ニシテ、学理ノ尋釈ヲ愛好スル篤志家ニ向ッテハ、敢ヘテ同書ヲ推薦セムト欲スルガ放ニ、ココニ一言ヲ添付スルナリ、)
- 六頁一行 制定素 ハ、 制定部 ノ誤リ

二〇頁八行註 フカサ ハ、 フヨミ ノ誤リ  
 六二頁五六行 構成 ハ、(ニツトモ) 相對 ノ誤リ  
 一〇二頁七行 呼ベリ ノ下 蓋シ、之ヲ佐藤誠実氏ノ「語学指南」ニ取レルナリ、 ノ一句ヲ脱ス、  
 一六六頁八行 正体言ノ ハ、正体言ニオケル ノ誤リ  
 二二〇頁一行 「アマンズ」 ノ下 (<「アマミス」[甘])  
 フ脱ス、  
 二六六頁五行 素材ヲ ハ、 素材ニ ノ誤リ  
 二八一頁一行 メ」 ノ下、 「ヨク ハ アラ ズ」 フ脱ス  
 一、凡ソ、人ノ世ニ立ツ、真而ナラムヲ要ス、況シテ、學術上ノ著述ヲ試ムルニ於イテラヤ、コノ故ニ、著者ガコノ書ニ於ケルニ、誠心ヲ提ゲテ心理ニ許シ、眼ニ物我ノ別ヲ認メズ、直チニ、我ズナハチ理・理スナハチ我ノ境ニ入ラムコトヲ期シ、敢ヘテ浮誇ノ辞ヲ述ベムトモセズ、マタ謙抑ノ態ヲ学バムトモセザリキ、モシ、僭越ノ情アリ誠意足ラザル所アリトシテ君子ノ斥クル所トナラムニハ、コレ、実ニ、著者ガ思慮ノ足ラザル過ヲニ座スベク、或ハ、人格ノ卑キニ座スベキモノナラム、著者ハ、謹ンデ、其ノ箴ヲ拝シ其ノ教ヘヲ受ケムノミ、サバレ、語ノ分類ト文素ノ分解トノ如キ、ワガ国語界ノ大疑問ニシテ、在来間ニ合セニコソ、或ル種ノ方法ヲ撰ビテ一時ノ急ヲ濟シタレ、到底、根本的ノ一大革新ヲ加ヘザルベカラザルモノナリトハ、苟クモ日本文典界ニ X 識ヲ有スル者ノ契得ゼザルナキ所ナリ、タダ、国語学ノ研究ノ鋭鋒ヲ世間的ニ最ハデヤカナラズシテ・而モ・勞苦徒ラニ多ク奏功甚期シ難キコトノ方面ニ向ケズ勞苦ノ比較的ニ少クシテ功果ノ甚収メ易キ他ノ方面ニ趨キタリシカバ、此等ノ疑問ハ、依然トシテ、不得要領ノ間ニソノ旧態ヲ守リ、イマダ解決ヲ見ルニ及バザリシノミ、サレバ、本書ニシテ、モシ、大ナル誤リナカラムニハ、国語学史文典学史ニ於ケル本書ノ地位ハ、甚輕カラザルモノナルベシ、然レドモ、著者ハ、自家ノ智慮ノ及ブ限リニ於イテ・十分ナル自信ヲ本書ニ懷クニカハラズ、身ノ不敏齒スルニ足ラザルヲ思ヘバ、戰々トシテ意外ノ錯誤ノ甚多カラムコトヲ懼レザルヲ得ズ、(著者、曾テ、国史国文ノ撰科生トシテ東京帝国大学ニ遊ビスルコトアレドモ、国語学ニ於イテ殆ンド

得ル所ナク、爾来十有四年、一二独学ヲ以ッテ立ツ、国学者ノ伝統アルニモアラズ、適當ナル図書館ノ後楯アルニモアラズ、薄給多累、僅ニ衣食ノ資ヲ割イテ図書ノ購読ヲ樂ム、コレ、著者現在ノ運命ノミ、就中、外国語学ノ事ニ関シテハ、モト其ノ専門ニアラザルヲ以ッテ、一モ通曉スル所ナク、タダ、浅然トシテ其ノ類書ヲ漁ルニ過ギザルナリ、而モ、頑鈍ナル頭腦ヲ恃ミ、敢ヘテ、断乎タル批判ヲ彼我ノ学説ニ加ヘ、居然トシテ〔オリジナル〕ヲ以ッテミブカラ許シ、昂然トシテ心理ノ直下ニ不羈ノ所信ヲ述ブ、蓋シ、参考書ト時間トニ乏シクシテ熱誠ヲ学理ノ研鑽ニ沃グ者ノ陥ラザルヲ得ザル窮境ノ所 X ナリ、カクノ如キ境過ニ於ケル弱点トシテ、著者ガ最懸念スル所ハ、ミヅカラ創見ヲ以ッテ許ス所ニシテ既ニ先輩ノ道破セル所ナルヲ覺ラザルモノアルコトト、如何ナル興材ノ上ニ其ノ説ヲ立ツルカヲ明ニセザルニ依リテ、先進ノ教ヘヲ X レムトスル者ヲシテ、猶豫セシムルニ至ルアラムコトトナリ、コノ故ニ、敢ヘテ、慚愧ノ情ヲ忍ビ、現在ニ於ケル所載ノ文典学参考書目ヲ卷末ニ付ス、（ソノ〔〕符ヲ加ヘタルハ、現在モシクハ過去ニ於イテ他ヨリ借受シタルモノ、モシクハ、XX ニシテ今ハ机上ニ上スコト能ハザルモノノ類ニテ、同一目的ニヨリテ附載シタルヲシメスナリ、）敢ヘテ、此等ノ書ニダニ通ジタリトイフニアラズ、タダ、狹隘ナル攻撃ノ資材ヲ開示シテ、博雅ノ示教ヲ X ハムト欲スルノミ、モシ、コノ些少ノ参考書ヲ以ッテ博覽ヲ飾ルモノトセバ、コレ、X ウルノ甚シキモノナリ、ソノウチノ改定版ヲ有スルノモノハ之ニ更フルニ最新版ヲ以ッテシ、更ニ之ヲ十数倍シタラムニハ、初メテ語学研究ノ一小文庫ヲ得タリトイフベカラムモ、ソハ、貧生ノ企テ得ベキ所ニアラザルナリ、）モシ、幸ニシテ、錯誤ノ存スルコトナキヲ万一ニ僥倖シ得タラムニハ、ソハ、実ニ、遲鈍ナル著者ノ力ニハアラジ、冥々ノウチニ本書ノ成立ヲ輔ケラレシラム真理擁護ノ神祇ノ力ナラムノミ

明治四十一年五月 著者識ス

## 追記

正誤表ハ、文典学参考書目ノ末ニアリ、閲読ニ先ダツテ、マヅ訂正ノ勢ヲ取ラレムコトヲ一般読者ニ懇請ス、但シ、ソガ思ヒショウモ多

カリシ結果ヲ見タルハ、著者ガ慚愧スル所ナリ

四十一年六月

## 56. 『同文新字典』(1909)

### 序

日清韓上下數千年間之文化、未嘗不恃夫漢學之功、即如三国之政體思想道德經濟實業宗教以及社會上組織等、莫非由漢學以立基礎哉、由是觀之、今卒然棄漢學而欲望將來文化之進、恐有所不能也、溯自漢學流播我朝以來、已歷千五百年、無論国民思想國家隆盛及一切制度文為、亦靡不漢學之功是賴、徵諸歷史、歷歷可考、故此欲遠溯我朝上古歷史、講求我國體之所存、以及所謂大和民族所發達之眞精神、實無一日不恃夫漢學之功者、即觀諸我朝文獻及歷史可徵者、大地為漢文所志、而可察焉、然迨近世歐美文化東漸、其嶄新科學精巧機械、與諸制度文為、又無不為羅馬字所傳也、是昔日我朝已有恃漢文以傳清韓及印度等之文化、而今又恃羅馬字以吸收歐美嶄新之文化、乃謂方在我朝、合東西之文化、會萃一處、貫通融會、將有集大成之觀、豈妄言乎、然此時生彼此不能相容之意見、亦所難免、或云今日時勢須將難讀難解之漢文、盡改用字、已成習慣、且收效以多、應仍因之以期他日文化之發達焉、甲論乙駁、迄今未決、然縱觀世界之大勢、以究此問題、如謂專以漢文字是賴、則東洋將來開拓事業、可期而待、此漢學派之論、其事固屬難行、然若謂需全發漢文、而專恃羅馬字方可達此目的、此歐美學派之論、亦為人所難服、然究應如何而後可乎、今按我邦地步而論斷、此後更宜吸收歐美嶄新科學精巧機械、及一切文偉制度、固不待言、且我邦應薈萃東西之文化、融和新書、鑄成一新文化之要素、更宜向亞東大陸、播傳我之文化、為擴充通商惠工之資者、舍漢學不知有何良策也、

從來竊見歐美政治家實業家、其外交貿易在東洋經營設施、不恃羅馬字者甚鮮、至緊切之漢文、渺而不相關、豈非缺典耶、然德國政府早已洞悉清國行情、其於列國未看破時、率先於柏林設立東洋語學校、以為東洋發展之地步、其眼光之大、使人可敬、即其近年之收效也、先奪英國在東洋之貿易、此後日美兩國之商業、亦將被其抵制、現據英美兩國駐華領事、無不以此行情切切警告於本國、查其意謂德國商人其對待

清國貿易之策、先期已能通語言筆墨、且講求應酬來往之道、其用意之周到、迥異歐美商人、宜其商務達駕於他國之上也、其所以然、實自設立東洋語學校所收之效、此為歐美國人所同認者也、若夫歐美國於日俄戰後、則不但將亞細亞地方認為世界貿易中心市場、且更視清韓兩國、為切要之圖、現已定議於國中大學校及高等學校、皆設華語科、以期造就對待清國貿易之人才也、且專為造就他日外交官及領事官起見、已選派華語研究生十名、日語研究生六名、使其留學與北京東京云、查該國其所以如是銳意計畫者、於東洋外交貿易上、有發展之大欲、舍造就精熟日華兩國語言者、則究不能達其目的也。

自今千五百年前、漢字流播我朝以來、其已變成我國語言者、何止一半、其根底已深、今一旦欲廢之、恐不可得、況於我歷史道德宗教、及所有事物之與漢學有未可一日相離之關係乎、如其欲廢之、徒為不可行之論、且其主意亦全與世界之大勢相背馳矣、何則今日泰西各國之所公認者、皆視經營亞東為世界大勢之所、欲講之策、必以精習漢文、為握要之圖、當此時不知我邦有何所見、而反欲廢此切要之利器、此予所千思而不獲一解者也、我國之與清國、已稱為同種同文、豈非天之將降大任與我邦與清國益敦善隣親睦之誼、同心合力、以開發東亞之風氣者非歟、試且徵諸對待亞東經營之勢、我國之與歐美各國其地步果如何、其於機械的工業及世界的商業、我國遠遜不及、而若論同種同文之便、則實不可同日語、是以日清韓三國之間、如欲謀彼此國情之疏通、望貿易之發展也、其稍解文字者、既易以筆代舌、即就我國語言、而少變語法、為漢文、亦非難、其利便共用豈淺鮮哉、如是則我邦人之專長、為歐美國人所難企及者也、想歐美國人之眼光決不輕忽之、今德美兩國果先於國中設東洋語學校、切切獎勵華語、其于東亞之經營、不可謂無深意也、世界大勢既已如此、仍有倡言欲廢漢文者、是以不達時勢者非耶。

今日歐美各國動輒有所謂黃禍論者、查其意不外以日清韓均屬同種同文、如三國同心協力進行亞東經營、則歐美國人恐他日被逐於東亞大陸、亦未可知也、如欲廢漢文、而專用羅馬字、有何異舍利及而取廚刀、廚刀尚可、而以之與歐美國人所專長之嶄新科學精巧機械相抗衡、斷非得策也。

自今七八年前、三井物產會社總辦益田孝君、遊歷清國之後告予曰、向來三井物質會社之設置分行於清韓要地者、專以操英語及習熟歐美商

工業之實者、用為行友、然再熟考之、日本人而穿西衣操西話、縱令風豐言語、宛如其人、亦難免為假裝歐美人也、而欲以之與歐美国人相抗衡、其為不利、不待智者可知也、故此欲他日從事清国貿易者、必宜習華語服華衣及最熟悉應酬交際之方者方可、近徵諸歐美国人之對待清国經營策、予深服其言之不悟也。

常言曰、貿易、伴隨於国旗、斯語在五十年前、則自為外交上一警語無疑矣、查當時專以權謀挾制、為外交及貿易上之要訣、非無故也、而至於今日、各国修好、漸加親密、則貿易擴充之策、惟在以期彼此国际間之圓滿親交而已、不得復用昔日之權謀挾制也、況於同文同種国間乎、今以政治而論、雖有国籍領土之不同、而就貿易上觀之、則日清韓三国者、謂為同諸一国内、亦未為不當也、徵諸世界大勢、凡同文国之於貿易上、其收效有勝於最良武器者、如一旦廢棄漢文字、則我邦人之於東亞經營、終不得不落歐美人後、其理明如觀火、且據我邦之地位而論、今後我邦之應靠羅馬字益輸入歐美文化、固不待論、但能咀嚼消化之、再恃漢字以輸出諸亞東大陸、以補清韓兩國之文化之不足、舍我邦其誰哉、雖世界各国之多、且歐美文化之為最先進之國、此後將東西兩球之文化、薈萃一處、陶冶一爐、別造出東洋一新文化之要素者、恐除我邦之外、不知復有何國在焉、要之為我邦人者、應進學修歐美国語、而亦應益修漢學、調和歐漢、以資亞東大陸之經營也、然則歐美各国亦將做我輦也必矣、不知當世有志之士、能不以鄙言為河漢否。

夫今後日本國民所負之責任、如是重且大矣、將從何實行開辦之乎、其辦法雖多、而其最緊且切者、則莫先於將日清韓三国日常所慣用之文字、整齊劃一、編成三国共通字彙也、於今日未見此等字彙出現、非盛世之缺典哉、如此則雖謂同文、其實字音不一、則不過以筆代口達其意、尤為不便、問今日清国留學生之住東京者、已達於一萬余、韓國留學生亦不下四五百人、又我邦人之在留清韓兩國者、以萬數計、是等三国人間唯一筆可以通意而止、一言口音有未能達其意者、即是無劃一漢字字彙之故也、是以我諸同志相謀、思彌此缺陷、設立漢字統一會、字數姑限以六千、擇其最通俗慣用之漢字、傍以我假字及羅馬字、施以三国字音、其意在不惟日清韓三国人、及歐美人苟一繙閱之、使其易會漢字之音也。

由以上所論而觀之、夫漢文字效用之於亞東經營上、其為切實要具、

不可復疑、但考其所以實行之次第辦法、即不如先企圖三国字典之著、無論夫在留我邦之清韓人與在清韓所留之本邦學生、均宜據此書以較三国字音之同異、為發音之津梁也、不僅東亞同惠、即歐美国人亦將因羅馬字而均沾其惠也、此書之著不過邦人應盡企書之一端耳、至其涉所有經營設施、仍多屬講求中、專賴大方君子之贊成、他日完成亞東開發之業、我輩幸甚、亞東幸甚。

明治四十一年十一月

漢字統一會會長 子爵 金子堅太郎識

## 序

夫漢字者、於交通東亞五萬萬生民之思想、不可缺之利器也、自古聖王易結繩以書契以來、古文籀文變為篆為隸為楷為行為草、或為片假字、或為平假字、皆因時勢之變遷、與国土之風氣、能制其機宜、連綿以至今日也、然而如其象形字體、太古邈焉不可得而孔也、焚書後、雖秦有李斯倉頡篇、趙高愛歷篇、胡毋敬博學篇、前漢有史游急就篇、楊雄訓纂篇、如其字數、古說多歧、殆不知所適從矣、至後漢安帝時、許慎說文解字出於世、古文籀文之義始明、其所收之字數、合重文九千三百五十三字、是實後世字書所依據之源泉也、爾來各時代所撰之字書中、探錄最著者、有魏李登聲類、晉呂忱字林、後魏楊承慶字統、梁顧野王玉篇、唐廣韻、宋集韻、明字彙、清康熙字典、近世歐美人中、尤盡力於漢字者、以英國人為最、而南話有得氏廈門語、美氏漳州語、格氏油頭語、哀氏廣東語、馬氏及巴氏福州語、仁氏上海語等字書、北語即北京官話、以西歷一千八百六四七年、駐清英國公使威德君、所著之語言自邇集為首、後有衍三畏廉士氏英韻府、近又有哈爾拔該兒士氏清英字典之著、視之從前漢人字典、雖稍減其字數、猶存世界罕見之字不少、韓國有御定奎章全韻、而其新定玉篇、全以奎章全韻為藍本、而名稱全韻玉篇、而至其字數、兩者共無所異焉、我國應神帝時、百濟人始傳漢籍。

自是厥後通經學古之士、致心於漢字讀法者日益多、距今一千有餘年前、昌泰中有僧昌住者、撰新撰字鏡十二卷、是從字畫分類漢字、施聲音字義者、誠我國漢字典之先河矣、當時又有舊題管原是善所作之類聚名義抄、又有所稱字鏡集和名抄者出、邦人所創作新字之漸加、見此

數書而可知也、其後足利氏執政之時、和玉篇、元龜字叢等書、是今世通行毛利貞齋校正玉篇之所據依、而養和年間、橘忠兼所著色葉字類抄、亦是後世節用集類之所淵源也、於是可見和化漢字、而增作和字之事實焉、迄今世我國輸入泰西文化、不獨醫學、兵學、文學、法學、於世間日用必須、增加若干漢字、或附加新字義、是理勢之所使然、而亦孳乳之義宜如是也。

夫漢字者、應世之必需、孳孳生產者、恰如父子祖孫生滅代謝、或有雖古代活動、今時老廢、而全不緊要者、或有今人雖不可缺、古人曾夢想亦不為者、是理之當然、而吾濟信雖何人莫不首肯也、設使周公旦再出作字書乎、非夫爾雅之類、而為今日必需字類之典籍也必矣、吾儕于數千載之後、竊有所感于茲、沈潛傾思要之所迫、敢質江湖賢士大夫、為裨益東亞文明之一端、敢撰輯本字典、僭越之罪、固非可免、惟請大方君子諒察而已。

從來傳我國漢字典中、最先完備者、乃康熙字典、而最廣行者、乃玉篇也、今據此等字典、每一字檢討精查、而求索通行文字、凡得五千字、以是認為日清韓三国共通文字可也、然在清国、其他尚有新字俗字等、蓋此等文字、以小學之書無所載、雖不為我國學士間之所知、檢清国俗間所常用者、概有七八百字、又在我國、各時代所作和字、雖彼小學書中未錄之、今日所通行者、亦概有一百字、加之以韓國所作新字一二、則都計可得約六千字矣、是實現今交通日清韓三国、關教育經濟政治實業等之思想、最必須不可缺之實用文字、而苟依之、足以達彼我公私交際之利便也、但專門名家之士、則猶有舊來小學之書在、何矣吾儕之書乎、然而彙集三国間必須文字、則茲不可不現出互相共通利益、其法何如、惟在比較研究各国相異之音韻、而明其流屬耳、抑比較我國從來之漢字音假字使用法、與現今官話音、則雖垣間見ること如有大徑庭、能尋繹索求其原委、則其間可發見儼然彼我音韻變化之理法存焉、特介日清二音間、以韓音、則其理一層明晰、僅諳數十之法則、輒因我字音、而知得彼字音之大概、實不難也、今也經日俄大戰役、三国交際愈加親密之時、輒得應用此理法于實地、則彼我利便、何以加之、以是知從來字音假字使用法之所以不可不容易改廢也、如此既定必須之字數、又立比較研究各字音韻之法、則最後三国人士、可如何供諸實用歟、乃不可不設最利便檢索法、抑從來檢索法有二、有因音韻者、有因字畫者、前

者在某國人通其自國音韻者、雖極利便、在不通其音韻之外國人、太不利便也、設使據清國音韻者歟、則不便于日韓人、據日本音韻歟、則清韓人不適其用、故據字畫之便、雖不待言、其索引法、亦以各字典異關字原說、同字為異部所彙集者不尠、然則其索求、卻不容易、如不一一依照檢字、則索出不得、其煩殆不可堪、為之消費貴重光陰者、決不可謂適應今日多事多用之時勢、是以最良至便之法、不如先彙類文字全體於總畫、其下亦分各首部、一目瞭然以便搜索也、苟依據此法、則雖何國人、於最短時間、容易得其所求文字、是所以本字典之探如上索引法也、抑依據前述方法、撰修本字典、是固東亞之一大事業、而非合眾力、集眾智、則不能也、故吾儕不肖淺學、雖深愧非其器、茲起同文新字典之稿、附之印刷、以廣質三國鉅公碩學鴻儒、求其意見、取捨增刪、且擬數年後、訂正出版、誠依此法、則碌碌璞片、亦如為他山石所磨而玉成、不備不完之原稿、逐為至善至美之一字典、永互後世、從天演理法、至其保有各時代必要文字亦不可知也、吾儕不肖不自揣、敢監修本字典、唯不過欲為東亞三國文明聊竭努力而已、江湖君子、假以一臂力、以大成本會事業、則豈獨吾儕之幸而已哉。

明治四十一年八月

漢字統一會副會長 伊澤修二識

## 57. 『日本讀書作文辭典』(1909)

### 敘例

一數年前、鄙人會編漢譯日本辭典、幸蒙學界不棄、重版屢次、惟彼書專係按音舉語、必熟其音、讀者而檢索其語意語法、方為有益、至於日文中所用漢字漢語之讀法意義、則毫不能乞靈於此、蓋日本所用之漢字漢語、或有當以音讀者、或有當以訓讀者、音有漢吳唐等之別、訓亦每字不一而足、且其意義多緣假借、甚至於漢字本義、全不相涉、故欲知漢字漢語之讀法意義、則不能不有待於按畫檢索之辭典、然此種書在日本至今猶少槩見、不可謂非學界之缺點也、鄙人有憾於此、去歲由蜀歸來、幸得餘暇、乃蒐集日本通用之漢字四千有餘、與二字以上組成之俗語二萬有餘、及重要之地名姓氏數百、按畫排列所有讀法意義、標注其下、至今春而卒成此書、雖未足以為完全、然漢土學

人之習日文日語者、苟得此以與曩日之漢譯辭典並用、庶幾略無遺憾已。

一漢土學人之欲作日文者、最苦於難知表動作形容之漢字讀法及其語尾變化、坊間辭書雖非絕無足以應此用者、然或揭古怪不通之讀法、或單揭讀法而未載語尾變化、究於實用多有不便也、故本書雖欲以資讀者之用爲主、而於此點亦特致意焉、凡學作文者、遽此書以用漢字、當不至復有晦澀口謬之弊。

一本書字畫之排列、一本康熙字典、而日本意造之字、亦按畫數而附於同類漢字之後、例如「烟」附於田部四畫之後、「榊」字附於木字十畫之後、如仍有未知其字之所屬何部者、可就所附新編檢字中求之、此新編之檢字、專欲以供實用起見、故不必拘於舊來之字典所附者。

一讀法以字母註之、其用片假名（即真體字母）者係音讀、用平假名（即草體字母）者係訓讀、若一語有數種讀法者、則先揭其用之最廣者、餘以次列之。

一字母之拼法、一從舊來慣例、如近時雖有破舊例而用新法者、然尚未至通行一般、即日本小學、亦會採此新法、然一二年來又復舊矣、蓋拼字改定之不易行、徵於歐美之歷史、已灼然可見、而日本之拼字新法、其亦不能遽望通行、可斷言矣、故漢土學人之習日文日語者、仍不可不諳舊例、況舊例既熟、改而從新、又屬易易耳、此本書之所以不盲從新法也、但舊例有所謂轉乎者、稍形繁雜、不可不知今揭其概要於下、

（中略）

一本書原以輕便爲主、故所附譯語、務從簡略、凡語之可作漢字之本義而解者、均祇載讀法而不及意義、至雖日本生造之語、而其意義可以漢字推之者亦如之、若假借轉用、僅行於日本人之間者、則略以數字釋之、其所含眾義、不及備舉漢譯日本辭典之譯語、較此甚詳、學者既就本書而知字之讀法、更無妨就彼書而詳其意義、其學力較高者、讀法既熟、更由此而取言海言泉辭林諸大辭典而窮語意之蘊奧、亦非難事也。

明治四十二年四月 難波常雄識